
三千世界（短編集）

ここプロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三千世界（短編集）

【Nコード】

N4519K

【作者名】

こころ

【あらすじ】

平均三千文字程度を目安とした小説集です。ジャンルはとにかく雑多ですが、『読み手の意表を突く』ことは共通のテーマとして書き進めてゆきたいと思っています。看破すること、あるいは騙されることに快感を覚える皆様。是非ともまず一話、お楽しみくださいませ。

『どこかで見た』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 字数1200 1300程度

『どこかで見た』（s s）

ある夜のことだ。俺は職場の同僚に誘われ、ちょっと高級なダンス・クラブへ遊びに行った。

俺はたいして金を持っている男ではない。しかしプロジェクトを成功させて褒賞金を得た同僚が、飲み代を奢ってやると言ったから、場違いとは思いつつもついてきたのだった。

一通りのダンスと酒を堪能した後、ほろ酔い気分を冷ますべくバルコニーに出た。

すると10Mくらい離れた場所だろうか。酒が入っているため曖昧だが……まあそのあたりに、男性たちと談笑するひとりの女性を見つけた。

俺はその女性をどこかで見たような気がして……いや、どこかで会ったような気がして、か？ まあ何か感じるものがあって、遠巻きにその女性の姿を見ていた。

はて。どこかであの女性と会っただろうか。

冷たい空気を吸いながら鈍った脳細胞に問いかけてみるが、有力な情報を得ることはできなかった。

しかしどうにも気になってその女性をじっと見た。まだ若い。化粧の仕方でも多少、大人びて見えるが、まだ22・3くらいの小娘だろう。メイクの下に瑞々しい肌を隠していることがはつきりと見てとれる。

ただ俺ももう40の身だ。20過ぎの娘と知り合う機会などない。ではどこかですれ違った程度だろうか。でもそれなら大して性能のよくない俺の脳が覚えているか？

いろいろと疑問が膨らんでゆく。そのうちに、足が自然と女性への距離を詰めていた。するとそんな俺の様子をどこかで見ていたのか、同僚が傍に寄ってきてこのように言った。

「なんだ。お前、あの娘に興味があるのか。話をさせてやろうか？」
「できるのか？」

頷く同僚。どうも彼女と見知った仲らしく、機を見て女性に話を通しに行ってくれた。

「いつもお世話になってます」

同僚は女性に対し、恭しい敬語で挨拶をした。女性も華やかな微笑でそれに応えている。

（おいおい。10も年下の娘にあいつが敬語でしゃべってやがる……）

俺は女性の身分がますます気になった。まさかどつかの重役の娘か、はたまた同伴者かなにかだろうか。見覚えがあるのも、どこかの会合でお偉いさんの脇にいたためか？

だとすれば俺もさっさと挨拶しにいかねばまずい。そう思い、女性がどこの誰だかわからないままに、同僚の傍に寄って女性に挨拶をした。

そうして二言・三言の世間話を交わす。声にも聞き覚えがあった。だがそれでも、自分は彼女とどこでのような形で会ったのか。それだけが思い出せない。

俺はどうしても我慢できずに「どこかで会いましたっけ」と女性に聞いた。もし会ったことがある相手なら後で謝る覚悟もできていたから。

すると女性は少しの間を置いてはにかむような表情を作った。

「たぶん、画面の向こうですよ」

「……ああ、芸能人の方でしたか」

「いえ、まあ、その……」

女性が顔を寄せてくる。息がかかりそうな距離に迫られ胸が高鳴る。

女性は俺の耳元に唇を寄せ、そっと囁いた。

「わたし、AV女優なんです」

ほとんど次の瞬間だった。俺は脊髓反射のような速さで、改めて同僚と同じ挨拶を彼女にした。

「あ、その、いつもお世話になってます」

『どこかで見た』(ss)(後書き)

女性読者にそっぽ向かれそうな出だし。こんな短編集ですがよろしくお願いします。

『金色の牢の中で』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 800 900字程度

『金色の牢の中で』(ss)

目が覚めたとき、少女は自分の知らない場所にいた。そこは思わず目を細めなくなるほどに明るい空間。

寝起きの少女の視界にまず飛び込んできたものは、金色の壁だった。……。少女は目をこすり、もう一度正面にあるものを確認する。しかし、金色の壁は消えない。

……。振り返ってみる。するとそこにも、やはりというべきかなんというか、正面と同じように金色の壁がそこにあった。また右を向いても、壁。左を向いても、壁。上を向いてみたならそこに広がるは金色の天井、視線を落とせば自分の立ち姿を真下から映す金色の床。少女のいる場所はとにかく、一分の隙も無く金色だった。少女は混乱した。昨夜は確かに自分の寢室の布団に入ったはずだった。なのに目を覚ませば、そこはなぜだかやたらと金色。自分の寢室がここまで悪趣味な金ぴかに染まっていた記憶は無い。では、ここはいったいどこなのか。自分はどうしてここにいるのか。誰かがここに連れてきたのだろうか。しかし、誰が何のために？

おまけに……。少女はぐるりと壁を見渡してみる。どうもこの牢（らしき空間）には出入り口と見られる穴や扉がひとつも無いようだ。それでは、自分はそもそもどうやってここに入ったのだろうか？……。っ。考えれば考えるほど積み重なってゆく疑問、そして同時に押し寄せてくる不安と恐怖。もしかしたら、自分はもう一生ここから出られないのではないか。少女は自分の胸に溜まってゆく気持ちをととうこらえきれずに、泣いた。助けを求める声がきくと誰かに届くことを信じて大声で喚いた。

そして一方、牢の外では。

「……。何事なんだこれは……」

鉈を持った老人が、中から子供の喚く声の聞こえる金色の竹を前

に唾然としていた。

『金色の牢の中で』(ss)(後書き)

原作で竹を切る高さが頭上より上だったという描写に安堵したのは私だけではないはず

『完成されたすれ違い』（コメディ）（前書き）

ジャンル「コメディ」 字数3100 3200

『完成されたすれ違い』（コメディ）

「なあ、肝試し行こう。肝試し」

夏休みの終了を目前に控えた8月の出校日。俺はクラスの友人からそんな誘いを受けた。

「こないだ、兄貴がさ。県内で有名な心霊スポットを回ってきたらしいんだ。」

それで何箇所か面白そうな場所があったっていうから、僕も一回行ってみたいな、って」

そんなことを言いつつ友人は地図を広げた。彼が言うには、地元で噂となっている心霊スポットが近場にもいくつかあるらしい。

廃墟、潰れたラブホ、旧国道トンネル。なかなかバリエーションに富んでいた。高校生の俺たちが向かえる範囲にもいくつか点在している。

「特にこのラブホなんて、テレビ局の取材も入ったことあるっていうぜ？ これは地元民として押さえておかないと」

「うーん」

正直、気は進まなかった。怖いものが苦手というわけじゃないが別に好きでもない。宿題と課題テストの対策時間を削ってまで行ってみたいとは思わなかったのだ。

「でも肝試しって、意外と危ない目に会うかもって聞くな。ヤンキーとかホームレスとかに鉢会ったりして」

「そういうのも含めてスリルがあるんじゃないか。なあ行こうぜ！俺とラブホに！」

「誤解を招く言い方をするな」

やや力を込めたチョップを友人の額に食らわせる。不必要にでかい声を出しやがった友人は患部を押さえながらも、しつこく俺を肝試しに誘った。

俺は相変わらず乗り気にはならなかったが、それでもあまりに彼

が熱心に俺を誘うので、最終的には誘いを受け肝試しに付き合うことになってしまった。

「せめて行くのはトンネルにしよう。ホテルや廃墟だと、不法侵入とかにもひっかかる」

友人にも少しは悪気というものが芽生えたのだろうか。こちらの提案はあっさりと受け入れられた。

そして約束を取り付け、彼は席に戻ってゆく。貴重な昼休みを無駄に使ったかな。そんなことを思いながら、俺はパンの包装紙をゴミ箱に投げ込んだ。

それから1、2分経った頃か。ぼんやりと文庫本を読み進める俺と尋ねてくる者がいた。

「ね、ねえ武藤くん」

「ああ。みゆきさん」

声に反応して本をたたむ。訪問者は同じクラスに所属する古賀みゆきだった。

「今日、帰りは……」

「うん。普通に帰るよ。みゆきさんは？」

「私も予定はないです」

「じゃあいつも通りホームルーム後に駐輪場でね」

彼女と帰宅の約束を交わす。一応、みゆきさんとの関係は恋人同士、だ。それでちよくちよく俺たちは下校の足並みを揃える打ち合わせをしておくことがあった。

しかしみゆきさんは約束が終わってもそこを動こうとしない。まだ何か用事があるのだろうか。俺が何も言わずに本を机にしまおうとすると、みゆきさんは少し上ずった声で話を始めた。

「あ、あの武藤くん。さっきちょっと聞いちゃったんだけど、木場くんと今度……その……」

声調に謎の緊張が感じられる。それに合わせてか、俺も無意味に

姿勢を正した。

「その……何？」

「その……えと……。で、出かけるって話して……ました？」

彼女の言葉を脳内で噛み砕き理解する。ああ、さっきの肝試しの話だろう。俺は頷いて肯定する。

「うん。あいつがどうしてもって言うから」

「え……？」

返答を受けると、何故かみゆきさんの頬は赤く高潮しながら、表情だけ青ざめたような感じに染まった。

「でも、そんな……。そういうのって普通、その……恋人同士でするものじゃないんですか」

確かに肝試しはカップルとか男女のグループで行くほうが盛り上がるだろうな。みゆきさんの言う通りだ。

でも女の子は夜遅くに歩みにくいだろうし、男だけで行くケースもさほど希少ではないと思う。

「別に男たちだけでもいい気はするけど」

「お、男の子たちだけって……！　そ、そんな変ですっ！」

やたら男だけの肝試しに苦言を呈するみゆきさん。反論をしようと思えばできないこともない。しかしあまりに力を入れて熱弁をふるうものだから譲歩の姿勢を見せておくことにする。

俺はけっこう押しに弱いタイプなのかもしれない。

「じゃ、じゃあみゆきさんも参加する？」

「なっ……！」

瞬間、みゆきさんの顔色にやや赤が多目にブレンドされた。逆に表情は氷みたいに固まる。

「ひどいです！　人をかつ、数合わせみたいにつ！」

不潔です！　不誠実です！　わ、彼女わたしというものがありませんがっ！

え？　なんで俺、いま怒られてるの？

意味不明な感情の展開に戸惑い焦りながらも、なんとかフォロ―

の言葉を搜す。

なんだろう。みゆきさんは自分を肝試しに誘って欲しかったのだろうか。

「でも確かみゆきさんって、こういうの（怖いもの系）苦手だったんじゃない？」

「う……。それは、えと、嫌というわけじゃないんですけど。……なんていうか私たちまだ高校生だし、もう少し大人になってからのが嬉しいっていいですか……」

肝試しってあまりいい大人がやるようなイベントでもない気がするが。

「まあ夏の風物詩みたいな感じで、やるならいい時期かなと気楽に考えてるんだけど」

俺が言つと、みゆきさんは更に顔を紅くして俯いた。理由はわからない。だがさすがに心配になって、彼女の表情を覗きこむ。

すると彼女は

わ、私のせい？ 私がこういうの奥手だから武藤くん欲求不満になつて男の子と……？ ……だめだめっ！ そんなのっ！ ……でもは、恥ずかしいし……。でもひと夏の思い出は欲し……。くないわけじゃないけどでも……っ

やらなんやらいろいろ呟いている。

それを受けた俺の心境を最も端的に表すとしたら？

の一字だ。いいかげんどう対応していいか困りかけてくる。

とにかく俺はみゆきさんを二人きりの肝試しに誘ってやればいいのか。……その読みに賭けて、みゆきさんにデートを申し込んでみた。

すると彼女は「……わかりました。私も覚悟を決めますっ」と俺の手を取った。何故か悲壮な決意が滲み出ている。

「私でいいんですね！ 武藤くん！」

え、だから俺は別に誰でも……。そう言おうとした。だがそこで

口をつぐむ。いまやどんな発言が地雷になるかわかったものではない。余計なことを言わないほうが吉と直感で思ったからだ。

「じゃあ場所を決めなきゃね」

こく、と小さく頷くみゆきさん。急に口を挟んでこなくなった。場所に希望はあるかと聞くと、「お任せします。ふつつかものですがよろしくお願いします」という格式ばった口調で返された。

混乱しかける思考を冷まさせるべく、軽く深呼吸。そして自分も少し落ち着きを取り戻したことを自覚し、改めて友人（木場くん）の挙げていた候補地を思い浮かべてみる。

確か、廃墟。潰れたラブホ。トンネル。……の3つだったかな。

「家（廃墟）とかラブホだと人に会うかもしれないから困るよね」

「……それはそうですね、それ以外に候補があるんですか？」

「うん、あるよ。夏も終わりだし野外で（肝試し）は少し寒いかもしれないけど、木場はトンネルするのがオススメって言ってた」

そう。まさに瞬間だった。

“トンネルでする”

俺がその言葉を吐いた瞬間だ。

「初めから野外で（プレイ）なんて最低ですっ！」

という叫びと共に閃光のようなピンクを頬に食らわし、みゆきさんは俺の元から走り去っていった。

頬の痛みが広がっていくのを感じつつ呆然と彼女の背を見送る。

そんな俺に、傍でそのシーンを見ていたのである友人（木場）は、そつと肩に手を置いて囁いた。

「……すまん、悪気はあったんだ。けどまさかここまで“嵌まる”とは……」

さすがにやりすぎたかなって反省してる。後で一緒に謝りに行くよ。

あとこのチェリオは僕の奢りだ。取っておいてくれ」

ひんやりと冷えたチェリオが友人から手渡される。

自分で言うのもどうかと思うが、まるで生気を感じられない拳動で俺はペットボトルを口に運んだ。

人工的な赤色をした炭酸が口を満たす。

今日のチェリオは、いつもよりちよつとしよっぱい味がした。

『完成されたすれ違い』（コメディ）（後書き）

お笑い芸人「アンジャッシュ」さんの芸風を参考にお話を作ってみました。大好き……アンジャッシュさん

『アイデア商品開発室』（コメディ）（前書き）

ジャンル「コメディ」 字数3100 3200

『アイディア商品開発室』（コメディ）

彼はバカか、天才か。

入社頃から何度、わたしは頭を悩ませたかわからない。

現在は同じ職場で働いている男、その名は田村。友人がアイデア商品を扱うベンチャー企業を立ち上げた際に、わたしが招いた人材だ。

どんな男かを一言で表すと、生粋の変わり者。あるいは変人と言っても差し障りはない。

とにかく一般人とはちよつとずれた思考回路の持ち主で、昔から周囲に奇異の目で見られていた男だ。

どういう風に変かというのはまあ置いておくとして、田村はその変人さゆえか就職先が決まらず、大学を卒業してから暇そうにしていた。そこで小学生の頃からの知り合いであるわたしが彼を入社させたのだ。当時会社は人員不足にあえいでおり、わたしの紹介の後押しもあって、田村の入社はあっさりと決まった。

アイデア商品の開発を担当するわたしは、田村の変人的発想に期待していたのだ。

彼ならきつと、常人には思いもつかないような商品を考え出してくれる。

そんな期待を抱きつつ彼と開発をはじめて早二ヶ月。思惑とは違い、未だにまともな企画書の一枚も作れていないわたしは焦りはじめていた。

「今日こそは上の目に適うような商品を作るわよ。このままなんの成果も出せないようじゃ、わたしらマジでやばいんだからね」

わたしの叱咤に、田村は不敵な笑みを浮かべて答えた。

「今回の商品には自信があるよ。実はすでに試作品も作ってきた」
そう言って鞆を漁り、商品を机上に置く。

ゾンビ（？）のようなロボットのような人形だった。そしてゾンビの足元には、小さな女性の人形が台座に固定されている。

「なに？ これ」

わたしが問うと、彼は「ライターだよ」と簡潔に答えた。どうやら足元の女性はスイッチになっているらしい。

こんなのがアイデア商品……？ つまらない結果を想像しながら女性を押してみると、

『焼き払えッ！』

という叫びとともに、ゾンビの口から炎が噴出した。

これ巨神兵じゃねーか！！

「おもしろいつしょ？ ちなみにオイルが減つてくるとね……」

内蔵された燃料を抜いて再度女性の、もといクシャナ殿下の頭をブツシュする。

『どうした、撃て！ それでも世界で最も邪悪な一族の末裔か！』

微妙にセリフが変わった。

「どうよー！」

「どうよじゃねーよ」

わたしはでかいたため息を巨神兵に吹きかけた。

「版權にバリバリ抵触しちゃってるじゃない。あとアイデア商品の意味も微妙に履き違えてる気がする」

「でも面白いだろ？ それにお前、ジブリとか好きだったじゃん」
好きとかそういう問題ではなかるうに。確かに面白いっちゃ面白いけど、こんな一発ネタのためにジブリを敵には回せまい。

何度か押してみると、他にもいくつかセリフがあるのがわかった。
『すまぬ』

クシャナヴォイスに代弁させる田村。若干のイラつきを覚えたの

は言つまでもない。

他にまともなのは無いの？ わたしがそう目で訴えると、田村はすかさず次の商品を取り出した。

机上に置かれた棒状のものを手に取る。見たところ、普通のシャープペンシルだ。

「シャープペンだ」

「シャープペンよね」

……。

「で？」

わたしが軽くメンチを切ると、田村は慌てて説明を始めた。

「た、ただのシャープペンではない。なんとこのシャープペン、ノック一回につきちょうど1ミリの芯が出るように設定されているのだ」
親指でシャープペンの尻をノックすると、かちりと音を立てて芯が出た。一度に出る芯が心なしか市販のものよりも長い気がする。

しかし、だからなんだというのか。わたしがそのように問うと、田村はやたら不敵な笑みを浮かべた。殴っちゃおうかな？ とか若干思ったりもしたが、とりあえず説明を聞くまでは耐えることにする。

「このシャープペンはきっかり1ミリしか出ないシャープペン。つまりこの機能を使えば、算数・数学の特定の範囲を簡単に攻略できるのだ！」

……。

「たとえば比の値を求める問題でも、ノックの回数によって公式を用いなくとも答えを出すことができる。これなら小難しい公式を暗記する必要もなければ、計算ミスだって防げる。同様に長さを求める問題だって楽勝だ！」

……。

「これが普及したら算数業界に革命が起こるぜえ！ 近い将来、教室でこの力チ力チ音が重奏を奏でる日もそう遠くは……」

よし、殴ろう。

革命がどうたらぬくだりですでに握力をチャージしていたわたしの拳は、田村の眉間を正確に打った。

「いてえ！」の叫びとともに悶絶する田村。

「文科省にもマークされたいの？　こんなのバトエン（バトルエンピツ）よりも迅速に禁止令が出されるわよ学校で。あんたの考えるのはどうしてこうも敵を増やしそうな代物なわけ？」

「で、でも画期的だろ？　それにお前算数とか苦手だったから」

「どうしてわたしの好みばっか……」

そこまで言って気がついた。いや、自ら口にしてはじめて気がついたというべきか。

今まで、田村が提案してきた商品たちの法則に。

「ねえ、あんた。どうして、いつもわたし基準で商品を考えてくるの？」

わたしは、ジブリ作品が好きだ。特に風の谷のナウシカなんかは子供の頃から大好きで、小学校のころはナウシカの筆箱を使っていた覚えがある。

そんな小学校時代、特にわたしが苦手としていたのは算数だった。計算が素早くやれず、テストはいつもからつきし。一部のクラスメイトから馬鹿にされ、悔しい思いをしたこともあった。

昔からの知り合いである田村が提案してきた商品の数々。偶然と片付けるには符合が揃いすぎている。

わたしの問いに、田村は少し戸惑いを見せながらも、はっきりと答えた。

「だって、俺はお前に喜んでほしかったから」

俺はお前に感謝してたから、お前の喜びそうなものを作るのにモチベーションを感じているんだと思う。だって、お前がいなかったら俺は今でも無職生活のままだ。これまでは誰も俺を認めては

くれなかった。けどお前は俺の特性を信じて、俺をここに呼んでくれた。

そのことへの感謝がずっと俺の意識の底にあったんだ。だから自然と、お前のことを考えてアイデアを練っていたんだと思う。

「でもそれじゃ本当の意味でお前に恩を返すことにはならないんだよな。……ごめん。俺、全然役に立てなくて」

沈んだ声でわたしに謝る田村。わたしは彼のゆがむ表情を見て、胸の痛みを自覚した。

彼はわたしのために頑張っていたのだ。結果はどうであれ、全部、わたしのために本気だったのだ。

商品開発は大事なことだが、彼の気持ちもまた無下にしたくはない。わたしの中で実績を求める合理的な思考と、パートナーに対する情がともに熱を帯びたような心地がした。

だったら……

「田村」

彼の名を呼ぶ声が静かな会議室に反響する。

「これからも変わらず、わたしのために商品を考えなさい」

わたしの声に、田村は机に落としていた視線を戻した。

「わたしが、消費者のニーズを的確に反映できる人材になればいいのよ」

そうだ。わたしが変わればいいのだ。

田村はいつもわたしの好みを的確に捉えた商品を提案してきた。世間にうけるかどうかはともかくとして、わたし個人としてはどれも面白いと感じた商品ばかりだった。つまり方向性さえ定めてやれば、田村の才能は確かなものであるといえるわけ。

だったらわたしがニーズを捉えられれば、彼の発想によってそれを魅力的な商品として具現化できる。

彼の才能を生かすことができる。

都合のよい見通しなのかもしれないが、とにかく、やってみなくてはわかるまい。

「いままで、あんたひとりに頑張らせてごめん。これからはわたしもセンスを磨いて、いい商品作れるように協力するから」

わたしの心からの言葉。田村にも届いたようで、彼の表情がフツと緩むのがわかった。

そして何故か机の上のライターをわたしに差し出して、ボタンを押す。

『すまぬ』

気付いたら、わたしの拳は馬鹿の眉間を捉えていた。

『アイデア商品開発室』（コメディ）（後書き）

コンセプトは”清清しいくらい台無しのオチ”

『撤去しました』（コメディ）（前書き）

ジャンル「コメディ」 字数2100 2200

『撤去しました』（コメディ）

うちの近所に小さな公園がある。広場の隅に滑り台と砂場、水飲み場、そしてトイレがあるだけのしょぼい公園だ。

子供の頃、俺はよくこの公園で遊んでいた。だから一応の弁護をしておこう。

この公園も昔は今ほど寂れた公園でもなかった。

“撤去しました”

かつてブランコが設置されていた場所にはそんな立て札が立てられている。

子供の安全を守りましょう。……そんな名目のもとで、ここにあった遊具は次々に撤去されていったのだ。回転する球体のジャングルジムにバネつきの木馬。子供たちが生傷をつくりながらも、遊びの幅を広げていた魅惑の遊具はいまやその影も残していない。

（ついにブランコまで撤去か。多少のスリルもない遊びの何が面白いのかね）

朝の通勤途中、茂みの向こうに見えていたブランコが消失しているのに気がつく。ついため息が漏れた。幼い頃にあのブランコで遊んだ思い出が脳裏にじわりと甦る。

（そのうちあの公園も“撤去しました”の札でいっぱいになるんだろうな。いつそ広場にしたらほうがまだ遊びやすいんじゃないかな）
自らの想像に苦笑してその場を去る。なんとなくブルーな気分で会社へと向かった。ただそんな気分も、デスクの資料を開いたあたりで吹っ飛んだ。

まあ前置きはその辺にして。

突然ですが、俺は今すごく腹痛に苦しんでいます。

「くそ！ やはり駅のトイレで待つべきだった！」

俺は10分ほど前に『家まで我慢する』という判断を下した自分を呪った。

腹痛には波がある。家までは余裕でもつと思っていたんだが……。不自然な小走りで家路つく。だいたい3分の2くらいは進んだが、それでもまだ7、8分はかかる道のりだ。腸運動の波にもよるが、正直、我慢しきれるかはかなり怪しい。

「お」

そんなとき目に入ったのが前述の公園だった。

そうだ、公園ならトイレがある。渡りに舟！

俺は勇んで広場の端にある建物へと向かった。

男性用のトイレには個室がふたつあった。急いでいる俺は手前の個室に足を踏み入れ、すぐにベルトへと手を伸ばす。

しかしそのときだ。俺はなぜか、本当に意味もなく今朝の出来事を思い出した。

なくなっていたブランコ。そして“撤去しました”の札。そして今日に限ってその光景が妙に気になった自分。

……これってもしか、物語で言うところの『フラグ』ってやつでは？

一気に警戒の念が高まる。もしかしたらこのトイレでも、思いもよらないものが撤去されているのかもしれない！

普通に考えれば間抜けな思考である。しかし腹痛で冷静さを欠いていた俺は妙にヒロイックな気分で確認を始めた。

（そこか！）

便器の脇を見た。トイレトペーパー……はちゃんとある。撤去

されていない。

（と、見せかけて背後！ ドア板か！）

振り返る。バネで開きっぱなしだが、扉もちゃんとそこに存在していた。

「……。まあ、そりゃそうだよな」

俺はそこでようやく一息をついた。トイレトペーパーが切れていることならまだしも、撤去されているなどはさすがにありえないことだ。

馬鹿なことやってないでさっさと用を足そう。そう思って、扉に手をかける。

「ん？」

扉に触れた右手に妙な感触を覚えた。扉に何かついていたのか？手を離すと、扉に自分の手形が残っていた。

キィと高い音を立てて扉が戻る。そしてはじめて、扉の外側にある張り紙が目に入った。

“ペンキぬりたて”

手を見やる。見事に白く染まった俺の掌。

「つつくしょう！」

乱れたベルトを直す間もなく個室を飛び出した。このままではズボンを脱ぐ際にペンキが付着してしまうではないか。それに紙をとる際にも利き手がこれでは不便がある。

だが塗りたてのペンキなら洗えばそれなりには落ちるはずだ。

まだ便意は我慢できそうなので素早く手洗い場へと向かう。5秒で到着！そしてペンキのついていない左手を蛇口に伸ばす。

しかし手洗い場には狙い済ましたかのように

“撤去しました”

の札が貼られていた。

おお神よ。私が何をしたというのです。

（ いやいや、パニックに陥ってる場合じゃねえって！ ）

無意味に出かかった祈りの言葉を飲み込み、思考を働かせる。：

…そうだ！ 確かすぐ傍に水飲み場があったはずだ。確か今日の朝、ちらつと見た気がする。今度こそ撤去されているなんてことはない。俺はすぐに建物を出た。水飲み場はすぐ傍。

そこへは4秒で辿り着けた。すぐに蛇口をひねる。水はちゃんと出た。ペンキがしつこくて落とすのに手間取る懸念もあったが、手は瞬く間に肌の色を取り戻した。

よし、後は用を足すだけだ。

手の水を切り、背後のトイレへつま先を向ける。しかしそこで足が止まった。

自分の腰ほどの高さに、ツインテールに髪をまとめた女の子の頭が見えたのだ。

その子は言った。

「ねえ、おにいさん。なんでズボンはいてないの？」

言葉の意味を脳が理解する前に、視線は自身の下半身へと降りていた。

露になったトランクス。ずり落ちたズボン。

そして個室を出るときに締めそびれたベルト……。

すべてが目飛び込んできて、一瞬、視界が真っ暗になった気がした。

その後、女の子にどんな言い訳をしてトイレに向かったかは覚えていない。

まあ近所問題にもならず、トイレに間に合わないという結末にもならなかった。

だが俺は、負けた、と思った。運命に。

結果として目標を達成することはできたけれど、個室を出たときの俺は、言葉にできない敗北感でいっぱいだった。

『撤去しました』（コメディ）（後書き）

遊びは危険だから面白いんじゃないか。なあ？
相棒

『旬の話題』（落語）（前書き）

ジャンル「落語」	字数	500	600
----------	----	-----	-----

『旬の話題』（落語）

「いや最近多いねえ。旬の話題、つてえの？」

「やれ海賊が現れただの、新党が立ち上がるだの、世間はいつもお祭り騒ぎじゃあねえか。まあそのお祭りも一瞬の花火みてえなものだかね。」

「ときにシゲさんよ。あんたはどの“旬”がお好きで？」

「そおだね。色々あるが、一番はうちの女房の話かね」

「またいやに身内の話じゃねえか。まあいいや。聞かせてみなよ」

「おう。最近、楽しんで痩せる“だいえつと”つてやつが巷で大流行らしいや。それに女房がはまっちまってね。もう大迷惑さ」

「なあに言ってたんだ。女房が綺麗になろうつてんだ。嬉しいことじゃねえか」

「とんでもねえ！ 逆さね。やりすぎて豚になっちまってるよ」

「そりゃあまたどういう了見で。だいえつと、つてのはすりやするほど細くなるもんだらう」

「いやいや、そんなのまやかしさ。」

「やれリングだいえつとだの、バナナだいえつとだの、納豆だいえつとだの、どれもこれもに手え出しちまって。いっつもなにか食ってやがる」

「なるほど。そりゃ太るに違いねえ」

「まったくんでもねえうつけさ」

「どこの女房も大変だ。」

だがそのどこが旬なんだい」

「と、いうと？」

「お前さんの女房は昔っから豚じゃねえか」

「ははっ！ 違えねえ！……だが旬にも違えねえぜ。」

「これぞまさしく『脂の乗った話』ってね」

『旬の話題』（落語）（後書き）

言葉遊びモノは短くまとまってくれるので書き手としてはすごく楽です。手抜き？ はは……そんなまさか……（汗

『武勇伝の真実』（1p掌編）（前書き）

ジャンル「1ページ掌編」 字数400以内

『武勇伝の真実』（1p掌編）

むかしむかし。鬼たちの棲む島、その名も“鬼が島”（そのままだな）に一通の書状が届いた。

『犬、猿、キジを味方につけました。いまからあなたがたを退治しに参ります 桃太郎』

内容を読んだ鬼たちは笑った。というか爆笑した。

犬と猿とキジ？ そんなメンバーで何ができる。馬鹿な男め！

鬼たちは余裕の態度で桃太郎がやってくるのを待った。

そして決闘の当日。

「……なに、あれ」

目を点にする鬼たち。その瞳の先ではおびただしい数の犬、猿、キジを乗せた大船団が鬼が島を囲んでいる。その数ざっと100隻！

呆然と立ち尽くす鬼たちに、先陣を切る犬軍（群？）の総大将は言った。

「別に、一匹ずつとは言っていないし」

し、信じられねえことしやがるぞあいつらっ!!

そして彼らは鬼たちを圧倒し、見事敵の本拠地を制圧した。

彼らにやられた鬼たちは後にこう語っている。

「すさまじい数の動物がいてよくわからなかったが……」

桃太郎、居たっけ？」

『武勇伝の真実』(1p掌編)(後書き)

数も実力のうち

『年賀状で不幸の手紙が届いた』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 字数400 500

『年賀状で不幸の手紙が届いた』（ss）

“この手紙と同じ内容の手紙を20人に送ってください。さもないと不幸が訪れます”

元日の朝。郵便受けを覗くとこんな文面の手紙が入っていた。しかも年賀状である。

「正月から馬鹿なことをやるやつがいるな」

春はまだ先だったのに。俺はため息を吐きつつ、それを机の隅に放っておいた。もちろん送ったりするわけではない。次の掃除のときにでも処分するつもりだった。

しかしこの不幸の手紙が思わぬイベントを呼び込むことになる。

「……当たってやがる」

なんと不幸の手紙のナンバーが、お年玉年賀ハガキの当選番号と一致していたのだ。

「皮肉なこともあるもんだ」

捨てなくて良かった。とんだ不幸の手紙だぜ。

しかも当たったのは二等。カタログから5千円相当のご当地グルメを選んでそれを取り寄せることができる。食いしん坊の俺には願ったり叶ったりだ。

そうして俺はグルメを取り寄せてそれをおいしくいただいた。しかしその次の日。俺はまたまた、思わぬ『当たり』を体験することになる。

「…………まさか生牡蠣があたりとは…………」

正月早々、まさかの食あたり。吐き気がひどくて餅もおせちも食べやしない。

不幸の手紙はやっぱり不幸の手紙だな……。病院のベッドで涙目になりながら、そんなことを思った。

『年賀状で不幸の手紙が届いた』（ss）（後書き）

ちなみに牡蠣が生食用ではないのに、主人公は火を通さず食べてしまった設定となっております。郵便局に落ち度はありません。

第一話 前 『つけない嘘』（ライトノベル）（前書き）

作中連載『箱庭の少年少女』

ジャンル「ライトノベル」 初回拡大版 前編

このお話は3000文字を超え、また前後編の構成となっております。ご了承ください

第一話 前 『つけない嘘』（ライトノベル）

「なあ、頼む。うちの妹を外へ引つ張り出してくれないか」

春もうつらかなある日の昼下がり。昼食を終えて下校の準備を整えていた俺は、教室に現れた部活の先輩からこのような依頼をされた。

「こんなことを頼めるのはお前しかないんだ」

「……逆に聞きます。なんでそんなことを俺に？」

鞆に教科書を詰め込む手を止め顔を上げる。だってそうだろう。

引きこもりの矯正など普通、部活の後輩に頼むようなことじゃない。「専門家に頼むのが妥当だと思いますけど」

当たり前の意見を返す。すると先輩はさすがにいくらい、しれっ、とこう言った。

「え、だってお前が専門家じゃん。二年も引きこもってたし。」

「確かに俺は引きこもっていましたが。二年も」

意図せずして突っ込みにため息が混じった。確かに俺は中学の頃、世間で言うところの“引きこもり”生活を謳歌していた経験がある。しかしそれを指して専門家と評されるのは初めての経験だ。

「カウンセラーとか教師とかはもうさんざん手を尽くしてくれたさ。でもだめだった。だったらもう経験者しか頼るアテはないだろうっ」

「いや、その理論はどうかと思いますが」

百歩譲って俺が引きこもりの専門家であるとしよう。だが決して引きこもりを矯正させることのできる専門家ではない。

「ほかならぬ先輩の頼みです。聞きたいのは山々ですが、正直、お役に立てる自信はありませんよ」

丁重にお断りの言葉を差し出す。しかし先輩はよほど必死なのか、まるで引く姿勢を見せない。

「頼む！ やるだけやってくれ！ 大事な妹なんだ！」

無理です。頼む！ 無理です。頼む！

そんなやり取りを10数ターン繰り返したあたりだったか。結局、先に折れたのは俺のほうだった。

「わかりました……」そう力なく声を吐き出すと、先輩は嬉々として約束の日を取り付け、この場を去っていった。

だが正直、このときの俺は何もわかっていなかった。

この口約束が、近い将来。我々の学校生活を大きく変えてしまうことを。

箱庭の少年少女

第一話『つけない嘘』

さて翌日の下校時。俺は先輩と共に問題の引きこもりが巣食うお宅へと赴いた。

そしてまずはリビングに通され、作戦を練る。

「俺はいまから少しだけ出かけるという設定でいこう。その間、例の妹には客人の相手をしておくように伝えておく。梶本（俺の名前）は俺が帰るまで、ここで妹といろいろ話を振ってみてくれ。とりあえずはそれだけでいい」

「妹さん、俺の相手なんてしてくれまスカね」

「少しは心を開いているからか、俺の頼みはそこそこ聞いてくれる。それくらいなら多分どうにかなるはずだ」

それからふたりで少しだけその後の打ち合わせをした。その間で

妹の情報を聞く機会も当然含まれる。その中には特にふたつほど興味を引かれる内容があった。

まずひとつは例の妹が俺と同じクラスの人物であること。あまり気に留めたことはなかったが、うちのクラスにはいまだ新学期から一度も姿を見せていないクラスメイトがいる。確か“工藤なぎさ”と言ったか。それが先輩の妹さんなのだそうだ。

そして二点目は、今回のお相手がかなり特殊な“能力”を身につけていることだった。

「うちのなぎさ（妹）には、嘘が一切通じない」

耳を疑うような先輩の言葉。「え？」と思わず間抜けな声が漏れた。

「家庭環境やら、一家が詐欺にあつたことやらが災いしてね。……まあ原因についてあんま詳しいことは言えないんだけど、なぎさは嘘をつくことに限って限りなく過敏なんだ。

例えばカウンセラーが甘い言葉をかけても、それが本心からのものでなければ一瞬で見抜かれてしまってる。だからあいつと会話するときはなるべく本音で話したほうがいいって感じた」

「あの……」

拳手をする俺に先輩は視線で発言許可を出した。

「嘘を見抜けるって、マジですか」

まるで小説の主人公が持つているような設定に眉唾ものの感情を抱く。愚直な先輩がこのタイミングで嘘を言うなどとは思っていないが、ついそんな疑問が口から出た。

「まあ信じられないだろうけどね。

本人が言うには、相手の表情とか声色、身体の微細な震え、態度……とかそういうものに反映される違和感がむちゃくちゃはっきりと見えてしまうそうなの。

もちろんあいつも心が読めるわけじゃない。でも相手の言っていることが嘘かどうかはほぼ100%判ってしまう。そういう体質なんだ。その精度は兄の俺からも保障しておくよ。

じゃ、そろそろ出かけるってことをなぎさに伝えてくる。なにか問題が起こったら連絡をくれ。

あとは頼んだぞっ」

「え、ちょー！」

俺の静止に耳を貸さず先輩は階段を上ってゆく。あっというまにリビングに取り残された。

……嘘が全て見抜かれる、ねえ。

一人で待つ間。なんとなく、俺は先輩の言葉を呟いて、何度か反芻をしていた。

そしてリビングで待つこと数分。先輩も玄関を出て行った後、問題の妹、なぎさがリビングに姿を見せた。

「こんにちは」

挨拶にも無言。そして無表情。見事なまでのノーリアクションで、なぎさが向かいのソファに腰を下ろす。もちろん俺と向かい合う位置に居てくれるなどという親切設計はない。

（まあこのくらいは予想済みだけど）

気にも留めずになぎさの観察を行う。直接会うのは初めてのことだったが、ぶっちゃけかなり美人だと思った。パッチリ開いた二重に白い肌。首もとで束ねられたつやのある黒髪。引きこもり中は運動不足になるため太りやすいが、無駄な肉のついていないスタイルも持ち合わせている。

笑顔がないため可愛くは見えないが、印象を除いて判断すれば顔立ちもかなり整っていると思った。学校に通うようになればお近づきになるうとする男子が後を絶たないことだろう。そんな映像が頭に浮かんだ。

「ねえ、あなた」

思案に暮れる最中、急に声をかけられる。少し焦った。しかし表情には出さないよう努めながら、なぎさに向き合う。

「あなた、専門家の人？」

質問から、俺が何者だか彼女に伝わっていないことが読み取れた。まあ適当に相槌を打とうと試みる。

しかしそこで先輩の言葉が脳裏を過ぎった。

『なぎさには、嘘が一切通じない』

(……本当かよ)

少しばかりの好奇心、つまりは邪悪ないたずら心が胸に芽生える。試してみるか。そう思って俺は

「まあ、そんなものだ」

とこう返した。

するとなぎさ。俺の表情からつま先までじろじろと見回し、小首を傾げた。

「嘘。しかもばれる前提で嘘をついてる。

あなた何者？」

射抜くような視線が飛ばされる。正直、かなり萎縮した。別に怖いと思ったわけじゃない。先輩の言っていたなぎさの能力が本物だとわかって、異質な驚きを感じたためだ。

(……先輩が俺のことを事前に伝えていた可能性もないわけじゃない。でもそれなら予め教えてくれているだろう。

なにかラクリがあるのか?)

いや、それではまず先輩がそのラクリを教えなかった理由から説明がつかない。彼女が確実に嘘を見抜く確かな能力を持っている。もうとりあえずはその前提で話を進めていったほうがよさそうだった。

「……元、引きこもりだよ。言ってみれば専門家みたいなもんだ。

今はお兄さんと同じサッカー部に所属してる。俺はマネージャーだけだね。つまりお兄さんの後輩だ」

「なにしに来たの？」

あえて避けた説明を、間髪も入れずにつつこんでくるなぎさ。普通ならここで『先輩と遊ぶつもりで来た。用事が済むまでここで待

つようにいわれている』とでも言えればいい。

しかし目の前の人間にはそれが通じないのだ。嘘を見抜かれるということが思った以上に厄介であること。今、それをようやく体感した。

（本題をかわし続ければ、ごまかすこと自体は……できるのかもしれない。でも後で先輩に聞かれたときに矛盾が生じるかもしれないな）

つまり結局のところ、俺は馬鹿みたいに本当のことを言うしかないようだった。

「まあ……もうわかってるみたいだけど、お兄さんに頼まれて来たんだ。引きこもり経験者として。君の話を聞きにね」

「……馬鹿にしているの？」

「そのつもりはない。多分、先輩にも」

「帰って」

もともと俺の目を見て話さなかったなぎさが顔そのものを他所に向けた。種がはつきりした今、もうこの場を閉めたくてしょうがない様子だ。

だが俺としても先輩の頼みでここに来ている以上、簡単には引き下がれない。もちろん場をつなぐ努力をする。

「俺は先輩が帰るまで、ここで待つよう言われている。だから帰るわけにいかないよ。それに」

目はそらされているが、あえて視線に力を込めて言った。

「それに君も、先輩が帰るまで客の相手をするよう言われている」

なぎさの表情が明らかに険しくなる。けれど反論はせず、その場を立ち去ることもしなかった。どうやら彼女、性質は理知的で正論は聞く引きこもりのようだ。

昔の自分とは違ったタイプだな……と、ちよつと昔の自分を思い返す。そんな淡い回想の時間を引き裂いたのはまたもやなぎさの冷たい声調だった。

「あなたの相手をしろとは言われた。でも話したいことなんてなに

もない」

「まあそう言うなよ。襟巻きトカゲの話でもしようぜ」

「興味ない」

淡泊なボケをより淡泊な態度で潰される。まあツツコミを期待してたわけじゃないからいいけど。

「じゃあ俺の話したいことでも勝手に話すよ」

まだ初日なのだ。場が保てば充分だろう。

それから俺はとりとめのないことを延々と語った。なぎさは相槌ひとつ打ってはくれなかった。まるで一人語りをしているような感覚だ。

だが自分が引きこもりをしていた頃の態度を思えば寂しさも苛立ちも覚えることはなかった。

ただ少しだけ、まるで過去の自分を前にしているようで、胸の締め付けられる思いをした。

「……」

ほとんど間髪をいれずに話していた俺が先輩の淹れていつてくれた麦茶を口に運ぶ。するとなぎさはスカートのポケットから携帯電話を取り出した。

そして電話を耳に当てる。コールを待っているのか数分の沈黙が場を満たす。しばらくして、彼女は何も話さずに携帯を折りたたんだ。

（おそらく電話の相手は先輩だな。用件は早く帰ってこいとかそのあたりだろう。）

でも残念。先輩は俺が帰るまで君からのコールをとらないよ）

この辺は事前の打ち合わせどおりだ。

「ケータイ、持ってたんだな」

俺が言うところ……しらじらしい」と冷たくあしらわれた。知らないフリまでもきっちり見破られる。その精度に内心で舌を巻いた。

「……まあ別にそのことを変わるとか言うつもりはないよ。家族間通話が無料のケータイは内線代わりに使えて便利だよな。俺も

昔は随分とお世話になった。まあ内容はほとんど『腹減った。飯も
つてこい』だったけどね。

別に悪意があって言ったわけじゃないんだ。ケンカを売ったつもりもない」

「……」

なぎさは相変わらず素っ気なかった。だがかまうことなく続ける。
「ただちよつと羨ましいと思った」

昔の記憶をなぞりながら、嘘の混じらない気持ちを言葉にする。

「当時の俺には電話なんてかけられる相手がいなかった。使ったのはメールだけだったよ。誰の声も聞きたくなかったからな。

誰にも会いたくなくて部屋からも出なかった。いや、出られなかった。

……でも君には少なくとも、声を交わすことのできる相手がいる。それってすごく心強いことだと思うよ」

言葉が出きったとき、ポケットの中で携帯が震えた。先輩の帰宅が近いようだ。今日のミッションはひとまずこれで終わりになる。

合図を受けて俺はソファを立ち上がるとした。そのときだ。

「別に私は、自分が恵まれてもそうでなくても、全然どうでもいい。あなたの価値観なんか知らない」

なぎさの口から出た相変わらずの言葉。しかしはじめて、彼女は俺の語りに応えてくれた。

（お！）

もしかして脈ありか？　ちよつと調子に乗って、予め用意しておいた連絡先を差し出してみる。今日はおよそ無理だと思っていたが今ならいけるかもしれない。そんな期待を込めて彼女の前にメモを出した。

が、残念ながらそれは目の前で破り捨てられる。

まあそうだよな。

軽く頭を掻いて俺はその場を立ち去った。

玄関口を出る。そこで当初の打ち合わせどおり、先輩に今日の首尾を報告した。

「先輩の言ってた通り、ほとんど相手にされませんでした」

「まあ、そうだろうな」

「連絡先もきつちり破り捨てられましたよ」

「予定通りじゃないか」

先輩が苦笑いを浮かべる。ただ俺が

「でもそっぽ向きながら、話はちゃんと聞いててくれたみたいですよ」と言つと、先輩は

「それは……予定通りじゃないな」

と悪態をつきながらも

「でも期待以上じゃないか」

そう言つて、ニツ、と笑った。

こうして我々の“引きこもり矯正プロジェクト”第一日目が終了。現在、特筆して成果なし。

ただ解決の見通しあり。同メンバーにて計画を続行すべきと、先輩に報告を済ませた。

第一話 後 『つけない嘘』 (ライトノベル) (前書き)

前編から続いています。

第一話 後 『つけない嘘』（ライトノベル）

そして先輩と俺による引きこもり矯正計画の発足から一か月。我々は依然として標的を家から出すことに成功していなかった。

開始からだいたい週1〜2のスパンで先輩の家に顔を出したが、いまだあの妹……なぎさは俺に心を開いてくれない。

「思った以上に厄介ですね。なぎささんのあの体質は」

俺は先輩に言った。体質というのはもちろん、相手の言う一切の嘘を見抜くというあの特殊能力のこと。

『なぎさは嘘をつくことに対して限りなく過敏なんだ』

先輩の言葉も妄言でなかったことがこのひと月で完璧に証明されている。

なぎさにあの力さえなければ、まだ、楽にコミュニケーションを取れたことだろう。嘘やごまかしを完全に排除した会話がいかに難しいか、体験してはじめて知った。同時に、コミュニケーションのために、自分が嘘に助けられてきたかを自覚した。

「腹を割る関係ってのは、ある程度の感情疎通ができてはじめて成立する人間関係だしな。」

初対面のときから本音だけのトークをするのはやっぱり無理なのか、ちなみに先輩はなぎさが引きこもる前からコミュニケーションをとっていた人物だ。彼がいまなぎさと話ができるのもそのときの恩恵があるからにすぎない。と、先輩は語る。

「これまで何回もあいつと話をしに来てもらったが……無意味っばいか？」

「いえ。そんなことはないと思います」

申し訳なさそうな顔で俺の見込みを窺う先輩に俺は断言した。

「もう少し、続けさせてください」

それから俺は暇を見つけてなぎさに会いに行った。

会話は相変わらず弾まなかった。冷たい態度をされることも多かった。彼女の機嫌しだいでは門前払いを食らうこともあった。

正直、続けるのが嫌になりかけていたこともあった。

でも俺はやめなかった。彼女とコミュニケーションをとり、塀の外へ引つ張り出す努力を続けた。

自分のしていることは無駄じゃない。経験則でそう断言をすることができたから。

（俺も昔、同じことをしていたからわかる）

どれだけ人を嫌っても。

不思議なことに、寂しいという感情はどうしても消せないのだ。

（自分のことを助けようとする人間がいる。気にかける人間がいる。それが嫌なわけなんてないんだ）

彼女を助ける義務が俺にあるわけじゃない。使命感に燃えているわけでもない。

ただ助けたい。そう思う心が枯れなかったから、俺は計画から手を引かなかった。

そしてまたひと月。相変わらず俺は先輩の家でなぎさとサシの会話を臨んでいた。

「あなたも飽きないわね」

リビングに通された俺を冷めた視線が歓迎する。

（見た感じ、今日はかなり機嫌悪そうだぞ。どうする？）

なぎさだけに聞こえない絶妙な小声で先輩が囁く。それに倣った声で俺も返す。

（ギリギリ……大丈夫ってとこじゃないですかね。やばそうだったらすぐ退くんで大丈夫です）

（そうか。じゃあもし一人で処理できないような事態が起きればす

ぐに呼んでくれ)

俺の合図と同時に先輩が早足で玄関を発つ。何を話しているのか、と聞かれる隙を排除するための迅速な行動だった。

男がひとり消えてリビングに二人きり。

ソファの脇に上着をかけ、俺はなぎさの正面に腰を下ろす。ただすぐになぎさは座る位置をずらした。

「相変わらずつれないな」

「あなたに愛想を振ってどうするの」

「方々に愛想を振っておくと、ときに思わぬラッキーがおきたりするぞ？　なぎささんみたいな美人なら特に」

ひきこもりにはわからないであろう社会の知恵を伝授してやる。

なぎさはちらりと俺の表情に目を向けた。そして頬をちよっぴり染め、すぐに視線を逸らす。

反論はしてこなかった。俺の言うことが嘘ではないとわかり、返答に窮したからだろう。

なぎさが美人だと思っているのは本当だ。惚れているわけじゃないが。

それから微妙な間を置いてなぎさは口を開いた。

「あなたに振る愛想なんてない」

「なら誰に振る愛想ならある？　俺じゃ不足ならそいつを連れてこよう」

「苛々する切り返しをするわね……鬱陶しい」

小さな舌打ちをするなぎさ。

この態度には少し、カチンときた。確かに俺は言葉選びが上手いほうじゃない。だが気を使って話をするようには心がけている。

そんな俺に対してなぎさはあまりに容赦がなさ過ぎた。自分が昔、同じような人間だったことはわかっている。それでも気分を害されることに変わりはない。

理屈ではない。感情の問題というやつだろう。

「俺は一応、お前のために言ってるつもりなんだがな」

気がついたらそんな小言を口にしていた。

「もう少し相手の顔を窺うってことも覚ええないか？」

「……あなたに『来てくれ』とわたしが頼んだ覚えはないし」

「じゃあもう来ないほうがいいんだな？」

強い言い方をするが、キレたわけではない。ただ俺の心も未熟で歯止めがきかなかった。

「鬱陶しい。だからもう顔を見たくないと。そう言っていると認識してかまわないな？」

畳み掛けるように言う。俺の迫力にかなぎさは視線を宙に惑わせた。

「な、なにもそこまで言ってないじゃ……」

「じゃあどう思っているのか言ってみろよ。自分の口でさ」

熱くなりすぎていると自分でもわかっていた。ただ冷まそうとも思わなかった。

「文句以外は言えないのか？ その口は」

「……っ」

水気を含んだなぎさの瞳が俺をキツと睨む。顔もうっすらと高潮していた。

そうだ。言えよ。ぶつけてこいよ。

ひとかけらの容赦もない覇気を込めて俺も睨み返す。なぎさの様子を見るに、怖気がなかったはずはない。ただ意地のほうが強かったのか。彼女ははつきりところ言った。

「そうよ。鬱陶しいのよ」

そして一気に叫ぶ。

「あんたのしていること全部、余計なお世話なのよ！

私はあなたと会うことなんて望んでない！ この生き方を変えないなんて思っでない！

もう放っておいてよっ！」

叫びが、胸に突き刺さる。それで心が冷めて、目が覚めた。

「そうか。じゃあもういい」

脇から荷物を取り、ソファを立つ。

「先輩には悪いが、俺はもう知らない。ずっとそうしてろよ」

捨て台詞を残してなぎさの脇を抜ける。彼女は肩を震わせて塞ぎこんでいた。

「あんたなんか……あんたなんか……」

壊れたテープみたいに呟きを繰り返すなぎさ。俺は無視して去ろうとした。先輩には後で事の次第を伝えてやればいい。

大きくため息を吐いてリビングの扉に手をかけた。

そのときだ。

ドサツ。と、背後でもの落ちるような音がした。

別に音の正体が気になったわけではない。しかし人間の性か。反射的に俺の視線は背後へと向けられた。

「……おい」

そこには、ソファから落ちて痙攣しているなぎさがいた。

わけのわからない事態に呆然と立ち尽くす。彼女は震える手でポケットから何かを取り出し、口に入れていた。

そして直後に痙攣は治まり、ぱたりと床に伏す。この時点であろう俺は我に返り、なぎさの脇に寄った。

「どうかしたのか」

うつぶせになった彼女の顔を見る。ものすごい量の水滴が額から滴り、目も閉じられていた。息は整っている……が、意識は完全でない様子。

「おい！ 大丈夫か！」

身体を強く揺する。するとなにかがフローリングに落ちたのか、かしゃりと小気味のいい音がした。

「ピルケース……？」

彼女の手先にプラスチック製の薬品入れが落ちているのに気がつく。倒れた直前に彼女が口に含んだもの。それが何らかの薬品であったことがすぐにわかった。

（……まさか病気か？ だったら早く救急車を……）

いや。確か先輩が言っていた。

なにか問題が起こったらずくに連絡をくれ、と。

（先輩は病気のことを知っているのかもしれない。だったら先に）俺は切っていたケータイの電源をすぐさま入れ、先輩に連絡を取った。どこでどんな状況にあるのかはわからないが、先輩は一度目のコールですぐ電話口に出た。

「おう梶本か！ どうだ？ 首尾は」

「そんなことを言っている場合じゃありません。なぎささんが倒れました！」

受話器越しに息を飲む音が聞こえた。

「……どういう状況だ！？」

すぐに経緯を説明する。混乱しているからうまく伝えられたかはわからない。だが先輩は質問をしてこなかったから、俺は情報をまくし立てた。

「……という感じです。救急車はまだ呼んでいませんが、呼んだほうがいいですか？」

「なぎさは薬を持っているはずだ。意識があるなら……」

「倒れる直前に薬は飲んでいました」

先輩の声を遮って説明する。すると少し間を置いて、落ち着いた先輩の声が返ってきた。

「薬は……飲んでいたか。なら大丈夫だ」

俺の心境に反してほっとしたような声調。どういうことだ？ 説明を求めようとしたところで、先輩が先に口を開いた。

「なぎさの身体はときどき発作を起こす。あいつが持っているのは、それを押さえる薬だ。薬さえ飲めていたなら問題ないはずだよ」

「発作って……なにか病気でも？」

「いや……」

妙な沈黙が少しだけ挟まれた。俺は黙って話しの続きを待つ。

少し息を吸うような音が聞こえたかと思うと、すぐに話は再開された。

「前にも言ったと思うけど、あいつは嘘をつくことに関して限りなく過敏な体質だ。それは前にも言ったよな？」

「はい」頷きながら返す。

「聞いています。その影響で他人の嘘を見抜けるんですね」

「必要ないと思ったから言わなかったけど、実はそれだけじゃないんだ」

「どういうことです？ 問うと、先輩はすぐに言葉の裏にあったもうひとつの意味を明かしてくれた。」

「なぎさは、自分自身も嘘をつくことができない」

！？

受話器を持つ手が震える。

「嘘をつくことに過敏な体質で、なぎさは他人の嘘を見抜けるようになった。しかし同時に、自分の口からも嘘をつくことができない身体になったんだ。」

あいつは嘘を言ってしまった、それを自覚すると発作を起こす。アレルギーショックみたいなものだ。それを押さえるために薬を持っているんだよ」

嘘を言つと発作を起こす？

ならあの事態は……。

「自分のせい。」

……だと思ふなよ、梶本」

諭すような柔らかい声調が受話器越しにも伝わった。

「あいつの体質は誰のせいでもない。強いて言うとしても、過去にあった悲しい出来事のせいだ。」

お前が気に病むことじゃないんだぞ。わかるか？」

黙って先輩の声を聞いていた。すると

「わかったか？」

と念押しのような言葉が発せられた。それでようやく「はい」とひとことだけ声が出た。

「……とりあえずすぐにそっちへ向かうよ。まあもう問題はないか

もしれないが、悪いけど俺が着くまで見ててやってくれ」

「はい」

もう問題はない。その一言でようやく思考が冷めてきたのが自分でわかった。

なぎさは無事なのだ。それが保障されて、ただ、安堵した。

「……それにしても、あいつが嘘をねえ」

先輩はため息交じりの声を出した。

「なぎさ自身も自分の体質は知ってるし、なによりあいつは嘘が嫌いだ。だからこんなことは滅多にないんだよ。」

それなのに、ねえ。いったいなんの嘘を言ったんだろっな」

先輩に言われてあのとときの会話の流れを振り返る。

倒れる直前になぎさが言っていたこと。

『あなたと会うことなんて

この生き方を変えたいなんて

』

「……そうか」

「ん、何？ よく聞こえなかった」

「いえ」

受話器を握る手が熱くなった気がして、俺はジーンパンで汗を拭いた。

「なんでもありません」

先輩との通話が切れて、とりあえずなぎさをソファに寝かせる。軽かった。部屋まで運んでいけないこともなかったが、引きこもりは自分の部屋に入られるのを嫌がるもの。自分の経験を振り返ってそのあたりの親切は自重しておいた。

なぎさの顔を窺う。汗ももうほとんど引いて、いまはもう静か

な寝息を立てている。目が覚めるのも時間の問題だろう。

それにしても美人だな。見ながらそう思った。

「普通にしてりゃかわいいのに」

「……誰が」

「つてもう目覚めるんかい」

驚いて思わず一歩引いた。目の前で急に瞼が開くとかなりびつくりするな。

「平気なのか？」

「うん」

「それは良かった」

台所に向かいグラスを拝借。水を入れてなぎさのもとへ運んだ。随分と汗をかいていたからよほど水分を欲していたのだろう。ほとんど一気にグラス一杯を飲み干した。

「まだいる？」

「ううん」

なぎさが小さく首を振る。短めのポニーテールが優しく揺れた。

「先輩にも連絡したから、もうすぐ来るはずだ」

腕時計を見た。電話をしてから5分。サッカー部で俊足の先輩ならもう長くかからないだろう。

「……ねえ」

その声に、二度目の帰り支度をする手を止める。振り返るとなぎさが自分の正面に向き合っていた。

「なんで、ここまでできるの？」

弱弱い声だった。けどそれ以上に、寂しい響きが俺には気になった。

「お兄ちゃんならともかく、わたしとあなたは赤の他人じゃない。それなのにどうして、ここまでしてくれるの？」

……他人、ね。

胸のうちにその言葉を嚙締めた。俺のいちばん苦手な言葉のひとつかもしれない。

いまはその言葉を聞いたたびに昔の自分を思い出す。だから自分で言うのはかなり憚られる。

まあでも、いつまでも引きずってたら駄目か。

「なぎささんが他人というなら、残念ながら俺たちは他人だ。人間関係は一方通行じゃ成立しないしね」

「だったら」

「でもさ」

いままでうつすらと思っていたこと。そして今ははっきりと自覚していること。それを頭の中で形にする。

少し息を溜めて、ちゃんと彼女のほうを向いて伝えた。

「少なくとも俺は、なぎささんのことを他人と思えなかった。だから助けたと思って思ったんだよ。尊敬する先輩に頼まれたからってのもあるけど、いちばんの動機はそれかな。あと……」

……あとは、昔の自分がしてもらったことに対する恩返しだ。

俺はかつて怪我のせいで夢を失った。糞みたいな家庭環境の中で、唯一、自分の存在を認めさせるステイタスであるアスリートとしての自分を失った。

絶望のどん底にまで堕ちて、もう立ち直る日は来ないと諦めた。

だがそんな俺を先輩とユーリさん（先輩の元彼女）が救ってくれた。だから俺は少しでもその恩を先輩に返したかったのだ。

ユーリさんはもういない。だったら俺が先輩のために動くしかない！ いや、動かなければならないと思った。

まあ今、それをなぎさに言う必要もない。俺は忘れたい愚痴を喉元で止め、繕いの言葉を搜す。

「あと他にも色々と思うところはあった。

でもまあ要するに好きでやってたことだ。だから気にすることはないぞ。感謝はしてもいいと思うけどな」

途中でこっぴどくしくなり最後はちよつとごまかした。思春期の男子の性というやつだ。

さっさと場を退場したくなり、手早く鞆を肩にかける。そして颯

爽とリビングの出口へと向かった。

だが

「私は」

語る声に、足が止まる。

「嘘をつけない身体で、人と関るのが怖かった。どうしても誰かを傷つけてしまうし、わたし自信も、誰かの嘘を見過ごせずに傷ついてしまうから。」

嘘を吐かないで生きていくことなんてできないもの。こんな世界じゃ。

でもあなたはそれをわかったうえでわたしと接してくれていた。あなたがそんなことできるのって……」

なぎさはそこで少し言いよんだが、次の言葉ははっきりと口にした。

「あなたも同じようなことで傷ついたことがあるからじゃないの？」
背中になぎさの視線を感じる。逃げるわけにはいかないと思った。
「あつたとしても、もう昔のことだ」

なるべくおどけた感じで言ってみせた。背中を向けているからなぎさから顔は見えない。それは幸いだった。

「そう」

なぎさはそれだけ言って、それ以上は何も問おうとしなかった。
彼女には言葉の含みが全てわかっている。その上で何も聞かないのは、彼女のやさしさだと思った。

「じゃあ、また」

言い捨てるような形で扉を閉めた。

……また。

空耳ではなければ、扉の向こうからそんな声が聞こえた気がした。

その夜。先輩からメールが届いた。

なぎさがちよつといい表情かおしてる。梶本、何かした？ -

何かしたって何だ。日中の恥ずかしさを思い出して“別に”と愛想のないメールを返した。なんか昔話題になった女優みたいな言い草になってしまったのはどうでもいいでしょう。

気分をさっぱりさせたくて風呂に向かう。あたたかい液体に満たされた浴槽につかっている間、いろいろなことを考えた。

そのいろいろなことがどんなことかは覚えていない。とにかく、なんかどうでもいいことだったはずだ。

風呂から上がると、メールが帰ってきていた。

さつさと開き、文面を確認する。そこには“ありがとう”と一言だけ、顔文字もなにもなしで書かれていた。

「エ 力様風のメールを踏襲してきましたか先輩。

……つて、ん？」

メール上部にあるFrom:の項目をよく見る。そこには見たことないアドレスが入っていた。先輩からなら、“工藤先輩”と出るはずだ。

アドレス帳に入っていない誰かだろうかと思い、アルファベットの羅列をよく見てみる。すると人物はすぐに特定することができた。

N a g i n a g i . p a n d a @ d o k o m o . n e . j p

「……意外にかわいいアドレスだな」

パンダって……。二ヶ月間見続けた、あのムスツとした表情を思い浮かべる。ギャップが妙に笑えた。

頬が緩んでいるのももちろんそのせいだろう。そうに違いない。

「あいつ俺の連絡先、破つてたくせに」

悪態をつきながらも返信メールを開く。

「さて、なんの話をするか」

それから30分かけて、俺はメールの文面を考えた。なんて書いたのかは……まあどうでもいいことなので省くでしょう。

ここからまた少し距離が縮まっていく気がする。

……最終的になぎさを外に連れ出せるのはいつになるのかわからない。それでも着実に、計画は前進の様相を見せ始めている。

いつかは同じクラスの仲間として、教室で顔を合わせられる日が来るんだろうな。

俺はそう遠くないはずの未来を見据えて、送信ボタンを押した。

第一話 後 『つけない嘘』（ライトノベル）（後書き）

ライトノベル初挑戦の作品です。ヒロインを可愛くするのが今後の
命題ッ！

『11番目の男』（文学）（前書き）

ジャンル「文学」 字数2900 3000

『11番目の男』（文学）

自分のペンネームをなによりも嫌う物書きがいた。

名は『11番目の男』

それは他の誰にでもない。物書きが自分で、自分自身につけた名だった。

ペンネームにはふつつ本人が好きな名前をつけるだろう。だが物書きは偏屈な男だった。そして同時に卑屈な男でもあった。

十指に数えられない実力しか持たぬ。そんな非力への諦念が、あるいは皮肉が、頭の“11”という数字に反映されていた。

物書きはかつて小説を書くサークルに所属をしていた。いまから数年前。彼がまだ大学生の身分を謳歌していた時代だ。

当時の彼は物語を書くことに没頭していた。

別に文章で進路を決めるつもりではなかった。だが彼には、彼にとつての、大いなる目標があったのだ。野望とすら言っても大げさではないかもしれない。

それはサークルの小説品評会で10位以上の成績を残すこと。

これだけは他の何を退けてでも得たい結果だった。

一応、物書きがそんな野望を抱くのには理由と背景がある。

自己顕示欲の強い彼はひとりでも多くの人に自分の小説を読んでもらいたいと願っていた。だからひとつ上の“十”という数字にこだわりの持ったのだ。

彼の所属する小説サークルは半年に一度行われる品評で、10位以内に入った作品だけを部内発行の冊子に掲載する。冊子は学校祭でも販売され、毎年千部前後の販売数を記録していた。

そのステージに上がる日を物書きは夢見ていたのだ。プロを目指す人間からすれば小さな到達点に過ぎないだろう。

ただ彼にとつてはそこが頂。見ている世界の全てだった。

なんとしても目標へと辿り着く。物書きは来る日も来る日も、目指す評価を射止めうるシナリオを練りに練って、品評会へと臨んだ。

大学二年生時、秋。最初の出品作品は11位。

三年生春、14位。秋は13位。

四年生春の品評会ではあと一步の11位。

夢はいつもあと一步のところでも物書きの指先をすり抜けた。ただ彼はめげず、相変わらずがむしやりにシナリオを極めようともがいた。

諦めかけたことも何度かはあった。だがそのたびに、原稿の頭に記した名前。11という数字を見ては自らの心を奮い立たせた。

このままでは終わらない。終われない。

自分は必ず11の先へ行くのだ、と。そしていつかはこの呪いの数字と決別してやるのだと。

かたく胸に刻んで筆を動かし続けた。書いた物語は自身ですらその数を覚えていない。だがその全てに魂を込めたと、彼は胸を張って誇ることができた。

そしてまた時は過ぎ、物書きは在学中最後の品評会を迎える。

現実には甘くはない。だがそれでも、才能なき者の努力にまるで応えないほど冷酷でも無かつたらしい。

作品名『隻腕の預言者』：4位

作者：11番目の男

4年生時の秋。発行された小説冊子に彼の栄光が刻まれた。

3年と半年を経てようやく辿り着いた悲願。彼の執念に結果が報いた瞬間がついに訪れたのだった。

ここまでの時間は、彼にとってあまりに長かった。

講義の最中にアイデアを思いついてはノートの端に書く。ノートの枠縁は講義と関係のないメモでいっぱいになった。

布団に入ってまどろみながらも新しい発想を思いついた際にはすぐに電灯をつける習慣もいつしか身についた。寝不足で1限の授業に遅れたこともあった。

11位という順位を取るたびに舌打ちをした。悔しくて次の連休を全て執筆に費やした。そんな何もかもが、このときの彼にとってはいい思い出と化していた。

そして同時に、彼にとつての呪いと決別するときもやってくる。「やっつと、この数字ともおさらばだ」

物書きはついに自分のペンネームを捨てるときを迎えたのだ。どれだけ待ち望んだかわからない瞬間だ。

……しかしこのとき、物書きの胸にほんのわずかな、灯とものような迷いの炎が燦きらっていた。

今までどんな苦難をも共にしてきた仮の名。11という数字。いつも自分の背中を押してくれていた。心を奮い立たせてくれていた。そんな名前を、ここで捨てるのは正しいことだろうか。

最初は確かに嫌いな数字だった。その過去は嘘じゃない。しかし今は？

物書きは首をかしげて、ペンネームをノートに書き記した。“1番目の男”。もう何度書いたかわからない名前だ。

それを消しゴムで擦ろうと試みる。だが何を躊躇ためらっているのか、指が動かない。

「……気味の悪い名前なこった」
物書きはノートを机の隅に退けて、今秋発行の冊子を本棚から抜いた。

自分の作品が載った冊子。巻末には選評と読者の感想も添えられている。

彼はぱらぱらとページを繰り、感想のページに目を通した。冊子

を受け取ったのは前日だったが、名前を捨てる瞬間のお供にと、いままで読まずにいたのだった。

『隻腕の預言者』

・相手の左手を見て、人の未来を見る男の特殊能力が“手相占い”のルーツという設定は斬新。さらに預言者本人に左腕が無いという設定も心惹かれる。

・文章は粗い。けれど構成には隙がなく、煮詰めた跡が窺える。

「……」

つい、冊子を握る手に力が入ったのを彼は感じた。努力が皆に認められる幸せに浸る心地よさ。何ものにも代えがたい快感だった。

しかし文字を読み進めるにつれて、その甘い快感が、鈍る。

・『11番目の男』さんが、ここに載るのを待っていた。

「……え」

さらにページを繰り、同じ数字の含まれた感想を見つける。

・11番目の男様の全力を見ました。いままでのものもすばしかったです。最後にふさわしい出来です。

・手放していいお話でした。11番目の男さんらしさも出ていますし。

何度も何度も、その名は出てきていた。出てくるたびに、読者がその名に親しんでくれていることを、物書きは感じた。

物書きは冊子に物語が掲載される前に、オンライン上で作品を発表していたことがある。きっとその名を感想に混ぜたのは、サークルのホームページに目を通していた人の一部だろう。

「僕の名前が、こんなにも」

意識せず、物書きの視線は片隅のノートに向かっていた。抹消するために書いた“11”という数字の白い紙面に佇む姿が見える。彼は無言で消しゴムを手に取った。そして自らのペンネームに押し付ける。

けれどどうしてか力が入らなかった。

やっぱり、指が震えていて。まるで何かを恐れるかのように。何かを惜しむかのように。

「なんだよ」

なにより嫌いだった名が、眼前に立ち塞がって消えようとしないう。なんだってんだ」

物書きの胸に意味不明の熱が滲んでいた。そしてそれはどれだけ抗おうとも、決して消えてはくれそうになかった。

そのせいだろうか。相変わらず消しゴムをかけることができない。もう仕方が無いから、彼はノートを破り捨てて終いにしようと決めた。

悪態のひとつでもついて。なにか吐き捨てて、終わりにしてやろうと思った。

ノートに添えた手首を下敷きに添え、息を吸い込む。

ビリッ！ という音と共に喉を通った言葉は、おそらくその状況で最も似つかわしくないであろう言葉。

「ありがとう」

だった。

そうして物書きは静かに目を閉じ、軽く丸めた紙をゴミ箱に落とした。かさ、っと軽い音が室内に響く。

「お別れだ」

物書きはこれ以上なんの独りごととも言わず、ゴミ箱に視線を落としていた。

それとまた同時に。

水滴で滲んだ11という文字だけが、そのときの彼の眼を見つめていた。

『11番目の男』（文学）（後書き）

軽い気持ちでつけたペンネームが、いつのまにかわが名のように大切になっっている不思議……

『イマ アイニキマス』（恋愛）（前書き）

ジャンル「恋愛」	字数	3300	3400
----------	----	------	------

『イマ アイニキマス』（恋愛）

三日目の雨にぬかるむ泥道が、丈の長い着物の裾を汚した。

雨の中を外套も羽織らずに駆ける男がひとり。彼の目的地は駅舎だった。

道の脇には紫陽花が鮮やかに咲きほこっている。花びらを濡らす雫は街灯の光を受けて、珠のように美しく輝いていた。だが男はそんな自然の芸術に目をやることもせず、一心に、一目散に駆けるばかりである。

男には待ち人がいた。そしてその待ち人は、今まさにその地を発たんとしていた。

雨空を見上げながらひとり佇む駅舎にて。桃色の晴れ着を羽織った女は、人目もはばからず大きなため息をついていた。

「来てはいただけなかった……わね」

雨音が駅舎の屋根を打ち、木造の駅舎に響き渡る。そんな水の雑音が彼女のため息をかき消した。

薄暗い待合室の掛け時計に目をやると、時刻は7時54分。列車の到着まではもうあとわずかに迫っていた。

「わたくしももう行かないと」

やや腐食した木のベンチが、きい、と軋むような音を立てる。女は脇に置いた手提げを腕に掛けて立ち上がった。

しかしそれだけ。女の足はなかなか一步を踏み出せない。

彼女はまだ待っていたかった。ここに呼んだ男が来てくれると信じていたかった。

その男は彼女の想い人。見合いに行く前に、女は最後に愛した人の姿を目に焼き付けておきたかったのだ。

（けれどそんなのはただの我憊。わたくしは父に逆らえず、見合いへ行くことに決めた。愛情よりも家をとったのだもの。そんな女に、いまさら会いにきてくれるわけ……）

こみ上げるものを飲み込み、目元を袖で拭う。唇を噛みながら待合室の引き戸を引いた。白熱灯の明かりにホームの白線がぼんやりと浮かんでいる。

そこへ向けて女はゆっくりと足を踏み出していた。そのときの彼女に思考は無い。何も考えず、うつろな眼差しで、浮浪者みたいに力なく足を運ぶだけ。

辺りには誰もいなかった。彼女だけだった。歩みを止める者はいなかった。

朱色の美しい草履が白線を踏む。風に煽られた雨粒が彼女のつま先を濡らした。

「……さよなら。大好きなあなた」

「なにがさよならだっ！」

さらに踏み出そうとする一歩は、背後から飛ばされる男の声によって止められていた。

ついさきほどまでは無かった人影。いつのまにが男は彼女の声が届くところにまで来ていたのだ。

男が白い息を吐きながら女に駆け寄る。男の形相には悲壮とほんのわずかの憤りがにじみ出て、女の肩を強張らせた。

「こんな手紙一枚残して出て行くななんてあんまりだろう」

男はつい先刻に受け取った書状を開いてみせる。

“今夜7時。見合いのため東京に発ちます。

ごめんなさい。さようなら”

女の達筆で、流れるような墨の線が短い別れの言葉を紡いでいた。

「見合いはしたくないって言っていたじゃあないか」

男の声には、まるで彼女ではない誰かを責めるような響きを伴っていた。それに対し女は視線を足元の白線に落としながら呟くように言った。

「父の意向なのです。断るわけには……」

女は不本意な見合いの背景を限りなく簡潔に伝えた。家の、あるいは親の意思が絶対の時代。

彼女に婚姻の相手を選ぶ余地がないこと。身分違いの恋が成り立たないことを改めて男に突きつける。

「わたくしとあなたは生きている世界が違うのです。だから……」

「でも止めて欲しかったから、わざわざ手紙なんて書いたんだろうが」

明記された行き先と出立の時間。男は短い文面から、女のことを過不足無く汲み取っていた。

「お前は止めて欲しいと思ってる。本当は見合いなんかしたくないと思ってる。」

だから止めに来た。 つべこべ言わずに俺と来い！」

到着の迫る列車の光が、白線すれすれに立つふたりをまばゆく照らす。男の手は彼女の手前1寸に差し出されていた。

女はそれを握り返そうとする拳をぐっ、と握り締める。なにより求めていた男の言葉。それでも、受け取るわけにはいかないところにいる自分。

齒痒かった。泣きたいくらい、女は齒痒い思いをしていた。

「家柄なんかどうでもよくなるくらい、お前を幸せにしてやる。そ

れでも不満なら、俺は必ず出世する。

時間は……かかるかもしれない。でも絶対にだ」

男は別段、正直者というわけでもない。けれど恋人との約束は今まで一度たりとも破ったことがなかった。

「家柄が愛情か。……信じるものはお前が決めてくれ」

あと30秒もないところにまで列車が迫る。女は男に言われた言葉を噛締めて思った。自分は幸せ者だ、と。ここまで思ってくれる人と出会えた己の運命に感謝をした。

けれど、それでも。

「ごめんなさい。
もう、行かなくちゃ」

最後は謝罪の言葉を残して、涙を頬に伝わせた。

それから数日。男はぼうつと軒先を眺めるだけの休日をごこして
いた。

つい先日まで瑞々しく咲いていた花が雑草に囲まれて枯れていた。
きつと栄養を奪われたのだ。空しいと思った。

縁側には蝉の抜け殻を見つけた。もちろん動かない。まるで自分
のようだと思った。

「おい、東京に行ったお京ちゃんから電報が届いてたぞ。お前最近ずっと休んでるからわざわざ届けに来てやったんだ。これでも読んで元気だせよ」

雨の上がった夕方になって、職人仲間の男が電報の複写を持って訪れた。男は同僚に「中を見たか」と聞くと、同僚は首を横に振った。

別にめでたい内容があるわけじゃないんだな。冷めた表情で書面を開く。

“イマカラ アイニキマス”

別れるとき受け取った手紙以上に短い文面だった。男はそのとき以上に大きなため息をついた。

「見合いに行く……って報告か。相変わらず律儀だな」

そんな報告いらねえよ。最後の一言は、同僚の耳に届かないくらいささやかな呟きだった。

同僚が去って、また孤独の時間がやってくる。いつもならこの時間。川原とか喫茶店、時には自宅とかで恋人と安らかな時間を過ごしていた。

つい先日まであったそんな時間がまるで遠い思い出のよう。男は寂寥感でいっぱいになり、京のとの会話を思い出そうとつとめた。

ねえ、あなた。

いつも京はこの言葉から話を始める。男が思い出そうとすると、本当に声が聞こえてきそうな気がした。

「ねえ、あなた」

「……ん？」

妄想の中で再生したはずの声に、男はつい返事を返した。そのくらしい生々しい声を耳が捉えたような気がしたのだ。

何だ？ 幻聴？

戸惑いながら顔を上げる。するとそこには、東京に発ったはずの京が立っていた。

「ただいま帰りました」

微笑を浮かべながら軽い会釈をする。長い髪が静かに揺れて肩に落ちた。

「え？ は？」

間抜けな声を出している。おそらく表情もだ。男はそう自覚した。

「お前……東京に行ったんじゃない」

「ですからただいま帰りました、と」

いやいやそうじゃなくて！ 男は頭を掻きながら、頭の中でこん

がらがる想いを少しずつ口にする。

「何でここに……。見合いに……。行つてたんだよな？」

「ええ。行つてまいりました。行つただけ、ですけど」

見合いに行け。そう言われたから、行くだけ行つて参りました。などと、子供の屁理屈のようなことをいたずらっぽく言う京。

そしてそのとき男は電報の意味を捉え違えていたのだと思った。アイニイキマスとは、俺に会いにくるという意味だったのか。そう解釈する。

「……いやいや、でも何で俺に今更！ 行くだけ行つたつてお前、相手は公爵の子息つて聞いたぞ。

あのときは家柄なんて関係ないとか勢いで言つたけど、俺が同じ天秤に乗れるような相手じゃないだろ。どうして断つて、しかもわざわざ戻つて来てるんだよ！」

「ですからそれも、電報でお伝えしたじゃないですか」

「だから何を　！」

混乱する男。そんな彼に京はそつと歩み寄る。そして別れの時に取れなかった男の手をそつと握り、改めて告白を自分の口で伝えた。

「今から、愛に生きます。つて」

イマカラ アイニイキマス

電報に込められた真意。それをひとつひとつ形にする。

「父……一族……身分。これから立ち塞がる壁はたやすく打ち崩せるものではありません。苦しいときもたくさんやってくるでしょう。それでもわたくしはあなたの愛情を信じ、生涯、あなたとともにありましょう。わたくしとわたくしたちの間に出来る子を、きっと幸せにしてくださいまし」

気がつくと男は京の背中に手を回していた。

もう二度と離すまいという想いが彼の両腕に力を込めさせたのだろう。「……痛いです」そう彼女が甘く呟くのも無視して、愛する想い人を強く抱きしめていた。

『イマ アイニキマス』（恋愛）（後書き）

”会いに行くことは、すなわち愛に生くこと” だれかがそう言っていたのを思い出して書きました。言葉とはよくできたものですね。

『タイムマシンのセキュリティ』(SF)(前書き)

ジャンル「SF」	字数3100	3200
----------	--------	------

『タイムマシンのセキュリティ』（SF）

「ほほう。これが例の“タイムマシン”というやつですか」

とある研究所の一室にて。卵のような楕円形のマシーンを前に、訪問者は感嘆の息を漏らした。

「噂には聞いておりましたが、まさか本当に完成させておられるとは。いやはや驚きました。未来工学の権威と称されたお話も納得ですな」

「いえ。まだ開発も半ばです。特に復路の手段に改良の余地がありましてね。

実用化……いえ、正式な発表までもまだ当分の時間がかかるでしょう」

デスクに置かれた年代物のデジタルカレンダーに視線をやり、N博士は少し遠い目をした。“2030” 年号を示す四桁の数字が無機質に刻まれている。

そんなN博士に訪問者は「ご謙遜なさらず」と言って愛想よく笑った。

「試作の時点ですでにタイム・スリップを成功させているというお話じゃあないですか」

「全くお耳の早い」

公式に発表されていない情報をさも周知であるかのように口にす

る訪問者。N博士はその諜報力に内心でため息をついた。

「一部ではすでに知られていますよ。偉大な発明は隠しても隠し切れないものです」

それから訪問者はひとしきり博士の発明を褒めちぎると、話題をタイムマシンの噂に戻した。

「それはそうと博士。この大発明がすでに完成間際だと、よからぬ輩の介入が心配ではありませんか」

訪問者は指折り数えながらその例を口にする。

「強盗、窃盗、産業スパイ……どんな犯罪から狙われるかわかったものではありません。」

そのあたりの対策は万全ですか」

微笑の中に心配を滲ませる訪問者。しかし彼と対照的に、N博士の表情に陰りは生じない。

「大丈夫ですよ。盗まれたりはしやしません。一応、監視カメラは設置してありますし、自作のセキュリティも施してありますから」

「そうですか。それで安心が守られればよいのですがね」

それからふたりはひとしきりの談笑を済ませ、訪問者は研究所を後にした。互に有益な時間を過ごせたらしい。ふたりは非常に晴れやかな笑顔を交わして別れた。

ただこの日は事情があるとのこと、訪問者は最後までタイムマ

シンの試運転を体験することはできなかった。可能なら、時間旅行という未知の技術を体験して帰りたいという願望は彼にもあったのだ。

しかし彼にとっては、噂のタイムマシンが存在していること。また時間旅行が実際に可能だという言葉質が取れただけで十分な収穫があったといってよかった。

「どうせ盗むんだ。試運転なんざこれからいくらでも出来る」
そう呟いて、訪問者は唇の端をつり上げた。

PM27時。訪問者はN博士の研究所を、今度は無断で訪れていた。

ひっそりと静まり返る研究所に張り巡らされるセキュリティをひとつひとつ外して、目的の部屋へと歩みを進める。

「移動物感知モーションセンサーに頼りすぎだ。こんなもの、ステルス迷彩ひとつでどうにでもなる」

訪問者の纏うスーツの表面は彼の動きに合わせてカメレオンのように色を変える。移動するものを感知して警報を鳴らすセキュリティも、最先端の泥棒七つ道具の前には形無しだった。

それから訪問者は15分もせずにお目当ての部屋へ侵入を成功させる。丸裸のタイムマシンを前にして、訪問者は少ばかり拍子抜けた様子だった。

「こんなセキュリティだけでよく今まで同業者たちに盗まれなかったもんだ」

部屋の内部にはなんのセンサーもカメラも確認されなかった。タイムマシン以外、まさしく何もないことを確認し、余裕の振る舞いで対象へと歩み寄る。

「さあ、こいつを運ばせてもらおうか」

不敵な笑みを浮かべてタイムマシンの外壁を撫でる。

と、その瞬間。タイムマシンは彼の手先から、まさに風のようになんて姿を消した。

「……………何？」

さきほどまでタイムマシンのあった位置が空間に変わり戸惑う訪問者。辺りをぐるりと見渡してみても、目の届く範囲にタイムマシンの姿は見当たらない。

「くそ。もしかして触れると保管場所を移動させる類のセキュリティだったか？」

そうなると長居はまずいな」

こういうシステムが作動した以上、場に留まれば拘束は必死だろう。訪問者はすぐにステルスを起動させ出入り口へと向かった。

だがドアノブをひねろうとした時点で異変に気がつく。なんとドアノブの鍵穴に、コンクリートのようなものが詰まっていて外に出

られないのだ。

「どういうことだ！？ 来たときはこんなの無かった！」

いったいいつの間にドアノブは固められたのか。タイムマシンが消えると同時にコンクリートが流し込まれて固まったのか？

しかし訪問者が見たところ詰まっているのは普通のコンクリート。セキュリティが作動してから固まったにしては早すぎる。

「タイムマシンが消えて、無かったはずのコンクリートが現れた。……もしかして俺が別の場所に飛ばされたのか？」

そうならばあったはずのものが消えてなかったはずのものが現れた現象に説明がつく。だがその仮説もどうもしっくり来なかった。

「だったらタイムマシン本体に仕掛ける必要はないだろう。

……って、ん？ タイムマシン……？」

そこでようやく訪問者は自分が盗もうとしていたものが“何のために使うもの”であるかを思い出した。

すぐに部屋の隅に駆け寄り、本の散乱するデスクの上を漁る。素人目には異言語としか思えない論文を除けると、真新しいデジタルカレンダーがすぐに見つかった。

「2010”

……やっぱり、そうか」

デジタルカレンダーの隅に示される4桁の数字は、彼が昼間に見

たそれより20もの数字を減らしていた。

「あのタイムマシンは、触れたやつを強制的に過去へ飛ばす仕組みなんだ」

「まだ開発も半ばです。特に復路の手段に改良の余地がありませんね」

博士が昼間に言っていた内容が脳にリフレインする。
そうか。あれはタイムマシン自体が過去には行かず、触れた者だけが時間を越えるという欠陥を意味していたのか。ここでようやく訪問者はすべてを理解した。

（タイムマシン自体は時間を越えない。ゆえにタイム・スリップを使った人間は帰ってこられない。だってマシンはもとの時代に残ったままなんだから。

だから復路に問題があるって言ったんだ）

その意味をあの場で確認しなかったことがあまりに大きな失策であつたことを、訪問者はここにきてようやく自覚する。

さらに言えば、セキュリティに関しての追求も甘かった。

“タイムマシン自体がセキュリティ”そのことに気が付けなかったせいで、訪問者は安易にタイムマシンへと触れてしまったのだから。

「いままで誰にも盗まれなかったのはこういうわけか。完全に、泥棒おれの敗北だ」

がつくりと膝を落とすと同時に、訪問者の視界が揺らぐ。それから一分もせずに彼は眠りへと落ちた。デスクの脇の装置から無臭の催眠ガスが出ていることを最後まで知らずに。

すると彼が眠ったのを確認したかのようなタイミングで、封鎖された扉が外側から開いた。そしてガスマスクをつけた男が倒れている訪問者へと歩み寄る。

「また送られてきたか。

おや、今度は 出版社の幹部じゃあないか。まさか彼までも、将来は私の発明を狙う立場にしようとは」

研究所の主はマスクの内側で盛大なため息をついた。

「まあいい。知人が未来で泥棒を働くと知るのは気持ちのいいことじゃあないが、これも発明のためだ。

おっと、今度の泥棒は迷彩服を持っているのか。これもマシンの部品に応用できそうだな」

未来の技術に目を輝かせる若かりしN博士。迷彩装置からいくつかの部品を取り除き、白衣のポケットへと放り込む。

「また近いうちに20年後から人間が飛ばされて来るんだろう。今はまだない最新式の機械を装備した状態で。

これを参考にすればまたタイムマシンの完成に近付きそうだ。未来の自分も、うまいことを考えたものだなあ」

『タイムマシンのセキュリティ』（SF）（後書き）

SF『タイムマシンのセキュリティ』をお読みくださりありがとうございます。ありがとうございます。タイムパラドックス的な話を書きたかったのですが上手くいっているのでしょうか。難しい話をつくると、だいたい頭がこんがらがります。

『いざ鎌倉!』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 字数800 900

『いざ鎌倉！』（ss）

時はXX世紀。太平洋の端くれに位置するとある島国の一角で、
大きないくさが起ころうとしていた。

「我らは將軍の為にあり！ いざ鎌倉っ！！」

集団の中でもひととき大きな兜を被った男が怒号をあげる。彼の
雄たけびに倣って叫ぶ兵士たちの声も合わさり、大地を振るわせた。

「いざかまくら”って、なんのこと？」

「いくさに出るときの合言葉みたいなものよ」

共に出立を見送る娘に問われ、母親は答えた。

「この言葉を叫ぶことで、將軍様との絆を確認するの」

「へえ……。すてきなことばなのね」

そう言っ て軍勢を見上げる少女の瞳に輝きが宿る。五百を超える
兵士たちのひとりひとりに、尊敬のまなざしが確かに注がれていた。

（省略）

それから数日後。戦いに勝利を収めた兵士たちは鎌倉の街で酒に興じていた。戦場でたまった鬱憤は、田舎での農作業に戻る前に少しでも解消させておくのが習わしみたいなものである。

ふるさとを出る際、気迫に満ちた掛け声をあげた軍団長は機嫌よく部下たちに言った。

「今夜は第二の戦いの始まりじゃあ！
ゆくぞお前らあ！！」

そしてお決まりのあの合言葉を元気いっぱいにかぶ。

『いざキャバクラっ！！！！！！』

……ビックリマークの数を見ていただければお分かりだろう。“いざ鎌倉”をもじった悪ノリ100%の掛け声は、鎌倉へ発つときの声量をはるかに超えていた。

「ねえ、“いざきゃばくら”ってなんのこと？」

「……いくさに出るときの合言葉みたいなものよ」

袖を引っ張って問う娘に、ひきつった笑顔で答える母親。娘はよくわからないという風に小首をかしげた。

「あれ？　いくさはこのあいだ、終わったじゃないの。」

こんどはどんなにくさをしにいくの？」

ほんの少しの硬直。それから母親は、氷のような間を置いて、彫像のような笑顔を浮かべて

「子供は知らなくていいのよ」

と言った。

聡明な娘はその一言で全てを悟り「しょーもない」をひとこと呟いて男たちの背を見送った。

そのまなざしは、まるで残念なものでも見たかのように冷ややかであつたという。

『いざ鎌倉!』 (SS) (後書き)

SS『いざ鎌倉!』をお読みくださりありがとうございます。
「いざキヤバクラ」……ええ、はい。そうです。それが言いたかっただけです。無性に一発ギャグをかましくなっただけでつい書いてしまいました。ノリって恐ろしい……

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（前書き）

『古畑任三郎の弟子』は全7話構成の予定です。ご注意ください。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）

こいつが、いけないんだ。

ゴトゴトと鈍い走行音を立てる列車の中。私は血に染まったスチール缶を握り締め、事切れた部下を見下ろしていた。

『撮らせていただきましたよ。部長』

ほんの数分前のことだ。愛人との旅行を済ませた帰りの列車内で、奴　滝本はデジタルカメラを片手に私の前へ現れた。

『ずっと後をつけさせていただきました。素敵な愛人がいらつしやるという噂は本当だったのですね。』

いやはや全くもって羨ましい。私にもそんな幸せを少し分けていただきたいものです』

滝本が形だけの不気味な微笑を浮かべてカメラをちらつかせる。

『どうです？　部長。せっかくの楽しい旅行です。思い出にひとつ、お買いただけませんかね』

滝本はデジカメのメモリを私に購入するよう迫った。奴の提示した額は一千万。支払いが不可能な額ではなかった。

しかし取引される物品はあくまで“データ”だ。奴がコピーを取っていない保障はどこにもない。この取引で全てが済むとはとても思えなかった。

これから私は奴に怯え続ける人生を送るのか？ そんなのは駄目だ！

……思うと同時に、私は自販機から取り出したばかりのスチール缶で奴を殴打していた。

何度も、何度も。きっとそのうちの一撃が頭蓋の急所を捉えたのだろう。私が我に返ったとき、滝本はすでに肉の骸と化していた。

「……スチール缶ごときで人が死ぬのか。くそ、こんなつもりはなかったのに」

本当に殺すつもりはなかった。ただ衝動的な怒りをぶつけてしまっただけなのに。

いや、後悔するにはもう遅すぎた。殺してしまったのだ。その事実は変わらない。なんとか逃げ延びる手段を考えなくては、この先に待つは破滅の人生だろう。

妻に浮気がばれるよりも部下に脅されるよりも暗黒の未来がすぐ傍まで迫っている。そう自覚したとき、私は自分でも驚くほど手際よく、罪を逃れるための手策に転じていた。

まずは凶器を処分。コーヒーの入ったスチール缶は指紋を拭って、自販機横のゴミ箱へと捨てた。

いずれ警察は凶器がスチール缶であることに気がつくだろう。だがモノはここで販売している缶コーヒーだ。これから犯人を特定することなどできやしない。

ならば凶器は持ち運ぶより現場近くに放置するほうが安全と考えたのだ。ゴミ箱に入れたのは単なる時間稼ぎに過ぎない。この旅客列車が次の駅に停車するまで約20分の時間を稼いでくれれば充分だった。

「次は……元凶のこいつだな」

奴の手からデジタルカメラを奪い取る。すぐにSDカードとカメラ本体の両方をおよそ復元不可能なまでに破壊した。無駄なくらい力が入ったせいか、SDが粉々になるまで10秒の時間も要しなかった。

あとは死体。このまま自販機コーナーに置いておきたくはなかった。少しでも発見を遅らせたい……そう考えて、自販機コーナー横の通話スペースに死体を運んだ。入り口に扉も無い自販機コーナーよりもまだ時間を稼ぐこともできるだろう。

最後に、私は滝本の財布から札だけを全て抜き取った。一万円札を2枚。金目当ての犯行と思わせるためだ。まあデジカメを壊した時点でそう思わせられるかは疑問だが、やれるだけのカムフラージュはすべてやっておきたかった。

「まあ……こんなところか。あまり長居は無用だな」

どれだけ現場を誤魔化しても誰かに目撃されたらそれまで。衣服に血液が付着していないことを確認し、私はさっさと指定席の並ぶ2両目のドアを開いた。

一部の乗客たちが顔をこちらに向ける。吐き気がするほどの視線を感じた。

もちろんそれは私の気のせいだろう。まだ死体すら見つからないのだ。私の犯行を知るものが乗客の中にいるはずはない。

にもかかわらず、みんなが私を見ているような気がしてならなかった。糾弾の視線が胸に突き刺さるような感覚が拭えなかった。

（これが“後ろめたさ”ってやつなのか）

深呼吸をして足を進める。ようやく座席に辿り着いたとき、足がずっと震えていたことに気がついた。そしてそれを押さえようとする掌までも。

座席に置き去りにしていた携帯が留守電の存在を示している。だが今の私はそれを聴く気にはなれなかった。

携帯電話を見ると死体を置いてきた通話スペースを嫌でも連想する。私は吐き気を抑えてその場にふさぎ込んだ。

駅に到着するまでの残り20分。そしてこれから先の人生が、つがなく進んでゆくことを祈ることしかできなかった。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（後書き）

『古畑任三郎の弟子』？をお読みくださりありがとうございます！
短編集に混じるには異彩を放つお話となりそうですが、どうか
気長にお付き合いいただけると幸いです。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（前書き）

？の続きです。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）

「なんだか喉が乾いたね」

私が人生最大の罪を犯し、座席に戻ったまさに直後。前の席に座るふたり連れの男のほうで隣の人間になにやら話しかけていた。

「……そうですね。今日はなんだか空気も乾燥してますし。あたし飲み物買ってきますよ。西園寺さんはなにか飲まれます？」

「じゃあお願いしようかな。あまり甘くないもので」

「わかりました。コーンポタージュですねっ！」

「いや確かに甘くはないけどもっ」

西園寺と呼ばれる男と若そうな女の声。テンションの高い女のほうの声妙に耳についた。普段ならそう気にならない程度のものであるうが、暗い精神状態のときに聞くには正直、つらい。

「ブラックが飲みたいな。いつも飲んでるやつがあつたらそれでお願い」

「かしこまりました」敬礼して自販機コーナーへと向かってゆく女。後ろ姿だけしか見られなかったが、小柄な割りに妙な威圧感を放つ背中に見えた。おそらく人を殺した後ろめたさがそうさせるのだろう。何もかもが不必要なほど恐ろしく思える。

しばらくして女は缶をふたつ片手に座席へと戻ってきた。

「買ってきましたよ！ コーンポタージュとイカ墨スープ！」

「……ごめん念のために聞くけど、イカ墨は誰の？」

「もちろんブラックをご注文いただいたお客様のものですつ。さあお飲みくださいませっ！」

「確かにブラックを注文したけど、僕がいつこれを飲んでいたと……」

西園寺という男のため息がこちらまで聞こえてくるようだった。

（女の様子を見たところ、死体は発見されてないみたいだな）

こちらは絶対に聞こえないように、ほっと息をつく。まあそれはそうか。飲み物を買うに行く目的で1両目と2両目のエリアに向かったなら、まず通話コーナーの死体は発見されない。

心配しすぎるのもかえって不審に思われるかもしれないな。そう思っただけいつもどおりの気分を取り戻そうと私は努めた。するとその刹那の出来事である。

「あ、それはそうと西園寺さん。わたし自販機がある部屋の傍にある通話コーナーで、大変なものを見つけちゃいました」

は？

耳を疑いながらも、女の話す声に耳を澄ませる。

「ちょっと見ていただけますか？ わたしもすぐ行きますから」

そう言われると西園寺は急に固い表情になって席を立った。その背中をぼんやりと見送るだけの自分。

どういうことだ？ まさか見つかった？

いや、まさかではない。もう確定だろう。どういう経緯が知らないが、死体があの子に発見されたのだ。

（どういうことだ？ 何で見つかった）

冷や汗が頬を、胸元を、全身をつたう。何故だ、なぜ……

「すみません」

混乱の最中にいる私はその声で現実へと引き戻された。気がつくとき、女が私の座席の横に立っていた。そして一片の隙も無い笑顔を私に向けて、こう言い放った。

「お話があります。ちょっとお時間、よろしいでしょうか」

そう言って指をさす女。細くて白いひとさし指は、私がつい先ほど滝本を殺した現場である1両目へと向けられていた。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（前書き）

『古畑任三郎の弟子』？から続いています

『古畑任三郎の弟子』？（推理）

案の定、というか何というか。私の隠した死体は見つけられていた。顔にハンカチがかけられていることを除けば、つい今しがた隠したときのままの状態が維持されている。

現場に到着すると、先にこちらへ向かった男……西園寺が死体の持ち物を並べている現場に出くわした。

「この人……死んでいるんですか」

「ええ。わたしが見つけたときには、残念ながら」

女は声だけ神妙な感じに変えて言った。しかし表情は相変わらず花のように可憐だ。そんな態度が妙に不気味に思えた。

「……事件の現場みたいですけど、その、いいんですか？ 警察の許可なく勝手に触ったりなんかして」

「大丈夫ですよ。私たちがその警察ですから」

なるほど。それでこんなに落ち着いていられるのか。疑問がひとつ解消した代わりに、緊張感が高まる。

まさかこんなにも早く死体が警察に触れることになるだなんて思ってもいなかった。なんとか私に不信感を持たれずにこの場を凌ぎたい。

いや、今はそんなことよりも。

「どうして素人の私をここに？」

ずっと引つかかっていたことをストレートに口にする。疑われる
も何も、どうして私を指名してここにつれてきたのか。その理由が
気になって仕方がない。

女は私が警戒していることを知ってか知らずか、何ももったいぶ
らずにその訳を説明する。

「いえ。あなたがこの死体を見た覚えがないかお聞きしたいと思
まして」

「……どうしてです？」

「1両目と2両目の間にあるこの場所には、自販機コーナーと通話
コーナーだけでしょう？　けれどあなたはさっき座席に戻ってきた
とき、なんの飲み物も持っていないませんでした。」

だとすればあなたに用があつたのはこの通話コーナー。なにか目
撃したのならそれをお聞かせください」

見ていたのか。偶然というものの存在を心から呪ってみる。

いやもしかすると完全な偶然とも言い切れないな。こいつは
警察官だ。凡人とは異質な観察眼を持っていたとしても不思議では
ない。

「なにかございませんか」

丁寧な声調に柔和な表情。情報提供を申し出る態度としてなら

不自然なところはなかった。だが女の瞳に込められた鋭い視線は、私の警戒心を高めるには充分だった。

「いえ、何も見ていませんよ。そもそも私の向かった先は自販機コーナーで、通話コーナーには出入りしていませんので。

飲み物を買わなかったのは、単に欲しいものが見当たらなかっただけです」

「そうですか。期待していたのですが」

”何を”期待していたのか。はっきりと言わない女の真意が見えない。

「……あ、でもひとつ気になることが」

私は不自然でない程度のリアクションを混ぜ、おそろおそろといった調子で死体を覗き込んだ。

「やっぱり」

「どうかされました？」

「顔が隠されていましたので一瞬……わかりませんでした。この人は会社の同僚です」

私はあえて被害者と自分が知り合いであることを白状した。こうなった以上、私とこの滝本が上司と部下の関係であるなんて調べればすぐにわかることだろう。

となればここらで白状しておかなければ、言わなかったことがあ

とあと不自然になる。疑われうる要素はできる限り排除しておきたい。

「まさか彼とこんな形で会うなんて……」

悲痛な声調を出して善良な一市民を演出する。それを見て、女は明らかに形だけの「お察します」という言葉を私に寄越した。

「彼が誰かから恨みを買っていたとか、なぜこの列車に乗っていたとか…… なにかご存知ではありませんか」

先ほどまで現場を物色していた西園寺が質問を重ねてくる。ここから先の質問にはほとんど「知りません」の一边倒で通した。私と滝本が列車内で会ったことだけは絶対に知られてはならない。

その間、女のほうは並べられた物品を物色していた。私は西園寺の話に相槌を打ちながらも、横目で彼女の挙動をずっと見ていた。

「西園寺さん。この破片は？」

女がプラスチックの黒い欠片をつまみ上げる。

「それはデジタルカメラに付属するSDカードの破片だね。犯人が壊していったものらしい。おそらくこのデータが犯行の動機に関係しているんだろう。」

財布からお金が抜かれているから金目当ての可能性も無いわけじゃないけど、たぶんそれは目を逸らすための陽動だと思う。

けれどこの壊れ方じゃ、復元は無理かな……」

「それは残念です」

復元は無理。警察官のお墨付きができて私は内心でほっとした。金目当ての犯行に見せかけることまでは高望みに終わってしまったが、データさえちゃんと破壊できたなら充分だ。

「あ、でも大丈夫ですよ西園寺さん。多分ですけど、データの中身ならすぐにわかります。」

そしたら犯人の逮捕もすぐ……ですよね」

ほんの一瞬。まさしく刹那の瞬間だが、女は確かに私を見た。

まるで全てを見透かすような目で。恐ろしいほどの戦慄が全身を走り抜ける。

「すみません。ちょっとトイレに」

私はもうこの場にいられなかった。逃げるように言い訳をして隣の車両へと逃げる。

（次の駅まで20分。それくらいなら粘れると思っていたが……）

甘かった。私の見込みは完全に外れていた。

このままではほんの数分もたたずにあの2人は私が犯人だと特定するかもしれない。根拠も無いのに、私は底知れない恐怖に怯えていた。

「このままじゃ駄目だ。なんとか……なんとかしなくては」

震える全身を抱きかかえてみる。とにかく寒くて嫌だった。

暖かさに満たされて過ごしていた旅の3日間が、もう気の遠くなるほど過去の出来事のように思えてならなかった。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（後書き）

じわじわと、しかし着実に距離を詰められる感覚を描きたいのですが、なかなか難しいです。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（前書き）

『古畑任三郎の弟子』？から続いています

『古畑任三郎の弟子』？（推理）

「はいよ。お釣りね」

犯行の行われた場所から5両ほど離れた車両にて。私は売店で弁当とお茶を買った。お釣りのお札と小銭を財布に戻す手が未だに震える。我ながら情けなく思った。

そして座席へ戻ろうと2両目へ向かおうとする。すると4両目と3両目の間でまたあの女と会った。

「あ、お弁当ですか？」

「ええ、まあ」

それだけ言っただけで脇をすり抜けようと試みる。だが女はその先に進もうとはせず、私の後についてきた。

「あ、しかも酢豚弁当じゃないですか！

いいですよ、酢豚！ 列車の中で酢豚弁当を食べるの、わたし小学校の頃からの夢だったんですよ」

何たる安い夢だろう。もっと他にはなかったのか。

……それからもしばらくはくだらない話に相槌を打っていたが、あまりにうつとおしいのでついに私は彼女に聞いた。

「……何か御用ですか」

すると女は、その言葉を待つてましたといわんばかりに目を光らせた。

「ええ。実はお話が。」

もう一度さっきの現場についてきていただけますか？」

その申し出は別に断つてもよかった。しかし私も一応、知り合いを殺された設定を通そうとする身。彼の死に興味を示す所作を見せなければならぬ。

「かまいませんよ。」

……とその前に、タバコをひとつ買つてもよろしいですか」

女が「どうぞ」と言うよりも早く私は札を脇の自販機に突っ込んでいた。ボタンを押すと、コトン、と軽い音を立ててタバコがボックスに落ちる。その後すぐに釣りのお札が出てきて、小銭たちがじやらじやらと音を立てて落ちた。

「ではわたしもひとつ」

同じように札をつっこむ女。私は女を待たず現場へと向かった。単純に女と長くいるのが嫌だった……確かにそれもある。

しかしそれ以上に私には自信があった。そしてその根拠も。

おそらく最後の最後で、あの2人は私を追い詰めることができないだろう……ほくそ笑みながら、3両目の扉を通る。

なぜなら私はついさっき……そしてたった今。彼女を手詰まりにする策を打っておいたから。

車両の結合部へ足を踏み入れる。様子を見に来たらしい西園寺とそこですれ違った。

「ん？ ミサキ君ってタバコ吸うっけ？」

「たまにはワイルドなオンナを演出するものよいかと思ひまして！」

どうでもいい雑談を背に私は決戦の場所へと向かった。

なんとかここを凌いで私は平穩を守りきってみせる。覚悟と決意を込め、手の中のタバコを握り締めた。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（後書き）

次回、決着編開始。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（前書き）

？から続いています。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）

「それではさっそく、事件の全貌を明かしていきましょう」

死体のある通話スペース。外には車掌を立たせ、西園寺と私のたった2人だけを前に、女刑事……ミサキは口火を切った。

「まずは確認です。この殺人はお金目当ての犯行ではありません。お財布からお金を抜き取ったのは犯人のカムフラージュです」

「まあデジカメを持ち去らず破壊している点から見てもそうでしょうな」

私はテンプレどおりの返事をした。デジカメはさすがに持ち去ろうという気にはならなかったのだ。あの時は鞆も持っていなかったし、あのデジカメはポケットにしまうには大きかったから。

「お目当てはおそらくデジカメの中身。ここに動機があるから犯人はデジカメを壊したんでしょう。つまりはこのデジカメにあったデータさえわかれば、犯人に目星をつけることができるわけです」

それはその通りだ。確かにデータの中身がばれれば、私と愛人の旅行もばれる。そうなれば私が犯人だと疑う充分な根拠になりえるだろう。

だが調べることができないようにあえてSDカードを壊したのだ。それがあるから私には余裕があった。しかしミサキはその自信を、次の瞬間、粉々に砕く。

「データの中身がわかりました。答えは彼の着ていたジャケットの内ポケットにありましたよ」

そして彼女は一枚の写真を私に提示した。そしてそこには……私が愛人と仲良く手をつないで微笑んでいる姿が映し出されていた。

「ど……うしてこんな写真が……」

枯れたような声が喉の奥から絞り出た。対してミサキはきわめて流暢にそのわけを説明した。

「被害者の滝本さんが、データのほかに写真も用意しておいたのですよ。」

彼は会社の上司とその愛人の関係を写真に収めた。そしてそのデータを取引するときのために、写真も一緒に現像しておいたのだでしょう」

「どういつ……ことです？」

馬鹿な！ という叫びをすんでのところで飲み込み、声を絞り出す。

「それは安全に取引を行うためです。想像してみてください」

ミサキは静かに目を閉じて語った。

「デジカメに愛人との逢引を収めた……そう言って相手がすんなりとそれを信じてくれれば問題はありません。すぐ取引を行うことができます。」

けれどももしそれを相手が信じなかったら？」

「……なるほど。相手を信じさせるためにデジカメの中身を見せる必要が出てくるね」

西園寺の相槌にミサキが頷く。

「そう。デジカメの中身を見せて信じさせなきゃいけない。相手がハタタリと思い込んでしまったら面倒ですからね。

でもデータの存在を確認させるために直接、デジカメ本体を渡すわけにはいかないでしょう？　なんらかの手段で奪われてしまうかもしれないから。となると相手に見える形で提示するための写真を一枚、脅す側が用意しておこうとするのは自然な考えです。

だからわたしはデジカメが壊されているのを見た時点で、被害者はどこかに写真を持っているだろうと見込んでいました」

ミサキはそれだけ言って視線を私に戻した。動機を示す決定的な物品を見つけて解決を確信したのだろう。自信がその瞳から見てとれる。

確かに奴が写真を持つ可能性にまで頭が回らなかったのは私の失策だ。それは認めよう。

だが私だって必死だ。このくらいのことで罪を認めるわけにはいかない。

「そうですね。私はその写真にある通り、女性と逢引をしていました。それも妻以外の女性と、です。言い訳をするつもりはありません」

しかし……そう付け加えて、あらかじめ言うつもりだった言い訳を口にする。

「私は滝本君に写真を撮られていたことなど知りませんでしたよ。それをネタに脅されてもいません。」

だから殺された彼が私の写真を持っていたのはたまたまです。あるいは犯人が私に罪を着せるために、彼のジャケットへ写真を忍ばせたのかも」

無理がある。けれどありえないとも言いきれない仮説を私は提示した。

「この写真を動機と“仮定”するなら明らかに怪しいのは私ですが、犯人が私であるという物的証拠にもならない」

往生際に立たされてなおも抵抗を試みる私に、西園寺は無機質な視線を送ってきた。そこから感情が読みきれない。きわめて不気味だ。

しかし私とていまだ決定的な証言は引き出されていない。そのくらいで怯んでたまるか！ 負けじと2人を睨み返す。

「お話はこれだけです。なら私は座席に戻ります。もう駅に着く頃でしょうしね」

失礼……と、その言葉が出掛かる瞬間。私の台詞はまたもやミサキによってかぶせられた。

「ありますよ。証拠」

「は？」

明らかに威圧を含む私の声にもまるで動じず、ミサキは淡々と話す。

「犯人はミスをしています。お金目当ての犯行に見せかけるというミスをね」

「ああ確かに。でももうそれはどうでもいいでしょう？」

「そうでもないですよ。その行為が、今回の事件を解決する証拠になってくれるはずです」

ミサキはそう言つて財布を取り出し、お札を1枚抜いて見せた。

「犯人はお金目当ての犯行に見せかけようとした。つまりお札を被害者の財布から持ち去っているんです。

“被害者の指紋のついたお札”をね」

彼女の指に挟まれた札がぴらぴらと音を立てて空を切った。

「つまりそのお札が、物的証拠です」

その見解は確かに詰みの一手にふさわしいものであった。もしも私の財布から被害者の指紋付きの札が出てればもう言い逃れはできない。

だが残念。その手はもう私の読みの範疇にあった。わたしはミサキが最後、この手で私を仕留めにくると読んでいたのだ。

ゆえに対策は万全である。私の財布に、例の札は“もうない”。

「……ほう。ではあなたは私の財布から被害者の指紋がついた札が出てくるとでも？」

「いえ。思っていないですよ」

「はあ？」

まったく回りくどい女だ。話していてイライラする。

「だったら証拠にならないでしょう」

「……持っていないのは知っています。だってあなたはわたしがここに呼び出す前、すでにそのお札を使ってしまっているのですから」

こいつ気づいていたのか。まあ問題ないとは思いながらも、予期されていたことが気に入らず舌打ちをする。

「わたしに疑われているのを知って、急遽、証拠のお札を売店とタバコの自販機で使ったのでしょうか？」

そこまでわかっていたか。その鋭さには正直舌を巻く。

そうだ。ミサキの言うとおり、私はもう2枚のお札を使ってしまった。私が疑われている以上、これ以上淹本の指紋がついたお札を持っているわけにはいかないと思ったから。

もちろんそのお札に私の指紋はつかないように注意した。ゆえにそれを発見されたとしても、私が証拠隠滅のために使ったお札なの

か、生前の滝本が使用したお札なのかを確かめるすべは無い。

ミサキもそれを知っているなら私を追い詰める証拠が出ないこともわかっていいるだろう。彼女の失策は、あからさまに私を疑う態度を見せてしまったことだ。それさえなければ、私は未だに証拠のお札を持っていたかもしれないのに。

まあこいつの策もここまでだろうな……。そう思った。だがミサキはこの期に及んでまだ手を隠し持っていた。

「それでも、犯人はあなたであること以外にありえません」

それも必殺の一手を。

それから1分。この事件に決着をつける、最後の駆け引きが始まる。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（後書き）

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（前書き）

？から続いています

『古畑任三郎の弟子』？（推理）

死体を囲んで3人の男女が対面する。だが2つの視線は私にのみ注がれていた。

警察官の西園寺、そしてミサキ。私はこの旅客列車で運悪くも人を殺してしまい、挙句刑事にそれを見抜かれつつあった。

だがいくら運が悪くとも、それに甘んじて未来を諦めるつもりはない。最後まで抵抗する気概も捨てるつもりはない。

「……仮にあなたの言うとおり、私が被害者の指紋がついたお札をすでに使ってしまったのだとしましょう。ではそれをどうやって証明するおつもりです？」

私は彼女に呼び出される直前。被害者の財布から抜いたお札2枚を売店とタバコの自販機でそれぞれ使用した。だからもう手元に証拠は残していない。

そして手元にはない証拠を、どのように私が使用したと立証するか。皆目見当もつきそうにない。

だがミサキはその手段を持っていた。いや、すでに“作り上げていた”ようだ。

「そうですね。たとえ売店とタバコの自販機から被害者の指紋つき一万円札が見つかったとしても、それがあなたによって使用されたものだとして立証できなければ証拠にならない。

……でもわたしはそれが出来るように、わざわざあなたの後をつ

けて、あなたの直後に、普段は吸わないタバコを買ったのですよ。あえてあなたが使ったお札と同じ種類のお札……一万円札を使つてね」

ミサキに言われてあのとときのシチュエーションを思い出す。私は被害者の指紋つき一万円札を処分するために、それを使ってタバコを買った。そしてその直後、ミサキは同じく一万円札でタバコを買っていた。

だいたいこんな感じだったはず。だがそれが何だというのか……

「わたしはあなたと同じお札で、同じ自販機でタバコを買いました。ということは、あなたの使った一万円札の次にあるのは“わたしの指紋のついた一万円札”でしょ？」

え？

「あ」

“自販機内部にストックされているお札の順序”

ここで彼女の罠を完全に理解した。しかしもう遅い。

「自販機の中を調べれば、わたしの指紋のついたお札が出てくる。そしてその直前に使われたお札は……あなたが使用したお札であることに間違いはない。」

もしそのお札から被害者の指紋が出てきたら、被害者の指紋がついたお札をあなたが使用した証拠になりますよね」

体中の筋肉が弛緩したかのように私は膝から崩れ落ちた。

自販機に保管されているお札の順。それを利用して、ミサキは私
が被害者のお札を使ったことを証明したのだ。

完全に、私の“詰み”だった。はじめに疑われたときから、私は
ずっと彼女の掌から抜け出せていなかったのだ。

「そもそもタバコの自販機でお札を使うのはいただけませんでした」

ミサキが相変わらず穏やかな口調で言う。

「わたしもあなたもタバコは吸わないのに」

「……どうして、私がタバコを買ったのが不可解だと？」

「だってわたしたちのいる車両は……」

車両の入り口に掲げられる見慣れたマーク。それを彼女は指差し
て言った。

「禁煙車両、でしょ？」

……成程。禁煙車両をわざわざ選ぶような人間がタバコを買っ
ていけない、ということか。

ミサキは最後の最後まで鮮やかに真相を解き明かしてくれた。も
ういっそ、逆に清しい気分になえさせられた。

「人間、悪いことはできないな」

ついこぼれ出た白状の言葉。私はようやく解放された気分になった。

「ずっと逃れようと必死だったけど……もういい。もう疲れた」

終わったんだ。もう。何もかも。

私の思考は真っ白になり、本当にもう死んでもいい気分になった。そんな自暴自棄な心を見抜いてか、西園寺が傍にそっと寄ってくる。自殺を警戒したのだろうか。だが私は潔く両手を前に差し出した。

しかし彼の手には手錠でなく、私が席に置き去りにした携帯電話が握られている。

「あなたがまた罪を犯す前に残されていた留守番電話です。聞いておきなさい」

それは最後の情けか。座席に置き去りにしていた携帯が手渡される。見ると留守電は自宅からだった。

耳に当てると、スピーカーの向こうからは聞きなれた女の声……家に残して来た妻の声が聞こえてきた。

『お勤めご苦労さまです。三日間の出張はどうでしたか？ きつとお疲れになっているわよね。』

でも子供も私も今日は寝ないで待っています。子供たちもはやくあなたの顔が見たい、って。ふふ。可愛いでしょう？

そういつわたしもその……同じなんだけどね。待ってるから早く帰ってきてね。わたしたちの元に。待っています。大好きなあなたへ』

そこで音声は切れていた。切れると同時に、わけのわからない思いが胸にこみ上げた。

「あいつ……」

待っている。妻は電話の向こうで何度もその言葉を口にしていた。どう考えても出張の夫を迎える電話ではない。

「もしかして知って……でもそれなのに」

あいつはそれでも「待っている」と。そう繰り返した。

「俺は女と遊んでいたのに」

心の軋むような罪悪感。空っぽになった私の気持ちに、再び感情がこみ上げてくる。

「刑事さん」

ミサキと西園寺。私はふたりに向けて言った。ふたりとも電話の内容はおそらく知らない。けれど妙に優しい表情で、私に視線を絡ませてくれた。

「ご迷惑をおかけしました。この償いとお礼は、いつか必ず」

ふかぶかと頭を下げる。それを前にミサキの唇が開いた。そして何事かを言おうとする。

だがタイミング悪くその声は列車到着のアナウンスにかき消され

ていた。それでもミサキの微笑みだけは確かに私へ届いた。

それだけでほんの少し救われた気分になる。

コトン……コトンと音を弱めてゆく車輪の音が、今までになく耳に心地よく思えた。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（後書き）

ようやく事件が解決しました。はじめに犯人がわかっていて、それをどう詰むのかを楽しむ。そんな某ドラマのような形式を参考にさせていただいたのですが、いかがでしたでしょうか。次話で『古畑任三郎の弟子』完結です。どうか最後までお楽しみいただければ幸いです。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（前書き）

？から続いています

『古畑任三郎の弟子』？（推理）

「まもなく、東京。東京。お出口は左側です。お降りの方は」

わたしたちが事件を解決したその直後。独特な抑揚の車内アナウンスが社内に響き渡った。

わたしと西園寺さんは犯人の両脇に立ち、駅に到着するのを待つ。それからほんの1分もせず列車の扉は開いた。

ホームに呼んでおいた警察官に被疑者の身柄を引き渡す。屈強な体つきの2人だった。護送にも心配は要らないだろう。ここにきてようやくわたしは、ずっと張りつけていた“余裕の笑み”を崩した。

「なんとか駅に着くまでに犯人を捕まえたね。さすがだよ」

わたしと違い屈託の無い笑みを浮かべた西園寺さんがねぎらいの言葉をくれる。

「あの追い込み方はとても綺麗だった。君の憧れている“あの人”の姿が少し見えた気がしたよ。本当に成長しているね」

彼の言葉には一片の含みも感じられない。だからわたしは一瞬、その評価を素直に喜んだ。ひと仕事終えた身体に賞賛の快感が染み渡る。業務のことで上司に褒められる快感は何物にも変えがたい。

しかしそんな喜びも束の間だった。私は今回の事件を振り返り、

腑抜けた気持ちを引き締めなおす。

「　　まだまた褒められたものじゃないです。だってすぐ解決できたのは……わたしの力じゃないですもの」

そうだ。この事件はわたしひとりの力で解決できていない。

だって今回の事件は、わたし1人だったらおそらく、こんな速さじゃ解決はできなかった。いやそもそも事件の発覚すら未だになされていなかったかもしれない。

犯行が行われた直後。もしもあのとき、西園寺さんが“わざと”

『　　なんだか喉が渴いたね』

……そう言わなかったら。わたしは容疑者と出会うことすらできなかったのだから。

「あんなことを言つて自販機周辺を見に行かせたのは西園寺さんじゃないですか。わたしひとりだったら、とても容疑者の違和感に気が付きませんでしたよ」

自分で唇を噛む。痛いくらいに。

「西園寺さんがわたしに事件を解決“させた”んです。そんなんじや素直に喜べません」

西園寺さんの瞳にほんの少しの戸惑いも生まれない。悔しかった。ひとつ上の階級の上司が、はるかに遠くにいるような気がして。

……だが西園寺さんはわたしを責めるような口調で話すようなことはしなかった。彼の声はあくまでも優しい。

「実^{ミサキ}三樹君は充分に成長している。本当だよ。現に君は、僕がイメージしていたのとはほとんど同じ手段で解決をしたし、予想よりほんの少し犯人を追い詰めるのも早かった。

気に病むことはないし焦ることもない。いきなりあの人みたいになることなんてできないんだ。地道に刑事としての力を伸ばしていければいい」

わたしに気を使っているのだろう。西園寺さんはあくまで“あの人”の名を出さずにいてくれた。

わたしの知る限り最高の刑事。そして最強の目標であるあの人の名前を。

「……悔しいです。まだまだわたしはひよっこです」

「そんなに未熟でもないのに」

「じゃあダチヨウのひよっこです」

「いやダチヨウの雛は大きすぎでしょう」

西園寺さんが強がりで言った冗談にも穏やかにのってくれる。すこし元気が出た。

そっか。そうだね。わたしから元気をとったら何ひとつあの人に敵わなくなっちゃう。

強く、ならなきゃ。そう思った。そうして息を胸がいつぱいになるまで吸い込む。

「もう大丈夫です！　せっかく事件を解決したのに落ち込んでたらどうしようもないですもんねっ！

打ち上げ行きましょう西園寺さん！　食べ放題とかどうですか！」

鬱屈とした気分を全て放り捨てて、西園寺さんの手を引く。

「わたし、いいお店を知ってるんですよ」

「いいね。なんの食べ放題なの？」

「佃煮ですっ！」

「また渋いなあ」

彼はほろ苦い笑顔を浮かべながらも、しつかりつきあってくれる上司なのだ。まったくいい人の下に配属されたものだ。自然と笑顔になってしまう。

「さあて食べるぞお！」

はた迷惑なくらいのテンションで改札を抜ける。空には真っ赤な茜空が広がっていた。

燃えているみたいに鮮やかな紅。いつもより空が、ほんの少し明るく感じた。

『古畑任三郎の弟子』？（推理）（後書き）

『古畑任三郎の弟子』をお読みくださりありがとうございます！

”あの人”が出てくることを期待されていた方にはすみません。ただ「これはこれで」と楽しんでいただけたのなら作者としてはとても幸いです。

私の中で神格化されているあの人影だけでも見せられたでしょうか……。

『三千世界』（ファンタジー）（前書き）

ジャンル「ファンタジー」	字数3200	3300
--------------	--------	------

『三千世界』（ファンタジー）

ばらら……と軽い音を立てて、本のページが数枚だけめくられた。

微かな風と人の気配を感じ取り、司書は手にしていた本を畳む。そうして本“から”現れた男に穏やかな視線を送った。

「お帰りなさいませ。今回も、よくぞご無事で」

司書からねぎらいの言葉をかけられる男。彼は大きなため息をついて、包帯の巻かれた左手首を目の前に掲げた。

「このザマが目に入らないか？ 今回もきつちりダメージはもらっている。服で見えないだろうが、脇腹の刺し傷もかなりでかい」

「ふふ。その程度なら“無事”でしょう」

微妙にかみ合わない価値観に辟易する男は言葉を返すことなく、手元の本を司書に渡した。『戦士の休息』……金の文字で書かれたタイトルが、蠟燭の灯りできらりと光る。

「貸し出されてから今日で21日目……相変わらず随分と余裕をもつて返しに来られますね。この本の貸し出し期間は30日あるのですよ？ もっと楽しんで来られたら良いのに」

「貸し出し期間を1秒でも過ぎたら戻ってこられなくなるんだらう？ 長居せず帰るのは当然だ」

イスを引いて腰掛ける男はわき腹を押さえながら言った。

男が口にしたこの図書館のルール。それは貸し出された本を……つまりは貸し出された世界を、必ず決められた期限までに返さなければならぬということだった。

この図書館にある本はそれぞれ別の世界へとつながっている。そして図書館に紛れ込んだ者は、借りた本に吸い込まれて異世界へ立ち、期限までに定められた条件を満たさなければ図書館に戻ってくることはできないのだ。

「今回もハズレだったぞ。本当にもとの世界へ戻れる本がこの中にあるんだろうな？」

頭の芯に響くような傷みに耐えながら、男が悪態をつく。「さあ？」司書はさらっとそう口にした。

「ただあなたが暮らしていた世界へ戻れる可能性があるとするば、とにかくあらゆる世界へ旅立ってみるほかにはありません。この図書館には収められている三千冊の本以外に、外へ通じる道がないのですから」

扉のない図書館のこもった空気が静かに震える。

司書の言葉を受けて男は軽い舌打ちをして黙った。その様子を見ながら、司書は受けとった本の表紙を眺める。

「『休息』というタイトルがついているので安全かと見ていましたが、当てが外れましたね」

「まったく」男は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「戦士が休息をとるから、代わりにお前が戦え」って内容だったんだぞ？ 完全にタイトル詐欺だ。わずか3週間で5回くらい死ぬかと思っただけだからな」

かなりの過酷だったのであろう修羅場を思い出したのか、男の表情がにわかに青ざめる。それとは対照的に司書は笑顔だった。いい感じのサドっ気が滲み出ている。

「本のタイトルなど往々にしてそういうものです。

まあとにかく戻ってこられたのなら良しとしましょう。あなたが不在の間に、またひとり犠牲者が出ているのですよ？ 命があるだけ幸せというものです」

「犠牲者って……まさか零歩れいほのことじゃあないだろうな」

零歩という少女は男の友人である。2人はこの図書館に来る前、つまり彼らの言う“もとの世界”にいた頃からの付き合いだった。男はこの図書館へ戻るたびに彼女の身を案じていた。そして彼は知らないが、零歩のほうもまた彼の身を案じている。

男は疲れた表情から一転、鷹のような眼光を司書に向けた。しかし司書は相変わらず揺るがぬ声調で、湧きかける男の激昂を諫めた。

「ご安心を。犠牲者はあなたと顔を合わせたことのない人物です。零歩さまではありません」

司書はそう言って一冊の本を掲げた。『ハコニワの少年少女』……零歩に貸し出された世界のタイトルが暗闇の中に映える。

皮の表紙はぼんやりと光っていた。それは中へ旅立ったものが生存しているという証。それを見た男はやっと肩の力を抜いて、背もたれに体重を預けた。

「零歩さまが選んだ本の貸し出し期間は1年。もう3ヶ月もたつて無事なのであれば、彼女の旅立った世界は死の危険が少ない世界なのでしょう。ただ……」

「……ああ」言おうとすることを察したのか、司書の言葉を男が遮る。

「あいつが3ヶ月も留まるような世界なんだ。きっと脱出条件が厳しいんだろうな」

男はついさつきまでいた世界の“脱出条件”を思い浮かべた。亡命を試みる姫君が他国へ向かうので、療養中の騎士の代わりに彼女を守れ……自分の身に危険の伴う過酷なミッションだった。

本の世界に旅立ったものは貸し出し期間が過ぎるまでに、本に定められた“脱出条件”をそれぞれクリアしなければならぬというルールが架せられている。ルールは期限的に厳しいものもあれば、こなすべき内容自体が厳しいものもあった。今回の男が経験した条件を分類するならば後者であろう。

もちろん簡単に脱出が可能な世界もあるにはある。ただ零歩がそのような世界に送られていたのなら、きっと自分よりも早く脱出に成功しているだろうと男には思えたのだ。

「まあ零歩も無事であることがわかればそれでいい。すぐ次の世界へ行く」

男は椅子を立ち、次に旅立つ世界を物色し始めた。大半の本は司書の持ち込んだ普通の、暇つぶし用の本。ゆえに異世界へと通じる本の証である“金の文字でタイトルの書かれた”ものに絞っていくつかの本を抜いた。

「またお急ぎなのですね。少なくともここなら命の危険はないのです。休まれていつてはどうですか」

「駄目だ」わき目も振らず男は申し出を断った。

「俺は怪我を負っているんだぞ？ さつさと医者に見せて全快しないと治りが悪くなる。ここには薬も何もないからな。」

「っか……」

右腕1本に抱えた本をどさどさと机上に落とす。

「ここにはまさしく本しかないんだ。食料も水も、日光の差し込む隙間もない。もちろんトイレもベッドも、必需品も全てない。」

さつさとライフラインの整ったところへ行かないとやってられないだろう」

男は並べられた本のタイトルを見比べた。『隻腕の預言者』……『武勇伝の真実』……『魔法使いの鏡』……。タイトルから内容が想像しにくいものばかりが並んでいる。

（魔法使いとか、ファンタジー系を連想させられるタイトルはもうこりこりだ。死ぬ危険が他のジャンルに比べて高すぎる）

そして図書館をもう一周し、今度は内容に想像のつくものをいく

つか揃えた。そしてその中の一冊を司書に提示する。

「『水平思考ゲーム』……ほう、露骨な推理モノのタイトルを選びましたね。推理はお得意なのですか」

「いや」男は汗が乾いてべたつく頭を軽く掻いた。

「得意ということもないだろうが、身体を使うよりも頭を使うほうがまだましだ。俺は零歩と違っていわゆる凡人というやつだからな」

「そしていわゆるチキンというやつでもあるのですね」

「まあそうとも言っな」

意にも介さぬ様子の男につまらなそうな顔を向けながら、司書は本を受け取った。そうしてその本へ念を込めると、皮の表紙が薄く光り出す。

「さあ、開いても大丈夫ですよ。この本の貸し出し期間は2週間。それまでに条件をクリアして、きつと無事に帰ってきてくださいね」

「……もとの世界へ帰れる道を見つけたらもう絶対戻らんわ。こんなところ」

「つれないですねえ」そんな司書のつぶやきが終わったときには、男の姿はすでに本の中へと消えていた。「……つれないですねえ」司書はもう一度だけ呟き、薄く微笑む。

「まったくもう少しお話に付き合ってくれてもよろしいのに。いつもいつも急ぐから、大事なアドバイスを聞きそびれる」

男の消えた後に残された本をそつと拾い上げる。『水平思考ゲーム』というタイトルの本。彼は普通の推理ものだと思い込んでいた。だが真相はそうではない。かつて多くの世界を経験した司書にはそれがわかっていた。

「一筋縄ではいきませんよ、この世界は」

ふふつ、と軽い笑い声が司書の口から漏れる。静寂の図書館に、その音は不気味なほど大きくこだました。

「さあて。今度は誰が救われて、誰が滅びるのでしょうか。事實は小説よりも奇なり。とてもとても楽しみです」

『三千世界』（ファンタジー）（後書き）

ファンタジー『三千世界』をお読みくださりありがとうございます。22話にしてようやくこの世界の核心にほんの少し触れることができました。短編集でありながら連載作品でもあるというスタイルを上手く出してゆくことが今後の目標ですね。

さて三千世界シーズン2はいかがでしたでしょうか。是非ともお声をお聞かせいただけると嬉しいです。

それではまたシーズン3の再開でお会いできますよう……

『循環』（ホラー）（前書き）

ジャンル「ホラー」 字数500 600字

『循環』（ホラー）

わたしはいま、夫を殺そうとしている。そう、この薬でだ。

毒薬じゃ、ないのよ？　ただちよつと人を衰弱させる薬。血液の機能を低下させるらしいわ。

この薬をちよつとずつ食事に混ぜる。するとなんの痕跡も残さず、人を衰弱死させられるらしいの。

とあるルートから手に入れた薬を、わたしは毎日欠かさず夫の食事に混ぜていた……そんなある日のことだ。

なんとわたしは交通事故にあつて、かなりの重傷を負つてしまった。夫を殺そうとしている自分が先に死にけるなんてなんたる皮肉だろう。

しかしいまの医療技術ならそう簡単に死んだりすることもないだろう。薄れゆく意識の中でそう樂觀していた。だが予想外のことがここで起こる。

「血液が足りません。どなたか血液型がB型の方はいませんか！」
「私はB型です！　妻と同じで！」

薬を飲ませている夫が献血に名乗りを上げたのだ。

「私の血ならどれだけ使つていただいてもかまいません。

妻を……っ！　妻を助けてください！」

ちよ、ちよつと待つて！　あなたの血液は……っ！

夫はまだ若く体力もある。だがわたしは重傷により体力を失っているのだ。そんな状態で弱った血液を輸血されたらどうなるか。

わたしは必死で拒否をしようとした。だが痛みで声にならない。

夫から抜かれた新鮮な血液がチューブをつたって身体に入ってくる。ゆっくり、ゆっくりと。血管の中を虫が這うかのような寒気が全身を巡る。

わたしの意識は、そこで永遠に途切れてしまった。

『循環』（ホラー）（後書き）

ホラー『循環』をお読みくださりありがとうございます。夏はやっぱりひやりとするお話が恋しくなりますよね。あ、季節が変わったらこここのコメントどうしましょう……

『七人みさき』（ホラー）（前書き）

原作：伝承『七人ミサキ』 シナリオ：ここプロ
ジャンル「ホラー」 字数 4000字程度

『七人みさき』（ホラー）

“七人みさき” って名を聞いたことはねえか？

……いや、違えよ。場所の名前じゃない。妖怪、つつつか亡霊の名前だな。

“みさき” ってのは溺死した人間の死霊のことだ。女の名前みただがそんな可愛いもんじゃねえ。強い怨念を持って彷徨う死霊、それが七人いる。だから“七人みさき” っって言われてんだ。

ああ、何でいまそんな話をするのかって？ ……そりゃあお前さんが勘違いしているからさ。

あいつらの失踪は水難事故のせいなんかじゃねえ。まず間違いない七人みさきの仕業さ。あんな穏やかな川で、増水もないのに、3人もの男が溺死なんてするもんか。そもそもおかしいだろう。あれだけ探して死体のひとつも上がらないなんて。

あいつらは狩られたんだ。彷徨える亡霊たちの怨念にさ。

七人みさきはいつも生きる人間の魂を狙ってる。そうすることでしか成仏ができないからな。永遠の生き地獄から解放されるために、夜の水辺をあてもなく彷徨うんだ。

ん？ 七って数字がひっかるって？ ……若いのに良いところに気がつくな。あいつらは人を殺すことで成仏ができる。だからいつまでも亡霊が七人のままではおかしい。そう言いたいんだろう？ 確かにそうだ。お前さんの言うことは正しい。七人みさきには成仏のチャンスが与えられているんだ。犠牲者が出ればその数だけ亡霊もいなくなるのが道理だよな。

けどそれでも七人みさきは七人なんだ。増えもしないが減りもしない。

だって七人みさきは、いわゆる“入れ替わり制”。人を殺せば成仏するが、その代わりに殺された人間が新たなみさきとなって彷徨うようになるのさ。

七人みさきに終わりは無い。あいつらは殺し続けるしかないんだよ。

……なあ、だから悪いことはいわねえ。あそこに立ち寄るのだけはやめておきな。

二代前の村長も死んだ。屈強な獵師でさえ何も出来ずに死んだ。それに俺の息子も、七人みさきに殺された。

信じられねえ、って顔をしているな。所詮噂だろ？ とかそんな風に思っているように見えるぜ。

だったら仕様がねえな。本当は話したくないが、お前さんのためだ。特別に話してやるよ。

おれは会ったことがあるんだ。

生者を求めて彷徨う、七人のみさきたちにな。

いまから数年も前のことになるか。おれは深夜の川原をひとりでうろついていた。

紫庸河原って聞いたことあるだろ？ 江戸の末期まで処刑場として使われてたあの場所だ。いや、違う。もっと下流のほうだ。砂利がやたら細かいあの辺りだよ。

何でそんなところをうろついていたかは……話すと長くなる。ただ簡単に言えば、みさきを探していた、って言うのが一番正しいか。おれは失踪した息子が七人みさきに殺られたと信じていた。だからそいつらに復讐をしてやろうと、刀を腰に、ほぼ毎晩河原を彷徨っていた。まるで七人みさきみたいにな。

しかし俺の搜索はなかなか難航していた。亡霊ってのは逢いたくてもなかなか逢えないものらしい。逢いたくないときには逢えそうなんなのによ。

虫に刺されて帰るだけの夜が半月は続いた。復讐の心が消えたわけではなかったが、流石に嫌になりかけたよ。

けど努力って実を結ぶもんだな。十七目の夜。おれはついに見つ

けられたんだ。息子が出かけてくるといったあの河原で、小舟にのって川を下るみさきたちの姿を。

あいつらは人間の形をしていた。靄のかかった月明かりだけが頼りで細かくは見えなかったが、皮膚が腐って藻が血肉に絡まっている姿はいまだに目に焼きついてるよ。

まああいつらの見た目はどうでもいいや。とにかく興奮したおれは、舟の進みそうな地点へ先回りをして、岸と岸の間に縄を張った。七人みさきは舟に乗っているんだ。転覆させてしまえば反撃の余地も許さず、奴らを一網打尽にできる。

作業は自分でも驚くほど手早く進んだ。薄暗い中でよくあれだけ無駄のない動きができたもんだと今になって思うよ。あのときのおれは奴らを沈めることしか考えていなかったから、他のことに思考を割いてる余裕もなかったわけだ。

縄を張り終わったおれは茂みに隠れて、小舟がやってくるのを待った。興奮と、緊張と、あるいは恐怖のせいかな、体中の血が熱くなるのを感じたな。荒い息を殺しながら、波の音に全ての神経を傾けた。

それからたぶん数分。霞の向こうに小舟の影が見えた。じゃぶじゃぶと鈍い音と共にそれはだんだんとこちらに近付いてくる。

航行の軌道からしても確実に縄の地点を通るだろう。おれはその時点で計画の成功をほとんど確信していた。

冷たくなった額の汗を拭いながらその瞬間を待つ。まるで獲物を狩らんとする蠼螂のように。

だが霞を抜けた小舟を見たときにおれは呆気にとられたよ。なんとその小舟に、みさきたちは乗っていないかったんだ。

わけのわからない事態に考えが硬直しかかった……そのときだ。

自分の周囲の茂み。それも複数の地点から、何かが動く音がした。がさり。がさり。

動物の走る音じゃない。人間が藪を掻き分け草を踏む音だ。

そして全ての気配はゆっくりと、しかし着実に自分の隠れる位置へと迫っている。

足音の数は……おそらく七つ。神経が極限まで尖っていたおれは気配の数まではつきりとわかった気がしたよ。そしてその正体も。それからもう一目散に走ったな。来るのも十七日目だし、村への最短距離はわかってる。逃げ切れる自信は充分すぎるくらいにあった。

でもその夜はなにかがおかしかったんだ。おれはどれだけ走っても藪の中を抜けられなかった。同じ虫の音がずっと聞こえる。同じせせらぎの音がずっと耳をついている。

そしておれを追う足音もいつまでたっても消えなかった。七つともね。

どう走ってもどう隠れても、ずっと囲まれているような感じなんだ。姿は見えないが傍らに誰かがいる。

無我夢中で駆け回ったよ。助かりたい一心で。

でも駄目だった。体力や気力が尽きたわけじゃない。藪の中で躓いた拍子に足をくじいてしまったんだ。辺りには草ばかり。杖の代わりになるような枝も見当たらず立つこともままならない。

その刹那だった。やつらの一人がついにおれを見つけたのは。へたりこむおれをそいつは月明かりを背に見下ろしていた。さすがに死を覚悟したよ……でもただでやられたくはなかった。せめて最後の抵抗をしよう。そう思っておれは腰の刀をみさきに向け、敵の姿を正視した。

そのときだ。おれが気がついたのは。

身体はくさっている。着物は泥と垢にまみれている。ひとものとは思えないほど冷たい目をしている。……それでもわかったのだ。見紛うはずもなかった。

それが、失踪した息子だと。

みさきと化し、血に飢えて彷徨うようになった自分の息子だと。

すぐにわかつて、刀を握る手ががたと震えた。

息子の手には錆びた鉋が握られている。赤黒い錆。おそらくは血によって錆びたものだ。でもそれが怖かったからじゃないんだ。おれが震えていたのは。

ただ悲しくて、恐ろしかった。息子が人を殺すために彷徨っているのが、耐え難いほどにおれの気持ちを揺さぶったんだ。

動けないうちにいつのまにか、残りの六人のみさきもおれの背後に寄っていた。中には腹に穴が開いた者や頭部の一部が欠けているものもいた。突かれたような痕跡。おそらくやつらは手にしている鉋で生きる人間を殺すのだらう。

そしてその矛先はまさにおれを突こうとしている。息子の鉋はおれの左目を照準に捉えていた。

しかしその手の動きが、途中で止まる。息子に向ける刀をおれが下ろしたその瞬間だ。

おれは観念のつもりで刀を下げた……確かにそれもある。だがそれ以上に、嫌だった。息子と切りあうのが。そして息子が永遠の苦しみを味わっていることが耐えられなかったんだ。

「殺せ」

おれはいつも息子に言ってきたのとまったく同じ感じで話しかけたよ。

「それでお前が成仏できるのなら、それでもいい。それも悪くない」
冷たくなつた息子の目を見たくなくて、目を閉じる。それからどれだけの時間が経つただろうか。いつまで経つても、おれの顔面に鉋の先が飛んでこなかった。

それどころか徐々に遠ざかってゆく足音。背後から六つの気配が消えつつあった。

再び目を開き顔を上げる。正面には鉋を下ろした息子の姿があった。

息子は何かをおれに語ろうとしていた。だが声帯が腐っているのか、声は出ない。

ただ口の動きは、必死で何かを伝えようとしていた。そしてそれが済むと、みさきたちは何も言わず、おれの元を去っていった。

これがあの夜に起こったことの全てだ。

七人みさきという亡霊がいたのはこれでわかっただろう？ ああ、七人みさきに逢って生きてるのは、知っている限りじゃおれただけだ。普通なら何の抵抗も出来ずに殺されるらしいぜ。それだけ強力な怨念で動いているんだ。

おれが助かったのは本当にたまたまだろう。理由ははっきりしない。

ただなんとなく思ったんだ。おれが助かったのは、あいつらが元は人間だったからじゃないかって。

やつらは怨霊となり、永遠の生き地獄を味わっているながらもなお、胸に人間の欠片を残していた。息子だったからとかじゃないだろうよ。だったらほかの六人がおれを殺してるはずだからな。

やつらだって人間だったんだ。それぞれに愛する家族や恋人だっていたはずだったんだ。

だから絆を壊せなかったんじゃないかな。生きていた頃の、幸せだった頃の記憶の残照が拭えなくて、さ。

わかってくれたか？

そうだ。悲しいことになる。お前があそこへいくと、たとえ生きて帰れてもそうでなくても。

おれにとつても、息子……お前さんの父ちゃんにとつてもな。

みさきになったお前さんの父ちゃんは自分の成仏を望んでいる。それでもここへ残してきたお前さんを殺してしまったら、死んでも死に切れねえさ。

ほら、もうお眠り。じいちゃんがついていてやるから。

孫とともに布団へと入る。話の後はなかなか寝付けなかった。

目を閉じると、未だにあの藪の中で、七人みさきに囲まれていたときのことを思い出す。

虫の声が嫌になるくらいうるさかった。

それはまるで、耳の奥の、もっと深いところから聞こえてくるような気がしてならなかった。

『七人みさき』（ホラー）（後書き）

ホラー『七人みさき』をお読みくださりありがとうございます。

元ネタの設定が好きで、気がついたらアレンジ作品を作っていました。あの怖さがしつかり伝わっていれば嬉しいです。

それでは次からは軽めのお話に戻すします。お口直しに是非他の作品にもお立ち寄りくださいませ

『告白について』(ss)(前書き)

ジャンル「ss」	字数3100	3200
----------	--------	------

『告白につつつけの日』(ss)

あたしは今日、告白する。

罪の告白。身の上の告白。考えてみると告白といっても色々あるわね。

だがそんな期待を裏切るオチはない。あたしがしようとしているのは正真正銘の愛の告白だ。

クラスメイトの三ヶ嶋 隼人くん。小学校の頃からの幼馴染で、ずっとなんとなく憧れていた。中学に入ってから同じクラスであり、あたしの私見ではそこそこ仲もいい。

最初は近くにいられるだけで幸せだった。……けど人間って欲張りなものね。傍にいればいるほど隼人くんへの気持ちは大きくなっていて、いつしか仲のいい友達のままじゃもう我慢がでなくなってしまうた。

そんなときに舞い込んだのがこの占いの結果である。

“本日誕生日のアナタ、今日こそが告白につつつけの日です。ずっとなんとなくいた人の傍へもっと近づけそう。

勇気を出してアタックして！”

これはやるしかないと思った。あたしの誕生日は今日。そしてずっとなんとなくいた人への告白がうまくいくという決め手の一言。まさしくあたしに告白しろと言っているようなものじゃないか。

ようし。告白する。絶対する。仲が良いだけの関係に終止符を打つてみせる！

あたしさりげなく彼を観察しながら、隼人クンに告白するチャンスを見計らった。彼は友達が多くなかなか1人きりになってはくれない。

放課後になってようやく彼の周囲から取り巻きが消えた。心臓ばくばくだったが、意を決して話かける。

「ねえ、隼人クン。大事な話があるの」

しかし彼は「今は聞けない」と申し訳なさそうに言った。これから用事があるらしい。なんでも“予約していたケーキを取りに行く”のだとか。甘いものが好きなのだろうか。

「悪いな。こんど聞くからまた話してくれよ」

じゃ！と言って手を振る隼人クン。あたしは走り去る彼の背を呆然と見送っていた。

もしかして失敗……？ いやまだチャンスはある。

占いは言っていた。“今日が誕生日のアナタ。本日こそが告白にうってつけの日です”と。今回のチャンスは不運にも逃してしまった。けどあたしの誕生日が変わったわけじゃないし、この瞬間に今日が終わったわけでもない。

あと6時間。午前0時を迎えるまでは今日なのだ。まだ終わりじゃない！

「絶対、告白するんだから……！」

あたしは拳を握り締め、早足で帰路に着いた。

家に着くと、あたしは速攻でクラスの連絡網をめくった。そう、あたしはなんとしても今日中に想いを告げるべく、電話での告白を目論んだのだ。

あたしは携帯を持っている。だが隼人くんは携帯を持っていない。中学を卒業するまでは親が許してくれない……そう彼が言っていたのを覚えている。

電話番号を控え、壁にかかっている時計を見た。7時5分前。学校を出た時間から考えてもさすがに帰っている頃合だろう。

3回くらい深呼吸をして通話ボタンを押した。相手の自宅にかけるのは勇気がある。家族が出たら無意味に緊張したりするから。けど今日のアタシにはツキもあつたようだ。

「はい、もしもし」

聞こえてきた声。隼人くんだ！ あたしは余計な緊張をする前に告白してしまおうと試みた。こういうものは短期決戦！ 前置きもなしに本題へと入る。

「もしもし、あたし。由衣香。さっきの話の続きなんだけどさ」

「え？ さっきの話？」

疑問の声が返される。……まあ無理もないか。あたしにとっては一大決心の声かけだったつもりだけど、相手にとっては単なる日常会話だ。覚えていなくても不思議ではない。

「大事な話よ。言ったでしょ？ ……今度こそ聞いてもらうから。逃げないでよ？」

「え、あ……はい」

ただならない空気を感じたのか、受話器の向こうからも息を飲む音が聞こえた気がした。

もうやるしかない。あたしは言う予定だった告白の言葉を、ほとんど息継ぎもせずにくましく立てた。

「ずっと隼人クンのことが好きだったの。小さいころからずっと。最初はいつも傍にいられるだけで幸せだった。でももう我慢できないの。仲がいいだけの関係じゃ、もう嫌なの……」

ねえお願い。付き合って。本気なの。
駄目……かな？」

しばしの沈黙。その間はまだ頭の中真っ白で、心臓はくばく鳴っていて、もうわけがわからなかった。雲の上にいるような感じた。気持ちふわふわ夢心地。

それからどれだけ経っただろうか。沈黙を破ったのは相手のほうだった。

固唾を吞んで言葉を待つ。すると受話器の向こうからはあたしの

予想だにしない言葉が帰ってきた。

「あの……兄ちゃんにかかりますか？」

「え……じゃああなたは……」

意図せぬ返答で汗が全身に吹き出る。

嫌な予感とかそういうレベルじゃない。

兄ちゃんって、まさか

「まさか、隼人クンじゃなくて……」

「ぼく……弟の隆人です」

ぎや ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
 ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
 ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
 ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ

ホラー映画ばりの叫びだけ残してあたしは受話器を叩き切った。

相手を間違えて告白するという世紀の失態。まさかあんなに声が似ている弟がいるだなんて知らなかったよう！

顔から火が出るとはまさにこのことだと知った。明日からどんな顔をして隼人クンに会えばいいのだ。

「なにが告白にうってつけの日よ……」

あたしはそれから小1時間ほど、ベッドの上でのたうち回った。

さて一方、こちらは電話を受けた三ヶ嶋家。間違いで告白を受けた隆人は戸惑っていた。

人の告白を間違いでうけてしまうなどもちろん初めての出来事だったし、年上の男女の恋に踏み入った感覚もかなりダメージとしてはでかかったようだ。

「おうどうした隆人。電話終わったならばやくケーキ食おうぜ。せっかくお前の誕生日なんだからよ」

そう言っつて弟のために買ってきたバースデーケーキを差し出す隼人。彼の弟もまた今日が誕生日だったのだ。だが隆人はなかなか兄に目を合わせることができない。

さっきの電話を言葉にするというのはかなりハードルが高かった。だって自分で兄に告白をするようなものだ。しかも女性の立場で。それは隆人にとってもつらいものがある。

ただ隆人も幼いながらにさっきの電話の重要性は理解していた。兄に向けられた、心のこもった愛の告白だ。伝えないわけにはいかない。

そこで隆人は閃いた。そうだ。メモを兄に手渡せばいい。

マメな性格の隆人には電話の内容を書き留める癖があったのだ。これを渡せば、自分はこっぴどかしい思いをせずに済む。

彼は絶妙な折衷案を思いついた……つもりだった。「兄ちゃん、これ！」それだけ言ってメモを手渡し、走り去る隆人。

「何だあ？」

首を傾げつつも、隼人は受け取ったメモを開いた。そしてまさしく言葉通り、彼の目は点となる。

“ずっと隼人クンのことが好きだったの。小さいころからずっと。最初はいつも傍にいられるだけで幸せだった。でももう我慢できないの。仲がいいだけの関係じゃ、もう嫌なの……。

ねえお願い。付き合って。本気なの。

駄目……かな？”

弟から受け取ったメモにはこれ以上ないくらいに心のこもった愛の告白がびっしりと刻まれていた。

「あいつ……俺をそんな風に見てたなんて。

でもこの文章……どう見たって、本気、だよな。弟と兄の関係じゃ満足できなかったのか」

隼人は息を吞んで立ち尽くした。しかし何かを決心したのか、彼は受け取ったメモを強く握り締めて、顔を上げた。

「俺は隆人の兄貴だ。あいつが本気なら、それなりの気持ちで返さなきゃいけない。」

そうそう容易く受け入れられるもんじゃないけど、努力くらいは、しないとな……」

そう言っただけで階段をかけあがる優しい兄。行き先はもちろん弟の部屋だ。

“本日誕生日のアナタ、今日こそが告白につけてつけの日です。ずっと近くにいた人の傍へもっと近づけよう。”

勇気を出してアタックして！”

はてさて、占いの結末やいかに。

『告白にうつてつけの日』(ss)(後書き)

ss『告白にうつてつけの日』をお読みくださりありがとうございます。電話ははじめに本人確認が必須ですね。顔が見えないのって怖い怖い……。

『解答用紙に空欄だ。さあボケようぜ!』(コメディ)(前書き)

ジャンル「コメディ」 字数2100 2200

『解答用紙に空欄だ。さあボケようぜ!』(コメディ)

全ての問題を一通り解き終えて、机の端に置いた腕時計を見やる。見直しまで終えた時点で俺はまだ十五分もの時間を残していた。

辺りにはまだカリカリとペンの走る音が聞こえてくる。いつも、どの教科でもこんな感じなのだ。相変わらず俺は解答に要す時間が早いようだ実感した。

……しかし俺の戦いはまだ終わっていない。いや、俺に限っては、とでも言うべきか。

解答用紙に残されたいくつかの空欄。こいつらをいまから埋める。それも全力のボケで!

どうせ考えたってわからないのだ。どうせ無意味な抵抗をするくらいなら、俺は笑いを取るぜ!

限りなくアホな芸人魂だとは自覚している。これまで何度呼び出され反省文を書かされたかもわからない。だがそれくらいで俺の笑いに賭ける情熱は止められないさ。

問題用紙をページに戻し、ペンを握りなおす。最初の空欄は漢字の書き取りだ。

次のカタカナを漢字に直せ

「・ガクト出陣」(正しくは“学徒出陣”)

確か学生を徴兵する制度かなんかの単語だったか。これはもう考える余地もなく筆が動いた。

「・G A C K T出陣」

コンサートかなんかでも始まりそうな雰囲気醸す字面だなと思った。ビジュアル系の出発式ってどんなだろう。

まあいいや。俺は思考を打ち切って次の問題に移った。膨らませて面白くなさそうなお題はとっと飛ばす。自分でやってお

いて我ながらいい加減だなと思わないでもない。

さて、次は四字熟語か。

四角に漢字を埋めて、四字熟語を完成させなさい

「・肉 食」（正解は“弱肉強食”）

なんというか、これを忘れた自分はどうかとさすがに反省した。

いや、別にワークをやるのをサボったわけじゃないんだよ。これだつて確実に一度は覚えたはずなんだ。

でも忘れてしまった。クラスの間があまりにも“焼肉定食”つて笑いながら連呼するもんだから、本当はどういう言葉だったのか忘れてしまったのだ。

くそ。何と書くべきか。さすがに“焼肉定食”じゃ芸がなさ過ぎる。

考えに考えたが良い案は浮かばず時間だけが無情に過ぎてゆく。まずい。これでは他の問題を真剣にボケる（？）時間がなくなってしまうではないか！

苦肉の策で俺は「干肉定食」という妥協みえみえのボケを残しておいた。なんとも口の渴きそうな定食だ。しかもメインデッシュがすごく薄っぺらい。

まあいいか。干し肉だつて美味しいし。

何がいいのかよくわからないが、飛ばして次の問題へ移る。

掛詞かけことばを用いて短い文章をつくりなさい

……次は文章題か。また時間がかかりそうでなんとも面倒くさい。しかしもう時間がないのだ。さっさとやってしまおう。

掛詞つてのは確か音が同じで二つの意味を持つ言葉のことだよな。松ノ待つ、とか、文ノ踏み、とかそういうの。和歌とか詠んでるとよく出てくるあれのことだ。

だが和歌でボケるのは流石に難しい。できないこともないかもしれないが、題材が高尚過ぎて相手に伝わらない恐れがある。

ギャグやって“え、どういう意味？”って思われるのは死にたくないほどきついからな。まだつまらないって言われるほうがましだ。これはシンプルで、かつくだらないものがいいだろう。……それは何か。

そう、“親父ギャグ”だよ君い。（どや顔）

指針が定まってしまうばもうこっちのものだった。俺の頭にスーパーコンピューターみたいな速さで、星の数ほどの親父ギャグが浮かぶ。たぶん世界一無駄な脳の酷使というほかないだろう。選定をすませた結果、俺はひとつのギャグを書きとめておいた。

「ジャムおじさんがジャムを持参」

“おじさん”と“を持参”と掛けた高等ギャグが解答用紙に炸裂ううっ！

……脳内で無意味なテンションの実況を済ませて俺はペンを置いた。そして解答の採点を行う先生の顔を思い浮かべる。

うーん。国語科の山岡か。あの堅物にこのギャグが伝わるだろうか。

いや、周りの目なんか気にする必要はねえ！ ギャグは一種の芸術なんだ。大事なのは自分が満足するかどうか。そうだと兄弟^{ブラザー}！？

隣の山田に熱い視線を送る。「（え、何……？）」「山田は明らかに戸惑ったらしく、目が泳いでいた。

ん？ なんだかさつきと考えることが違うような気がするな。まあいいや。そろそろ解答時間も終わる。

それから数秒もせずに終了のチャイムが鳴った。俺は満足げに用紙を集める級長へ解答を手渡した。

さあて今回は何枚の反省用紙をくらうか楽しみだなあ。

俺は芸人体質でもあり、ソフトMでもあった。

いっぽうこちらは職員室。国語の採点を手早く終えた山岡教諭は相変わらずふざけた解答をする生徒の存在に頭を悩ませていた。

「おや、山岡先生。それは日塚の解答じゃないですか。またあいつはなにかふざけたことをやらかしましたか」

「はい。今回は三つ、明らかにふざけた答えを書いてきましたよ」

「どれどれ……はあ、今回は親父ギャグですか。まったくあいつも懲りませんな。せつかく良い頭を持っているというのに」

ため息をつきつつ頷く山岡教諭。

「本当ですね。あいつがした失点はボケた三問のみ。それ以外は全て正解していて学年トップです。」

馬鹿と天才は紙一重といますが、あれは何とかならんものか……

『解答用紙に空欄だ。さあボケようぜ!』(コメディ)(後書き)

コメディ『解答用紙に空欄だ。さあボケようぜ!』をお読みくださりありがとうございます。テストの解答欄つてたまに笑いの神が降りたりしますよね。友人が昔、遣隋使の人の名前を「小野妹」と書いてたのには爆笑しました。

追記：調べたところジャムおじさんのネタは既出であることがわかりました。親父ギャグ界では有名なギャグらしく権利の所在もなさそうなので修正はしませんが、この場にて報告させていただきます。

『そんなプレゼンテーション』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 字数600 700

『そんなプレゼンテーション』（ss）

「なあ、そろそろ……良いだろ？」

とあるプライベートルームの一室。百万ドルの美しさと称される夜景をバックに、男は甘い声で語りかけた。

「夜はそう長くない。それに僕の辛抱もね」

上品なワイングラスを音もなくテーブルへと置く。そして器用にネクタイとボタンを解き、細身ながらも引き締まった肉体を露にした。

だが夜のお相手は別段の反応を見せない。男のほうがその気になってからもう30分は経っていた。男は深いため息をついて、囁く。「君は心の準備に時間がかかるんだね。わかった。僕はもう一度シャワーを浴びてくるよ」

シャワーの蛇口をひねり冷水をかぶる。それから体の隅々を丁寧に洗い流した。

だいたい15分くらいは時間を潰しただろうか。男はバスロープを羽織り、ベッドへと戻る。

そして相変わらず……鈍い反応の相手を前に、少し苛立たしげに頭を掻いた。

「オウ・ノー。いったい君はどれだけ準備に時間がかかるんだい！？」

ジジ……ガガガという鈍い電子音が響く。ハードディスクのマークに灯る薄緑色のランプは未だに点滅をしている。

「なあ、いい加減に起動してくれよ。これじゃ書きとめた小説の掲載が出来ないじゃないか……」

パートナーに焦らされていやしませんか？

テックガーデン社の新型ハードディスク“E-MAX”があなた

のインターネットライフをもっと快適にします。

詳しくはこちらのホームページにて

www.tecgarden/imax.co.jp

今すぐアクセス！

『そんなプレゼンテーション』（SS）（後書き）

SS『そんなプレゼンテーション』をお読みくださりありがとうございます。何故か外国のCM風。パソコンの起動が遅くカッとなつて書きました。あ、ちなみに企業名やアドレスは適当でございます。

『五人の死体』（SS）（前書き）

ホラー要素を含むきわめて凶悪なシナリオです。苦手な方はご遠慮ください。

ジャンル「ショートショート」 字数3200 3300

『五人の死体』（SS）

カーナビのかすかな光が、白い煙のゆらめきを照らした。

暗い山道の路肩に止められた一台の車。煙草の匂いが立ち込める室内で三人の男が言葉を交わしている。

「どうする？」

そう言いながら運転席の男は空き缶の口で吸殻をもみ消した。

「サツが国道、県境を封鎖するのも時間の問題だろ。強盗を取り逃がしたとなりやあ奴らの面子も丸つぶれだろうからな。このまま立ち往生してるわけにはいかねえ」

まばゆく光るモニターの端で数字が点滅する。時刻は午前2時。草木も眠る時間帯だ。

ぼたぼたと窓を打つ雨音だけが静寂の中に響く。大きなジュラルミン・ケースを胸に抱えた中年の男は、おそろおそるといった様子で口を開いた。

「車が直らないんじゃないかもう仕方ないじゃないか。

夜が明ける前に降りよう。こんなところで止まっているよりは歩いてでも……」

「この雨の中、この山道をか」運転席の男が鼻で嗤う。

「無い脳味噌でももうちつとマシに使えや」

懷から取りだされた“それ”を向けられ、助手席の男の顔が凍りつく。関空の税関から掠めとったトカレフT-33。細い漆黒の銃口が薄くなりかけた額を照準に捉える。

「……止めておけ」

帽子を深くかぶる後部座席の男は熱くなりかけた男の挙動を諷めた。

「それはあくまで脅しの道具だ。そういう使い方をする為に奪ったんじゃない」

「……ハッ」嘲りのこもった笑みとともに引き金から指が離れる。

「じゃあどういう使い方をするのが正解だ？ 名門大卒の元・優等生さんに教えていただきたいもんだね」

「だから言っているだろう。 脅しの道具だと」

後部座席から男が降りる。ドアが開くと冷たい清新な空気が籠った室内に流れ込んだ。

脇道の樹木をつたって落ちた雫の香り。水と緑の混じった匂いが男たちの鼻をくすぐる。

外へ出た男は運転席の男から拳銃を受け取り、車道に出た。

それから5分も経たない頃だったか。走行する車の前に仁王立ちし、たまたま通りかかった白い乗用車をあわやの距離で止めた。

「あ、危ないじゃないかつ」

運転席の窓を開けた細身の男は開口一番に文句を言った。ひ弱な顔立ちながらもそれなりの剣幕を伴っていた。

そして二言、三言へと言葉をつなごうと息を溜める。

しかし言葉は続かなかった。ぐっしょりと雨に濡れた男は静かに歩み寄ったかと思うと、躊躇いの欠片もなく、銃口を運転手へと向けたのだ。

「降りろ」

降りなければ……。その先を必要としない語気が目前の運転手へとぶつけられる。

彼はごくりと唾を飲んだかと思うと、抵抗もなしに席を譲り車を降りた。故障した車内でその動向を見ていた男たちはヒュウと軽く賞賛の口笛を鳴らした。

運転手から足を奪った男たちは法定速度の倍に迫る速度で道を下った。

予期せぬアクシデントで潰れた時間を少しでも稼いでおきたい……そんな思いがあったのだろう。雨の山道であるにも関わらず、アクセルにかける体重は緩まない。

車体にぶつかる雨粒に混じって時折、小石を跳ねるような音が聞

こえた。助手席の男はそわそわしながらラジオの流れるスピーカーの音量を上げた。

「……が……て、などは……。言葉になっていない音がノイズと共に大きくなる。お……で……ちに……。稀に単語が聞き取れるか聞き取れないかというレベルの雑音だけが延々と続いていた。」

「こんな山奥じゃあ無駄だろ」

先ほどよりも多少上機嫌になった運転席の男が言う。

「どれだけ音量を上げたって聞き取れやしねえよ」

「……しっ」

助手席の男が唇の前で人差し指を上げる。脇でハンドルを握る男は怪訝そうに眉をひそめた。

「どうした？」

タオルで頬を拭いながら後部座席の男が問いかける。助手席の男はしばし耳をすませたかと思うと、呟くように声を漏らした。

「いま……なにか聞こえなかった？」

「何か、ってなんだよ」

「変な」助手席の男の口が小刻みに震える。「変な女の声、みたいなのが」

「はあ？」

運転席の男はろくに聞いていなかったラジオに耳を傾けた。だが番組は男のDJが一人で務めているようで、彼には女の声など聞こえない。

「……気のせいだろ」

「そう、かな」

「ああ聞き間違いだ。それより俺はさっきから漂ってる異臭の匂いが気になるぜ。」

誰だ？ 屁えこいたの」

ハンドルから片手を離し鼻の前を仰ぐ。ただ今度は助手席の男が怪訝な声を返した。

「え？ ぼくにはわからないけど」

それを受けて運転手がバックミラーを覗く。後部座席の男も首を横に振っていた。

「……なんか妙なことが起こりやがるな」車内を見渡す運転席の男。声には若干だが、警戒の音が含まれた。

「集中しろ」そんな彼をまたも後部座席の男が諫める。

「余計なことを気にするな。スピードが出すぎているぞ」

「あ、ああ。悪い」

右足に込める力を緩める。しかし何故か相反し、速度は緩まない。それどころかどんどん加速をしている。

雨でタイヤが滑りやすくなっているとはいえ何かがおかしい。

運転席の男は動揺しながらも素早く、足を左側のペダルへとシフトする。そして力いっぱいブレーキを踏んだ。さすがにこれで止まるだろう。彼らはそう思っていた。

だが車輪は一向に止まる気配を見せない。

白の車体がろくに灯りもない山道を疾走する。水たまりを轢いて舞うしぶきがフロントガラスの視界を覆う。

「カ、カーブが」震える腕で金の詰まったケースを抱く男がナビを見て青ざめた。

「カーブが迫ってるぞ！ 早くブレーキを……！」

「やってるよ！ でも止まらねえんだっ！」苛立たしげにハンドルを殴る。

「くそっ！ なんだよこれっ！」

パニクになりかける前の二人に目を向けることもなく、後部座席の男はナビの画面を凝視した。崖際のS字カーブまで残り約100M。もう車を止める有効な手段はないと言ってもいいだろう。混乱の最中で彼はするように判断をした。

「飛び降りるぞ……！」

仲間に激を飛ばしドアに手をかける。ここまで来たらもう怪我を覚悟してでも座席から飛び降りる算段だったのだ。

しかし、ドアは開かない。それどころか窓も。わけのわからない

力が働いて開かない。まるで外から誰かが押さえつけているかのよう。

もはやこの乗り物は走る牢獄、あるいは溶接された棺桶と変わらなかった。向かう先は崖下という名の地獄だ。そして地獄への距離は20M、10Mと着実に迫っている。

ガードレールに衝突し突き抜けるまでは、あつという間だった。フロントのへこんだ乗用車とともに空中に投げ出される男たち。

最後の最後。彼らが見たのは女の姿だった。

ドットの荒いカーナビに映る、血みどろに染まった女の顔面。

死の際に立つ三人の男はその誰もが息を飲み、最後の瞬間を静寂で迎えている。

きっと、だからだろう。彼らが彼女の囁き声を確かに聞いたのは。

『おいで。』

おいで。

コッチニオイデ』

次の瞬間には、爆発音。

男たちの意識は車体とともにばらばらになり、焦げ付いた嫌な匂いと共に空中へと霧散した。

そして雨の上がった翌日。崖下で大破していた乗用車に乗る死体が警察の手によって回収された。

ひとつは運転席の男。エアバックは作動しておらず、ハンドルに

頭を強打したのか、頭蓋骨の裂け目から脳漿が流れ出ていた。

ふたつめはバッグを抱えた助手席の男。割れたフロントガラスが顔面に満遍なく突き刺さっており、焼け爛れた眼球からは黄ばんだゼリー状のものが漏れていた。

みつつめは後部座席の男。胸から腹にかけての部分が強打したのか、いびつな形に潰れた内臓が口から吐き出されていた。

そして……よつつめの死体。警察の追っていた強盗とは別の人間が車内から発見される。

後部座席のトランクから発見された女は、五体ばらばらの状態でポリ袋にくるまれていた。鋸のようなもので切断されたパーツの断面には蛆が湧き、湿気と相俟って生々しい腐臭を放つ。

ポリ袋の裂け目からは、黒く血走った女の眼球が、ちょうど運転席の方向を凝視していたのだという。

大破した乗用車の本来の持ち主 殺人の容疑で指名手配中の男の消息は未だ不明。警察による数百人体制の搜索がなされたものの、手がかりは掴めていない。

最後に女性を殺したきり姿をくりました彼は現在も行方不明の状況が続いている。

『五人の死体』（SS）（後書き）

SS『五人の死体』をお読みくださりありがとうございます。……
余裕のある方はもう一周いかがでしょうか？ 聞こえなかったものが
聞こえたり、嗅げなかったものが嗅げたりするかもしれません。

『循環 アナザーエンド』(ホラー)(前書き)

ジャンル「ホラー」 字数700 800

『循環 アナザーエンド』（ホラー）

わたしはいま、夫を殺そうとしている。そう、この薬でだ。

毒薬じゃ、ないのよ？ ただちよつと人を衰弱させる薬。血液の機能を低下させるらしいわ。

この薬を少しずつ食事に混ぜる。するとなんの痕跡も残さず、人を衰弱死させられるらしいの。

とあるルートから手に入れた薬を、わたしは毎日欠かさず夫の食事に混ぜていた……そんなある日のことだ。

なんとわたしは交通事故にあつて、かなりの重傷を負つてしまった。夫を殺そうとしている自分が先に死にけるなんてなんたる皮肉だろう。

しかしいまの医療技術ならそう簡単に死んだりすることもないはず。薄れゆく意識の中でそう樂觀していた。だが予想外のことがここで起こる。

「血液が足りません。どなたか血液型がB型の方はいませんか！」
「私はB型です！ 妻と同じで！」

薬を飲ませている夫が献血に名乗りを上げたのだ。

「私の血ならどれだけ使つていただいてもかまいません。

妻を……っ！ 妻を助けてください！」

ちよ、ちよつと待つて！ あなたの血液は……っ！

夫はまだ若く体力もある。だがわたしは重傷により体力を失っているのだ。そんな状態で弱った血液を輸血されたらどうなるか。

わたしは必死で拒否をしようとした。だが痛みで声にならない。

夫から抜かれた新鮮な血液がチューブをつたって身体に入ってくる。ゆっくり、ゆっくりと。まるで血管の中を虫が這うかのような寒気が全身を走る。

徐々に霞んでゆく視界の先　死の際で見た映像は、口元を吊り上げて自分を見下ろす夫の不気味な微笑だった。

冷たく暗い瞳の奥に醜くゆがむ私の顔が映る。苦しくて、悔しくて涙が出た。

そうして私に顔を寄せる夫。そして冷たい吐息を私の耳に吹きかけた。

「さよなら。悲しい女」

その声を聞いたのが、最後。わたしの意識は永遠に途切れてしまった。

『循環 アナザーエンド』（ホラー）（後書き）

『循環 アナザーエンド』をお読みくださりありがとうございます。以前に掲載した『循環』を書いた際に出来た三つのネタのうち、余ったものを載せてみました。……手抜きじゃ、ありませんよ？

『すれちがい青春日和』（学園）（前書き）

ジャンル「学園」	字数3200	3300
----------	--------	------

『すれちがい青春日和』（学園）

“衝撃！！ 山本ミナの路チユー撮った！！”

「へえ。またあの女子アナがね」

「今度のお相手は？」

「んとね……野球選手だつて。ヤキユルトの選手」

とある大学の研究室にて。同じゼミに所属するふたりの女子学生は週刊誌のスキヤンダラスな記事を肴に雑談を楽しんでいた。

講義を終えた直後の開放感も手伝つてか安いゴシップ記事で盛り上がるふたり。現代メディア研究の資料として配布された主婦向けの雑誌だったが、まだ十代の彼女らもそれなりに楽しめているようだ。女はいくつになろうと噂好き。その法則に誤りはない。

「路チユーとか……大胆だよな」

「ね、ね？ みゆきちゃんはしたことあるの？」

そして彼女らの話題は好物のゴシップから大好物の恋バナへ。

「ほら、武藤君と。付き合い長いんでしょ？」

「もう、恥ずかしいこと聞かないでよう」

きやつきやつきやつきとじゃれあう女子ふたり。するとそこへ……

まさしくナイスタイミングとも言うべき状況で、渦中の人物が研究室へと入ってきた。

「あ、武藤くん」

「 笹原さんにみゆきさん。まだ残ってたんだ」

彼女らと同じゼミに所属したみゆきの彼氏でもある青年、武藤はふたりに軽く挨拶をした。「どうしたの？」笹原がそう聞くと、武藤はパイプ椅子に残されたテキストを拾い上げて見せた。どうやら忘れ物を取りに来たらしい。

「じゃお先に」

武藤が愛想の良い笑顔を残して扉へと向かう。すると笹原は何を

思ったか、部屋を出て行こうとする彼を呼び止めて聞いた。

「ね、武藤君。ちょっと聞いていい？」

「ん？ 何？」

ふたりのやりとりをみゆきはきょとんとした目で見上げている。笹原はそんなみゆきを一瞥して、にやけた笑顔を浮かべた。

「武藤君でさ……路チユーとかしたことがある？」

！？

「（ちょ……ちょちょちょとささちゃん！？）」

プライベートに土足で踏み込むかのような発言にみゆきが抗議する。頬はまるで茹蛸のように赤らみ、視線は風車のようにくるくる回っている。

そんな彼女を満足そうに見ている笹原。瞳にはいたずら程度のサドっ気が光っていた。

「なんでそんなことを？」

別段動揺する様子もなく、武藤が聞き返す。笹原は「気になるから」と軽口のように言った。

「んー……路駐ね。けっこうするよ」

「えー！ マジ？ マジ！？ 意外に大胆なんだね！」

鬼の首を取ったかのように喜ぶ笹原とそんな様子を不思議そうに見る武藤。そして氷の如く沈黙するその彼女。

サウナの内外みたいな温度差が教室を満たす。

「ね、ね。けっこうするの？ どのくらいするのぉ」

「どのくらいって……出かける回数にもよるけどほぼ毎回かな？」

（駐車する）場所がないこととか、学校の周りだとけっこうあるし「きゃー！」

ひとりで盛り上がる笹原に武藤が首をかしげる。彼にとっては日常茶飯事を話したただけで何をそんなに騒いでいるのだろうか。若干不思議には思えたが、笹原のテンションを見る限りどうにも疲れそうな展開を予想できたため、これ以上のやり取りを回避して武藤は教室を出て行った。

その背中を大騒ぎしながら笹原が見送る。その脇ではみゆきが相変わらず無言で俯いていた。

「みゆききゅん。聞いちゃったよ。カレシのカミングアウト」

「……」

「やってんじゃん！ 他人事みたいに言っちゃってこのお」

「……」

「どしたの？」

やば、ちよつといじめすぎたかな。内心で少し焦りながらみゆきの顔を覗きこむ笹原。俯くみゆきの表情は海みたいに青ざめている。「……ちよつと、ホントどうしたの！？」どこか尋常じゃない気配を感じ取ったのか、みゆきの肩をゆさぶる。

みゆきは身体を揺さぶられながら小さく唇を開いた。

「わたし……武藤君に路上でキスしてもらったこと……ない」

「え？」

笹原の瞳孔がわずかに広がる。

「で、でも武藤くん、ほぼ毎回って」

「……」

少々の間を挟んで笹原の身体にもみゆきと同じ衝撃が走る。すなわち戦慄という名の衝撃が。

武藤はみゆきの彼氏である。彼が路上でキスをする機会があるとすれば、その相手はみゆきであることが道理であり倫理だ。

だがその彼女は路上でキスをしてもらったことなど無いという。

この矛盾が、あるいは符合が何を意味するのか……ふたりにはわかっていない。

「き、きつと誤解だよ！ だってそんな、うわ……じゃなくて、武藤君が他の女の子なんて、そんなのありえないって！」

彼女は感情にまかせて説得をしたが、理論的にもその指摘は正しい。だって武藤がもし他の女とキスなどしているのなら、それを彼女であるみゆきの前で話すことなどありえないのだから。

だが慌てているふたりはそんなことにも頭が回らず、焦る焦る。半ばパニック状態になりながらもふたりで手を取り合いながら、深呼吸を繰り返した。

「と、とにかく武藤君を追わなきゃ！」

彼女らは財布と携帯に次ぐ生命線であるバッグをも残したまま、教室を飛び出した。

枯葉の積もる正門の外。手分けをして搜索をした結果、先に武藤の姿を見つけたのはみゆきだった。

部屋を出て四分……恋人の嗅覚というやつだろうか。まるで行動を先読みしていたかのような速さだ。流石は高校時代からの付き合いなだけはある。

「武藤君っ！」

焦り30、不安30、願望40。さまざまな感情がブレンドされ形容しがたい表情を浮かべるみゆきが、武藤へと詰め寄る。ヒールを履いているとは思えない足運びで。

彼女の形相を見た武藤は少し眉を吊り上げたが、すぐに恋人と会うときの自然な笑みを向けた。

「どうしたの？ そんなに焦って」

「さ、さっきの話なんですけどっ」

息を切らせながら言葉を搜すみゆき。「落ち着いて」武藤は少し屈み、彼女をいたわった。

「……もう大丈夫です」

息を整える。そしてみゆきは意を決し、いちばん聞きたくてある意味じゃ聞きたくない疑問を恋人へぶつけた。

「ほとんど毎日……路チューしてるって、冗談、ですよネ？」

「はい？」

一瞬、何を言われたのかわからず戸惑う武藤。しかしすぐにさっきの話題を思い出し、言葉を返す。

「ああ、さつき笹原さんが聞いてきたやつね。路駐がどうのって」

「……どう、なんですか？」

「どうって」

すがる様な目で見上げるみゆきに対し、武藤はきよとした表情で答えた。

「本当だけど。逆になんで俺がそんなことで冗談を……」

「ひどいです」

ぽつり。ぽつり。あたかな雫がアスファルトに落ちる。

「え、み、みゆきさ」

「わたしというものがありません。わたしは彼女……なのに」

「ど、どうしたの！」

鳴咽が武藤の胸に突き刺さる。肩を震わせる恋人が、彼にはあまりに儚く見えた。

何も知らない車が彼らの脇を走りぬける。だがどのような音も聞こえない。武藤には彼女の鳴咽だけが聞こえていた。

思わず抱きしめる。だが彼女の鳴咽は止まない。肩の震えが止まらない。

どうしたらいい。どうしたら　！

気がついたら、武藤はみゆきの口を塞いでいた。

もちろん自分の唇で。

その行動がどのような心理からきたのか、彼にもわからない。ただ彼は本能的に、彼がすべき最も効果的な手策を取っていた。

「よくわかんないけど、ごめん。悲しませて」

その言葉をきっかけに、こんがらがった誤解が解かれ始める。落ち着きを取り戻したみゆきは少しずつ武藤の話を飲み込み、自分と

笹原が抱えていた致命的な誤解の存在を理解した。

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

額の前に合掌を作ってみゆきが詫びる。相変わらず涙目だ。しかしその瞳に溜まる涙は、明らかに先ほどまでもものと違っていた。

「誤解が解けてよかったよ。それにしても俺ら……」

武藤が少し視線をそらして呟く。

「しちゃった、な」

オレンジみたいな夕日がふたりを照らす。ほんの少しの間を置いて、彼らの影はもう一度重なった。

「……仲直りできてよかったけど、あれは元通り過ぎでしょ」

そんな様子を木陰で見守る女、笹原。ゴシップ好きはいつのまにか出歯亀へと進化していたようだ。

「あーあ、心配して損した。……ま、いいけど」

ふう、と小さな息を吐いて携帯を取り出す。

“ごめんね。それと、よかったね”

短い一文を打ち込んで、笹原はその場を後にした。

『すれちがい青春日和』（学園）（後書き）

『すれちがい青春日和』をお読みくださりありがとうございます。
最初はコメディを書くつもりだったのに、気が付いたらシリアスになっ
ていました。みゆきのリアクションが方向性の分かれ目だった
かも。

『水平思考ゲーム』 前（推理）（前書き）

このお話は前後編構成で、3千文字を大幅に超える内容となっております

ジャンル「推理」 字数4400 4500

『水平思考ゲーム』 前（推理）

彼のいる病室は此処だと言われた。

真つ白で無為に広々とした空間。あるのは大きなベッドと数台の医療機器、そして窓際に飾られるカミツレの花くらいのものだ。棚には一冊だけ本が置かれていた。

看護師の背についてベッドへと歩み寄る。カツ、カツと無機質な足音がやけに大きく響いた。

半身を毛布にうずめる彼は窓の外に広がる景色を見下ろしていた。黒の摩天楼を取り囲む星屑のようなネオン街は、人工物によって構築された唯一の“世界十景”として登録されている。

そこはつい先ほどまで彼がいた場所だった。そしてこれから、私がかうべき場所でもある。

「ご機嫌はいかがだろうか」

挨拶にも彼は夜景から目を離さなかった。「タキヅ力さん」看護師が声をかけようにもまるで応じようとしない。

私はため息をひとつ挟み、構わず話を続けた。

「Mr・タキヅ力、君も愛想がないね。命の恩人が尋ねてきたんだ。少しくらい笑顔を作ってもいいんじゃないか？」

「命の恩人？」

タキヅ力は視線だけをこちらに寄越し、問いを返した。「聞いていないのか」彼の腋腹につながれている数本のチューブに目をやる。どうも彼は状況を、おそらくは多くても半分程度しか把握していないものと思われた。

「そうか。では教えよう。最初から」

雰囲気を感じたのか、無表情な看護師が部屋を出ようとする。だが私は軽く掌を掲げて彼女の挙動を制した。医療知識に富んだ彼女にも発言をしたらう機会があるかもしれない。

「どこから話そうか。……そうだな。君が弾丸に横っ腹を貫かれた

状況から確認しよう。

君はいつものようにスラム奥のカジノをひとつ荒らして街を歩いていた。ネオンの煌くメインアベニューからかなり離れた、街灯もない裏路地をね。そこで撃たれた。おそらくはカジノにいた人間に、だろうね。

理由は金を持っていると知られていたからだろう。君はマークされていたんだ。カジノで勝ち、そこを出たところから。あるいは君が腕利きのギャンブラーと知った人間がいたのかもしれない。

いずれにしても君を撃てば金を得られると確信した人間が君の後をつけていた。それは確かだろう。

まあそんなことは当人である君がいちばんよくわかっていることだろうがね。本題は君が倒れたその後の話だ」

話しながら、私は昨夜の光景を脳裏に浮かべた。小雨の降るビル群の隙間で、タキヅカの身体は骸のように転がっていた。腋からは赤い液体がとめどなく流れており、コンクリートのひび割れを雨露と混じりあいながら広がっていた。

「あの夜……“ たまたま ”、私はあの場所を通りかかって君を見つけた。それで顔の利く病院のここに君を搬送させたんだ。

腕の確かなドクターはこう言っていたよ。あと3分、搬送が遅ければ私の厚意も無駄になっただろう、とね。

そして保険も法律の庇護もない君の治療費も肩代わりしている。

そんな私を恩人と言わずしてなんと言う」

9割がた真実でつくられた話を彼に伝えてやる。ほとんど嘘で飯を食べている私からすれば破格の親切だ。

そこでタキヅカはようやく私のほうに顔を向けた。胡散臭いものを見るかのような視線は相変わらずだった。

「俺のことをやたら知っているみたいだな。何が狙いだ」

“ 腕利きのギャンブラー ” “ 法律の庇護のない ” など私の話した断片的な情報から、タキヅカは私の行為が厚意でないことを悟ったようだった。まあそれも筋書き通りの展開だがね。そのほうが話が、

早い。

「私のためにギャンブルを打ってもらいたい」

私は彼を助けた動機を端的に語った。

「Mr. タキヅカ。勝手ながら君のことは調べさせてもらったよ。そしてずっと探していた。私のパートナーとなってもらったために」

長かった。私は彼を探し続けた2年間を振り返った。

もう間に合わないかもしれないと思っていた矢先。まさかこんな形で、彼に恩を売った上でという理想的な形で、彼と交渉する機会が得られるなどとは思ってもいなかった。

自分は神に愛される価値のない男だと知っているし、愛されたいと思ったこともなかったが、このときばかりは初めて自分以外の誰かに感謝をしなければならなかった。

私は確かに今、自分の実力以外の要因に導かれ、彼と向き合えている。そんな実感がある。

「私には金がある。力もある。それこそこんなに大きな病院の一室に、後ろ暗い過去を持つ男をひとり匿えるくらいの力がね。

それでもまだ足りないのだ。私にはもっともっと、金が必要なのだ。

そこで考えた。短時間ででかい収入を得るには、莫大な元手を使ってギャンブルに勝つしかない。

聡明な君ならもうわかる

だろう？」

「代打ちか」ぽつりと呟くように、タキヅカの唇が小さく開いた。

「俺があんたの金をギャンブルで増やす……そういうことだろう」

鷹の眼光に近いものすら感じるタキヅカの瞳が、鋭い語調と共にこちらに向けられた。

「察しが良くて助かるよ」私は形だけの拍手を彼に贈った。

「私も大概な嘘吐きで勝負師だがギャンブルが本職の君ほどじゃない。目標の額までゲームに勝ち続けるとなると、私ひとりでは厳しく思えてね。

そこで君にこんな提案をしているのだよ。君が……」

「俺が話を引き受けて、勝負に勝てばこの恩はチャラ、か」
なるほど流石は腕利きと称される勝負師なだけはある。目の前の男はほんの少し先の展開を常に見据えているようだ。

黒い針のような前髪の間からタキヅカの両眼が覗かれる。風体は若い。外国人だから見た目じゃ詳しい年齢までわからないが、20歳には届かない若さだろう。それでも風格はあった。幾重もの修羅場を潜り抜けた者にしかない、底の見えない風格が。

噂の勝負師とやらに会ってみてわかった。そして安心した。

この男は、噂だけじゃない。

「細かい交渉をしよう」

私はじんわりと掌に籠った湿気をさりげなくズボンで拭った。

「今回君にやつてもらった仕事はとあるギャンブルに参加して、私の財産2000万を1億にまで増やしてもらったことだ。

成功報酬はこれまでの治療費、世話代もろもろの免除。そして1億を超過した分の金だ。今回のギャンブルでは一度勝つことに賭けた額の倍が払い戻される。つまり三回勝てば払い戻される額は1億6000万。この場合6000万円分が君の報酬になる。

負けた場合は……」

「好きにしる」

タキヅカのはっきりとした語調が私の語りを遮る。思わず私の息が止まった。

「負けた場合の話は必要ない。そのときはあんたの好きにすればいい。」

だがふたつ質問がある」

タキヅカはそんな前置きを挟むと、私の反応も待たずに聞いた。
「どんなギャンブルを戦うつもりだ？」

「それはもう決めている」想定されていた質問に、用意していた答えを素早く返した。

「“水平思考ゲーム”だ」

私は彼の国の言葉でギャンブルの名を口にした。この国では“シ

チュエーションパズル”と言う。

このゲームはいわゆる“決められた回数だけ質問が可能なクイズ”だ。質問によっていかに回答の候補を削るのか。それが鍵になる頭脳戦である。

運任せでは絶対に正解できないゲームだ。だがその反面、頭さえ切れば運による敗北の可能性も低い。

出題される問題の難易度はどうしようもないものの、ルーレットやポーカーなど違い運任せの要素はきわめて少ない。純粋な運には自信のない私や、通り魔に会ってしまうタキヅカのような者にはうつつけのゲームだ。

「水平思考ゲームか。金を賭けてやったことはないな」

「詳しい説明をするか？」

「だいたいはいわかる。特殊なルールとかあるのかもしれないが、その説明は後でいい。特殊なルールとかあるのかもしれないが、その前に二つめの質問だ。あんたはなぜ、金が必要としている？」

勝負の肝となるルール説明もそこに、タキヅカは私に戦う動機を尋ねた。

「こんな病院を動かせるだけの権力。そして2000万なんて元手を出せる財力があんたにはある。それなのになぜギャンブルなんて危ない橋を渡る必要があるのか、それがわからない。」

あんたがあんたにとって堅実なやり方を貫けば、一億くらいそう何年もかからず得られるだろう。あんたは何をそんなに焦っている？」

“何をそんなに焦っている？”

その言葉を向けられたとき、私は胸の内で舌打ちをした。

「交渉には関係ないだろう。君はとにかくゲームに勝てばそれでいい」

「関係なくはない」あからさまに不機嫌な私の態度など気にも留めていないかのように、タキヅカは淡々としている。

「俺とあんたは手を組むんだろう。だったらお互いの信頼は必要だ。」

隠し事は不信につながる。不信は亀裂につながる。亀裂は崩壊につながる。崩壊はすなわち敗北だ。

俺たちは利害関係だけでつながっている。それは確かだ。だが勝利を目指して足並みを揃えていかなきゃならない以上、人間関係がないがしろにはできない。

俺はあんたほど人生を長く経験してきちゃいないさ。それでもギャンブルに関してはプロだ。専門家の指示には従ってくれ」

出資者を前にしてもタキヅ力は徹底的に職業人としての態度を崩さなかった。私は乱暴に頭を搔いて、頭にこびりつくような鬱屈とした気分を弾く。

「そうかい。だったらMr・タキヅ力。先にプロとしてのお前の腕前を見せてもらおうか」

自分でも驚くくらい低くて重い声が出たと思った。目の前ではタキヅ力が、脇では華奢な看護師が平然としているのが余計に苛々する。

真っ白な病室の中で、なぜか自分の影だけが濃いように見えた。

「これからお前の力を図るために例題を出そう。これから戦うカジノで出された過去問だ。まあ同じ問題が出ることはあり得ないが、お前の力を測るには丁度良いだろう。

ルールは簡単。俺の出す問題に正解すればお前の勝ち。正解できなければお前の負けだ。

問題はきわめて難問だが、そのかわりお前には質問をする権利が七回だけ与えられる。お前はその権利を使って正解を導けばいい。

私は質問に対し“YES”か“NO”のみで回答をする。“答えは何？”だとかそういう質問には当然、答えることができないというわけだ」

「七回。”YES”か”NO”で答えられればどんな質問にも答えてくれるんだな」

「ああ」

俺の説明をタキヅ力は静かに聞いていた。質問もせず特別な反応

も見せない。だが戦い方を飲み込んで聞いている様子は確かに感じられた。

「このデモンストレーションゲームに勝つようなら改めてお前をパートナーとして迎えよう。さっきの質問に答えてやってもいい」

俺の提案を受けて、白い壁に溶け込むようにこれまで動かなかったタキヅカが小さく頷く。

「良いだろう。出題しろ」

言葉の一言一言に、タキヅカの勝負師としての気迫が滲みでる。

だが私も彼と住む世界こそ異なるものの、失脚と隣り合わせの駆け引きは幾度となく行ってきたのだ。

たかが一人の若造に気圧されたりはしない。

「はじめようか」

頭に叩き込んだ無数の難問。そいつらを掻き漁り、テストに相応しい極上の難問を探る。

時間は10秒か。あるいは20秒か。時間がわからなくなるくらい集中した上で精選した問題を選んで提示した。

「では出題だ」

『その人たちはとてもはやい。ある人は走っている。ある人は眠っている。またある人は食事をしたり、あるいはシャワーを浴びたりしている。』

だが皆、一様にはやく移動をしている。

この状況を説明せよ』

『水平思考ゲーム』 前（推理）（後書き）

次回、解答編です。できれば一ヶ月以内には……っ！

『水平思考ゲーム』 後（推理）（前書き）

『その人たちはとてもはやい。ある人は走っている。ある人は眠っている。またある人は食事をしたり、あるいはシャワーを浴びたりしている。』

だが皆、一様にはやく移動をしている。

この状況を説明せよ』

『水平思考ゲーム』 後（推理）

『水平思考ゲーム』デモンストラーションマッチを開始。目の前にいる男 若き勝負師タキツ力は、ゲーム開始とともに毛布の一点を見つめ、呼吸すらも感じさせないような静止状態を作り上げた。難問に窮したのか。集中しているのか。まるで彼の精神状態・思考状況が感じ取れない。その姿は徹底した“静”で、グラスに張られた水の面をも髣髴とさせられる。

「ひとつめの質問をする」

そうタキツ力が口を利いたのは、1分ほどの間が置かれてからのことだった。

「誰もがはやく移動をしているというが、その“はやい”とは速度の概念か？」

最初の問いは、“はやい”の意味が速度のことか、あるいは時間の概念に関ることなのかを絞るためのものだった。“速さ”なのか“早さ”なのか。ここを特定するのは、この手のゲームのセオリーだ。彼もその手段にはすぐに至ったようである。

「YES」私が短く返す。すると彼はいまの情報を踏まえ、思考をまとめるように小さく呟いた。

「速く移動しているというが、どの程度の速さで移動をしているのか知る必要がある。」

だが質問にはYESかNOかでしか答えない……」

開始数分にして彼はこの出題の肝にぶち当たった。そう、それは“速い”というのが一体どの程度の速さなのかという疑問だ。

速いと感じる基準は観念的なものである。“速い”と聞いて短距離走くらいの速さを思い浮かべる者もいれば、ジェット機くらいの速さを思い浮かべる者もいるだろう。

そこをはっきりさせなくてはこの問題を解くことはできない。残り六つの質問でそこをどう攻略するのが、彼の頭脳の魅せ所だ。

「二つめの質問だ」

さあ、どう聞いてくる？ 私は期待半分、緊張半分の心持で彼の言葉を待ち構えた。

「その人たちは、速度にして音の移動よりも速く移動をしている？」
タキヅカの質問に、体中の血が冷たくなったような気がした。
核心を貫くような質問。いや、まるでもう解答を見抜いた上で、それを確認しているかのような聞き方だった。

普通の回答者だったら違う。時速何km以上、秒速何km以上とかそういう聞き方をしてヒントを絞ろうとする。そうして悪戯に質問の権利を消費してしまうのがこのゲームの罠だ。

だが彼は違った。おそらくだがもはや脳のなかに、答えの形が浮かんでいる。

「YES」努めて冷静な口調で私は返した。そんな私に追い討ちをかけるかのような形で彼は、「三つ目の質問だ」そう言つて間髪をも許さず畳み掛ける。

「その人たちのいる星は、地球か？」
心臓が跳ねる。

彼は三つ目の質問にして決定打を捉えていた。

「どうだ？」タキヅカの切れ目が私の瞳を見据える。「YES……だ」私はおそらく声の震えを隠し切れなかった。

「そうか」

タキヅカが視線を毛布に戻し、今度は私に聞こえるような……いや、聞かせるような声で呟く。

「いる場所は地球上。またそこにいる人たちは音速よりも速く移動をしている。」

確か地球は一周で約4万km、すなわち4000万mだったな。
また地球は24時間……つまり86400秒で一周をする。

となれば赤道付近にいる人たちは約4000万m÷86400秒の計算から、常に秒速約462.9mで移動をしていることになるな。

これなら状況など関係なく移動をしていることになるし、音速の秒速約340mよりも速く移動をしているという条件にも合致する」

有り得ない。

その声が喉を通ったかはわからないが、私は心底から驚愕をしていた。

私が難問のつもりで出題したものを、彼は開始数分もかからずに看破をしたのだ。それも虎の子である質問の権利を四つも残して。

「ゲームセット……か」

全身から力が抜けるのを感じた。だが彼は

「まだ終わっていない」

そう言つて、視線を私に送った。

「俺は定まつた解答を宣言していない。そして質問の権利も残している」

「は？」我ながら間抜けな声が出たと思った。タキヅカが何を言っているのかがまるでわからない。

彼は間違いなく正解にたどり着いている。にも関わらずこれ以上何を聞こうというのか。

「YESかNOかでならちゃんと答えてくれるんだよな。そしてゲームに関係のない質問をしちゃいけないとは一言も聞いてない。

だから権利を使わせてもらうよ。四つ目の質問だ」

蛍光の白い光がただでさえ白いタキヅカの肌を明るく照らす。

「このゲームが始まる前。あんたは嘘をついているな？」

出題者への直接攻撃。不意打ち、という表現がこれほど似合う状況もそうないと思った。

おそらくタキヅカはゲームの条件を聞いたときから、この展開を思い描いていたのではないだろうか。七回の質問で文字通りの“全貌”を明かすことを。

「あんたは短い時間で金を稼ぐにはギャンブルしかないと言ったな。それはある意味じゃ正しい。けどあんたが言うには不自然なんだよ。

ギャンブルで一発逆転を狙うなんてのは刹那的な力しか持たない者がすることだ。俺や、それこそ明かりの届かない暗闇に住むような奴らのための手段だ。

あんたは違うだろう。真つ当な手でも金は得られる。それなのにこんな脆い橋をあえて渡ろうとするのは……」

「もういい」

私は肩をすくめて両手を挙げた。「私の負けだ。何でも話そう」タキヅ力の力量はもうよくわかった。そして私自身、臨戦態勢の彼とこれ以上向き合っているのは辛くなってきた。ここらが引き際だろう。

「あんたが戦う目的は、単に財産を増やすことじゃないな？」

「ああ。金は単なる手段だ。」

私には倒したい人間と、救いたい人間がひとりずついる。今回のギャンブルに勝てば二つの目的を同時に達成することが出来るのだよ」

それから私はほんの少し、昔話をした。私がまだ娘と穏やかな生活を送っていた頃の話だ。

妻を失った私は娘が笑顔でいてくれたから幸せだった。娘は私が自分より大切だと思える唯一のひとだった。

金も時間も権力も彼女のためなら何も惜しくはない。そう思えるくらい大切なひとと一緒に過ごせることが私はただ幸せだったんだ。「そんな生活もあの事件が起きるまでの話だったがね」

「あの事件……？」

「非加熱製剤の輸血事件だ。聞いたことはないか？」

「ん……」タキヅ力は記憶を手繰るかのように多少の間を置いた。

「この国での事例は知らないが、俺の国でも似たようなことはあったな」

割と騒がれた事件だったが、彼が知らないことはいささか意外に思えた。私は必要そうな情報だけを掻い摘んで話す。

「ウイルスの感染患者が蔓延した事件だよ。医療センターが杜撰な

管理をしていた血液を介して、だいたい五十人くらいの人間が不治の病を患った。私の娘もそんな五十のうちの一人だね。

そのとき国営の医療センターで管理官をしていた男は末端の職員をスケープ・ゴートに挙げて自身は碌な責任も取らず、現在は国営カジノの相談役に収まっている。非加熱製剤の使用を許可したのは自分の癖にな。そんな奴を許しておけるわけがない。

だから私は奴の管理下にある主要カジノを潰す。標的は全て国営のカジノだ。その全てが経営破綻レベルの大敗を決すれば、流石に政府も奴を社会的に抹殺することだろう」

心底にあるものを吐露しながら身体は熱く、心は冷たくなってゆくを感じる。ただ相反する感覚に支配されながらも、思考は驚くほどクリアだった。

「成程な」

タキヅ力はわずかに俯き、目を細めた。

「俺に架せられたノルマが1億6千。そんな打撃を一気に複数の力ジノが受けることになれば、流石にお前の言う“奴”も失脚するだろうな。その可能性は高い。

だがそんなことをしても、あんたが本当に守りたいものを、守ることになるのか？」

それは配慮かそうでないのかわからないが、タキヅ力は娘という語を使わなかった。

「不治の病なんだろう？」

“復讐は何も生まない”彼はそう言っているように聞こえた。おそらく私のことを慮って。

だから私は言うべきか迷ったが、医者として誰にも話したくない真理を……あるいは単なる事実を口にした。

「法律と倫理を無視すれば医療はいくらでも発展するのだよ。実験さえ出来れば、実用に至りうる理論はいくつも持ち上がっている。

まあそれを突き詰めるには非合法な人材、設備、薬品等がふんだんに必要なのだがね」

「あんだ……」

「私は」何かを話そうとした彼の声にかぶせるように、私の声が強まる。ケースに残る点滴薬の水面が震えるように波打った。

「私は何も惜しまない。今度のことがうまく行けば、娘の無念を晴らせる。なりふり構わない研究で娘の延命も可能になるかもしれない。

ならば今更何を迷うものか。私とて悪党である前に、ひとりの人間だ」

言い切つて、本日何度目かの沈黙が再び室内を満たす。ガラスに映るネオンだけが絶えず星のように瞬いていた。

タキヅ力の腋につながっている点滴の雫が落ちきり、看護師が彼のチューブを外す。そこでようやく、タキヅ力は肩を回しながら私のほうを見た。

「あんたも目的のためならなりふりを構わないタイプか。……まあ、事情はわかった。というかもともと事情がどうであれ俺にはあんたに手を貸さない選択肢はないんだけどな。

だがあとひとつかふたつ聞きたいことがある」

「君はあと質問の機会を三つ残している」私は彼の前に指を立てた。「何でも聞け」

タキヅ力は初めて、うつすらと笑みを浮かべた。

「そうか。じゃああんたにとって話しにくいことかも知れないが、遠慮なく聞かせてもらうよ。

五つ目の質問だ。

俺を撃ったのは、あるいは撃たせたのは、もしかしてあんだか？」タキヅ力はお互いにとつてもつとも危険な仮説を提示した。

暗がりでは彼を撃ったのは私か、私の命を受けた人間で、タキヅ力がここに来たのは陰謀だった。そして恩義をちらつかせた交渉が行われるところまで全て仕組まれていた。……と、そういう見方である。

私は「NOだ」とはつきり答えた。

「君を撃つたのは私でも、私の手の者でもない」

「本当か？」

「ゲームで嘘をつくのはセオリーだ。だがルール違反は美学に反する」

タキヅカが私の顔色をじっと見る。胸の奥の、そのまた奥まで覗くような眼差しだ。

「嘘は言っていないように見えるな。じゃあ聞き方を変えよう。」

六つ目の質問だ。

あんたは俺が撃たれた状況に関して、なにか隠し事をしているな？」

「それは」思わず大きなため息が喉の奥から出た。

「YESだ。どうして勘づいた？」

「不自然だったからだよ」

タキヅカに言われて自分の言葉を思い返す。

“君はいつものようにスラム奥のカジノをひとつ荒らして街を歩いていた。ネオンの煌くメインアベニューからかなり離れた、街灯もない裏路地をね。そこで撃たれた。おそらくはカジノにいた人間に、だろうね。”

理由は金を持っていると知られていたからだろう。君はマークされていたんだ。カジノで勝ち、そこを出たところから。あるいは君が腕利きのギャンブラーと知った人間がいたのかもしれない。

いずれにしても君を撃てば金を得られると確信した人間が君の後をつけていた。それは確かだろう。“

「おそろく」だろう”かもしれない”

言葉の端を捉えながら指が折られてゆく。

「あまりに仮説が多くなかったか？」

タキヅカは端的な一言で種明かしの口火を切った。

「今の時点じゃ確かなことは何もわかっていないのにあんたはやけ

にべらべらと仮説を並べ立てた。まるでその話題はさっさと片付けてしまおうとするかのようにね。

何か隠しているのは見え見えだったよ。あんたは具体的な何かを知っている上で、知っている事を俺に悟られまいとしたんだ」

ほんのちよつとした違和感から彼は私の秘め事に近付いてゆく。

まるで宝石の埋まる岩を少しずつ削るかのように。

「では何故俺は撃たれたのか。この疑問にはあんたが俺を探していた理由を話してくれたとき推測が立ったよ。

あんたは複数のカジノを潰そうとしていると言ったな。だったら俺のほかにも腕のある勝負師を探していたはずだ。

そんな動きがあんたの“敵”に悟られたんじゃないのか？ だからあんたに捜されている俺が殺されかけた。敵はそもそも勝負が始まる前にあんたの計画を潰そうと思ってるね。

つまり俺が撃たれたのは、俺がギャンブルの代打ち候補だったからだ。違うか？」

「……見事だ」驚嘆と共に呟きが漏れる。

ここに来てタキヅ力はおおよそ全ての謎を収束させた。あまりに隙のない思考の展開によって。

「言うのは二度目だが、私の負けだ。完敗だよ。

私の都合で黙っていた事を、まさかゲームに乗じて晒されてしまうなどとは思ってもみなかった」

つまりは私のせいでタキヅ力は命を狙われた。それを言うのは流石にばつが悪かった。しかも交渉をしようと思っていた矢先にだ。言える訳がない。

それに真相を隠せばその恩をちらつかせて交渉の材料にもできる。我ながらしたたかに振舞ったものだと思えて未だに感心する。

「まあ君を助けたのも私だ。大目に見てくれ」

「見るわけないだろ」と言いつつじと目になるタキヅ力。初めて青年らしい表情が見られた気がする。

「まあゲームに参加することは俺の目的とも合致するから、構わな

いけどさ」

「目的？」

聞き返す。するとタキヅ力は少し目を大きく開き、視線を彷徨わせた。彼の視線の先に、棚に一冊だけ立てかけられた本がある。確か彼が倒れていた時にもその手に握まれていた本だ。

「俺は……」

言いかけて、手元のグラスを口に運ぶタキヅ力。透明の液が彼の口へと吸い込まれてゆく。

「……俺にとつてもあんたの敵は敵ってことだろ。撃ってくれた礼はきっちり返させてもらわないとな。」

まあ敵の敵は味方ってやつだ」

「味方なら」私は笑顔を作って、彼の言葉を借りる。

「お互いの信頼は大切にしないでな。隠し事は不信につながるぞ？」

言葉につまったかのように俯くタキヅ力。看護師はくすりと笑わず、器具の片づけを行っていた。皮肉は聞こえていたはずだが全くのノーリアクション。生物が近くに感じる感じがしない。

「まあいい。話したくなったら話してくれ」

私は大人の対応をして靴のつま先を叩いた。

「私はそろそろ戻る。他の代打ちとも話があるものでね。」

勝負は二週間後だ。君の怪我は集中治療をすれば一週間程度で治るらしい。ことは別にスイートな病室も用意しておいたから、残りの期間はじつくりと英気を養ってくれ。

それでは」

彼は軽く親指を立てて病室を後にした。

「グッド・ラック」

あなたは腕利きのギャンブラーです。

あなたは病室で、ギャンブルの代打ちを依頼されます。

そこでのデモンストレーションマッチ。あなたは見事に勝利を収め、二週間後の戦いに備えます。

あなたはこれから、三つの厳しいゲームに挑むことになります。

「ここまでは予定調和ね」

薄い桃色のマニキュアが鮮やかな指先が、そつと本の表紙を閉じる。

「どう？ 自信は」看護師は彼に一声をかけると、そつと本を元の場所へと返した。タキヅカは彼女に一瞥を向けると、気だるそうにベッドへ半身を倒した。

「自信があろうがなからうが戦うしかないだろ。そして勝たなきゃ俺の居た場所へは帰れない。

まあやってやるさ。せめて今は、この傷を癒すのに集中するよ」そう言って目を閉じるタキヅカ。「おやすみなさい」看護師はそう言っただけで彼の身体にかかる毛布を彼の肩にかかるよう少しだけずらした。

まどろみの中で、彼は“彼女”の微笑を見たような気がした。

誰も彼もが不確かで約束されない“世界”を歩み生きてゆく。

明かりがおちて、消えることのないネオンの光だけが室内の闇を薄ぼんやりとぼかしていた。

『水平思考ゲーム』 後（推理）（後書き）

推理『水平思考ゲーム』をお読みくださりありがとうございます。
『三千世界』最終話への布石をふんだんに盛り込み、かつ短編としても成立させられる作品を目指して執筆しました。ただの伏線回で終わらなかったかが最大の懸念です。

『禁じられた術式』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」	字数5200	5300
----------------	--------	------

『禁じられた術式』（SS）

「はい。これで術式は完了いたしましたよ」

私は患者の手を放して言った。

「どうですか。気分は」

「とても……楽になりました。まるで身体の重さが半分になったみたい」

ありがとうございます、といって患者は頭を下げ、診療室を出て行った。

「次の方」

呼ぶやいなや、次の患者が入室する。目に大きくまをつくった女性だった。

カルテを見る。“日並かえで”十七歳女性。裏にはクリップで問診票がとめられている。初診のようだ。

「どうなさいましたか」

「眠れなくて」

明らかに寝不足らしい女性から詳しい話を聞く。どうも精神的に負担の大きな過去を抱え、もう数日もろくに眠れない日が続いているらしい。

「そうですか。お気の毒です」

病状を紙面に要約しながら応対をする。

「当院で施すことが可能な治療はふたつあります。

ひとつはアナタを今すぐ眠らせること。ここは診療所です。入院の手続きをとられるのであれば、ベッドをお貸ししましょう。

もうひとつはアナタの過去を記憶から消してしまうこと。少し準備の時間をいただくことになりますが、ものの一時間もせずにお帰りいただけます。ただ無くした記憶を取り戻すことはもう出来ませんからね。

催眠術師の私にはいずれの手段もたやすく施すことが可能です。

いかなさいますか」

私の提案に、女性は悩んだ。

彼女の悩みは不眠である。が、一時的に眠るだけのことによってその悩みは根本的な解決をされない。

催眠術によって一時的な眠りに落ちることができるとはいえ、不安を胸に抱える限りそう間もないうちに不眠症は再発してしまうことだろう。

ただし辛い過去とはいえ、自分の記憶を抹消するのには抵抗をもつ人が多い。当然だ。自分の一部を失うのだから。

だがそれでも彼女は「やってください」そう私に懇願した。

「それで辛い思いをしなくてすむのなら、記憶を失っても構いません。いつそ一思いに」

「後悔はなさいませんか」

そう確認をとる。後から“やっぱり戻してくれ”などといわれて訴訟でもされたらたまったものではない。私の流派で扱う催眠はかけることこそできれど、解くことはできないのだ。

まあ催眠などという非科学的なものを裁判にかけられようがまともな審判などなされないのだろうが、単に面倒なのは間違いない。

「やってください」

女性から言質とサイン入りの承諾書を受け取って術式の準備に入る。

大きなヘッドホンを用意し女性の耳に装着。スピーカーからは般若心経が延々と流されている。事前催眠というやつだ。単調な音を延々と聞かせることにより、脳を麻痺させ催眠のかかりやすい状態にする。別に念仏でなくともかまわない。朝礼時の校長の話なんかも事前催眠の効果を大いに発揮しそうだ。

術をかける私はというと消したい記憶の日時を聞き、それを頭の中で反芻した。集中して、患者の状態が整うのを待つ。

ちなみに消したい記憶の内容は聞いていない。聞くと患者たちの嫌な記憶が自分の中に蓄積されて鬱屈とした気分になることうけあ

いだ。自分に催眠をかけてそれを消すこともできるが、二度手間である。それならいつそ聞かないほうがいい。

三十分ほどの時間が過ぎた。あとは虚ろになった女性の目を見て、呪文を唱える。やることはそれだけ。

すると彼女はものの一分もせずに所定の記憶を失った。目をぱちくりさせて、私を見る。目のくまこそ残れど、表情は別人のように晴れやかに変わった。

「どうですか。気分は」

「なんだかわからないけれど……とても気持ちがいいです」
「それは良かった」

彼女は対価と笑顔を残して診療所を去っていった。

と、同時に白衣を着た老人が診察室に入室をしてきた。七十代の白ひげ爺さんは診療所の院長であり、私の師匠でもある。

「予約の患者はこれで終わりだな。

よっしゃ。今日は週末じゃ。広間にあつまれい！」

「あつまれい」は師匠が酒の席に誘う時の口癖だ。

やれやれ。今夜はさつさと眠りたかつたんだがな……。

しかし師匠の誘いとあつては断れず、私は激務で重くなった腰を上げた。

宴もたけなわ午前二時。私は親類たちの集まる広間を抜けた。診療所へとつながる廊下を横切り、足早にトイレへと向かう。酒を一升空けたところでようやく解放されたのだ。

いつも思うのだが催眠術師たちの宴は本当にたちが悪い。特に宴会芸。時間限定の制約をかけているとはいえ、酔った勢いで周りに催眠をかけるまくるのは止めて欲しい。

お陰でさつきまで自分を女性だと思い込んだおっさんたちに言い寄られていた。酔いは一気に覚めて気持ち悪さだけが残ったからなあれ。

思い出すと共に悪寒が強まった気がして足が速まる。トイレは角

を曲がつてすぐそこだ。

とそんなとき、私は右手の庭にある蔵が開いているのをみつけた。

「おいおい。誰だ開けたの」

急ぐ気持ちを我慢して庭に下りる。我が家に古くから伝わる財宝やら、秘術の記された巻物やらが収められてる由緒のあるらしい蔵だ。まあ一緒に宴会グッズや自転車とかも収められているからあまり厳かな表現はし難いが、それでも開けっ放しで問題のない蔵ではない。

私は久しぶりに蔵へと足を踏み入れた。子どもの頃に一度立ち入って親父に叱られたとき以来である。まあ私も術式を皆伝した一人前の催眠術師で、この家の次期当主だ。蔵に入るくらいで叱られることもなからう。

「……泥棒が侵入したとかじゃなさそうだな。やはり誰かが閉め忘れたのか」

門に壊された痕跡も無いのを確認し、外に出ようとする。

と、そのとき私は蔵の奥に、とても興味を引く文字の書かれた木箱を見つけた。ちなみに私の視力は二・五だ。

“ 禁じられた術式 ”

思わず息を飲むような緊張が身体を走る。

手に取り蓋を開けると、中には巻物が入っていた。茶色で所々が欠けた巻物だ。審美に通じていない私にも相当古くから伝わったものであるう事が感じられる。

「さて、見るか」

酔った私に一ミリの迷いもなかった。一応、巻物そのものに仕掛け催眠の気配が感じられないことを確認した上でだ。

禁術というからにはなにかとんでもない内容がかかれていそうなものだが、まあ何が書かれていようと私が私の裁量でそれを使うか

判断できれば問題はない。

中には催眠の術式がひとつだけ記されていた。

“催眠を解く術式

相手の手を握り、目をしっかりと見つめたうえで『解け。解き放て』と三度唱える”。

「は？」

……それだけ？

紙の端をつまみ巻物を完全に解く。しかし書かれているのはそれだけだ。禁術に相当するような面倒な事前催眠の必要もなく、術式によるリスクも何も記されていない。

「拍子抜けもいいとこだ……」

何が禁じられた術式だ。むしろ催眠を誤ってかけてしまった時には便利なくらいである。まあ催眠にミスはあつてはならないと師匠に叩き込まれてきただけあつて、これまで誤催眠をしてしまったことなどないが。

「解け。解き放て、ね」

私はぼんやりとした頭で巻物を元の場所に戻して、蔵を後にした。拍子が抜けたのと同時に酒も抜けてしまったらしく、私は蔵に門をかけてそのまま大広間……もとい悪ノリの聖地へと出征した。

そんな夜から一週間が経った頃。私はいつもどおりの診療を行っていた。

「次の方」

カルテを繰りながら呼ぶ。入室した患者は見覚えのある女性だった。

「あなたは先週の」

化粧のばっちり整った女性の顔を直視する。たしか名前は……日並さん、だったか。記憶を消すという荒業を所望した患者のことは

流石に覚えていた。先週の帰り際と違い、目元からくまは消え、大きな二重まぶたがぱつちりと開いている。どうやら不眠は解決をしたらしい。

しかし表情はまたどこかつかない感じに戻っていた。

話を聞く。すると彼女は言った。

「……こんなお願いをして申し訳ないのですが……」

その、記憶を戻していただけないでしょうか」

「……わけをお話ください」呆氣にとられながらも口調だけは冷静に診断を始める。

彼女の言う決心に至るまでのいきさつはこうだ。

一週間前。彼女は都合の悪い記憶を催眠によって消滅させた。しかしそのいきさつを聞いた彼女の周りの人間はその過去を消すべきではなかったと主張をした。

「 みんなに説得されて気がついたんです」

女性が目を伏せる。

「都合の悪い記憶は消せばいいの？ 逃げてしまえばそれで済むの？ ……そんなの、間違っているって。」

私は辛いことから逃げようとした。向き合おうともせずに。

こんなんじゃない私はまた逃げようとする。きっと一生。そうしていつか逃げ切れなくなつて、駄目になつちゃうのだと思うの。

だから恥を承知で、無理を承知でお願いに参りました。どうか私の記憶を取り戻してください」

女性は覇気のある口調で言った。また覚悟のある表情であることも見てとれた。

それは無理だと事前に説明させていただいたはずですが。

喉元まで言葉が出掛かる。ただそこで私は声を飲み込んだ。

“ 解け。解き放て”

ほんの一週間前。私は蔵で見た呪文を思い出したのだ。

そう。実験こそしていないが、今の私には心当たりがある。不可能を可能にする手段の心当たりが。

同時に頭を過ぎる“禁じられた”の一言。そう。あれは禁術だ。文字通り、使うことを禁じられた術なのである。これを使えば私は流派に反することになるのだらう。そう思うと気は引けた。

だが目の前の女性は覚悟を持ってここに来ている。自分なりに強く生きようと決意してここに来ている。

しばし悩んだ末、ついに私は「わかりました」と返事をした。

「ただし成功する保障はありません。また解除の反動が起きる可能性も捨て切れませんが、よろしいですか」

確認半分、脅し半分の文句を提示する。女性は一瞬だけ表情に影を浮かべたが、「構いません」とはつきり口にして、承諾書にもサインをした。

自分にも言い聞かせ、女性の手を握る。そして彼女の瞳をしっかりと見据えた。大きな瞳の奥に、直視する私の顔が映る。

「解け。解き放て。」

解け。解き放て……」

「あああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ

あああああ……っ！」

絶叫が院内に響いた。

待合室の患者がどよめくのを制し、院長が隣の診療室へと駆け込む。

「何事だっ」

そこには口元を両手で押さえる女性と、白目を剥いて身体を痙攣させる院長の息子の姿があった。

いきさつがまるで掴めない院長は女性の肩を掴み問い詰める。女性には全身をがたがたと震わせながら、自分の知る情報を彼女の可能な限り過不足なく説明した。

「催眠を解いた……？」

禁術か。馬鹿な事を」

呼吸もほとんど消えかけている息子を肩に担ぎ、院長は診療室奥の扉に手をかける。そんな彼を、女性が背中から呼び止めた。

「ど、どういうことですか。何があったんですか！」

女性の声に振り返ることはせず、院長は声だけを返す。

「思い出してしまったんですよ。あなたと同じで。」

けれどあなたと違い、なんの覚悟もなしにね」

清潔な色合いの蛍光が意識を失った男の顔を白んで見せる。

「催眠術師は誰の記憶でも消すことができます。もちろん自分の記憶でさえも。」

だから催眠の使える人間は大抵、自分の辛い記憶を催眠によって忘れさせようとします。さらにたちが悪いことに、忘れさせたとい

うその事実さえも忘れられるような催眠をかけるんです。辛いことが存在したという過去そのものを忘れてしまえるように。

息子はきつと、自分の辛い記憶を催眠によって忘れさせてきたのでしょう。それを今日、何も知らずに催眠を解いたものだから、人生で味わってきた辛い過去を催眠の解除とともに一気に思い出してしまったんです。

それでショックを受け、心が壊れてしまったんでしょう。こういうことがあるから、この術は“禁じられた術式”にされたのだというのに」

「で、でも！」

食いかかるように女性が半身を乗り出す。

「催眠を解かれたのは私のほうなんです！ どうして彼にかかっていた催眠が……」

院長はそこでようやく振り返り、彼女の目を見据えた。

「……あなたの瞳はとても澄んでいる」

そう言っただけ息をついた。

「手の届く至近距離で目を見詰め合えば、相手の瞳に映る自分の姿を見る。事前催眠の必要ないこの禁術は、術者にも効果が及ぶことを避けられない性質を持つのですよ。」

息子はそれに気がつかず、あるいは効果が自分に及んでも問題ないと思って術を使ってしまった。

知ってはいたが、本当にどうしようもない馬鹿息子だ」

大きなため息が女性の耳にも聞こえた。それをかき消すように

「っ！ でも！」

女性の叫びがこだまする。

「彼は私のために！」

「わかつている」

院長は先ほどまでと違い、多くを語らなかつた。

「それもわかつています。この子は、そういう子だ」

それだけ言っただけ院長は大きな手で息子の頭を撫でた。

診療室奥の扉が開かれる。老いぼれた老人の背中と事切れたようにも見える若者の身体は、まるで別の世界へとつながるかのような暗闇の向こうへと吸い込まれていった。

『禁じられた術式』（ss）（後書き）

ショートショート『禁じられた術式』をお読みくださりありがとうございます。
ございます。「催眠術」はいつか扱ってみたい題材のひとつでした。
ネタがかなり余っているので、整ったらまたどこかで使うかもしれません。

あ、なにげにこのお話でシーズン3終了です。シーズン4は間を
置かず書いてゆくのので引き続きお楽しみくださいませ！

『はじめての女子会』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 字数2900 3000

『はじめての女子会』（ss）

まさしく爆発しそうなくらい、胸の鼓動が高鳴るのを感じていた。ネオン煌く午後八時の繁華街。前をゆく親友の背を見失わないようにだけ注意しながら雑踏を進む。人ごみの中で心音だけがやけに大きく聞こえた。五感を奪われるほど、わたしはこれから開かれる会合に心を躍らせている。

「ついたよ。かなた」

望はチャイニーズバーの看板を指差し、わたしの名前を呼んだ。BAR “cobalt blue” 極上のカクテルを安価でいただくことの出来る隠れた名店と評判の店だ。

「どう？ 内装もわりと綺麗でしょう」

「ひゃ、ひゃい」

喉の端から搾り出したような声で返事をする。まさかこんなお洒落で…… なんとというか本格的な場所でハジメテを経験することになるだなんて思わなかった。

そう、噂でしか聞いたことのなかった祭典。 “女子会”

わたしは社会人二年目にしてついにこの女子会への招待をされたのだ。恋の極秘情報が飛び交い、また時には培ってきた価値観をも破壊しかねない経験談が飛び出すこともあるのだと噂には聞く。

「もう！ そんな緊張しないで。」

さ、入りましょ」

手を引かれてテーブル席へと進む。薄暗くてわかりにくいが広さ自体はさほどでもない店内だ。あつという間に席が見える。本当は心の準備をする時間が欲しかった。できれば2時間くらい。

「もう、望ちゃんたち遅い」

ピンクのノースリーブからすらりと伸びる細腕の綺麗なひとがわたしたちに手を振った。「あ、ここ。ごめん」 同じように語尾をのばして望が返事を返す。

「この娘が店の前で尻ごみしちゃって。

あ、この娘はかなたちちゃん。会社の同期なの。女子会は初めてなんだって」

けらけらと軽やかに笑いながらわたしを紹介する。わたしはそんな望の腋を肘先で軽く小突いた。

「（ちょ、ちよっと！ はじめてとかばらさないでよう）」

ロケットスタートの如き速さで経歴を明かされ、顔から火の出る思いをした。目の前の……ひい、ふう、みい……三人の参加者は皆洗練された様相を呈していた。きつと女子会も百戦錬磨に違いない。わたしだけがはじめてだと知れたら、内心で笑われてしまうのではないかと勘ぐったためだ。

しかし“ココ”さんは柔らかな笑顔を浮かべてわたしに視線を寄せた。

「あ、そうなの。でもそんなの大丈夫よ。誰だって最初は初めてなんだから。って最初は初めてに決まってるけどね」

そう言っ隣のシートにそっと手を置く。隣に座れということだろう。

よかった。いい人だ。わたしはほっと一息をついて腰を下ろす。すでに用意されていたグラスを渡されるとすぐに乾杯が行われ、女子会が始まった。

「うん。じゃあお酒も入ったことだし、下ネタでもいこっか」

……は？

思わず隣のココさんを見上げる。そして一度は視線を戻しグラスに口をつけたところでもう一度見た。俗に言う二度見というやつである。

「それじゃ新入りのかなたちちゃんから。お題は下ネタね」

「え？ 霜ネタですか？

ええと霜は空気中の水が昇華し結晶として物質の表面に……」

「え、あ、いや霜の話じゃなくて」

ココさんが突っ込みを入れる。するとワテンポを挟んで場に笑

い

が起きた。

「かなたちちゃん面白い〜！」

正面の大柄なひと……確か名前はユウさんだったか。お絞りを口に当てながら大笑いをしていた。

ど、どうということなのだろう、この流れは。

ワンピースの下地に汗が滲む。まだろくな自己紹介すらしていないというのに下ネタ……だと……？ うら若き乙女たちの会話では有り得ない展開だと思った。少なくとも女子会処女のわたしにとつては。

「この娘、女子会はじめてだから驚いてるんじゃない？ このノリに」

こくこくこく。望の助け舟を受け、首の据わらない人形のように肯定の合図をする。

「そつか。それじゃちよつと話しづらいよね。

じゃあ望ちゃんからいこつか」

「え〜、あたしですか？ じゃあねー……」

あれ？ 流れはこのままなの？

一瞬、思考が吹き飛ぶ。しかしすぐにわたしは先輩方の話に耳を傾けた。この勢いに飛び込んでしまった以上よそ事を考えている隙などない。ほつとけば一馬身や二馬身じゃ済まないくらいの差がついてしまうことになりかねないだろう。

「でね。あたしの彼ったら を寄せながらわたしの×××をいじっちゃって、しかも とか言いながら口では……」

何かがわたしの頭の中でショートした。

開始8秒。KO負け。綺麗なフックをもらったボクサーみたいにだらしなく顎が開く。

考えられなかった。というか有り得なかった。どうしてこんな一文節にあれだけのアレな用語が詰め込めるのだ。しかも行為の内容がなんというか……その……！

あ……気が遠のく……。

緊張とショックからか、わたしは視界がぼやけるのを感じた。

「でもさ。ほら、あたしってば恋してる自分に恋しちゃうタイプじゃない？」

「知らねーし！」

「……って、かなたちゃん……？」

大口を空けながらはしゃいでいたユウさんだったが、わたしの異変に気がついたのだろう。「はいこれ。飲んで」手元にあった水をこちらに渡してくれた。

「ん。なんか調子悪いのかな。あたしこの娘についてますんで、ちよつと外します」

「平気？」

「ちよつと休めば大丈夫そうです。テキトーに飲んじゃっててください」

望がわたしの身体を支えて店の外へと連れ出してくれる。都会の夜の空気が冷たくて心地いい。わたしは天を仰いで、ネオンの合間に薄く光る一番星を見つけた。

「どしたの？ 体調悪い？」

アイシャドウで大きな二倍増しの瞳がわたしを覗き込む。「ううん。平気」わたしは力ない声で望の疑問に応えた。

「まさかあんなに初っ端から過激な話が飛び出すなんて思わなかったよ。男の子だってあんなに過激な話をしないでしょうに……」

「まあ……女子のがこういう話はきついよね。しかも社会人の女子会だし。学生の頃くらいから慣れておけば平気だったかもしれないけど」

「それは無理だよ……」

わたしは微妙に潤んだ瞳を伏せた。

「だってわたしは最近まで男子だったんだもん。学生の頃に性転換した望ちゃんと違って女子会に慣れる機会なんてなかったもん。」

それをいきなり本物の女子の下ネタになんてついていけないよ」「なあと弱気なこと言ってるの」

望がぼんぼん、とわたしの肩を叩く。

「だれだって初めは初めてだってココさんも言ってたでしょ。気にすることなんてないの。」

それにね。あなたはひとつ勘違いしてる」

そうして望が窓から覗くココさんたちの席へ視線を送る。

「今日の女子会に参加しているのはわたしたちも含めて全員、“元・男子”よ。女子会っていうのも“本物の女子に近付きたい会”の略だから。」

ちなみにあたしたちと湊さん、勇さん（改名前は勇と書いて“いさお”）は本名。ココさんはあだ名で、本名は鳴子 胡三郎ね。もとはどいつもこいつも男なのよ。はじめからあんなだけ女子会慣れしてたら、女の子らしく嫉妬してこの自慢の二の腕がラリアットかましちゃうから」

そう言って望は、アメフト部時代に鍛えあげた鋼の両腕を魅せつけた。

評判だった山のような力瘤は今でもまるで衰えを見せていないのが、実は最近の悩みだという。

『はじめての女子会』（ss）（後書き）

ショートショート『はじめての女子会』をお読みくださりありがとうございました！ かなたの例えがやたらとワイルドだったのはつまりそういうことです。女子っぽさとそうでないっぽさをブレンドしながらの執筆がなんだか楽しかった……。

『俺の幼馴染は凄いんだぜ』（コメディ）（前書き）

ジャンル「コメディ」 字数600 700

『俺の幼馴染は凄いだぜ』（コメディ）

「俺の幼馴染は凄いだぜ」

青年はまるで自分のことのように誇らしげに、友人へ幼馴染の紹介をした。

「何が凄いつて、まずすごく気立てがいいんだ。おまけに可愛い！頭もよくてまさしく才色兼備というやつだ。こんな凄い幼馴染は捜してもなかなか居ないよ」

「それは凄いな」

「けどひとつだけ残念なことがある」

「ん？ 何だ？」

「その幼馴染は男なんだ」

「……そりゃあ残念。というか台無しだな」

「しかし俺はゲイなので大いにありだと思っている」

「突然のカミングアウトに心臓が跳ね上がったよ」

「実はお前のこともちよつといいな、って思ってたりする」

「……。そ、それはなんていうか……その……すまん。
っておい。なぜ心なしかこっちに接近してきてるんだい……」

「？」

「まあそう怖がるなよ。すぐ済むから」

「な、何がすぐ済むというのか！」

「大丈夫大丈夫。最初は手を握るだけ」

「さ、最初はつてお前っ！ や、やめてくれ！ 寄らないでくれ！」

「……なんだよ。そんな邪険にすることないじゃないか。俺のこと嫌いか？」

「っ！ そ、そんなことはない！ けど接近するのは駄目だ！ そんなことされたら……」

「されたら、何だ？」

「好きに……なっっちゃうだろうが」

友人は頬をほんのり染めて言った。

「ブルウトウス。お前もか。」

まあ怖がるなよ兄弟。^{ブラザー}一緒に行こうぜ真世界へ。

ちなみに褒めてた幼馴染ってお前のことだからな」

「嬉しい……」

そうして二人は逞しい腕を組み合い、夜の街へと消えていった。

『俺の幼馴染は凄いんだぜ』（コメディ）（後書き）

コメディ『俺の幼馴染は凄いんだぜ』をお読みくださりありがとうございます。
こんなネタを続けて書くだなんて私ったらいけない子……。

『ペガサスに跨って』（コメディ）（前書き）

ジャンル「コメディ」	字数	1500	1600
------------	----	------	------

『ペガサスに跨って』（コメディ）

「ねえ聞いて聞いて！ 今日ね、夢にすごくかつこいい人が出てきたの！」

ある夕方の下校風景。少女はまるで鬼の首を取ったかのような喜びようで、隣を歩く幼馴染の青年に今朝見た夢の話をしていた。

「まさしくわたしの理想の人っ！ まずね、顔はもちろんかつこよくてやさしそうなもの」

「まあ格好よくて優しいのは基本だな」

「でねでね？ 朝は白馬に乗って登校で着衣はもちろん白タイツなの」

「あ、設定は王子様なんだ」

しかし『もちろん白タイツ』とはなんだろうか。王子様〃白タイツは基本なのか？

“江頭2：50がタイツ着用なのはあたりまえでしょ”みたいな感じにのたまう少女。

「そう王子様！ 挨拶の発音もすごく気品があって優雅なの。“ボンジュウール”って」

「……それ誰？ フランスの皇太子？」

「皇太子じゃなくてお・う・じ・さ・ま！ ちゃんと聞いてたの？」

「あ、はい。すみません」

なぜいま俺は謝ったのだろうか。青年は心の中で呟く。

「それでそれでっ！ 夢に出てきた理想の人はわたしの手をそつと握って言ったの。」

『毎朝僕の味噌汁を作ってくれないか』って！ きゃー！」

「プロポーズは純和風なんだな」

夢見がちな少女はその後夢の中で出会った理想の人とやらの紹介を延々と続けた。青年はそんな少女の話に軽い相槌を打ちながらも、脳にはしっかりその特徴を記憶した。

「あいつ……そういう男が好きだったんだ」

少女の家の前で別れた青年は、呟きながらとりあえず白タイツの購入に向かった。

そしてあくる日の朝。

「そ、それどうしたの……？」

変わり果てた青年の姿に、少女は唖然としていた。青年はいつもの学生服姿ではなく、白タイツに赤白ボーダーの入った短パン。そして頭には王冠を載つけて少女を迎えにきたのだ。

「ボ、ボンジュウル」

一夜漬けで仕込んだ本格派の発音を披露する青年（白タイツ装備）
彼の心境は羞恥半分、緊張半分で目いっぱい満たされている。

実は昨日、ようやく一緒に帰るダンスをものにした青年は少女に告白をしようと目論んでいたのだ。だが少女が延々と理想の話を
するものだから期を見失い、また青年も自分の方向性（？）を見失
い、この展開へと至ったわけである。

「どうだ。完璧だろう。」

さすがに白馬は調達できなかったからこの白いママチャリで勘弁
してくれ」

チリンチリンと甲高いベルの音が朝の清しい空気に鳴り響いた。

少女は啞然としながら青年に見入っている。よし機は整った！
青年はゆっくりと少女に歩み寄り、彼女を手を取って見つめた。

「毎朝僕の味噌汁を作ってくれないか」

ブレザー姿の少女に白タイツの男がプロポーズするというシユールな光景が出来上がる。近所の人が見たら通報するレベルかもしれない。

偶然かもしれないが、この光景を捉えたカラスはすぐさま進路を変え別の方向へと飛び去った。

「あの……原田君。きつと疲れてるんだよ。今日は学校休んだほうがいいんじゃないかな……？」

「俺は疲れてなんかいない。いたって健康だ。そしていたって真剣

だよ。マドモオアゼル」

「じゃあきつと……わたしが疲れてるのかな？
ごめんね原田君。わたし、今日は学校休むね」

両目を押さえながら踵を返し、扉を閉める少女。その後ろ姿を青年は呆然としながら見送った。

何がいけなかったのだろうか。

青年はしばし思案に暮れる。そうして数秒後、何かに思い至ったらしく拳で電柱を軽く叩いた。

「くそう！ やっぱ白馬を妥協したのがいけなかったか！」

すぐさま携帯で検索を開始し、“JWHA（日本白馬協会）”のホームページをブックマークする青年。

すぐさま予約を取り付け、一週間後には期待の2才馬“ペガサス”をレンタルする手はずが整った。

『ペガサスに跨って』（コメディ）（後書き）

コメディ『ペガサスに跨って』をお読みくださりありがとうございます。気がついたら「ボケ」と「突っ込み」の役割破綻が起こっておりまして。作者の不器用ゆえキャラクターが器用になるのははじめての経験です。

『愛しき人へ』（文学）（前書き）

ジャンル「文学」	字数3100	3200
----------	--------	------

『愛しき人へ』（文学）

私たち家族は二人になった。

本当は三人の家族だった。ほんの数日前までは。そんな生活から本当に突然、夫だけが欠け落ちた。

葬壇に飾られる夫の遺影が静かに微笑み喪服姿の私を見つめている。私は唇を噛んで俯き、彼と、彼の息子と過ごした日常を回顧していた。

私たちは出会ったとき三人だった。

夫は離婚を経験していた。息子は夫の連れ子だったのだ。

離婚経験があることなど気にならないくらい夫を愛していたから、連れ子の息子とも仲良くやっていける自信があった。

「これからよろしくね。拓馬くん」

結婚が決まって最初に挨拶をした相手は先方の両親ではなく拓馬だった。拓馬は何も応えなかった。目すらも合わせようとしなかった。

「ほら。ちゃんと挨拶をなさい」

夫が穏やかな口調で言う。しかし拓馬はぶっきらぼうな態度を崩さない。

「ごめんな。由美子」

ばつが悪そうに謝る夫に私は「いいの」と心から言って微笑んだ。「時間がかかるのはわかってる。それでもあなたたちと一緒に生きてくって決めたから」

それから数ヶ月。数年が瞬く間に過ぎた。

拓馬は私に全くといっていいほど話しかけることはなかった。出会った当初の頃のように無視されることさえなくなったものの、親子の距離にまで縮まったとはとても言いがたかった。

思えばずっと、私は拓馬に呼ばれた覚えが無い。「ママ」というただの一言でさえも、記憶から手繰りよせることができない。

拓馬が前の母親から虐待を受けていて、それが原因で他人と上手く関れないのは知っていた。だが辛い過去も時間が解決してくれるだろう。そんな私の考えは、あるいは根拠の無い期待は甘すぎた。私の思っている以上に拓馬の抱えるトラウマは深かったのだ。

夫は海外への出張が多い人だったから、拓馬と二人きりで過ごす時間は誰よりも多い。けれどそれでも駄目だった。たまに夫が帰り三人で過ごす時間が取れても、拓馬は夫としか目を合わせようとはしなかった。

寂しいとか辛いとか。そんなことを思った夜は星の数ほどある。けれどそれでも、私は夫がいたから頑張れた。最愛のひとの子だからこそ拓馬との距離を縮めるためにあらゆる努力を惜しまずにいられた。

しかしそんな夫も出張先の……ビル倒壊事故で呆気なく死んでしまった。

「いつも寂しい思いをさせてごめんな」

夫は出張に行く前、いつもそう言って私を抱きしめた。

「あと二年か三年、海外での取引を続けたら国内本社の勤務に戻れる。そうしたらきっと、由美子と拓馬とたくさんの時間を三人で過ごすよ。約束する」

「ううん。気にしないで」

私は本音九割、一割ほどは強がりのつもりで首を横に振った。しかし夫はそんな心持ちを見抜いたかのように「ごめん」ともう一度呟いて背中に戻す両腕に一層の力を込めてくれた。

「こんな俺を支えてくれてありがとう。拓馬ともよくやってくれてありがとう。」

じゃあ、行って来る」

そのやりとりが最後になることも知らず、私は微笑んで彼を見送った。

抱きしめられたときの体温すらもう残ってはいない。彼が残してくれたのはわずかばかりの遺品と、息子の拓馬だけだった。

夫の遺体を送還されるのにはまだ時間がかかるらしい。しかしいくつかの持ち物は所管の役人からこちらに届けられている。

その中には彼が最後まで身につけていた手帳が含まれていた。

スケジュールには予定がびっしり。なんとか社との契約とか納品とか、小難しいことが所狭しと書き込まれている。

メモの中にはときどき赤字のものがあつた。“拓馬の誕生日”“結婚記念日” 全てが、家族に関する内容だった。

ページを繰るたびに夫との思い出が甦る。途中で何度、手帳を閉じてしまいそうになったことが。けれど何とか目を背けずに夫が亡くなった前日のページにまで目を通した。

これで終わりか。そうは思いながらも、何気なく事故当日のページを開く。

そこにもメモが残されていた。いやメモというよりメッセージか。崩れた文字で、“由美子へ”と題したそのメッセージは、ビルの崩れ落ちる最後の最後、彼が手帳に残した想いのようだった。

“由美子へ

ごめん。いつもごめん。拓馬のこと、よろしく頼む。

それとありがとう。幸せだったよ”

蚯蚓の這うような走り書きのメッセージはとても短かった。

最後の最後。夫は自分の身じゃなくて、私たちの事を想ったらしい。押しつぶされる恐怖をかみ殺して、本当に死の間際にまで家族のことを想い、そして死んでいったのだ。

彼の喪失をリアルに感じたその瞬間、私はひとりぼっちになった気がした。

そんな表現が適切じゃないのはわかっている。私は息子の拓馬を守ってゆかなければならないのだ。その義務を忘れていいわけがな

い。

けれど今の私には拓馬の存在が逆に辛かったのだ。心を開いてくれない息子と二人きりの生活に私は耐えられるのか。息子も、トラウマの影を残したまま私と向き合ってくれるのだろうか。

考えれば考えるほど気持ちが重たくなって、私はひとり和室を抜け出た。涙が今にも溢れそうで、誰も居ない場所でひとりきりになりたかった。

葬式の会場となった夫の実家は広い。早足でさえも廊下は長く感じた。

突き当りを曲がる。すると廊下の脇に、拓馬がひとり佇んでいるのを見つけた。

「……どうしたの、拓馬」

聞いても返事は返ってこない。それはいつものことだった。拓馬は何も言わず、ただ私を見上げていた。

愛した人の面影が仄に残る息子の顔。見ていて長くは耐えられそうにない。しかし拓馬の前で弱さを見せたくはなかった。これから私は一人きりで、息子を守ってゆかなくちゃならない。

絶対に拓馬の前では泣けない。私は齒を食いしばって拓馬の脇をすり抜ける。

だが進めはしなかった。背後から引つ張られるような感覚。振り返ると、拓馬は私の喪服の裾を摘んで、一言だけこう呟いたのだ。

「ママ」

瞬間、涙が零れ落ちた。

沈む私を慮ったのか、あるいは心変わりがあったのか。拓馬の乏しい表情からその真意を汲み取ることはできない。

それでも私は救われた気がした。

裾と指先のわずかなつながりから、親子のぬくもりを確かに感じた気がしたのだ。

「拓馬っ……」

思わず小さな身体を引き寄せ抱きしめる。おそらくは初めての抱擁だ。

名前を呼んだその先の言葉は続かなかった。ただ涙を見せないという覚悟だけは貫こうと、息子の顔を胸に押し当てて泣きじゃくった。

拓馬は私に抱きしめられているその間、やはり何も話そうとはしなかった。

ただ私の勘違いでなければ、胸に熱いものが沁みたような、そんな感覚を味わっていた。

それから約半年後。私と拓馬は新たな季節を迎えていた。

桜並木の下をびかぴかのランドセルを背負った拓馬と二人で歩く。何もかもを新品の上物で揃えた拓馬はどこか上機嫌に見えた。

あれからすぐにわかったことだが、夫は驚くほどの財産を残していたのだ。

結婚資金と書かれた通帳には予想外の数字が刻まれていた。夫は海外でもほとんど全くといいほどの浪費をせず、貯蓄に励んでくれていたらしい。

『いつか、いい結婚式を挙げたいな』

私がいつもそう言っていたのに夫は『そうだね』と笑って頷いてくれていたっけ。

けれどごめんなさい。そのお金、拓馬の養育費に使わせてもらっちゃった。でもいいよね？

だって拓馬があんなにも幸せそうなんだもの。私は遠目に拓馬の瞳の輝くのを見つけた。

「ママ」

先ほどまでスキップでもせんばかりの拓馬が、学校の門まで来て突然、不安げに眉を寄せる。私は「はいはい」といって息子の手をとった。あたかも“しょうがないわね”といわんばかりの調子で。

本当は嬉しくて仕方が無いくせに。

そうして二人で始まりの一步を踏み出す。開式までもういくら
の時間もない。

行つて来るわね。あなた。

そう呟いて見上げた春の空は突き抜けるように澄んでいて、温かい日差しを惜しみなく注いでくれていた。

『愛しき人へ』（文学）（後書き）

文学『愛しき人へ』をお読みくださりありがとうございます。”
死者の遺したもの（特に手紙）”というテーマはすでに書きつくさ
れています。シナリオもよく言えば素直、悪く言えばありきたり。
なんとか私”らしい文章”で差別化を図ろうと試みましたが……い
かがでしたでしょう。

『消費生活』(SF)(前書き)

ジャンル「SF」 字数1900 2000

『消費生活』（SF）

あたたかな日差しの降り注ぐ週末の午後。私は居間のソファに腰掛けテレビを見ていた。

一昔前と比べれば200倍にもなる超解像に、42型でわずか500グラムという超軽量のハイビジョンテレビ。半年前に電気店で見かけ、一目ぼれをして購入に踏み切ってしまった代物だ。

値段はわずか二万を切っており、その安さに少々の不安はあった。だがテレビの映りになんら問題はなく、この半年間、我が家の優秀な暇つぶし家具として働いてくれていた。

「しかしもう買い替え時か。まあ安かったし仕方がないな」

ぼやけた映像に目を細めながらため息をつく。大量生産・大量消費のご時勢。半年もつてくれればいいほうか。そんなことを思いながら、銀縁の眼鏡を外して置いた。

しかしそこで違和感に気がつく。眼鏡を外しても視界のぼやけ具合が変わらないのだ。そういえば先ほどからテレビだけじゃなくその周辺の家具もぼやけて見えていたような気がする。

「故障したのは眼鏡のほうか」

私は電子眼鏡のつるの裏を覗き込む。ランプは青色に点灯していた。電池切れではないらしい。

ではやはり故障か……そんなことを思いながら新しい眼鏡を棚から取り出す。同じ種類の眼鏡だ。性能は良いが長持ちするものを作らないこの時代。備えをしておくのは当然の配慮だ。

いまや科学は目覚しく発達し、合成によって再現できる地球上の物質は有機物で7割、無機物で8割を越える。創成はもはや人間のお家芸として日々進歩を続けていた。”資源は大切にしましょう”などというフレーズはもはや過去のものとなり、その影響か、人間の生活を取り囲むあらゆるものが使い捨ての新品になりつつある。

私はコンタクトレンズを取り替える感覚で眼鏡をゴミ箱へと投げ

込んだ。そうして新しいものへと付け替える。

しかしそれでもぼやける視界はクリアな状態へと戻ってくれない。どういうことだ？ 一瞬、原因がわからなかった。しかしあらゆる要因を探り、ひとつの可能性に思い至る。

「もしかして、故障したのは私の眼球か？」

私はすぐに棚から予備の目玉を取り出した。ついでにゴム手袋を両手に装着。水溶液に満たされたケースから代えの目玉を摘み、私は装着済みの合成眼球を取り外して新しいものへと取り替える。

初めは視神経への馴染みが悪かったのか色合いが黒ずんでいたが、1分ほどしてもとの視界に、10分後には視力も6〜7程度にまで戻っていた。

「……やはり眼球の劣化だったか」

そうして私は再びテレビへと向かう。目が急によくなったせいかなんとなく音の聞こえの悪さが気になってきた。鼓膜の替え時も近いだろうか。そんなことを考える。

もはや代えの利かないものなどない。そういう時代なのだ。

どこか満たされたような……反面、そうでもないような思いをもちながらぼんやりと画面を眺める。

それから1時間ほど経っただろうか。妻が出かけ先から帰宅をした。

妻の腕には大きな紙袋が提げられている。それはいつものことだ。いまさらどうこう言うものでもない。しかし私は彼女の脇にいる、長身の男が気になって彼の顔をまじまじと見つめた。

とても精悍な顔つきで、きりつとした瞼が特徴的な色男。おまけに瞳はブルーだ。おそらくヨーロッパ系の人間だろう。

だが私にこんな知り合いはいない。客だろうか。私は荷物を玄関に下ろす妻に問いかける。「この方は？」すると妻はしれっとした表情のまま

「新しい夫よ。安かったから買っちゃった」

と答えた。まるで安売りの電子レンジでも買ったかのような感じ

で。

「あなたにも飽きてきちゃったしね。デパートでヨーロッパ人フェアがやってたから、気に入ったの選んできちゃった。

それでこれは彼の分の服とか」

ぱりっとしたスーツを一枚、目の前に掲げる。妻が私の購入記念日に贈ってくれた物よりずっと上物のスーツだった。

「あ、だからあなたはもういいのよ。

あなたの部屋は新しい彼に使ってもらうから、今日中には片付けて出て行つてね」

妻に言われた私は持ち物をバッグ一つに収め、家を出た。

私はついに“消費”されたのだ。リサイクルという言葉が死語となった今、私の活躍できる場所はもうどこにもない。

そうして自分の身をどこに廃棄しようかと、地図を眺めつつぼんやりと考えた。

いつからだろう。人さえも代えの利く存在になったのは。

試験管の中で何もかもが合成できるようになってから？

人の手でクローンの技術が研究されるようになってから？

科学というものが研究されるようになってから？

あるいは、もっと前から？

そんなことを延々と考える。本当はもうどうでもいいことはずなのに。

「それなのに、どうしてこんなに胸が熱いんだろうな」

久しぶりだった。こんな感覚は。

「まあそれも、現代^{いま}となつてはどうでもいいことだが」

呟いて、バッグを開く。中には青いラベルの小瓶ひとつのみ。私はそれを手に取り、適当な数の薬剤を喉の奥に流し込んだ。

『消費生活』(SF)(後書き)

SF『消費生活』をお読みくださりありがとうございます。我が家でもつとも長く使っているものはクーラー(10年)。出る空気が埃っぽいですが、謎の愛着をもっています。

『正直者と女神』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」	字数1000	1100
----------------	--------	------

『正直者と女神』(SS)

「あなたが落としたのは金の斧ですか。それともこの銀の斧ですか」
ある国のある湖にて。きこりが愛用の鉄斧を湖に落としてしまったところ、水から女神様が現れてこのように聞いた。

驚きに目をしばたかせるきこり。しかし正直者の彼は動揺しながらも、「私の落としたのは鉄の斧です」と偽りなく答えた。

「あなたはとても正直者ですね。素敵。

「ご褒美にこの金の斧と銀の斧もあげましょう」

女神様はきこりに二本の斧を渡し、湖の中に戻っていった。

それから数日後。二本の斧を受け取ってお金持ちになったきこりは“王国”から来た友人にこの間の出来事を話した。

「斧を湖に落としたら、水からすごく綺麗な女神様が出てきてさ。

この金の斧と銀の斧をくれたんだよ」

「そりゃあ聞き過ぎせないね」

話を聞いた王国の男性はいてもたってもいられなくなり、鉄の斧を持って噂の湖に向かった。

そうしておもむろに斧を湖に落とす。すると水から美しい女神様が出てきた。

「あなたが落としたのは金の斧ですか。銀の斧ですか」

「いや。僕が落としたのは鉄の斧さ」

王国の男性が正直に答える。すると女神様はテンプレどおり「あなたは正直者ですね」といつてにっこり微笑んだ。

「ご褒美に金の斧と銀の斧を差し上げましょう」

しかし王国の男性は首を横に振る。そうして女神の手を取り、彼女の瞳を見つめた。

「そんなものより、君が欲しい」

「え……えっ？」

突然のプロポーズに身を固くする女神様。しかし男性のほうはいたって大真面目だ。

「“すごく綺麗な”と聞いていたから期待してきたけど、想像以上だよ。本当に君は美しい。」

正直者へのご褒美なら、君からのキスが欲しいな」

「そ……そんな」

呟きながら顔を赤らめて身をよじらせる女神様。

「冗談は……やめてください」

しかし男性は女神様の耳元で「鉄の斧」と一言、囁いた。

「僕が正直者なのは、君も知っているだろう？」

必殺のセリフと共に男性の色目が炸裂する。女神様はもう茹で蛸も顔負けなくらい頬を染めて、

「お、お友達からお願いますっ！」

そう残して水の中へ戻っていった。水際に二本の斧を残して。

男性は斧を拾い上げて、軽いため息をつく。

「やれやれ。お堅い女神様だ。けど口説き甲斐があるよ。」

この斧はまた返しに来よう」

君に逢うために……ね。ウインクをして、男性は去っていった。

お金は口実。あるいはただの手段でしょ？

あなたが本当に欲しいのは、お金をきっかけにして得られるものの何かでしょ？

『正直者と女神』(ss)(後書き)

ショートショート『正直者と女神』をお読みくださりありがとうございます！
金によくばりな登場人物を愛に貪欲な人物に差し替えてみました。言い回しは完全に私の妄想です(笑)

『ファイルを巡って』？（ファンタジー）（前書き）

ジャンル「ファンタジー」 字数：未定

この物語は全5話構成、3000文字を大幅に超える内容となっております。

『ファイルを巡って』（ファンタジー）

“殺されるかもしれない”

人が本気でそう思うことって、一生に何度くらいあるのだろう。

「ゼロだ」そう答えられる人の多くはきっと平和な環境で平和な生き方をしてきた人。あるいは単に危険を認識していない人。まあ前者の想定が一般的だとは思われる。

平和な環境にあっても一度や二度、殺人の恐怖を身近に感じた人はいくかもしれない。不幸な偶然や過ちによってそんな経験に見舞われることも有り得ない話ではない。

では百回。あるいはそれ以上ならどうか。

平和な環境にあつて、その人自身が罪を犯しているわけでもないにもかかわらず命の危険に見舞われる数が三桁に及ぶことって有り得ると思う？

多くの人がどう考えるかは知らない。だが少なくともここに、“やたら命を狙われる一般人”がひとりいる。

彼女は物心のついた頃から命を狙われていた。

遊園地の着ぐるみに手榴弾を手渡されたのが最初。レストランに入れば毒を盛られ、広場に出ればどこからともなく刃物が飛んだ。

まさしく死と隣り合わせの生活といって差し支えはないだろう。

そしてそれは十七歳を迎える現在にまで至る。

いちばん新しい事例はつい昨日の出来事だ。

彼女が買物かごを片手に町を歩いていると、突然、弾丸が彼女の額めがけて飛んできた。

ボールペンのような形状の鉛が、空を裂く音をも置き去りにする速度のままコンクリートの地面に突き刺さった。

アスファルトの欠片が膝の高さにまで飛び跳ね、空中で爆ぜる。

「間一髪」

覆いかぶさるような体制で地面へ転げた男性が彼女の耳元で呟いた。

「怪我はありませんか？ かえでお嬢」

男性の腕の中。顔面蒼白、全身から血の気も失せたかえでは声を出すこともできずに息を飲んだ。

「身体のほうは……大丈夫そうですね」

ほっとした笑みを浮かべ、男性はかえでの背中に回す腕の力を緩めた。

と、その瞬間。先ほどと同じ形状の弾丸が男性の背中を捉える。しかしその弾は彼の背中に触れる寸前三メートルのところで逸らされた。厚さ八ミリの鋼鉄に描かれたジャスミンの花びらが衝撃によりわずかに欠けた。

「油断をするなルーク。一撃じゃない」

ルークの前に、彼と同じくかえでの護衛を務める女性が立つ。右手に広げられた薄緑の鉄扇はまるで重さを感じさせないほど軽やかに舞っていた。

「サンキュ、依鈴^{イリン}」

命拾いしたよ」

「礼は後だ。早くかえでを死角に」

「オーケイ」

震えるかえでを拾うように持ち上げて建物の陰にルークが走る。

彼の背後でまた、金属を弾くような音がした。

「お嬢はここで待っててな。すぐ片付けてきますから」

穏やかな笑みを残してルークが再び陰から飛び出す。このときになつてようやくライフル弾の着弾を認識した人々は騒ぎ喚き、蟻の子を散らすようにしてその場を離れる。

人通りはまばらであつたため将棋倒しの被害は起きそうになかつた。依鈴は気を緩めることはなくとも、内心でほっと息をついた。

「ライフル攻撃とはまたえげつない真似をしてくるね」

コンクリートをも穿つ魔弾を鉄扇一つで凌いでいた依鈴の脇にル

ークが駆け寄る。

「恨み言を言っている場合ではない。かえでは無事か」

「もちろん」

「ならさつさと始末してこい」

会話とともに右手の鉄扇が動き、頬をかすめるすれすれの地点へ弾丸を逸らした。

「場所は？」

「正面へ八百メートル。送電線の拠点となる鉄塔が見えるだろう。あそこの中間付近だ」

「了解」

言うや否や標的の潜む方向へ駆ける。途中、ルークの急所を捉えた弾丸は確実に何発か発射されていた。しかしそのほとんどが彼の動体視力と反射神経の賜物によって回避される。

初撃の間合いはおよそ八百メートルだ。その距離からかえでの位置を正確に捉えた狙撃手が、距離を詰める人間の脳天を打ち抜くことなどわけではない。

それでも殺せないのだ。達人の域と呼べる腕前と高性能のライフルをもつてしても、超人的な身体能力を持つ接近者の反射にすら及ばなかった。

ルークが敵を視認して二分かそこらの時間が経った頃だろうか。子どもの身長ほどもあるアサルトライフルを抱えた男が鉄塔から落下していた。

その姿を確認し、依鈴の鉄扇がようやく畳まれる。

「もう平気だ」

「……」

警戒宣言が解かれてなおも一般人、かえでは震えていた。彼女に抱えられる買物袋から、小さな林檎がことんと軽い音を立てて地面へ転がった。

遠回りに遠回りを重ねて三人は森のウッドハウスへと戻った。

この家が現在の彼らの拠点だった。かえではここを“隠れ家”と呼び依鈴は“アジト”と呼んでいる。ちなみにルークの呼び方は“マイホーム”だ。

かえでは戻るとすぐに自室へと籠り、護衛の二人は各々の仕事にとりかかった。依鈴は夕食の支度を始め、ルークはピンセットと針をガーゼの上に並べている。

「撃たれたのか」

黒いワイシャツの上からエプロンを羽織り、包丁を動かしつつ依鈴が尋ねた。「かすり傷さ」ルークは慣れた手つきでピンセットを操り、糸を縫ってゆく。初めこそガーゼがじんわりと紅く染まっていたが、瞬く間に出血は止まり傷口が塞がれた。

「さすがに標的から三十メートル地点まで寄ったときの弾丸はかわしきれなかったよ。まあ接近戦に持ち込んでからは楽勝だったけど」
「いてて、と言いながらも誇らしげに武勇伝を語るルーク。」

「敵の目的と正体は。ちゃんと聞きだしたのか」

「ああ。そういえば」

うつかりしていたよ。そういわんばかりの様子で、ルークが自分の頭を小突いた。依鈴はそんな彼の失策に呆れるような視線を送った。

「ダメージもらった怒りもあつてすぐ倒しちゃったからね。」

でもまあ、どうせいつものでしょ」

「根拠は」

「お嬢が狙われる理由なんて、ファイルのことくらいしかないからさ」

ざつくばらんに結論が付けられる。

「甲斐谷ファイル。あんなものに絡んでなけりや、誰もお嬢の命なんかほしがりやしないよ」

“甲斐谷ファイル”その名前が出た瞬間、依鈴の目が見開かれたのをルークは確かに見た。

「君がお嬢の護衛をする理由も、敵がお嬢を狙う理由も同じさ。依

鈴。

もつともファイルを抹消してしまおうとする彼らより、お嬢を守ることとファイルの手がかりを得ようとする君のほうが何倍も賢いだろうけれど」

「もういい」

ルークにそのつもりがあるのかどうかはわからないが、言葉に棘を感じた依鈴は端的に会話を断ち切った。

そうしていつのまにか煮込まれていた鍋の中身を器によそい、プレートにのせる。プレートの端には一口大にカットされた林檎がのっていた。

「手当てが済んだのならかえでにこれを持って行け。

私は次のアジトを捜しておく。ここもそう長くはいられそうになりからな」

エプロンのヒモを解くと、それだけ残して依鈴は別室へと向かった。ルークは頬を掻きながら彼女の背中を見送ると、小さく鼻息をついて夕食のプレートを手にかえでの寝室へと向かった。

「入りますね」

夕食を持ったルークが形だけのノックをしてノブを捻る。かえではベッドに半身をうずめて窓の外を見ていた。

防弾ガラスの向こう側に広がる木々の群れ。その先にはつい数時間前、戦闘の繰り広げられた大通りがある。

「夕食をお持ちしましたよ。かえでお嬢」

声かけによつてかえでがようやく訪問者のほうを向いた。

「その傷……」

かえでは夕食よりも何よりも先にルークの腕へ視線を向ける。不自然に厚みのあるガーゼの存在が何を意味したのか、彼女にもはっきりとわかった。

「ごめんなさい。わたしの……せいで」

「お嬢のせいじゃないです」おどけるような笑いとともにルークは

答えた。

「僕がへまをしたせいさ。興奮していたとはいえライフル持った相手に直線で距離をつめるなんて我ながらクレイジーな真似をしたと思いますよ。」

まったく牛じゃああるまいし」

自分自身に呆れたかの様子でルークは肩を竦めた。かえでは彼の冗談にも、沈んだ表情は変わらない。

「あまり気に病んだら駄目ですよ。」

今日のことものことも、お嬢自身のせいじゃないんですから」

「でも」小さな手が毛布を固く握る。

「わたしがファイルの情報なんて記憶しているから、こんな目に」
「ファイルねえ……」

先ほど依鈴と話題に上げたファイルのことを思い浮かべる。

“ 甲斐谷ファイル ”

それはかえでの育ての親である甲斐谷創がまとめたファイルのことだ。

甲斐谷は自称ジャーナリスト。世間的には情報専門の盗賊として名を知られている。彼の残したファイルには世界中のあらゆる機密が記されているというのだ。

「こんなことお嬢の前で言うのもなんだけれど」

ルークが夕食にスプーンを添えてかえでに手渡す。

「ファイルの一部を記憶しているというだけで命を狙われなきゃならないような機密があるんですか。」

ファイルの詳細を知る人間がいるわけでもなし。どうも話が大きな気もするんですがね」

「 詳しいことはお父さんに口止めされてるから言えないけれど奥底にしまいこんだ記憶を探り出すかのようにかえでの瞳が閉じられる。」

「ビルが倒壊したあの事件の真相とか、あの国の麻薬製造工場の場合

所とか。

わたしが覚えてるだけでそんな情報が二十くらいはある」

「マジですか」

「他にまだ発見されてないとされる遺跡のありかのことかも」

ただ漫然とファイルのことを貴重品とだけ捉えていたルークは内心で舌を巻いた。そして同時にかえでが命を狙われる理由を改めて実感する。

そりゃあ未解決事件の真相や政治の絡む犯罪を把握されていくなれば、それを不都合に思う人間に狙われもするだろう。かえでは情報を盗んだ実行犯ではないが、それを知るだけで暗殺の対象となりうる理由としては充分だ。

「お嬢を消そうとする奴は都合の悪い情報を甲斐谷氏に盗まれた奴たまに誘拐しようとしてくる奴は、それを得ることでなんらかの得をする奴ってことか」

かえでが頷く。彼女の手に渡された粥から白い湯気がゆらゆらと立ち上った。

「とにかくファイルには秘密という秘密が無節操に閉じられているの。わたしが全部のファイルを見たわけじゃないけれど、子どもながらに、大変なものを知ってしまったと思った」

「そんな情報を娘に知らせるなよ……」

顔も見たことのないかえでの父親に呆れるルーク。

甲斐谷はその仕事柄、自身が命を狙われる経験は往々にしてあっただろう。ならば一部とはいえファイルを託された娘が同じように狙われることもわかって然るべきだ。

「でも」かえでが呟く。

「でもお父さんの手がかりはこのファイルの記憶しかないから」

伏せられていたかえでの瞳が、このとき少しだけ大きく開いた。

「強いですね」ベッド脇の椅子を引き寄せ、ルークが腰を下ろす。

ファイルを持つことによって命を狙われるリスクは彼女も理解していた。そんなファイルを託されたせいで自分が命を狙われている

ことももちろん理解をしている。

それでも父親に対する恨み言をかえでは言わなかった。行方も知れない父親に会おうという志を悔いたりしていなかった。

かえでと甲斐谷がどのような親子だったのか。その間にどんな絆があつたのかルークは知る由もなかったが、親子の間に確かな心の疎通があつたこと。それだけは何となく理解をすることができた。「ただ……ルークと依鈴さんには本当に申し訳なくて」

「僕？」ルークが自分を指す。

「お父さんに会いたいのには単なるわがまま。けどそのために二人が怪我をしたり……もし死んだりしちゃったらわたし……！」

かえでの目元に溜まった雫がうつすらと光る。ルークはそれを見て、昏間に負った傷とは別の場所が痛んだような感じを覚えた。

「気にしないでください。僕も依鈴も、好きでやってることで」

ルークの声は平静と変わらなかった。精一杯、心を律した成果といえる。

「僕はファイルがらみの依頼でお嬢の護衛をしています、半分はお嬢のことを好いてやっているつもりです。依鈴もお嬢に何かあれば、彼女の狙う情報の手がかりを失います。」

僕らは嫌々、護衛の真似事をしているわけじゃあないんですよ。

決して」

「それでも、ときどき忘れてしまいたいって思う」

視線は布団に落としたままだった。しかしかえでの声ははつきりとしたものだった。

「わたしがファイルのことなんか記憶してなかったらって」

呟きとともに会話が途切れた。森に囲まれた室内がしんと静まり返る。

かえでは人間として当然の弱さを晒した。しかし弱さを晒せることが、逆にルークには凄いことのように思えた。

ファイルを持っていないかえではただの一般人。何百回も命を狙

われていれば、心が壊れてしまってもおかしくはない。

しかしそれでもかえでは人のことを想う優しさを忘れず、生きる事に絶望せず、ここにいます。

仕事絡みの関係とはいえ、この人間のために自分は最善の護衛をし続けよう。ルークは改めてそう心に決めた。

「今日は早くお休みになったほうがよさそうですね」
ルークが椅子を引いて立ち上がる。

「また何か困ったことがあれば呼んでください。
それじゃ、おやすみ」

言葉と共に扉が閉められる。

冷めかけた粥を持ったまま、かえでは再び外を見た。いつのまにか木々の間から差し込む光が月の光に変わっていることに気がついた。

『ファイルを巡って』（ファンタジー）

「新しいアジトのことだが」

鏡のように光るナイフでフレンチトーストを切り分けながら、依^イ鈴^{リン}が言った。

「ここから160kmくらいのところにいい島を見つけた。もちろん無人島だ。地図にも載っていないからおおよそ誰にも見つからない。地図に載っていない島をいかにして見つけたのだろう？」

当然の疑問をルークは抱いたが、どうせ聞いても教えてくれないだろうから尋ねることはしなかった。黙って話を聞きつつ、スクラブルエッグと共にベーコンを口に運ぶ。

「もう少し調査がいるだろうが……まあ四・五日中には手はずが整うだろう。そのつもりでいてくれ」

「わかった。お嬢にもそう伝える」

「そういえば」依鈴がフォークを皿に置いた。「かえでは？」

いつもは三人の食卓が今日はふたりきり。ひとりこの席についていなかった。そのことが今になって尋ねられる。

「食欲がないらしい。三日前の襲撃からろくに眠れてもいないみたいだ」

「命の狙われるのはいつものことだろう。それなのに何故だ」

「さあ」

ルークの立てる食器の音に混じって常人離れた会話が淡々となされる。二人はそれぞれ同じ事を考えていた。

ライフルの弾がかえでの身をかすめたのは初めてのことじゃない。それどころかもっと危険な目に遭ったことさえある。

しかし二人の主観ではどうもかえでがいつもよりひどく塞ぎこんでいるように思えたのだ。

「聞いてはみたけど『なんでもない』としか言ってくれなかったよ。単純に体調を悪くしているのかもしれない」

「薬を使うか？ 眠れなければ良くはないだろう」

「いや。お嬢に不眠の薬は効かないらしい」

そう断言してルークが音もなくスープをすする。

かえではまだ命を狙われ慣れていなかった頃に何度もストレスからくる不眠症に陥った。その積み重ねで最近はストレス処理が自分なりにできているらしいものの、薬を使いすぎて耐性ができたせいか睡眠薬はまるで効かない身体となったのだという。

「けど一応、医者には連れて行くよ」

「薬は効かないんじゃないのか」

「もつと胡散臭いものに頼る」

それは何だ。そう問う間もなく、ルークはその手段を明かした。

「催眠術」さ。

お嬢のファイルにそういう情報があるらしい」

今朝の出来事だ。

依鈴がリビングに顔を見せる前、朝食を作るルークのもとにかえでは姿を見せた。

目には大きくまができており、肌の血色は薄くなっている。もちろん言葉にはしないがひどい顔だとルークは思った。

「ご気分はいかがですか」いいわけがないとわかっていながら、ルークが尋ねる。

「大丈夫。心配かけてごめんね」

とても大丈夫そうにはみえない顔で無理やりに笑みを作るかえで。「流石に無理がありますよ」ルークはスープを混ぜる手を止めた。

「ずっと眠れてなさそうじゃないですか。医者に行ったほうが……」無駄だとは知っている。しかし気休めにでもなればと、ルークはそんな提案をした。

かえではすぐに答えを返さなかった。ルークもそんな彼女の様子を黙って見守る。

「催眠」

しばらくしてかえでが小さな唇を開いた。

「催眠術を使える医者がいるらしいの」

あまり耳にすることのない単語を拾って、三角巾の上から頭を搔くルーク。

普通なら催眠術などという非科学的なものに頼るのはどうかと思うところだろう。しかし提案しているのが、あの甲斐谷創の娘であるかえでなのだ。

世間的に知られていない情報でも彼女なら把握していてもおかしくはない。だから余計な口を挟まずに「場所は？」と聞いた。

かえでの口からその場所の説明がなされる。乗り物を調達すればさほど時間のかかる場所ではなかった。

「わかりました。けど一応、依鈴とも相談してから決めましょう」「お願い」かえではそれだけ残すと寝室へと戻っていった。

公共の交通機関は使えない。安全な車を依鈴に用意してもらわないと。

……早くて昼過ぎからの出発になるかな。

ルークは今日の動きを反芻しながらお玉をかきまぜる。とろみの出たコーンスープがふつふつと煮立ち、甘い香りを放っていた。

「まあそういうわけで」

ルークの説明を一通り受けた依鈴は、すぐさま乗り物の手配に動いた。彼女の手際のお陰だろう。予想に反し、昼前にはルークの運転で目的の場所へ向かうことができた。

その間、依鈴はログハウスに残って新しいアジトの手配を続ける。よって今日の護衛はルーク一人だ。

かえではそんなこともなかったが、ルークは普段より若干の緊張感を持って回りに気を配っていた。敵に攻め入る能力はともかく、専守防衛の性能となると依鈴に及ぶべくもない。彼はそのことを自覚していたためだ。

それでも心配は杞憂に終わり、平和なドライブを経て目的地へと

たどり着くことができた。

五煌山とよばれる山を少し登ったところにその診療所はある。麓の駐車場に車を止めると、二人はエスカレーターに乗った。

ほどなくしてたどり着いた診療所は、どう見ても普通の診療所だった。近代的な外装で、とても催眠術などを連想させるようなつくりをしてはいない。唯一変わっているところといっても、大きな屋敷が併設されているくらいのもの。まあ診療所と自宅をつなげるだけと考えればさほど不思議な点でもない。

「俺はここで待ってます。必要になったら呼んでください」

診療所にいる人間の中に敵意を持つ者の存在を感じなかったルークは診察をかえで一人に任せた。催眠の術式というものに興味はあったが、プライベートに立ち入らないことを優先させたらしい。

「ありがとう」

かえではそう言って診察室へ入っていった。

それから四十分くらいの時間が過ぎただろうか。 “外見は” すっきりとした表情のかえでが待合室へと戻ってきた。

「どうでしたか」

彼の問いにかえでは「平気」と短く答えた。だがそれ以上のことを何も話そうとしない。

何か含みがあるな。そんなことをルークは感じた。

「てつきりもつと時間がかかるものだと思ってました」

気を利かせてかカマをかけるつもりでか……まあおそらくは前者の拠るところが大きいだろう。ルークがかえでに話しかける。

「不眠を治すってことでしたから。その場で眠ってくるのかなって」

それとも今日は問診だけだったのだろうか。もし時間のかかる治療なのだとすると、依鈴にも話しておかないといけない。さすがに込み入ったことは聞けないものの、かえでの安全を守る上で影響しそうなことだけは確認しておこうとルークは考えた。

「しばらく通わなくちゃいけないようなら、アジトの場所も配慮をしますが」

「うん」

かえでの返事は明らかに歯切れが悪かった。瞳は伏しがちで視線は彷徨っている。

しかし彼女は声だけは毅然とした調子をもたせて

「戻ったらちゃんと話すから。ルークにも、依鈴さんにも」

と、このように言った。まるで何かを決意しているかのように。

「わかりました」

聞きたいことは山ほどあったが、ルークは聞かなかった。いや、聞けなかったのだろうか。

四時間かかった二人きりの帰り道は最後まで無言だった。

エンジンの振動に揺さぶられる飲みかけの缶コーヒーが、静寂を埋めるBGMの代わりにかたかたと軽い音を立てていた。

ログハウスに到着したときには日が沈んでいた。

夕食の済んだ午後八時三十分。かえでの召集により三人がリビングのソファへ腰を下ろす。

「大事な話があるの。」

わたしにとっても。それにたぶん、あなたたちにとっても」

かえではそのような言葉で口火をきった。

深刻な話だろうか。雰囲気を感じ取ったルークが手にしていたグレイプ・ジュース入りのグラスを置く。依鈴は微動だにせず腕を組んでいた。

「それで話をするのだけれど……その前にひとつ二人に確認をさせて」

かえでの瞳が交互に護衛の二人を見やる。

「あなたたちがわたしを護ってくれる理由は何？」

まさしく藪から棒、そう呼ぶに相応しい質問だった。意図をはかりかねた二人はお互いの視線だけを見合わせる。

「昨日も言ったと思いますが」

真意が見えないままではあったが、ルークが先に言葉を発した。

「半分はお嬢を護ることで依頼人からの報酬を受けるため。それで半分はお嬢に惚れこんでいるからです」

今までかえでにしてきた説明をそのまま口にする。

信頼をされていないのだろうか。ルークは心の片隅でそう疑った。彼は契約の都合で、かえでに依頼人の名を明かしてはいない。

それがかえでの不安につながっているのだろうか。そんなことを気にする。

しかしかえでは穏やかな目をして「わかった」と言い、依鈴の方へと首を向けた。ルークの主観ではあるが、自分が疑われている様子ではなかった。

「依鈴さんは」

「ファイルの為」

手元にきた球をそのまま弾き返すかのように依鈴が話す。

「かえで。あなたの父親が作り上げた“甲斐谷ファイル”には私の望むあらゆる情報が記載されていると聞く。

私があなたを護るのは、それを手に入れるためだ。あなたが持つ記憶が、情報が、甲斐谷創へとたどり着く唯一の手がかりであるからだ。それ以上の理由はない」

ドライな言葉が突きつけられる。しかしかえでは「そう」と平静とかわらぬ調子で息をついた。ルークはそんな様子を黙って見ていた。

「そうよね。全部、ファイルのことよね」

そう言っただけでが一冊のファイルを二人の前に提示する。古ぼけた革の表紙に、変色した紙の色が年季を現していた。

「これは？」

まさかとは思いながらルークが問いかける。「一部だけれど」小さく頷きながらかえでは言った。

「わたしの預かっているファイル。ずっと手放さないようにってお父さんから預かったもの。」

たくさんあるうちの一冊でしかないけれど、これは正真正銘の“

甲斐谷ファイル”だよ」

告白と共に空気が、そして依鈴の目の色が変わった。

かえでがファイルの内容を記憶していることは護衛の二人も知っていた。しかし一部とはいえファイルの現物が所有さえているなどと夢にも思わなかったのだ。驚きを隠しきれないはずがない。

やばいか？ ルークは依鈴の挙動に注意を向けた。かえでがファイルをもつことは公言されていたものの、ずっと在り処の明かされてこなかったファイルだ。護衛の二人も現物を見るのは初めてのことである。

これを狙って星の数とも呼べる人間が血を流した。そして依鈴もその一人なのだ。興奮を覚えないはずなどない。

もしも。これは本当に万が一のことではあるが、依鈴がここで“無茶な行動”に出るようなら自分が抑えなければならぬ。

ルークは数年にわたる護衛生活で最も手強い相手と一戦を交える覚悟を心の中で固めた。そうして緊張感を維持しながら二人のやり取りを見守る。

「依鈴さん」

少しの間を置いてかえでが依鈴へファイルを差し出す。依鈴は手を出しはしなかったものの、ファイルに視線を釘付けた。

「これをあなたに」

「何？」 依鈴とルークの言葉が重なる。

「どういうことだ」

依鈴の問いかけに目を伏せるかえで。

「もいいの」

そうして彼女は自身が二人に確認をしたことと、行動の真意を彼らに伝えた。

「もう疲れた。昨日のことで、本当にそう思ったの。」

こんなものがあるせいで、わたしはずっと命を狙われてきた。ファイルさえなかったらわたしは悪い夢にうなされることもなく普通の女の子の生活が送れたはずなのにつて。

お父さんとの約束は破っちゃうことになるけど、このファイルは欲しがっている人にあげたい。依鈴さんにはお世話になったし、きっとこのファイルを悪いようにはしないと信じられるから。

だからこれはあなたに託そう。……そう決めたの」

重量を持ったファイルが依鈴の目の前数十センチの場所に置かれる。

「これさえ手放せばもうわたしが命を狙われることもない。

依鈴さんとルークももう、わたしのことを護らなくて済むの……よね」

そう言うかえでは微笑んでいた。

「遠慮をしないで。もうお終いにしたいの」

ファイルを見つめたままの依鈴に勧める。だが依鈴はどこか興奮を抑えきれない様子ながらも、「そんな簡単な話ではない」と言って首を横に振った。

「ファイルは何冊もある。かえでの持つこのファイルに私の望む全てのことが不足なく記されているとは到底、思えない。

結局のところは甲斐谷創に会い、ファイルの全貌を知らなくては意味がない。もちろん手がかりにはなるだろう。けれど私が重視しているのはかえでの持つ情報のほうだ。かえでがいなければ甲斐谷創の顔もわからないのだからな。

だからファイルを託されることはひとつのきっかけにはなるにしろ、何もお終いにはならない」

きわめて冷静な意見が依鈴からなされる。しかしかえでもそんな反論を考慮していたかのように即答を返した。

「わたしの持つ情報はもう何もないの。

重要な情報はもう全部……消してしまったから」

「消した？」

言葉の意味がわからず護衛の二人が首を傾げた。

「どういう意味だ」

「言葉の通り」ファイルに落としていた視線が依鈴へと向けられる。

そうして顔を上げるとともに、かえでの口からこの場の誰もにとって衝撃となる告白がなされた。

「ファイルに関する記憶も、お父さん……甲斐谷創に関する記憶も、全部消してしまったの。」

わたしが覚えているのはもう、わたしが甲斐谷創の娘であることだけ。今はもうずっと手元にあったこのファイルの中身も覚えてはいないのよ。

そういう催眠をかけてもらったから」

端的だけれどすべてを語る告白。

言葉の意味はわかれど理解が追いつかずに固まる二人へ、かえでが真相の言葉を紡ぐ。

「不眠で苦しんだのは本当。けれど催眠術でそれを治してもらったと言ったのは、嘘なの。」

わたしは最初から記憶を消してもらったつもりで、催眠術師のもとへ連れて行ってもらったようルークに頼んだ。

何もかも忘れてしまえばもう何もかも背負うこともなくなる。それがいちばん良いことなんだと思って」

催眠術。その言葉を受けてルークが、少し遅れて依鈴がようやくかえでのとった行動と、その意味を飲み込んだ。

三日前に敵の襲撃を受けたかえでではなんらかの理由で思いつめ、命を狙われる元凶となったファイルの記憶を消したいと願った。

そこで彼女はファイルに載っていた“記憶を消すことのできる催眠”の存在を頼り、不眠を治療するという名目で術師のもとを尋ねたのだ。

「何を馬鹿な……っ」

依鈴が視線を泳がせる。唇は固く結ばれ、色が薄くなっていた。

それは取り返しがつくことなのかそうでないのか。……普段の依鈴ならそのような確認を取っていることだろう。しかしそれすらできず彼女はかえでを責めた。

取り乱している、という言葉じゃ片付けられない動揺が胸の内に

渦巻いているのだろう。依鈴がいかにファイルに固執してきたかよく知っているつもり。のルークは、彼女を諫めることも、口を挟むことすらもできなかった。

しかしかといってかえでを責めることもできない。

これまで守ってもらったことに対する不義理があるとはいえ、命を守るための行動という大義名分あるのでは咎められようもなかった。

それに彼女も唯一の身内と呼べる人間と過ごした記憶を失ったのだ。その決断に抵抗がなかったはずはない。苦しみがなかったはずはない。

自分を含めた誰もが傷つく道であっても、それが最善であることを想ってかえででは記憶を消したのだ。

自分が一番辛いはずなのに、世話になった人間への気遣いを優先してこんな話をしている。今まで命を張って守り続けたファイルをも渡そうとしている。そんなかえでをルークが責められようはずもなかったのだ。

「お嬢……」

やっとの思いでルークが声を絞り出す。「ごめんなさい」彼の言葉に対してかえでが返した……そのときだ。

ルークは窓の外。つまりはかえでの背後に奇妙なモノを見た。

硝子から漏れる部屋の明かりを受けてきらりと光る金属製の何か、黒い木々の合間にぼんやりと浮かんでいたのだ。

いや、浮かんでいるというよりも、浮いている。

プロペラを内蔵した円盤のようなフォルムに、こちらに向けて備え付けられた三本の細い筒が特徴的な機械だった。

遠目に見ただけのルークにそれが何なのかはわかるはずがない。だが筒の脇に備え付けられたレーザーポインタ。そしてそこから発行している光線がかえでの首筋に照準を合わせているのを見つけ、瞬時に彼は理解した。

その何かが明らかな殺意を持ってこちらに狙いを定めている事を。

「伏せろっ！」

ルークの叫びがかえどと依鈴の耳へ届く。その直後、外で無数の爆竹を破裂させるかのような轟音が鳴り響き、窓に張られた強化ガラスは粉々に碎け散った。

貫通した弾の何発かがテーブルや陶器などに当たって部屋の内を跳ねまわる。そのうちの一発はルークの用意していたドリンクを捉え、炭酸の入らないグレイプ・ジュースがシャンパンのように飛び散った。

およそ十五秒にわたる射撃の音が止んだときには何もかもが穴だらけになっていた。電灯は跡形もなくなり、三人の腰掛けていたソファは傷だらけという表現ではとても足りないほどひどく引き裂かれている。

窓枠の外に浮く円盤の筒からは細い硝煙が立ち上っていた。木々の隙間から差し込む月光に照らされた白い揺らめきは、火薬の臭いに混じって、新緑の中へと消えていった。

『ファイルを巡って』？（ファンタジー）

目が眩むくらい鮮やかな赤の飛沫がかえでの頬を染めた。

「大丈夫ですか。かえでお嬢」

かえでの身体を抱えて地面に伏すルークが穏やかに微笑む。

「あ……あ」

問いかけられたかえでの口から出たのは言葉になっていない声だった。抉れた肉の裂け目と、そこから流れる血が彼女の目を釘付けにする。

“ 伏せろっ！”

そう叫んだ瞬間、ルークは机を蹴り上げるとともに、かえでの身体をかばっていた。外から発射された弾丸の何発かは机に弾かれて逸れた。だが跳弾となつて不規則に跳ねた弾の軌道までもは塞ぎきれず、やむを得ず自身の身体を盾にしたのだ。

「かえでは無事か？」

ソファの影から依鈴の問いが投げかけられる。

もう一人の護衛である依鈴はルークに比べると反応こそ遅れたものの、跳弾の何発かを鉄扇で弾き落とし、無傷でこの場を凌いでいた。彼女がいなければルークの負担はもう少し大きくなっていたかもしれない。

「大丈夫だ」ルークはかえでの現状だけを正確に伝えた。「依鈴。

君は？」

「問題ない」

本当かよ。ルークは傷口を押さえながら彼女の言葉を疑った。

昨日の襲撃者が用いた単発の銃撃ならともかく、さきほど発射された機関銃のような弾幕を鉄扇で凌いだというのか？

あいつもう人間じゃねーな。そんな事を思いながら次の指示を待つ。

おそらく次の手は外に出ての応戦だろうとルークは考えた。

このまま弾丸のみの襲撃ならともかく、爆弾とか火炎放射とかの武器が用いられたら室内での処理はかなり難しい。

一刻も早く外に出ることが最善のはずだった。だが依鈴から発せられた言葉は

「かえで。あなたは馬鹿だ」

という端的な苦言だった。

「いまさらファイルや記憶を手放そうがあなたが命を狙われることには変わらない。だって敵はあなたが本当にファイルや記憶を失っているのなんて確かめようがないのだから」

依鈴の言うことは至極もつともな指摘だった。

たとえばかえでがファイルを手放し殺す価値のない人間になったとしても、それを信じる余地のない敵にとってかえででは相変わらざる要注意人物だ。なら真偽を調査するよりとりあえず殺しておいたほうが手っ取り早い。

だからかえでが自分の命を守るためにした行為と見れば、ファイルを託したのも記憶を消したのも全て無意味だったといえるのだ。

「命の危険に晒され動揺をしていたとはいえあまりに浅い判断だった。」

あなたらしくもない」

強い口調で責めの文句が飛ばされる。だがそういう依鈴のほうにも冷静とはいえない声色が含まれていた。

まあそれはそうだろう。かえでが記憶を消したという衝撃の告白がなされ、気持ちの整理もつけられないままに窓から機関銃を撃ち込まれたのだ。即座に気持ちを切り替えられるはずはない。

だからルークにも依鈴の気持ちはわかった。それでこれまで依鈴がかえでを責めるのも黙って聞いていた。

しかし“あなたらしくもない”という言葉が出た時、彼は反射的に

「それは違うと思うね」

そう反論をしていた。

「僕はむしろお嬢らしいと思ったよ」

言いながら衣服を破いて二の腕を縛り付ける。上腕からの流血がそれでいくらか緩んだ。

「本当に命を狙われるのが嫌でファイルを手放そうとしたならとくにやってるでしょ。記憶を消したところで自分が狙われるのはお嬢にだってわかってる。

それでもあんな手段に出たのは……」

ルークの手がそつと包帯に当てられる。三日前に彼が銃弾を受けて治療をした箇所だ。

「自分の命が惜しくなったからじゃない。自分の周りにいる人間が傷つくことを怖れたからだ。

違いますか」

言葉と共に少女を抱える腕に力が込められる。

かえではルークの胸に顔をうずめた。嗚咽のような声が漏れていた。

「もう嫌なの」

肩を震わせ、瞳を固く閉じながらかえでが話す。

「わたしのために誰かが死んじゃうのはもう嫌なの。嫌なのっ！」
壊れた水道管のようにとめどなく思いが吐露される。

“殺されるかもしれない”

これまで生きてきた十七年のうちにかえでがそう思ったのは何度くらいあるだろう。

五十回？ 百回？ あるいはもっと？

彼女は自分の死なら数え切れないくらい覚悟をしてきた。それでも自分のために周りの人間が死ぬことだけは、どうしても、受け入れることができなかった。

仲間が怪我をするたびに浮かぶ死の残像。いくら目を逸らしても夢に出た。

そうして眠れなくなる。だが瞼を閉じればそこに焼きついているかのように負の想像が瞳に映る。

それは考えすぎでもなんでもなくて、明日にでも起こりうる事態

なのだ。事実としてかえでは護衛の死を目の当たりにした経験もある。

事あることに思い起こされるトラウマ。それがついに彼女の心に悲鳴を上げさせたのだった。

「う……うっ……！」

嗚咽と共に涙が頬を伝い落ちる。雫は飛び散ったルークの血液に溶けて混じった。

「ともかく」

かえでの頭を撫でながらルークが頭を上げる。そうして周りを一瞥し、現状を確認した。

依鈴はかえでの告白に混乱した状態でかえでは見ての通り。まともに思考を働かせられそうなのは彼ひとりだった。

自分を除く二人の心境は察して余りあるが、襲撃の危険はまだ去っていない。呆けていたら三人とも蜂の巣だ。

敵はこの間にも追撃を仕掛ける機を窺っていることだろう。だとすれば一秒すらも惜しい。

「僕が警戒をしながらお嬢を外に連れ出します。

依鈴。君は僕らが上手く茂みに入るのを確認できたら裏口から後を追ってくれ」

わずかの間を置いて「了解」との答えがソファの裏側から返ってきた。それを受けてルークが簡易の防弾チョッキをかえでに手渡し、自分も着込む。

防弾チョッキを着るのは二人にとって本当に久しぶりのことだった。依鈴が機能しているときの護衛なら、銃弾系の攻撃は全て彼女の鉄扇によって逸らされる。動きが鈍くなる負担を考えたらチョッキを着る利点はほばないといえたからだ。

だが今は依鈴の助けを期待できそうにはない。

一分の狂いも許されない極限の扇子捌きは、乱れた精神状態で成せるものではないだろう。ルークにもそれがわかっていたからだ。

「さ、お嬢。行きましようか」

傷を負っていないほうの腕をルークが差し出す。かえでは視線を床に向けたまま「　　どうして」そう呟いた。

「ファイルも預けて、秘密の記憶も全部消してしまった。あなたたちが命を賭ける理由はなくなったはずでしょ……？」

それなのにどうして」

地面に押しつけられた拳が固く握られる。ルークは差し出した手を少しだけ伸ばし、彼女の手に重ねた。

「僕は依頼主から“お嬢を”守れと言われました。ファイルを守れと言われた覚えはありません。

それにね。言ったでしょう。僕はお嬢が好きです。人間的に尊敬をしています。

だから傍らにいてお嬢を守りたいと思うんです。ファイルや記憶を失ったなんて瑣末な問題は知ったことじゃありませんよ」

言葉と共に、温かい微笑みがかえでに向けられる。

「さ、行きましょう。お喋りなんて終わったらいくらでもできます」そう言っただけで手を引く。ルークの思った以上に軽い力で立たせることができた。

もちろんかえでが細身のせいではない。

彼女が自分の意思で立ち上がったからだ。

三人の主観ではとても長く思えた会話が終わり、屋外での攻防が始まる。

ルークは外へ出る準備が整ってすぐに窓枠に残ったガラスに向けて小物を投げつけ、すぐにかえでを連れて窓とは反対側の出入り口へと走った。

ほんの数秒ではあるだろうが敵の注意をガラスの破損音へと向けさせる。そのお陰か、敵に銃口を向けられることもなく茂みに駆け込むことに成功した。

人の背丈よりも長い草むらの中で襲撃者……いや、襲撃機という

のが正しいか。銃器を搭載した円盤はなかなか二人の姿を捉えることができていなさそうだった。ふらふらと不規則な動きで木々の合間を縫って浮遊している。

リーダーはなさそうだ。操縦者の気配も近くにはない。

おそらくオートで標的を追跡しているな。

ルークが木陰から敵の動きを観察する。

背丈のある草むらと林立する木々のお陰で、敵の直線に身を晒さず逃げ回るのはさほど難しくない。草むらを掃う火器や薬品が円盤に搭載されていなさそうなことも逃走者にとっては有利な要素だった。

ただ……。隣で荒く呼吸をするかえでにルークが視線を送る。

敵が弾切れになるのが先か、かえでの体力が尽きるのが先か。それを考えると長期戦はあまりに分が悪く思えた。おまけにルーク自身も決して浅くはない傷を負っている。敵が諦めるまで無事に逃げ回れる公算はどう考えても高いとはいえない。

それでは短期決戦ならどうだろうか。つまりは敵を破壊する。そんな手に出れば解決をするか？

そう考えたルークは円盤の動きを注意深く見たがやはり厳しそうに思えた。

自動操縦と思われるその円盤は動きに無駄が多く、ルークには行動パターンが読みきれない。“かえでを狙う”という最低限の命令だけがなされている様子だった。

その割に機動力そのものの性能は非常に優秀で、飛行も銃撃に移行する反応も中々に速い。

距離を取ればどうということもないが、近寄るのは難しいというのがルークの印象だ。万全の調子で逃げ回る分にはさほどでもないが、いざ反撃に出るとなると非常に厄介なプログラミングをされた相手だった。

「まったくやりづらい敵だね」

ログハウスから持ち出したスポーツドリンクを一口だけ含む。喉

を走り抜ける清涼感が火照った身体に心地よかった。

「せめて依鈴がいればもう少しまともに動けるんだろうけど」

「呼んだか？」

「うん。」

「……っ！？」

依鈴！？

喉元まで出かかった素っ頓狂な声をぎりぎりで飲み込むルーク。

彼が声のほうに首を向けると、なんと十センチくらいの先に依鈴の顔があつたのだ。

「どうした。私の顔に何かついてるか」

「い、いや」額の汗を拭ってルークが答える。隣ではかえでが目を見開き胸を押さえていた。どうやらかえでにも彼女の接近はまるで感じられなかったらしい。

まるで忍者のような気配の殺し具合だった。野生の獅子とか豹のレベルに近いかもしれない。

この女とやりあうことにならなくて本当に良かった……。

ルークはファイルが提示された時のやりとりを思い出し、内心でとても安堵した。

「依鈴さん……」

驚きで声を失っていたかえでがやっこの思いで彼女の名前を呼ぶ。その続きはなかったが、依鈴は彼女の言いたい事を察したらしい。

「意外だったか？」そう言って扇子を開く。前日の襲撃で欠けた箇所はいつのまにか修復されていた。

「わたしの目的はあくまでファイルだ。だが、かえで。わたしはあなたのことは決して嫌いじゃない。

自分の守れる範囲に敵が迫っているというのに見殺しになどするものか。その程度の情はある。

私とて人の子だ」

かえでとルークを一瞥だけして敵へと視線を送る。

“人の子”ねえ。その割にいろいろ人間離れしてるけども。

ルークの頭にそんな突っ込みが浮かんだが言葉にするのはやめた。無粋な男は嫌われる。それはよくわかっていたし、何より依鈴の言葉が変に嬉しく思えたからだ。

「話を戻すぞ。どういう状況だ」

来て早々に依鈴が指揮を取る。ルークはこれまでの流れを端的に彼女へ説明した。

「なるほど。敵の正体と目的は」

「機械相手に聞けるか。」

けどまあ、お嬢が目的なのは間違いないと思うよ」

これまでの観察で唯一、ルークが確信できた情報を伝える。

「最初の襲撃のとき、レーザーポインタを向けられてたのはお嬢だけだった。」

それにお嬢が射程内に入った時だけ真っ先に銃口を向けてきた円盤の拳動から、標的はお嬢一人でしょ。さすがにそうとしか考えられない」

他にも情報らしい情報はあるがあくまでも憶測でしかない。場を変に混乱させることを避けるため、それ以上のことをルークは口にできなかった。

「なにか手はあるかい？」

「こんなのは、どう？」

提案がルークに返される。しかしそれはかえでの口からだった。

「要するに円盤を壊せばいいのよね」

「ええ」意外な人間の発言に驚きながらも、ルークは彼女の言うことへ真剣に意識を傾けた。

「けど円盤の動きが複雑すぎて確実に捉えられるタイミングがないんですよ」

「でも円盤の狙いはわたし。」

わたしが射程に入ったら、敵は真っ先にわたしを狙うんでしょ……？」

「お嬢」ルークが息を飲む。「まさか」

かえでが頷く。彼女の決意は、その“まさか”だった。

「わたしが円盤の前に飛び出す。

それで相手がわたしに注意を向けたら、その瞬間をルークが攻撃する。」

これなら確実に円盤へ攻撃を当てられるよね」

「無茶です」

言い終わるや否やというタイミングで彼女の提案を一刀両断するルーク。

「どうして？」

「どうしても何も危険だからです」

かえでの返しにルークは軽い頭痛を覚えた。

「お嬢も見たでしょ。敵の反応はかなり速いですよ。」

そりゃあお嬢が囷になれば敵の動きが読める。その瞬間は絶対に叩けるでしょうけど、リスクが余りに高すぎます。もしお嬢が……

怪我、でもしたら……」

「けれどそうしなきゃルークの危険まで増えちゃう」

かえでの指摘にルークは閉口した。戦いが長引くとまずいのは傷を負ったルークにとっても同じ。彼はあえて言わなかったことだが、かえでにもそれがわかっていたようだった。

「二人はいつもわたしのために戦ってくれた。」

だからわたしも、二人のために命を賭ける」

真っ直ぐに二人を見据えるかえで。ルークは無言で依鈴へ顔を向ける。

「攻撃の準備をしろ」

依鈴はそう言って中腰になった。

「本気か」

意に反した指示にルークがやや語気を強める。

「危険すぎるだろ。もし下手を打てば……」

「危険などない」

そう言って依鈴が鉄扇であおぐ。耳元を隠す髪がふわりと軽く揺

れた。

「かえでに飛んでくる弾は全て私が弾く。一撃たりとも通しはしない。」

だから作戦はお前次第だ、ルーク。

かえでは覚悟を決めた。あとはお前がどうするかだ。それで決めるよ。」

女性二人の視線がルークへと向けられる。

ルークは頭を掻き、苦し紛れの苦笑いを浮かべた。

「わかった。わかりましたよっ！」

二十秒だけ時間をください。準備運動するので」

そう言ってストレッチを始めるルーク。とにかく準備がしたかった。身体もそうだけれど、心の準備も。

女性二人が覚悟を決めているのに自分ひとりがつるたえている。

彼はそんな心持ちを誤魔化したくて必死だった。

しかしやると決めた以上、失敗は許されない。

ルークが攻撃を当て損じたり遅れたりすればかえでと依鈴へ銃弾の雨が容赦なく降り注ぐ。攻撃をする自分は安全ながら、最も重い責任を負う作戦なのだ。彼にもわかっていた。

「時間だ。動くぞ」

依鈴の号令に二人が頷く。

ルークは黙って、手に握った汗を脱ぎ捨てた防弾チョッキで拭いた。

十二月の冷たい風が茂みをざわめかせる。

揺れる草と葉の影の中、三人の影だけがくつきりと地面に形を映していた。

『ファイルを巡って』（ファンタジー）

『あなたの力を見込んで依頼をしたい』

ルークが依頼主と初めて顔を合わせたのは二年前。確かうつすらと雪の積もる冬の日のことだった。

冷えたアスファルトに倒れる十数人の武装集団。もう起き上がることもないマフィアたちの傍らで、ルークは静かに煙草を啜えた。

着火と共に白い呼気に混じって煙が揺らめき立つ。依頼主は足元に散らかる銃器の破片を拾い上げると、無言でそれを見つめていた。

『試しに仕事を任せてみたが、文句無しの出来だ。これならあの子の護衛も勤まるだろう』

『護衛ね。あんたの頼みごとってのはお姫様かなにかのガードマンかい』

『まあ、そのようなものだ』

ルークの問いに必要な最低限の答えを返す依頼主。そうしてルークに厚みのある封筒と小切手を手渡すと、またも最低限の言葉で用件を語った。

『本命の依頼を話そう。あなたにはこれからとある少女の護衛についてもらう。』

少女の名は“日並かえで”ありとあらゆる人間から命を狙われている少女だ。

あなたには彼女の身に迫るあらゆる危険を排除して貰いたい。成功報酬は前にも伝えたとおり、今日の仕事二百回分の額を支払う。

条件はたった二つ。

命に代えてもかえでを死なせないことと、依頼主の名を明かさないうこと。それだけだ。

YESならここにサインを』

報酬の半額が記された小切手と共に契約書が提示される。舞い落ちる氷の粒が触れると、音もなく溶けて紙面に沁みた。

何桁かもよくわからない数字の羅列にルークが目を落とす。彼の主観では、人生をだいたい一、二回は遊んで暮らせるくらいの額だった。

『報酬に関しちや文句はないよ。ただ条件を付けさせて欲しい』
言いながら、ルークが器用にペンを回す。

『僕のすべきことはあくまで“護衛”でいいんだね？』

『それは言葉の通りだが』

『なら構わないよ』

『何が言いたい？』確認の意図を掴みきれず依頼主が尋ねる。

『たまに勘違いしてる依頼人がいるからさ』ルークはそう言つて息を大きく吸った。煙草の先の灰がふわりと落ち、地面に着く前には消えた。

『護衛は経験があるけれど、“お守り”は専門外なんだ。僕は執事バトラーじゃないからね。

僕が守るに値すると思えた人間なら何があっても守ろう。それは約束する。

けど面倒くさい女ならすぐに報酬ごと依頼をお返しするけど、それでもかまわないかい？』

『その点は問題ないだろう』

依頼主が肩にかかった雪を払う。

『あの子は気立てが良く、芯も強い子だ。おまけに中々の美人ときている』

『鼻肩目が入っていやしないか』

『まあ、それは自分で判断をすればいい』

そうさせてもらうよ。最後にルークは微笑みを残してその場を去った。

彼がかえでと出会い、彼女を気に入り、護衛を始めることになったのはその一週間後のことだった。

「あれからもう二年になるのか」

静かに茂みを掻き分けながら、ルークは小さく呟いた。

かえでの護衛を依頼されてからこれが何度目の戦いになるだろう。それは彼にももうわからない。だが全ての戦いのなかで、とりわけ窮地に立たされていることだけは確信できる事実だった。

「こんなに厳しい戦いは数えるほどもなかったらうな。それでもやるしかないんだろうけど」

僕が守るに値すると思えた人間なら何があっても守ろう。それは約束する。

ルークがかつての誓いを思い出しつつ、静かに両頬を叩く。右手のグローブに仕込んだ鉛の冷たさが神経を尖らせた。

気合の入ったところで改めて依鈴、かえでの二人と打ち合わせた作戦を反芻する。

まずは囷の二人が取り決めたポイントへ移動し、別方向からルークもポイント付近に潜んで待ち伏せをする。円盤が付近を通ったらかえでが依鈴とともに茂みを飛び出す。そこで円盤の注意がかえでに向き、発砲するまでの隙をルークが叩く。端的に言えばこういう作戦だ。

一応、ルークが間に合わず敵が発砲してしまった弾は依鈴が弾く手はずになってはいる。だが正直、鉄扇の防御にあまり期待はできそうにない。ルークはそんな事を考えていた。

依鈴の鉄扇捌きは万全の体調と精神状態が整ってようやくあの神業の如き精度を発揮する。依鈴は平然を装っていたが、かえでの記憶が失われたことの動揺が完全に拭い切れているはずがない。

“かえでに飛んでくる弾は全て私が弾く。一撃も通しはしない”

彼女はあんなことを言ったが、それは無理やりに気持ちを奮い立たせるための方便だとルークは知っていた。おそらく自分の行動が遅れ、発砲を止められなければ二人は無事じゃすまないだろう。

ルークの攻撃が一瞬でも滞れば作戦は失敗する。もし敵を倒せたとしても、誰か一人でも欠ける事態になればそれは失敗なのだ。

絶対に下手は打てない。

最悪の窮地だからこそ、求められるのは最高のパフォーマンスだ。決意を込め、重たい防弾チョッキを茂みへ放り投げる。敵の目標はかえでの抹殺だ。かえでが囷になって敵の前に出るからにはルークへ銃口が向く心配はまずない。ならば機動力を削る装備はなるべく外しておくべきだろう。

軽装に変わりルークの肉体が露わになる。ルークは慣れた手つきで傷口にあてた包帯を巻きなおし、改めて敵の位置を視認した。

円盤はいつでも発砲できる準備を整えた状態で、おおよそ彼の五十メートルほど先をゆっくりと浮遊している。もう一分もかからずにポイントを通りかかるだろう。

ルークは手近の枝に手をかけると素早く樹木に登り上げ、密集する枝に身を同化させた。そうして息を殺し敵を待つ。緊張からか、ものの数十秒がいやに長く感じた。

並木道を挟んで反対側の茂みにはかえでと、鉄扇を構えた依鈴が潜んでいる。針のような葉の合間から覗く瞳と視線が重なった。

“行けるか？”

声なき問いかけにルークが頷く。あとは円盤が通りかかるのを待つのみだ。

囷に反応した円盤が銃撃を始めるまでの時間はコンマ数秒ほど。ルークの狙う間隙はほんの一瞬、それも一回きりのチャンスだ。それを改めて意識したルークの身体が高揚する。嫌でも心臓が高鳴った。

だが反面で彼の精神は水面のように静かである。何も焦ってはいない。彼は自分が、興奮状態にあつてこそ本領を発揮するタイプの人間だと知っていたからだ。

神経が冴え渡り、拳には力が漲る。

いける！

瞬間、ルークがサインを出すのに合わせてかえだと依鈴の二人が茂みを飛び出した。

遮るものがない並木の通りで敵と罔が対峙する。

警戒をしながら浮遊をしていた円盤だが、標的へ三本の銃口を向けるのに一秒の時間も要さなかった。キュルリ、と金属の擦れるような音と共に回転し、レーザーポインタがかえでの額へ照準を定める。

だがそのときにはすでに鉛を仕込んだ拳が円盤の上部を捉えていた。

円盤の上空三十センチ。重力を味方につけて加速するルークが円盤の隙に狙い定める。

“勝った”

拳を振り上げるルークと、対面にてかえだと共に銃口へ身を晒す依鈴は作戦の成功を確信した。

確かに円盤の反応は素晴らしかった。しかしルークの拳は更に速い。

ルークの飛びだすタイミングに一分の狂いもなかった。すでに円盤は彼の腕の射程圏内に入っている。

あとは殴るだけ。これなら確実に、銃撃よりも先に円盤を撃墜できる。

ルークは笑みさえも浮かぶ心地をかみ殺して腕を振り下ろした。

この瞬間まで、彼は確かに任務の遂行が完全なものになることを信じていた。

しかし瞬間。彼の肩に異変が生じる。

腕を振り下ろしたのと同じ、筋肉の軋むような感覚と共に包帯で塞いでいた傷口から真っ赤な液体が噴き出したのだ。

嘘……だろ？

腕に箆っていた鈍い違和感が雷撃のような痛みへと変貌する。それも腕に力を込めた絶妙の、そして最悪のタイミングで、だ。

三日前に受けたライフル弾の傷。そしてログハウスで受けた射撃の出血が、彼のパフォーマンスに影響を及ぼさないわけがなかった。

かえでが記憶を失って平静を保てたのはルークだけ。精神的に最も安定した状態で作戦に臨めるのは彼だけだ。それは確かである。しかし度重なる襲撃の最中に唯一、怪我を負ったのもまた彼なのだ。これまで他人の心配ばかりをしてきたがゆえの失念が今、形を成してルークに襲い掛かる。閃光の速さを誇る彼の拳はこの瞬間、わずかだが揺らぎ、そして鈍った。

痛みによって彼が怯んだわけでは決してない。だが物理的に、筋肉の繊維がバネの役割を充分に果たすことが出来なかったのだ。

拳の衝突と共に鋼鉄の機体が浮力を失う。ルークの攻撃は敵を破壊するのに十分な威力を保ったまま標的へと届いてはいた。

しかしほんの少し。ほんの僅かだが速さが足りない。

ダタタタッ……！

拳が入るその刹那、銃口から炸裂音が響く。ルークの推定では四発か五発、円盤を破壊するよりも先に弾幕がかえでと依鈴に向けて放たれた。

撃たれた……！

ルークの表情が凍りつく。

射撃が一発や二発ならまだよかった。だが五発を無傷で防ぐことが今の依鈴に出来るか。しかも単発銃ではない。機関銃だ。全弾がほぼ同時に標的へと到達する。

それを一本の鉄扇で全て防ぐことなどできるはずがない。少なくとも心を乱した今の彼女のコンディションでは、とてもじゃないが不可能だろう。

そしてそれは彼女の状態を誰より正確に把握していたルークの予測どおりとなる。

かえでの顔面を捉えた二発はかろうじて鉄扇によって弾かれた。一発は二人の脇を逸れた。しかしもう一発は……鉄扇が軌道を塞ぐよりも先に依鈴の胸部へ到達していた。

銀の弾丸が薄いコートを羽織った身体へめり込む。

ほんの少しの間、彼女は胸を押さえながらも自分の脚で立っていた。だがルークの攻撃を受けた円盤が地に落ち、機能を失ったのを見届けると、そのまま力なく膝を折った。

「依鈴……さん」

ぐらりと傾く依鈴を呆然と見つめていたかえでの喉から声が絞り出される。

『「かえでに」飛んでくる弾はすべて私が弾く。一撃も通しはしない』

彼女は確かにその言葉を守っていた。

しかしその防御は、自分の身体をも盾に晒した捨て身の防御となっていた。

「っ！ 依鈴っ！」

肩から流れる血と金属の破片と共に着地したルークが依鈴の元へと駆け寄る。

「依鈴さん……」

依鈴さんっ！」

これまで抜け殻のように固まっていたかえでの叫びが夜の森に響き渡った。

“左胸に銃弾を受ける”その深刻さは戦闘に関して素人のかえでも理解ができるものだった。

瞼へ涙を溜めるかえでを抱き寄せ、依鈴の脇へとルークが割り込む。依鈴の額からは滝のような汗が流れ、撃たれた箇所を覆うかのように扇子で胸を押さえていた。

「依鈴さん！ あああああ……！」

「うろたえるな」

依鈴はうつすらと開いた目をかえでに向けて、言った。

「問題ない。」

私は平気だ」

ルークもかえでも聞いたことのない優しい声だった。「問題ないわけないだろう……！」鬼気迫る口調でルークが叫ぶ。

「左胸を撃たれたんだぞ。すぐに処置を……」

ルークが自分の衣服を破る。おそらくは止血をするつもりなのだろう。

撃たれた箇所は心臓の付近だ。処置など無駄なことはもう彼にもわかっていて。だがそれでも動かずにはいられなかったのだ。

彼女を死なせたくない。その一心が彼を合理的でない行為へと駆り立てていた。

「平気だと言っているだろう。この事態は……想定されていたことだ」

依鈴が胸に当てていた扇子を除ける。薄手のコートには穴が開いていた。確かに敵の弾丸は彼女の身体に当たったのだ。

しかし傷口にあたる箇所からの出血が見られない。依鈴はコートのボタンをそつと外し、胸元をかえでとルークに晒した。

「私は想定していたんだ。私が撃たれるかもしれないことを。」

ルークは傷を負っている。私の精神状態も万全とは程遠く、鉄扇捌きに不安が残る。だから最悪の場合、私は身体を盾にしてもかえでを守らなくてはなくなるだろう。それは覚悟していたんだ。だったら生身で敵の前に身を晒すわけがないと思わないか？」

「生身って……あ……」

彼女の言葉がルークの記憶を呼び覚ます。

襲撃の直前に自分が機動力を高めるために茂みへ投げ捨てたものを。そしてそれを依鈴がじっと見ていたことも。

「まさか」

ルークの言葉に依鈴は小さく頷いて胸元を撫でた。

「なかなか馬鹿にできるものではないな。防弾チョッキというものも。」

骨の一、二本は持っていかれたが、弾は私の身体まで届いてはいない」

雲間に覗く月光が銃撃を受けた箇所を照らす。紺のベストに突き刺さった弾丸がきらりと光った。

「もう安心していい。かえで」

依鈴が首だけをかえでへ向ける。光の加減のせいかわからないが、ルークには依鈴が微笑んでいるように見えた。

「敵は倒した。そして私たちも誰ひとりとして欠けることなく終わった。」

だからもう泣かなくていい。

私たちの勝利だ」

「うん……！」

宣言とともに、かえでが依鈴へとしがみつく。

肋骨を折った怪我人だ。その行為が傷に痛まなかったはずはない。しかし依鈴は顔をうずめるかえでを何も言わずに撫でた。彼女とルークの口から漏れる吐息がわずかに白む。

ルークは鉛の入った手袋を外し、空を見上げた。

網目のような枝の向こう。いままで空を覆っていた雲は薄れ、無数の星が浮かんでいた。

『ファイルを巡って』？（ファンタジー）

鋼鉄の襲撃機を撃墜して数分。泣きじゃくるかえでの呼吸が整ったときには、頭上の月が少し西へ傾きかけていた。

ルークは自分の手で止血を済ませ、周囲の警戒をする。あたりに敵の気配はなく、第二・第三の襲撃もこないと見てよさそうだった。「これどうする？」

機体の半分が潰れた円盤を指差し、ルークが意見を求める。

「回収しておこうか？」

こいつを差し向けた奴を知る手がかりになるかもしれないし」

言いながら機体へ触れようとするルークに「止めておけ」依鈴はそう言っただけで制した。

「畏があるかもしれない。

調べようとして解体したら、即座に自爆する機能があることも考えられる」

「怖いな」

触れかけた指先を慌てて引っ込める。さすがに自爆は大げさだが、発信機や盗聴器くらいのも物が搭載されている可能性もないとはいえない。

「まあ用心に越したことはないか。

とりあえずこれは放置しておくこととして、早めにここを離れないと」

「待つて。依鈴さんが動けるようになるまで待たなきゃ」

「もう充分だ」

かえでの肩を借りて依鈴が立ち上がる。少しふらつきが残っているようだったが、自分の足で歩くことは出来そうだった。意識もはつきりしている。

「森の端に安全な車も用意しておいた。おそらく誰にも触れられてはいないはずだ。

それで新しい隠れ家へと向かう」

「わかった」

とりあえずログハウスへと戻り、荷物をまとめ、移動をする。三人はそれだけ合意し、戦場となった場所を後にした。

壊れた円盤とその破片が草陰に残される。

“ほとんど”すべての機能が停止したその円盤は、微弱な電波だけを発しながら、彼らの背中をレンズに映していた。

「　　なかなかやるな」

東の空がわずかに青く染まりかけた頃。戦場の跡へ一人の男が訪れていた。

「襲撃機の中でも最高の反射と射撃性能を誇るS P - Rを素手で撃退するか。しかも罠の可能性まで疑うレベルの知恵もある。

確か護衛の二人は依鈴と……ルークとか言ったな。

まずはあの二人を排除する仕掛けを打たなくては」

呟きながら、自らの操っていた円盤を拾い上げる。バッテリーもほとんど消耗し、発信機とカメラの機能だけが生きていた。

「まあ相手はたった二人だ。対策にもそう時間はかからないだろう。日並かえでが抹殺される日もそう遠くない。次は確実に殺れる」

「　　そうか。

まあ残念ながら、君に次はないけどね」

は？

予期せぬ相槌に男の思考が固まる。

そのときだ。ようやく彼が背後に張り付く人間と、首元に突きつけられた刃物の存在に気がついたのは。

「さっきは面白いプレゼントを有難う。そこそこ楽しませてもらったよ」

氷のように冷えたナイフが男の肌と、思考を凍てつかせる。

背後から囁かれる声はスピーカーを通して聞いていた音声と同一人物のもの。だがその調子は別人と思えるくらいに、禍々しい殺意を含んでいた。

「ルーク……？」

お前はアジトへ向かったんじゃない……」

冷や汗を流しつつ声を絞る男。「僕の名前まで知ってくれてるとは光栄だね」ルークはナイフの刀身をゆっくりと男の首に這わせた。「やっぱり盗聴器を仕込んでんだ。ここへ円盤を回収しにきたってことは発信機もか？」

依鈴の言うとおり、持っていていかなくて正解だったよ。

まんまとこいつを回収しにくるんだから」

「どういうことだ……？」男が声を上ずらせる。「どうしてお前がここにいる」

「だから言葉の通りさ」

ルークは吐息のかかる距離にまで口を寄せて言った。

「円盤を放置すればそれを敵が回収しにくると思ったんだ。

僕たちがもうここに居ないとわかれば、手がかりを残さないために敵は円盤を拾いに来るでしょ？そこを待ち伏せさせてもらったよ。

盗聴器とカメラがあることは予想できていたからね。“早めにここを離れないと”って言ったのは演技さ」

ルークの言葉に、男はようやく理解をした。より優れた罠を仕掛けていたのはどちらなのかを。

円盤を撃墜したあの時点で、少なくとも依鈴にはこの展開が見えていた。だから『罠があるかもしれない』などといってルークが円盤を回収するのを止め、密かにここで待ち伏せをするよう指示したのだ。

「まあ君の寄越した円盤……S P - Rとかいつてたっけ？あいつの動きもなかなか優秀だったよ。

けどまあ機械は機械だね。お嬢が困なのを見抜く知恵もなければ、壊れかけても標的を追う執念深さもない。人間のがよっぽど手強いよ。

もし生まれ変わってまた僕らとやりあうことがあれば、今度は自分で攻めてくるといい」

さて……ルークはそんな前置きを置いて、敵の腕を組む左手に力を込めた。男の両腕が音を立てて軋む。

「君の素性と目的を聞こうか。

言わなければ殺す。言えば、なるべく苦しまずに終わらせてあげよう」

冗談でも言うかのような口調とは裏腹に、言葉は刃物よりも冷たいものだった。

男の全身に汗が染み出す。しかし彼もまたそれなりの死線を潜り抜けたプロだ。「それで勝ったつもりか」声だけはきわめて冷静にルークへ応じる。

「私にはお前のような戦闘能力はほとんどない。だが機械の設計……特に兵器の扱いはプロフェッショナルであることを自負している。見ただろう？ SP-Rのあの性能。そしてあの獨創性を。

私はね。さまざまなシチュエーションに対応できる強力な兵器をいくつも手がけてきたんだよ。作った兵器の数は自分でも覚えていないほどだ」

「それが？」

「SP-Rだけではないということさ。

“まるで人のようなロボット”を見たことがあるか？」

あざけるような笑いととも男の語気が強まる。

「目はカメラで声はスピーカーだが傍目には普通の人間となんら変わらない。そんなロボットだよ。

スパイヤらなんやらに使えるんだが、操縦者の扱い方次第では兵隊としても機能することが出来る。もちろん爆弾を仕込んでテロを起こす事だって可能だろう。

さて問題だ。そんな機械を作れる私自身がわざわざここへやって来ると思つかい？

もちろんその機械に何も仕込むことなしに……ね」

男の生殺与奪を握っているはずのルークがわずかに目を見開く。

「終わりにしようか」

駄目押しの脅迫が男の口からこぼれ出た。

もしも男の言うことが本当なら、ルークは一刻も早く男から距離を取らなければならない。もちろん場を凌ぐための嘘の可能性はあるが、その真偽をルークが知ろうはずはない。

だから安全を確実なものとするなら、ルークは男から距離をとるべきなのだ。だが彼は男を拘束する手を緩めることなく、端的に答えを述べた。

「嘘だね」

ほんの僅か。果物に切り傷を作るかのように、ルークはナイフの刃を立てた。

「身体から勇気も覇気も、そして恐怖もなにもかも伝わってくる。

君は機械じゃない。血の通った人間だよ」

首筋から赤い雫がみたい落ちる。温かいものが皮膚を這う感触から出血を悟った男は「これまでか」そう呟いて全身の力を抜いた。

「チェックメイト、というやつだな。質問は……私の正体と目的だったか。

良いだろう。冥土の土産、とは違うが一つだけ答えよう。

私の狙いは君も承知の通り、甲斐谷ファイルの抹消だ。あれはこの世に存在してはいけない。あのファイルはいつかこのセカイを破綻に追い込むことになる。

ファイルの抹消を試みたのはただ平和のためだ。君にそれだけは伝えておこう」

「」

無言でルークが男の横顔を覗く。まだ何か隠している様子ではなかった。

だがこれ以上は無駄骨だろう。この男はおそらく何も話しはしない。

そういう覚悟を見てとったルークは彼を拘束する腕に込めた力を、痛みを感じない程度にまで緩めた。

「機械を派遣して襲ったのはいただけなかった。けど最後の最後、あんなハツタリで駆け引きに持ち込もうとしたのは見事だったよ。」

そんな君に敬意を表する。せめて、安らかな死を」

ルークがナイフを持つ手の人差し指で小さく十時を切る。

空気の最も冷える午前四時。このときようやく、全ての戦いが決着をした。

「終わったか」

森の端の空き地に到着したルークは迎えたのは依鈴だった。ブラウンの車体にもたれかかったまま、ルークへ上着を差し出す。

「ご苦労だった。で、敵は……」

「ごめん。また聞きそびれた」

両手を合わせ、ばつの悪そうな表情をルークが浮かべる。

「話すタイプの奴じゃなさそうだったから。それに無理やり聞き出すのはどうも苦手で……」

「もういい」

道中で考えた言い訳を途中で遮られ、ルークが閉口する。

やはり怒っているのだろうか。こりゃあまたかえでのいないところでどやされるかなあ。

そんなことを思い依鈴の顔を窺った。相変わらず表情に乏しく、何を考えているのかはよくわからなかった。

「お嬢は？」

「車の中で眠っている」

「そっか」ルークは後部座席の窓を覗き込んだ。スモークが張られ

ていてわかりづらかったが、誰かが寝返りを打つのをシルエットから想像することができた。

「お嬢も今日は頑張ったからね」

誰にともなくルークが呟く。

ほんの数時間前。かえでは依鈴と共に機関銃を搭載した円盤の前へ身を晒した。

それも自分の意思で。自分ではなく、彼女を守るべき立場にいる二人のために。

『二人はいつもわたしのために戦ってくれた。

だからわたしも、二人のために命を賭ける』

あのときのかえでの決意に嘘はなかった。彼女は機関銃を前にしてもパニックを起こすことなく、ただ護衛の二人を信じて、囹の役割を全うしたのだ。

「今回の戦いがつつがなく済んだのもお嬢のお陰だね」

「ああ」

「もちろん依鈴。君のおかげでもあるけれど」

ちゃっかりとおだててご機嫌を取ろうと試みる。無駄かもしれないけど、いやおそらくは無駄だろうけどやらないよりはマシだ。ルークはそんなことを考えた。

もちろんその言葉は百パーセントのお世辞ではない。彼は心からそう思っている。

かえでの告白で平常心を乱されてなおも先の先を読み、身を盾にしてまで自分の使命を依鈴はやりとげたのだ。そこには確かな賞賛と、ある程度の尊敬をこめたつもりではあった。

だが依鈴は「それだけではない」と、含みのある返しをした。

「私とかえでの力だけではない。ルーク。あなたの動きも見事だった。

私が呆けている間もかえでの安全を守り、あれだけの深手を負いながら性能の優れた襲撃機を撃墜して見せた。

もしも護衛が私ひとりだったら、かえでを守ることができなかった。

たかもしれない」

「いささか褒めすぎじゃないか」

「だがあなたにあの子の護衛を依頼して良かった。

今は心からそう思っている」

依鈴は穏やかな表情をルークに向け、ほんの会釈程度に頭を下げた。

その言葉が、彼女との出会いをルークに思い起こさせる。

『あなたの力を見込んで依頼をしたい』

ルークが依鈴と初めて顔を合わせたのは二年前。確かうつすらと雪の積もる冬の日のことだった。

薄手のコートを羽織った女は二十五、六ほどだろうか。とにかく若い。闇の世界に生きる自分へ仕事を依頼する人間としては若すぎる。……自分も似たような年齢であることを棚に上げ、ルークはそんな印象を持った覚えがある。

果たしてこの女がどこまで本気なのか。それを確かめるつもりで、ルークは『あんたの“頼みごと”』ってのはお姫様かなにかのガードマンかい』そう言っただけで依鈴を茶化した。

しかし彼女もそんな扱いを受ける事を予想していたのだろう。依頼料を現金でルークへ提示し、さらに偽造不可能とされるワールドバンクの証券を取り出して見せた。

呆氣にとられたルークを置き去りにするかのように話を進める依鈴。その間、彼女はずっとルークの瞳を見据えて離さなかった。

『条件はたった二つ。

命に代えてもかえでを死なせないことと、依頼主の名を明かさな
いこと。それだけだ。

YESならここにサインを』

「あの契約からもう二年も経つんだ」

昔を懐かしむかのように遠くを見ていたルークが依鈴へ視線を戻す。

「依頼を受けたときには甲斐谷ファイルのことなんて名前くらいしか知らなかったからね。二か月で五回も銃撃を受けたあたりからえらい仕事を引き受けてしまったものだと思った」

「後悔をしているか？」

「いや」

ルークが静かに首を振る。

「やりがいがあるよ」

彼の言葉に依鈴は少し間を挟んで、依鈴は「そうか」と返した。

「色々聞いて済まなかったな」

「構わないよ。」

替わりといっちゃなんだけど、僕からもひとつ質問」

いいかな？ 視線で確認を取るルークに、彼女もまた無言で肯定の意を示した。

「依鈴こそ、後悔はないのか？」

ん、何か違うな。そうじゃなくて……」

少し時間を挟み、頭を捻るルーク。

「依鈴は…… どうしてここまでできる？」

抽象的な問いに依鈴が首を傾げた。ルークはまだ考えが纏まっていない様子だったが、少しずつその意を形にする。

「なんというか…… 命を賭けているのは君も同じだ。けど僕と違って君の目的は報酬じゃない。君の目的はファイルなんだろう？」

僕は甲斐谷ファイルのことをよくは知らない。けど本当に、目の眩むような大金をつぎ込み、命を晒してまで手に入れなきゃならないようなものなのかな」

「それは……」 依鈴はほんのわずかだが、目を細めて俯いた。

「あまり詳しいことは言えない。だがあのファイルは私にとって、人生を賭してでも手に入れる価値のあるもの。それだけは確信を持つて言えることだ。」

……こんな答えでは不服か？」

「言えないことを無理には聞かないよ。

けどそれって、君がお嬢との関係を隠そうとしているのとなが
りがあることなのかな」

「なぜそう思う」

「たまにだけど」

ルークは記憶を手繰り寄せながら、依鈴との会話を思い起こす。

「依鈴はかえでの護衛を依頼したときから、たまにだけとお嬢のこ
とを“あの子”って呼ぶでしょ。

ファイルの手がかりを持つだけの他人のことをなかなかそう呼べ
る人はいないと思ってるね。

ま、あくまで勘にすぎないけど」

ルークからの指摘はこれまで依鈴の意識したことのないものだっ
た。しかしほんのついさっき。自分は

“あなたにあの子の護衛を依頼して良かった。

今は心からそう思っている“

このように言っただのを思い出す。

「ふ、深い意味はない」

依鈴が視線を泳がせながら弁解を試みる。「ま、僕の思い過ごし
かな」ルークはそう言って肩を竦めた。

慌てる依鈴の様子を久しぶりに見る。笑った時もそうだが、表情
を作っていないときの依鈴はどこかかえでに似るな。

口にこそしなかったが、ルークはなんとなくそんなことを思った。

「けど依鈴これから君はどうする？」

話を切り替えるつもりで、これまで置き去りにされてきた問題を
口にする。実はこの問題だけは、昨夜の時点で解決しておきたい内
容だった。

「お嬢はファイルを君に預けると決め、甲斐谷創の記憶も失った。
事実上、君がお嬢を守る理由はなくなってしまったわけだ。

まあ僕はボランティア活動のつもりでお嬢にくつついてるけど、

君は……」

「まだ話していなかったな」

途中でルークの言いたい事を悟ったのか、依鈴は彼の言葉を遮った。

「かえでは記憶を戻す決心を決めたそうだ。ついさっきだが、眠りに落ちる前に私へそれを話した。」

術師には無理だと言われているらしいが、まあそのあたりは交渉次第になる部分もあるだろう。

それがうまくいけば、また三人で過ごしていくことになる」

詳細な話を依鈴は省いたが、まあ要するに催眠によって失われた記憶を取り戻す努力をする方向でかえでは動いていくことに決めたそうだ。

せつかくきつい枷を外したのにまた自ら過酷に身を置くか。

依鈴といいかえでといい、最近の女は半端無いな。

そんなことを思いつつルークは頭を掻き、大きなため息をついた。

「じゃあ要するに今まで通りってことでいいんだね」

「ああ」

「了解」

依鈴からキーを預かり運転席に乗り込む。かえでが後部座席で眠っているせいかどうかはわからないが、外よりはわずかに温かいなとルークは思った。

エンジンをかけハンドブレーキを引く。今は珍しいガソリン車の特徴といえば特徴だろうか。シートから伝わる振動が、冷えた身体に心地よく感じた。

「お嬢の記憶に僕の肩、それと依鈴の肋骨。治さなきゃいけないものが山積みだ。しばらくは治療院巡りだね。」

さ、行こうか」

アクセルを踏み、がたがたの道をゆつくりと進んでゆく。しばらくは平坦な道に出られそうにはなかった。

だがそれでもせっかくのドライブだ。それなりに楽しんでいけたらしい。

ルークがフロントガラスの向こうに浮かぶ朝日を見上げる。

太陽は今日もはた迷惑なくらい明るい光と熱をこの世界へ注いでくれている。

『ファイルを巡って』？（ファンタジー）（後書き）

ファンタジー『ファイルを巡って』をお読みくださりありがとうございます。長い作品となつてしまいましたが、ここまでお付き合いくださった読者の方々へ深くお礼を申し上げます。

『童女の駆け引き』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」	字数1400	1500
----------------	--------	------

『童女の駆け引き』(ss)

お正月のこと。わたしはおばあちゃんの家へ新年のごあいさつをしにいきました。

「おばあちゃん！ 新年あけましておめでとう！」

「はい、おめでとう。美雪ちゃんも、おめでとう」

「はい。おめでとうございます！」

親せきの美雪ちゃんといっしょにおばあちゃんへあいさつをします。

おばあちゃんはわたしたちがさいそくするよりも先に、お年玉をくれました。そしてたくさんおいしいものを食べて、たくさん遊びました。

楽しい時間はあっという間です。夕方になってわたしの家族が帰る時間になったころ。おばあちゃんはわたしたちのところに、大きな箱をもってきてくれました。

「この間、妹の家から伊予柑がたくさん届いてね。一箱あるから、これをふたりで分けて持って帰りなさい」

わたしが箱を開けると、中にはいよかんが13……14こ入っていました。

「きちんと半分こ。平等に分けるんだよ」

そう言っておばあちゃんが台所へ戻ります。いよかんが大好きなわたしたちは目を見あわせてよろこびました。

「さっそく分けよっか！」

「ん……」

美雪ちゃんは少ししせんをきよろさせて言いました。

「あ、わたし、おトイレ行きたい。茜ちゃん、半分こにしておいてくれる？」

「わかった。14の半分は……7こずつだね」

美雪ちゃんがおトイレに向かい、わたしがいよかんを分けること

になりました。

そうしてあらためて箱の中をじっくりと見ます。

きつとおうちで取れたものだからでしょう。14このいよかんは、それぞれ大きさがちがうことに気がつきました。

そのときです。わたしはちよつとしたずるを思いつきました。

（7こずつに分ければいいんだよね。だったら大きいのをもらっちゃお）

わたしは分ける係りをまかされたのをいいことに大きいよかんを7つ箱から出しました。

（わたしが分けたんだもの。これくらいはいいよね）

そして箱に7つのいよかんを残して箱を閉めます。そのとき、おトイレに行っていた美雪ちゃんが戻ってきました。

「分けておいてくれた？」

「うん。ちゃんと7こずつ」

わたしが返事をしたら、美雪ちゃんはだまってふたの閉まった箱を見ました。

そうして時計を見ると、こういいました。

「茜ちゃんのおうちはもう帰らなきゃいけないんだよね？」

「うん。うちは犬をかつているし、えさをあげなきゃいけないから」

「じゃあこの箱ごと持っていったいいよ」

え？

わたしは胸のなかですつとんきょうな声を上げました。

「わたしは後でおばあちゃんにふくろを用意してもらってからだいいじょうぶ。7つも手でもっていくのは大変だから、この箱ごとどうぞ」

「

美雪ちゃんがえがおでそんなことを言います。

わたしは箱のなかの小さないよかんを思いうかべました。こんなはずじゃありませんでした。

しかし平等に、自分の手で分けたからにはいまさら取りかえたいだなんて言えません。

「う……うん。そうね。

ありがと……」

わたしは箱に入った小さいよかんをうけとって、帰ることになりました。

「またね！ 茜ちゃん！」

美雪ちゃんはやっぱりえがおでわたしに手をふって見送ってくれました。美雪ちゃんの手には大きいよかんがつまったふくろがさげられていました。

神さまはわたしたちのことをよく見ています。

わたしがずるをしたからばちがあたったのでしょうか。むずかしいことはわたしにはよくわかりません。

けれど美雪ちゃんと会うときは必ずといっていいくらい、よくばちがあたります。

まるで神さまが美雪ちゃんの目の中にいて、わたしをじっと見つめているかのように。

『童女の駆け引き』(ss)(後書き)

ショートショート『童女の駆け引き』を読んいただきましたありがとうございます。
親戚の子に会つと、子どもが欲しくなりますね。はあ……かわいい。

『童女の計算』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 字数1700 1800

『童女の駆け引き』 未読の方はまずそちらをご覧くださいただけると幸いです。

『童女の計算』(ss)

お正月のこと。わたしはおばあちゃんの家へ新年のごあいさつをしにいきました。

「おばあちゃん！ 新年あけましておめでとう！」

「はい、おめでとう。美雪ちゃんも、おめでとう」

「はい。おめでとうございます！」

親せきの茜ちゃんといっしょにおばあちゃんへあいさつをします。おばあちゃんはわたしたちがさいそくするよりも先に、お年玉をくれました。そしてたくさんおいしいものを食べて、たくさん遊びました。

楽しい時間はあっというまです。夕方になって茜ちゃんのおうちが帰る時間になったころ。おばあちゃんはわたしたちのところに、大きな箱をもってきてくれました。

「この間、妹の家から伊予柑がたくさん届いてね。一箱あるから、これをふたりで分けて持って帰りなさい」

茜ちゃんが箱を開けると、中にはいよかんが13……14こ入っていました。

大きなものもあれば小さなものもあります。きつとお庭でとれたものだからではないでしょうか。

「きちんと半分こ。平等に分けるんだよ」

そう言っておばあちゃんが台所へ戻ります。いよかんが大好きなわたしたちは目を見あわせてよろこびました。

「さっそく分けよっか！」

「ん……」

わたしは少ししせんをそらしてかんがえました。

わたしはいよかんが大好きです。けれど同じくらい茜ちゃんもいよかんが大好きです。このまま分けあったら、大きいいよかんの取りあいになってしまうかもしれません。

茜ちゃんは親せきです。大きくなってもずっとわたしの親せきです。だからけんかはしちゃいけません。

もしも茜ちゃんにえらばせてあげたら、わたしはいい子だってほめてもらえるでしょう。でもわたしだって大きないよかんは食べたいです。お母さんも大きないよかんはよろこぶと思います。

じゃあいい子だってほめられて、大きないよかんももらうにはどうしたらいいのでしょうか。

わたしはしずかにかんがえ、茜ちゃんに言いました。

「あ、わたし、おトイレ行きたい。茜ちゃん、半分こにしておいてくれる？」

「わかった。14の半分は……7こずつだね」

わたしがおトイレに向かい、あかねちゃんにいよかんを分けてもらうことにしました。

おトイレのドアを閉めます。そして茜ちゃんがいよかんを分けるのを待ちます。

茜ちゃんはきつと、大きないよかんばかりをえらぶでしょう。きつともどつたら、大きないよかんが取りだされ、小さないよかんが箱にのこされているはずです。

わたしがもどると茜ちゃんはいよかんを分けおえていました。

箱のふたは閉じられていたけれど、中には小さないよかんが入っているだろうなと思いました。

「分けておいてくれた？」

わたしがそうききます。

「うん。ちゃんと7こずつ」

茜ちゃんはそうこたえました。たしかに数は半分こにちがいありません。

ぜんぶ思ったとおりです。

わたしはちよっぴりおおげさに時計を見て、茜ちゃんに言いました。

「茜ちゃんのおうちはもう帰らなきゃいけないんだよね？」

「うん。うちは犬をかつているし、えさをあげなきゃいけないから」
「じゃあこの箱ごと持っていつていいよ」

「……え」

わたしが茜ちゃんに気をつかうと、あかねちゃんはびっくりしたように目を大きくひらきました。

「わたしは後でおばあちゃんにふくろを用意してもらうからだいじようぶ。7つも手でもっていくのは大変だから、この箱ごとどうぞ」
「う……うん。そうね。」

ありがと……」

わたしのことはで、あかねちゃんは箱に入った小さいよかんをうけとって帰ることになりました。

茜ちゃんの取りだしていたいよかんは大きなものばかりでうれしくなりました。

大きさにちがいがあつたけれど、茜ちゃんが自分で平等にえらんだので、きつとなにもいえなかったのだと思います。

「またね！　茜ちゃん！」

わたしはじょうずなえがおで茜ちゃんに手をふつて見送りました。わたしの手には大きいよかんがつまつたふくろがさげられています。

だいじなのはがまんしてほしい物をあきらめることじゃありません。じょうずにえがおをつくつて、じょうずにお話をするのがだいじなの。

そついうふうに、ママがわたしにおしえてくれたことがあります。むずかしいことはよくわかりません。

けれど大きいよかんをもらうことができたので、これからもしじょうずに茜ちゃんとおつきあいしていきたいです。

『童女の計算』(ss)(後書き)

ショートショート『童女の計算』をお読みくださりありがとうございます。
います。ああ……いよかん食べたいです。甘酸っぱくてしゃきしゃ
きした歯ごたえのやつ。

『投資の代償』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」	字数
	1600～1700

『投資の代償』（SS）

二月十三日午後六時。計画の期日を目前に控え、私の家にようやく荷物が届いた。

サインをしてダンボール箱を受け取る。そうして笑みを浮かべながら、その箱を居間へと運んだ。

「おねえちゃん。それ、なあに」

指をくわえた妹が尋ねた。向き直るとともに私は笑顔を切り替える。

「チョコレートよ。ほら、明日はバレンタインデーでしょ？」

「それ全部？ そんなにいっぱい？」

「ええ。あなたにもひとつあげるわね」

「わあい！」

包みを渡すと妹はそれ以上追及することもなく、たどたどしい手で包装を破り始めた。

そんな妹を尻目に携帯を開く。そこには明日、チョコレートを手渡す相手のリストがメモをされている。

私が精選した、金と気前を併せ持つ男のリストだ。

そう。このチョコレートはこの男たちのために手配をしたもの。つまりこれは投資なのだ。

バレンタインデーは男性が得をする日と思われがちだが実は違う。チョコを受け取った相手にはお返しの義務が発生する。

そしてそのお返しはどうあっても受け取ったものより上質なものでなくてはならないというのが世間の常識であり、男が固持すべき体裁だ。“お返しは三倍返し”という言葉が示す通りね。

だからチョコレートを撒けば撒くだけ一月後には得をするわけ。そりゃあ返さない不届き者の男性もいるでしょうけれど、トータルで見た場合に原価を割ることはまず考えられない。

バレンタインデーの贈り物は株の投資に似ている。大きく見

返りを期待できそうなもの研究し、選んだ先に投資をする。その点ではなにも変わらない。

だがリスクを負わずただ儲かるという特質はあまりにも大きい。バレンタインデーがただ愛を語るだけの日だと思っているのは単純な男と小学生くらいのものだろう。

「さあて。今年はどのくらい収穫できるかしら」

私は胸を躍らせながら、ダンボールの蓋を閉じた。

そして翌日から三日ほどかけてすべてのチョコレートを配りきった。

会社の同僚に、学生時代の同級生に、あるいは合コンで知り合った相手に。受け取る相手が顔を合わせないよう細心の注意を払い、自分で言うのもなんだが私はうまく立ち回った。

その成果もあり、一月後。私は大量の贈り物に囲まれた。勘違いした男から愛の告白を受けることにも成功した。

「今年はまた派手に儲かったわね」

三つのダンボールに詰め込んだ贈り物を一つ一つ開封し並べる。今年はバッグとか少なく、ほとんどが食べ物だったのが少し残念だが、どれもなかなか手の出ない上質な菓子ばかりだった。

「あ、これ鈴屋のカステラじゃない。それにこっちもシャルテの特製キャラメル！」

テンションのあがった私は片っ端から口に入れてみた。どれもこれもが口の中で幸せなハーモニーを奏でてくれる。

この時点ではわたしの投資は文句なしの大勝利だと思っていた。今日この日、妹にこの一言を言われるまでは。

「おねえちゃん。太った？」

言われて焦って体重計に乗ってみる。

私の視力が正常ならひと月で四kgくらい増えていた。

なんと私の投資は体重と体脂肪という形でガッツリ反映されてしまったのだ。

「オウマイガッ！」

私はそれから全力でダイエットをしたが時すでに遅し。合コンでもまったく輝くことができず、告白をしてきた男からも愛想をつかされてしまった。

「あ、そういえばね、おねえちゃん。わたしもおねえちゃんのまねしてチョコあげてみたの。いっただけだけど。」

そしたら幼稚園でいっしょのたか君から好きっていってもらえちゃった」

後日になって妹からこんな報告を受けた。

「おねえちゃんのおかげだね。ありがと！」

そう言って妹が微笑む。本当に屈託のない笑顔で。

私はその笑顔を見て空しくなった。

いつから私は間違えたんだろうと思った。

けどもし戻れるなら……来年は原点に帰ろう。なにかかも、物事を純粹に楽しめていたあの頃に少しでも近づこう。

袖で目元を拭う。付け睫の黒がほんの小さなシミをつくっていた。

「よかったわね。たか君と仲良くね」

贈り物の指輪を外して妹の頭を撫でる。

妹は嬉しそうに目を細めた。

意図していないのに、私の顔にも自然と微笑みが浮かんでいた。

『投資の代償』(SS)(後書き)

SS『投資の代償』をお読みくださりありがとうございます。バレ
ンティンデーのお菓子は外せない楽しみ。太るの怖いですけど
汗

『人格ダウンロードプログラム』(SF)(前書き)

ジャンル「SF」 字数 2800～2900

『人格ダウンロードプログラム』（SF）

“実験に成功した”

そんな一報を受け、彼らは全ての残務を投げ出して博士のラボを訪れた。

「お待ちしておりましたよ」

二重、三重のセキュリティシステムを抜けようやく博士と対面する。

「遠いところをようこそいらっしやいました。お茶でもいかがですか」

「結構。それより例のものは。早く見せていただきたい」

「わかりました。こちらへ」

博士の後に付いて三人の男が鉄製扉の先に足を踏み入れた。

教室ほどの広さの部屋にテーブルが一つ。その上に溶液に満たされた試験管と注射器、そしてパソコンと無数のファイルが置かれている。

「これか。話に聞いていた“人格ダウンロードプログラム”の用具一式というものは」

黒服の問いに博士が静かに頷く。

「ええ。いくつかの方法を試した結果、薬物投与の療法が最も大きな効果を挙げてくれました。

お預かりいただいた被験体三名は皆、プログラム通りの人格へと矯正されましたよ」

そう言っ博士が男たちに書類を手渡す。

「死刑囚たちは今どうしている？」

「今の時間帯は皆、私の用意した箱庭にありますよ。奉仕活動にでも勤しんでいる頃でしょう」

「ほう。あの三人がね……」

男たちが驚嘆の息を漏らす。書類に記された検証結果からも、ど

うやら本当に博士の実験は成功したと判断できそうだった。

計画の発端は四年前。博士が新しい人格矯正のプログラムを考案したことから始まった。

殺人以下の犯罪の再犯率が七十%を越え、この国だけで年間の死刑執行者数が百人に迫ろうとする悪夢の時代に終止符を打つべく、連邦政府上層部はこのプログラムの実用化に莫大な投資と倫理観を投げ打って、秘密裏の研究を博士に進めさせてきたのだった。

「このプログラムは薬物投与による遺伝子の書き換えが主となって対象の人格に作用をします」

大方の説明は省いて確認程度の説明を男たちに行う。

「特殊な電解質を含む溶液により脳細胞から“悪意”だけを消滅させ、同様の効果を全身の染色体へも染み込ませます。

脳細胞をいじった時点で披験者が悪意のある行動をとる可能性は限りなくゼロになるでしょう。しかしより大きな効果を広い範囲で挙げるにはなんらかの方法で溶液の性質が波及する仕組みを考える必要があります。

そこで目をつけたのが“遺伝”です。

哺乳類の染色体へ作用する成分を溶液に含ませ、ラットによる動物実験を行ってみました。その結果……」

博士はそこで紙の束を一枚めくった。同じように男たちもページをめくる。

「遺伝子操作の効果は次世代へも受け継がれ、生まれた子にも薬物の効果が作用することがわかりました。

よって犯罪者の子がどんな素質を持っていようと、どんな環境で育とうと、罪を犯すことはあり得ない。

こうして徐々に悪意の芽生えない身体をもった人間が増えてゆくのです。

この効果を全世界に広めれば、やがて犯罪のない平和な世界が実現するでしょう」

一通りの説明に区切りがつく。三人は書類を床に落とし、惜しみ

のない拍手を贈った。

「よくやってくれた！」

「人類の愚かな歴史によりやく終止符の打たれるときが来たのだ！」
賞賛に、博士も笑顔で応じる。

ラボに鳴り響く喝采はしばし鳴り止む気配を見せなかった。

犯罪者の遺伝子操作を行う法案はすぐに審議をされた。

もちろん反対をする者がいないはずはない。人権団体や市民団体が連日のようにデモを行った。副作用を懸念する声も上がった。政府の陰謀を唱える者もいた。

だが今や一分半に一人が殺人によって命を落とす世の中だ。法の抑止に限界を感じ、犯罪という恐怖からの開放を望む者もまた少なくはなかった。

五年にわたる論議の末、折衷案として試験施行が行われることとなる。

それから更に三年後のことだ。

この国の犯罪再犯率は施行前の七十%から、なんと十五%にまで減少をした。

ちなみにその十五%はすべてが薬物投与の対象外となる軽犯罪を犯した者によって占められており、この結果は人格ダウンロードプログラムが完璧なものであることを決定付けていた。

「このプログラムは本物だ」

「平和のために、この効果を全世界へと広めてゆくべきだ！」

すぐさまプログラムは同じく高い犯罪率に苦しむ各国へと導入される。

どの国でも同様の効果を挙げ、普及がなされるのに大した時間はかからなかった。

“悪意は根絶されつつある”

プログラムがはじめて施行されて十五年後。こんな記事が新聞の見出しを飾った。

このときプログラムを採用していた国家は百二十カ国。その全ての国で、犯罪件数は施行前と比較し五%以下へと抑えられていた。またプログラムの導入に消極的な国家へも先進国政府が秘密裏に情報を流し、徐々にではあるが、さまざまな形で遺伝子の書き換えられた人間は増えていった。

「この遺伝子が広まれば、いずれ地球上から全ての悪意が消え去ることだろう」

いまや科学と平和への貢献者として世界的権威を持つようになった博士は、平和賞を受賞した場でこのようなスピーチをした。

疑う者など誰もいなかった。

疑う余地など与えないくらい、世界は前向きな方向へと変わっていった。

そしてまた十数年。死刑の制度が世界から消えた。誰も悪意を持つて重大な罪を犯したりしないからだ。

さらにまた十数年。最後の独裁国家の支配者が倒れた。後継者は悪意のない遺伝子を持っていた。

国家単位で世界の平和に仇を成す国が事実上、なくなった。

それから数年。多くの人類にとって冷戦の頃からの悲願であった“核兵器の根絶”が連合において満場一致の可決を実現させる。

どの国も核兵器など必要なかった。だって誰も攻めてこないのだ。金がかかるだけで無用の長物だった。

そうして次々に軍事費が、同時に人々の防衛への意識が削り取られてゆく。

ミサイルが消え、戦車が消え、ピストルまでもが博物館の一角に姿を残すのみとなった。

このまま世界に永久の平和が約束されるのだ。
この星の人々は、心の底からそう思っていた。

“実験に成功した”

シエルター式のラボに見立てた宇宙船の一角にて。博士は故郷の仲間にごのような一報を知らせた。

“計画通り、地球人の武装は解除されたか”

仲間の質問に博士は笑みを浮かべる。

“ええ。核兵器があるうちは面倒でしたが、今や地球人には機銃ひとつの装備ありません。”

侵略は赤子の手を捻るより容易いでしよう”

“そうか。よくやってくれた。すぐに軍と迎えをそちらに寄越すでしょう。”

君の昇進は私からも強く推しておく”

そこで通信が途切れ、ノイズだけが流れる。

博士はデスクの脇に置かれた小さな盾を静かに伏せてほくそ笑んだ。それは博士が平和賞の受賞者となった際に、彼へ贈られた栄誉の品だった。

「この私が平和への貢献者か。皮肉なものだな。

彼らは最後まで何もわかっていなかった。

いや、最初から何もわかっていなかったと言っべきだろうか」

物事はマイナスの要素を消しさえすれば完璧になるわけではない。何かが消えれば新しい何かが芽生えるための、あるいは新しい何かが付込むための隙間が生まれるだけだというのに。

静かなため息について博士は盾をくずかごに放り投げた。

表面を彩る金のメッキが、光の乏しいくずかごの底で鈍い輝きを放っていた。

『人格ダウンロードプログラム』（SF）（後書き）

SF『人格ダウンロードプログラム』をお読みくださりありがとうございます。
ございます。自分の中から悪意が消えたら素敵だなあって思います。
けど消えたら、たぶんこういうシナリオも書けないのかも。

第二話 前 『ふたりきりの試験勉強』（ライトノベル）（前書き）

作中連載『箱庭の少年少女』第二話前編。
字数は3000字を超えております。ご了承ください。

第二話 前 『ふたりきりの試験勉強』（ライトノベル）

「なあ、頼む。うちの妹に勉強を教えてやってくれないか」

期末考査を控えた梅雨明けの日の正午過ぎ。友人とともに昼食のひとつを楽しむ俺の元へ、サッカー部の工藤先輩が息をせき切ってやってきた。

マイペースな先輩らしからぬ態度にただならぬものを感じ教室を離れる。先ほど購買で買ったばかりのミネラルウォーターを手渡すと、先輩はほとんど一気に喉の奥へと流し込んだ。

「ふう。すまん。梶本」

「いえ。」

それで何事ですか。そんなに焦って」

「さつき……進路指導の先生に言われたんだが……」

さすがは運動部のエースといったところか。ボトルを放して顔を上げた先輩の顔からは汗が引き始めていた。しかし表情は相変わらず曇ったまま、事情が話される。

「このままじゃ、うちの妹が留年になる」

「なぎささんが？」

先輩の話を要約するところだ。

先輩の妹であり俺の同級生でもある工藤なぎさは、ただいま諸々の事情により絶賛引きこもり中である。

中学三年の受験までは普通に登校していたため進学に支障はなかったのだが、この学校の高等部に進学して三ヶ月の間、彼女は一度も学校の門をくぐっていない。

そのため進級の可否を断ずる中間考査も未受験であり、成績は赤点以下のからつきし。もしも次の期末考査まで未受験となると、その時点で彼女の留年が決まってしまうのだそうだ。

「残念だけど俺の頭じゃとてもなぎさに勉強を教えてやれない。だから梶本。期末考査の間まででいいから、お前になぎさの家庭

教師を頼みたいんだ」

梶本も忙しいだろうけど……そう付け加えて先輩は頭を下げた。もちろん俺は先輩の頼みとあらば断るつもりなどない。なぎさとも一応は見知った仲だ。嫌なわけでもない。

だが果たして役に立てるだろうか。その懸念が大きかった。

ただクラスメイトに勉強を教えるだけの話ではない。人ひとりの進級がかかっているのだ。いうまでもなく学習指導のキャリアなどない俺がこの重責に見合った働きをできるだろうか。

「家庭教師とか雇ったら駄目なんですか」

不安と重圧からそんな提案を試してみる。しかし先輩は「金がない」とすっぱり断じた。

「それになにより、教わるのがあのなぎさだ。病的人見知りのあいづが初対面の人間とマンツーマンで勉強なんかできるわけないだろう」
「確かにそうでしょうね」

学力を伸ばすことに気をとられて単純なことを見落としていた。クラスメイトである俺でさえもとに会話ができるまでに二ヶ月くらいかかったっけな。どれだけコミュニケーションに長けた家庭教師だろうと、十日後の期末考査までになぎさと打ち解け、勉強に集中をさせるのは難しいだろう。

「わかりました。お役に立てるかどうかはわかりませんが、やれるだけのことはやってみます」

「おお助かるよ！

サンキュ！ 梶本！」

そう言う先輩は満面の笑みを浮かべて俺の両手を取った。

「なぎさには俺から話をしておくから」

それから俺たちは少しだけ打ち合わせをして別れた。

廊下に響く予鈴の音に混じって、外からかすかに蝉の鳴き声が聞こえた。

第二話 『ふたりきりの試験勉強』

先輩から依頼を受けた次の日の七月二日。工藤家のリビングに三人の人間が顔を合わせた。

「それでは第一回“工藤なぎさを進級させる大会”を開催いたします！」

わー！ という声とともに拍手が沸き起こる。もちろんテンション高いのは先輩だけだ。俺となぎさは手を叩くだけにとどめていた。「それでは本大会の目標を確認するぞ。

目標はなぎさの期末考查突破。それまでに十一科目すべてのテスト対策を行ってゆこう。

なぎさの中間考查はすべて零点の扱いだから、留年を防止するためにはすべての教科で五十点以上を取る必要がある」

いつのまに作ったのか、先輩がフリップを掲げてルールの確認をする。

うちの学校では中間と期末の合計点（最高二百点）のうち、五十点をすべての教科で獲得することが進級の基準とされている。

なぎさは中間考查が未受験のため、今回の期末考查だけで全教科五十点越えを達成しなくてはならない。

これがなかなか簡単な話ではなかった。定期テストは授業で扱った内容から出題される。授業に出るところか一度も登校すらしていないなぎさが五割以上の得点を、しかも全教科で取るには時間が足らなすぎる。

「今回は学校カウンセラーの零ちゃん先生に頼み込んで別室受験を認めてもらったから、とりあえずは集中して受験できるはずだ。

あとはうまいこと勉強するのみ。

俺は明後日まで静岡に行かなくちゃならないから、梶本の指示で効率よく勉強をさせてやってほしい」

なぎさと俺がうなずき肯定の意思を示す。

ちなみに先輩はサッカーの選抜合宿に出るのだそうだ。テスト週間間際とは言え、特待生として在学している先輩が合宿に出ないわけにはいかない。

「そこでもうひとつ大事な話だが……」

先輩が改まって表情を引き締める。

「お土産は何がいい？」

思わず呑んだ固唾が戻りそうになった。

「だってせっかくの静岡だぞ？ なぎさが欲しいものならお兄さん何でも買ってきちゃうぞ！」

さあなぎさ！ 何が欲しい？」

「え……別に」

「遠慮するなよ！ なぎさは甘いもの好きだよな。」

うなぎパイか？ うなぎパイが欲しいのか？」

先輩の妹バカが炸裂する。

うつとおしそうではないが苦笑いのなぎさと先輩を尻目に、俺は参考書を開いた。なるべく時間は有効に使いたいからな。雑音をシャットアウトして文字に集中する。

「それじゃあ色々買ってくるよ。梶本にもなんか買ってくるからな。うなぎパイとか」

「はい（生返事）」

「実技科目とかもすっかり頼むぞ」

「はい（生返事）」

「ただし二人つきりになるからって保健体育の実技とか始めようとしたら許さんからな」

「はい（生返事）」

「ちょ、ちよつとお兄ちゃん!？」

いままで言葉の少なかったなぎさが急に声を張り上げる。頬はほんのりと赤らんでいた。よく聞いていなかったからわからないが、先輩のことだ。きつと何かしら冗談でも言ったのだろう。

「冗談冗談。」

おっと、そろそろ時間だ。それじゃ二人とも、勉強しつかりな」

そう言い残して先輩がポストンバッグを担ぎ、玄関へと出て行く。俺は参考書をたたみ、玄関まで先輩を見送った。

そしてリビングへと戻り早速、なぎさと向かい合う。

「それじゃがんばろうな。五教科だけじゃないのがちょっと大変だけど。芸術とか保健もあるし」

「うん……。あ、梶本くん……」

「なに？」

視線をそらし、もじもじしながらなぎさが口を開く。

「さっきの……冗談だからね」

「何が？」

“さっきの”が何を指すのか、話を聞き流していた俺にはよくわからなかった。

沈黙が挟まれると、なぎさが更に声を籠らせながら視線を落とす。

「保健体育の……その……はじめる、とか」

「ああ、保健ね。別に問題はないけど」

「え……問題ないって……」

言つとなぎさはなぜか目を大きく見開いた。

怪我をするまではプロのサッカー選手を目指して生活し、今でもサッカー部のマネージャーをしている俺は栄養学やスポーツ科学に關してそれなりの知識を持っている。

「別に教えられるぞ？　むしろ得意科目だ」

「得意なの！？」

「昔はそれ関係で食べていくのが夢だったし」

真っ赤になった表情を引きつらせながらなぎさがちらちらと俺の目を覗く。なぎさが言葉の真偽を判断するときにする癖だ。

「ほ、本気で言ってる……」

さすがはなぎさの嘘アレルギー体質。俺の言葉が本気であることはことは見抜いて貰えたらしい。

そしてその直後、

「わたしまだそういうのはその、高校生だし……そういう関係じゃないし……。」

その……「ごめんね」

なぜか謝られた。脳裏に無数のはてなマークが浮かぶ。

「まあ……よくわからないけど保健は後回し。」

時間のかかりそうな理数科目から手をつけようか」

「うん……」

話を切り替えて参考書を開く。

俺が該当のページを示す間もなぎさは落ち着きのない様子で、正座する足をよじらせていた。

「私はバターです」

「ええっ!？」

暑さで頭がやられたかのような俺の発言に、なぎさの手からペンが落ちた。

「だ、大丈夫？ 梶本君。お水飲む？」

「いや大丈夫。」

なぎささんが書いた英文なんだけど」

赤ペンでチェックを入れた文章を提示する。

“The butter is me.”

「バッター（打者）の綴りは“batter”ね。aとuが間違ってる」

惜しいな。続く文章“However, my younger brother is a pitcher for allong time from the junior high school student.”（けれど私の弟は中学生のころからずっと投手です）”はあってるのに。

「あ、そういうこと……」

単純なミスになぎさは軽く頬を掻くと、すぐにノートへ正しい綴

りを書き始めた。忘れないうちに記憶へ刻み込むつもりらしい。勉強の仕方はわかっていているみたいだった。

それに……俺は採点の終わった答案集を改めて見直してみる。

リーディング

英語 44点

ライティング

英語 47点

日本史 A 49点

世界史 A 52点 以下略

昨年のもものだから参考程度にしかないとはいえ、先輩から借りた過去問をなぎさがここまで解けるといっのは驚きだ。

さすがに理数科目はほとんど点が取れていないものの、現代文や古文に関しては60点台をキープしている。

「なかなかの出来だ」

まるで勉強に手をつけてこなかった者の得点ではない。そう思っ
てなぎさを褒める。するとなぎさはペンを走らせながら

「家でそれなりに勉強するようにはしてたから」

と、点数の種明かしをした。

「なるほどね」

少しだけ希望が見えた気がした。

まったくゼロからの状態で全教科五十点はかなり絶望的なハードルだったが、文系科目は今の時点でもそこその点が見込める。

理数科目に絞って教えてゆけば間に合うかもしれない。黙々とテキストを読み込むなぎさを見て、俺も頑張らなくてはと思った。

「それじゃそろそろ休憩にしようか。過去問六つもよく頑張ったね
お茶入れてくるよ」

「あ、私がやるよ?」

「大丈夫。座ってて」

「あ……じゃあ冷蔵庫にケーキあるから」

なぎさに言われて冷蔵庫の中を覗き込む。いや、覗くまでもなかったか。

冷蔵庫の中央段には色とりどりのケーキが、ひいふうみい……た

ぶん十個くらいは並んでいたのだ。

「か、買いすぎだろう」

どれだけケーキが好きなんだなぎさは。

いや、違うか。なぎさは外に出ない。これを買ってきたのは先輩だろう。

自由に使える金だってそんなにないはずなのに。妹バカここに極まれり、だな。

とりあえずお茶とケーキどもをお盆に乗つけてなぎさの元へ運ぶ。
「お待たせ」

声に反応したなぎさが顔を上げる。そして本日二度目となるが、
またもペンを落とした。

「なにこれ」

「見ての通り。ケーキの群れです。」

なんと総計3200キロカロリー。丸二日はこれで食いつなげるぞ」

「身体に悪すぎるでしょう」

この事態はなぎさも知らなかったみたいだ。ケーキを買っておい
た、としか聞かされていなかったのだろう。

啞然とするなぎさを一瞥してティーポットを傾ける。ぬるめの濃
い茶がグラスの氷をゆるやかに溶かした。

「まあせっかくだし食べよう。日持ちするものでもないしね」
そうして二人向き合い、紅茶を傍らにケーキをつつく。

なぎさは珍しく屈託のない笑みを浮かべてケーキを口にほおばっ
ていた。甘いものが好きというのは事実のようだ。あっというまに
一つをたいらげた。

「もうひとつ、いっとく？」

勧めると、なぎさは首を横に振った。

「いい。あんまり食べると太るから」

「なぎささんの体格ならなんら問題ないと思うけど」

押してはみたが、それでもおかわりを固辞するなぎさ。甘いもの

が好きなのは間違いなさそうなのに、意思の緩みはまるで感じられない。

ダイエットか？ いや、笑顔が少ないことを除けば芸能人ばりの外見を維持しているなぎさには必要のない試みだ。

では何故。俺が怪訝な顔をしていたのか、なぎさは自分からその意図を話した。

「ほら。私、あんまり外に出られないから。

筋トレの量を増やさなきゃいけないのも大変なもの。それにいつまでも引きこもってばかりじゃいけないじゃないと思うし」

思わずフォークを持つ手が止まる。

『いつまでも引きこもってばかりではいけない』

その言葉が謎を解いてくれた。

普通、引きこもりは自分の体裁など気にしない。昔の自分がそうだったように。世間に姿をさらす気のない以上、外見などに気を使う必要はないからだ。

だがなぎさは違うようだった。いつかはこんな生活をやめなきゃいけないとわかってる。だからいつでも自分を変えられるよう、自分に出来る範囲の努力を続けてきたのだ。

思えばなぎさが家での勉強を続けていたのもそのためだろう。今の自分が少しでも周りの人の、あるいは未来の自分の負担とならないように、と。そんなことを考えたんじゃないだろうか。

高等部の勉強は急に難しくなる。誰の助けも借りずに勉強するのはかなり大変だったはずなのに。

食べかけのケーキに落としていた視線をなぎさへ戻す。彼女はいつのまにかフォークを置き、再びペンへと握り替えていた。

「頑張ってるんだな」

声をかけると、なぎさはノートの文字を目で追ったまま言葉だけを返した。

「これ以上迷惑をかけたくないもの。お父さんにも、お兄ちゃんにも。」

それに梶本くんにも」

「迷惑だなんて思っていないよ。」

だってこんなに必死じゃないか」

一心不乱に勉強するなぎさを見据えた。本心からそう言うことができた。

たぶん先輩も同じ事を言うだろう。

「だから何も気にすることはないよ。」

それより今は勉強に集中、だね」

「うん」

クーラーの音とペンの走る音だけが沈黙の空間に流れる。

窓の外から差し込む日もいつの間にか温かみを帯び、空にはうっすらと星が浮かんでいた。

今日が終われば残りはあと九日か。

涼やかな風鈴の描かれたカレンダーを一瞥して、俺はぼんやりと参考書の束に視線を落とした。

正直なところ、上手くいくかは良くて五分五分といったところだろう。現実的に時間が足りないのだ。三ヶ月の遅れを残りの期間で埋めることは決して容易いことじゃない。

けれど。それでもなぎさはがんばってる。

だから俺も、なぎさの努力に見合うだけの手助けをしよう。

そんなことを思いながらページに付箋を貼ってゆく。

ふたりきりの試験勉強は日が完全に沈むまで続いた。

第二話 後 『ふたりきりの試験勉強』（ライトノベル）

七月十二日。テスト初日。

英語二科目と現国の試験を終え購買に向かった俺はフルーツ牛乳を片手に教室へと戻った。

教室ではクラスメイトたちが試験の出来を肴に各々の昼食をとっている。この日の試験はこれで終了だ。しかしこの学校の生徒は昼食を学校でとる文化というか風習のようなものがあつた。

郷に入れば郷に従え。普段は俺も例に漏れず昼食を学校でとるようになってる。

しかし……俺は廊下側の一番うしろの空席を見た。一学期の頭からずっと空いたままになっている席だ。

席の主はいまごろ一人で昼飯を食べているんだろうか。

ふと彼女のことを考える。いつもどおり澄ました顔で、でもどこか物憂げな表情をしているなぎさの顔が浮かんた。

なぎさは進路相談室で別室受験をしている。時間はチャイムに合わせているからテスト自体は終わっているだろう。

行つてやつたほうがいいだろうか。

そんな考えが頭を過ぎる。しかし俺は同時に、試験を受ける前。

今朝なぎさとともに門をくぐる際に彼女と交わしたやりとりを思い出した。

『私は平気だから』

新品同様の制服に身を包んだなぎさは歩きながらぽつりと言った。

『お兄ちゃんには特別受験のことお願いしてもらった。』

梶本君には今日まで十日間。たくさん勉強を教えてもらった。

だから今日は……今日くらいは自分ひとりの力でがんばってみる。だから学校にいる間は気を使ってくれなくていいから』

ね？ 目でそう訴えかけるなぎさ。

先輩は本気で心配そうな顔をしていた。そりゃあそうだ。引きこ

もりを学校でひとりにするなんてライオンの檻にねずみを放りこむようなもの。『いいか！ なにかあったらすぐ防犯ブザーを鳴らすんだぞ！』などとなぎさに言うくらい心配性の先輩が落ち着いていられるはずがない。

『大丈夫』

だがそう言ったなぎさも瞳もまた覚悟のこもった光を帯びていた。だから俺も先輩もそれ以上何も言わなかった。言えなかった。

まあ、考えてみればテスト受けて帰るだけの話だ。そう大げさに考えることもないだろう。あんまり過保護な真似をしてもうっとおしいだろうし。

視線を自分の席に戻し、腰を下ろす。しかし俺はそこで強烈な違和感を覚えた。

「椅子しかない……」

なんと席には椅子だけが残され、机が消えていたのだ。

「おーい真司！」

クラスメイトの一人、健太郎が窓際の席から手を振っている。

「こっちだこっち。遅いぞ！ 早くメシにしよう」

見れば俺の机は健太郎と、同じくクラスメイトのあかりの席の近くに移動されていたようだ。

「なぜ机だけ移動させた」

俺が問うと健太郎は「悪い悪い。椅子はいま移動させようとしてたところだ」と悪びれもせずにした。

「そんなことより急げって！ 今日のはあかりがおかずを分けてくれるらしいぜっ」

フルーツ牛乳を椅子に乗つけて二人の元へ運ぶ。

ワックスでかっちり固めた天然パーマの男と、小柄で純朴でつばらな瞳の少女が近くまで寄った俺を見上げた。

「いいのか？」

あかりの手元には確かに普段の彼女が使っているよりも一回り大きな弁当箱が置かれていた。

「お弁当、作りすぎちゃったから。よかつたら食べて」

割り箸を並べながらあかりが柔らかな笑顔を浮かべる。

卵焼き。プチトマトのサラダ。ブロッコリーとベーコンの炒め物。箱の中には色とりどりのおかずが並んでいる。どれも紛いもなく美味しそうだった。

「あ……でもお箸がひとつしかないんだけど……」

「問題ないさ。」

はい真司！ あーんっ！

「結・構」

なぜか恋人のノリで迫る健太郎を華麗にスルーして卵焼きをつまむ。たまごの甘みと出汁の旨みが口の中で混ざるようにしてとろけた。

「お。旨い」

「ほんとか！」

健太郎が空中に差し出した卵焼きをそのまま自分の口に入れる。

「何これうめえっ！」まさしく満面といっていい笑顔が彼の顔にも浮かぶ。

「さすがはあかりのお母さんだ！ お嫁にもらいたいぜ」

「ごめんね。うちお父さんいるから」

「真面目に答えるとこじゃないからな」

馬鹿なやりとりを交わしながらおかずをつつく。

本当は昼食にパンを持ってきてただけ、今出すものじゃないよな。

帰ったらおやつ代わりにでも食べればいいか。そんなことを考えながら俺は机の脇のバッグから弁当箱へ視線を戻す。

「お。この炒め物も旨いぞ」

健太郎に言われてブロッコリーを口に運んだ。薄口のしょうゆとみりんの味わいがなかなかのハーモニーを醸していた。

「確かに。かなりいける」

「ほんと？ よかつた」

俺の食べる様をなぜか食い入るように見ていたあかりがほっと息をついていた。

「それ私が作ったの。お口に合うかなって不安だったんだけど……」
「やるなあ……」

炒め物をもう一つまみもらってじつくりと舌の上で味わった。俺も料理はやるほうだと思っけどこうは上手く味をつけれない。

一度教わってみたいと思えるレベルだ。健太郎もまるで遠慮なくおかずを口に運んでいた。

「こんなの作れるなんてさすがはあかり！」

もう今すぐにでもお嫁さんになれるな。ってかお嫁に来てくれ」

直球ど真ん中のプロポーズを吐きながら健太郎があかりの手を握る。

「は、恥ずかしい冗談はやめて。」

真司くんも止めてよう」

あかりがほんのり頬を染めながら助け舟を求めた。

「止める健太郎」

俺の制止にあかりがほっと胸を撫で下ろす。

「あかりは俺の嫁だ」

しかし撫で下ろした手は即座に凍りついた。

「そうか真司。お前と雌雄を決する時が来るとはな。」

ならばあかりを賭けて勝負といこう。

“あっちむいてホイ”で勝負だっ！」

「臨むところだ」

「わ、わたしの人生がミニゲームで決まっちゃう……！」

あやうく少女の人生が決定付けられる瀬戸際になって、俺は「はい。終了」と号令をかけた。俺と健太郎はよくこうした悪乗りをすることがあったが、たいていはどちらかが空気を読んで雰囲気をもとに戻すのだった。

「まあ冗談はともかくよくできてるってのは本当。自信持っていんじゃないか」

「ほんと？」

「ほんとだほんと！ 毎日でも作って欲しいくらいだ」

男子二人で手を合わせて「ごちそうさま」を言う。

あかりは花のような笑顔を浮かべて「お粗末さまでした」と元気よく言って笑った。

こうやって机並べて飯食って、馬鹿やつてられるのも学生時代の醍醐味なんだよな。

俺は豪快に笑う健太郎と朗らかに相槌を打つあかりを見て、ほんの少し昔のことを思い出した。

かつて引きこもりだった頃は俺がこういう輪に入れることなんて想像もしていなかった。

自分の居場所があつて、そこには和やかなときと一緒に過ごせる仲間がいて。

それらは何もかも一度は諦めかけたものばかりだった。

でも今は諦めなくてよかったって思う。ここまで来る道は決して平坦なものではなかったけれど、努力をしてよかったって心から思う。

だからなぎさ。お前も来れるといいな。

こつちの世界へいつかは戻って来られるといいな。

ダメダメだった俺でもできたんだ。なぎさなら、きっと無理じゃないはずだから。

それから俺は二人に軽く挨拶だけを残して、工藤家へと向かった。到着した時刻がだいたい十四時過ぎ。リビングへ通されると、なぎさと先輩はすでに明日の科目の勉強を始めていた。二人して数学の問題集を広げている。

明日は数A、芸術、科学、古文か。理数科目をふたつも含んでいる。なぎさにとってはひとつめの関門だな。

俺はあえて二人に声をかけることはせず、冷蔵庫から麦茶を出し

て二人の元へ運んだ。もはや勝手知ったる家だ。先輩もなぎさもごく自然にグラスを受け取り、お礼を言った。

「どうだった？ 出来は」

「たぶん大丈夫。英語なんかは梶本くんが抑えてくれたところから結構出てたし」

「それは良かった」

もともとなぎさの文系科目は危なげない予想ではあったが、役に立てたようで何よりだ。

俺は英語を含む三科目のテスト内容を思い浮かべてみる。問題数は多めだったけど捻りの少ない素直なテストだった。なぎさの点が五十を切ることはないだろう。

むしろ先輩が青い顔をしているが大丈夫か？

話を聞くとところによると先輩のテストはあまり出来がよさそうではなかったらしい。ユース選抜やら合宿やらいろいろあつて勉強に時間を割く余裕があまりなかったからな。

まあでも先輩はなんだかんだ言つて一度も赤点を取ったことはない。追い込みをかければ乗り切れないこともないだろう。

「あと二日です。頑張りましょう。二人とも」

俺もノートを取り出し、三人で勉強を始める。

最後の追い込みだ。なぎさも先輩も疲れがないはずはなかった。

しかし集中に途切れは見られない。良い傾向だと思った。

このまま何の問題もなければ無事にテストを乗り切れる。

俺はそう樂觀していた。

そして試験二日目。

この日は理系科目を含んでいたが、特にイレギュラーな問題が出題されることもなく、試験後のなぎさの反応も上々だった。

この時点で十中八九はいける。なぎさに油断こそ見られなかったものの、俺も先輩もほとんど今回の壁をクリアした気でいた。

だが三日目。俺たちも含めて、おそらく一年生の生徒全員が予想

していなかった事態が発生する。

それは最終科目の数学？の試験時間に起こった。

“出題者 妃名宮零歩^{ひなみや}”

問題用紙を開いて出題者の名前が目に入る。そこには事前に知らされていた教師の名前とは別の名前が書かれていたのだ。

試験には傾向というものがある。そしてその傾向には出題者の性格・嗜好が色濃く反映するものだ。

俺は事前に出題者が誰であるかを調べ、その教員が過去に作成した試験問題を手に入っていた。出題者は本校八年目の勤務となる数学科主任の堤先生だった。先輩がらみのネットワークから過去問を手することはさほど難しいことでもない。

そこで俺はかなりの時間を割いてなぎさに過去問を解かせ、また傾向の似た問題を自分で作成したりもしていた。だから対策は万全のはずだったのだ。

けどまさか出題者が変わっているとは……。

おそらく対策を練ってきた生徒たちは皆少なからず動揺したことだろう。しかし俺の驚きは皆の比ではなかったと思う。

試験問題をざっと見てみた。問題のレベルは正直、かなり高い。平均点はおそらく五十……四十五……。いやもつと低くなることだって考えうる難易度だ。傾向も基本を重視する堤先生の問題とはかなり異なっている。

（これはなぎさのレベルじゃ……）

全身から嫌な汗が吹き出した。

なぎさは一科目でも五十を下回れば留年が決定する。そうならば先輩の思いにも、なぎさの努力にも、報いることができなくなる。

（くそ……！）

いまさら言ったって意味はない。焦ったって仕方がない。そんなことはわかっている。

けど俺は鼓動を収めることが出来なかった。

頑張ってきたなぎさの姿。それを支える先輩の姿。

傍で見守り続けてきた色んな映像が、目の前に浮かびぐにやぐにやと歪んで見えた。

すべての試験が終了したこの日、俺は全ての誘いを断って工藤家へと足を運んだ。

いつもなら友人たちと遊んでいる頃合だ。けれど俺はどうしてもなぎさの様子が気になって、はしゃいでいられる気分にはなれなかったのだ。

インターフォンを鳴らし、先輩に玄関を通される。ずっと参考書で埋まっていたリビングの机にはお菓子やらジュースやらが並べられていた。

「遅いぜ梶本。早く座れよ」

先輩がジュースをついでくれる。すでに俺の座る場所にはケーキが置かれていた。どうやら俺が来ることは想定されていたことらしい。

「つと、そっぴや静岡の土産も渡しそびれてたよな。」

ちよつと待つてくれ。すぐとつて来る」

慌しく先輩が階段を駆け上がったてゆく。話したいことはあったが、俺は言われるがままに腰を下ろすことしかできなかった。

定位置に腰を下ろすなぎさと向かい合う。二人きりになると、ずっと俺の顔を見て目をぱちくりさせていた彼女は小さく口を開いた。「えと……。ごめんね？ 無理に誘ったりして」

ばつが悪そうに目をそらす。どうもなぎさは俺が先輩に誘われてここに来たのだと思っているようだった。

「別にそんなことないよ。」

もともと来るつもりではいたんだ。他に約束もなかったし」

「……嘘」

なぎさは端的に俺の誤魔化しを指摘した。なぎさに嘘が通じないことを、このときの俺はなぜだか忘れてしまっていた。

「ごめんね。でも、ありがとう」

「いや。あの、さ」

ぎくしゃくした間をおいて言葉が出た。なんだか意味もなく言葉に詰まったのだ。

テストの出来はどうだったのか。

そんな端的な疑問が形にならない。いつものように雑談交じりに聞けばいいだけなのに言葉にならない。

それはきつとなぎさの力を信じようとする思いより、現実的な考えが俺の頭の中で強みを帯びているからだろう。

後ろめたさが邪魔をして正面のなぎさを直視できない。どうしても視線が彷徨ってしまう。

「梶本くん」

口火を切っておいて言葉が続けない俺に痺れを切らしたのか。はたまた氣を使つたのか。おそらくは後者だろう。なぎさが言葉を発してくれた。

「テストのことなら大丈夫。

やれるだけのことは……やったつもりだから」

なぎさは穏やかな微笑を俺に向けた。後ろ向きの感情を少しも滲ませることのない完璧な笑顔だった。

「。」

でもなぎさ……さ」

「お待たせっ！」

元氣な掛け声とともに先輩が登場する。腕には浜松の名産“うなぎパイ（抹茶味）”の箱が抱えられていた。しかも三箱。

「ほら梶本！ お土産だ！

目いっぱい買ってきたから遠慮なく食べる！

さあいけほら！ サクツとほら！」

底抜けのテンションがギロチンみたいに流れをぶった切る。

「梶本はうなぎとか好きか？」

「ええ……まあ」

「そんなお前にほら！ 浜松名産のうなぎパイ！」

いやうなぎパイはうなぎよりパイ寄りのお菓子のような気がするが。

そんなツツコミをさせる間もなく先輩が俺の口にパイを詰め込む。

「あ、甘い。むぐ」

口の中でパイ生地が水分を吸って膨らむ。おかげで口がリスミタいに膨らんだ。そんな様子を先輩もなぎさも笑って見ていた。

そしてなぎさは俺が帰るまで、この日、ずっと笑顔のままでいた。けど。俺はそんななぎさがやはり気になって仕方なかった。なぎさは笑顔で『大丈夫』と言ったけれど。

一度も『テストができた』とは言っていなかったのだから。

そうして楽しい時間が過ぎ、日常が戻ってくる。

普通に部活へ出席して土日過ごし、テストの返却が始まる週初めの授業を迎えた。

俺は家庭教師としての立場上なぎさの得点を知らされる立場にある。先輩は各教科の先生から預かったなぎさの答案を、本人に見せるよりも先に俺へと回してくれていた。

現国七十五点。日本史六十七点。世界史六十九点。

苦手とされていた科学も五十六点でセーフ。半数を返却された時点で、なぎさの点数は危なげなくボーダーラインを突破していた。

「なぎさも心配そうな顔はしてないし、こりゃあもらったぜ！」

な！ 梶本！」

「……ええ」

先輩の言葉に形だけの相槌しか返せなかった。あの日のなぎさの反応が、どうしても脳裏にこびりついて離れなかった。

ただ漫然としてはいられない。万が一のとき、どう手を打ったら

いいか考えておかなきゃいけない。

俺は先輩と話している間も思考の半分は別のところにあつた。

杞憂ならそれでいいし、それが一番いい。けど現実には人の願いや思いとは関係なくやってくる。それを痛いほど知っているはずの俺の頭は、どうしても楽天的にはなれずにいた。

そして二日後。

ずっと目を背けたかった現実が、数字の裏付けとともにやってくる。

最終科目“数学？”

「なぎさの点数は」

時計の秒針の動く音がやけに大きく響くりビングにて。あの先輩が肩を落とし、蚊の鳴くような声で結果を語った。

「四十七点。あと一問分……足らなかったよ」

なぎさも俺も黙って先輩の声を聞いていた。

惜しかったとか頑張ったとか。先輩が沈んだ表情を見せたのは一瞬だけで、あとはいつものように元気な声で前向きな言葉をかけてくれていた。

「平均は四十三点らしい。

一週間ちよいの勉強でよくここまで取ったよ。お兄さんは感動してるぞっ！」

先輩はそう言ってなぎさの頭を撫でた。しかしなぎさは顔を上げこそしたものの、なにも言葉を発しなかった。

「なぎさ……」

なぎさは黙って無理な笑顔だけを俺と先輩へ向けて作っていた。けれど何も言えない。どんなに強がろうとしても、なぎさは心にもないことを言えない。そういう体質だからだ。

口を開けばネガティブな言葉ばかりになってしまふ。

だからただ微笑んで。叫びたくなるような悔しさを、泣きたくなるような悲しさを噛み殺して、なぎさはいまこの瞬間まで言葉を、涙を零さずにいた。

ずっと必死で抵抗してきて、その願いが届かなくて辛くないはずがないのに。

「先輩」

少しだけ、席を外してただけませんか。

俺が目で合図をすると、先輩は小さく頷いた。

「……そだ。急にバニラアイスが食べたくなつたからちょっと出かけてくる」

下手です、先輩。でもありがとうございます。

流れるに意味不明な退室理由になってしまったが、意思の疎通はしっかりとできたようだった。このあたりは付き合いの長さが成せる業といったところだな。

ぱたりと音を立ててリビングの扉が閉められる。

それとほとんど同時だった。

なぎさの目から、ずっと溜まっていたものが堰を切って溢れたのは。

「梶本……くん。

ごめん。……ごめんね……」

混じりけのない純粋な本音が涙とともに零れ出る。

「今までたくさん……たくさん助けてもらったのに……私……！」

「うん」

「でも結局は……駄目で……。頑張ったけどだめで……」

「わかってる」

俺は家庭教師としてずっとなぎさを見てきた。だから彼女の努力が、流す涙に相当するものであることは知っているつもりだ。

「なぎささんが頑張ってきたのはわかってるよ。

だからさ」

俺は少し息を整えて言った。

「これまでしてきた努力。

もう少しだけ、続けることってできる？」

なぎさは袖で目元を拭って顔を上げた。「

え」両目を赤く晴

らしながらも、しっかりと瞼を開いて俺を見据えている。

「まだ手はある。ほとんど茨の道だけれど」

いま、俺がどんな慰めをしようが何も変わらない。そう思ったから俺は事実だけを端的に語った。

「ひとつだけ、なんとかする裏技を知ってるんだ。定期試験の勉強とは比べ物にならないくらい過酷なものへ挑戦することになるけどね」

「挑戦……？」

「おまけに成功率はとっても低い。きついことに耐えて耐えて、その努力が水の泡になることだってあると思う」

俺の語りになぎさが耳を傾ける。受け答えにはときどき嗚咽が混じっていた。しかしそれでも目は逸らそうとしなかった。

「途轍もなく険しい最後の手段だ。それでもやってみる覚悟はある？」

なぎさがそうしているように、俺もまた彼女の目を見た。そうすれば言葉なんかなくても覚悟は読み取れる。そんなつもりだった。

しかし俺が考えを巡らせる間もなく彼女は

「やる」

そう断言した。予想外の即答だった。

「教えて。梶本くん」

なぎさは嘘を言えない。だがそんな制約を判断基準にしなくとも、間違いなく本気の言葉だとわかった。

だから俺も、もう勧めることを迷わないと決めた。

「わかった」

言って、鞆から二枚の書類を取り出した。進路主事の先生から預かってきた、試験の要項だ。

「なぎさんは今回の試験で留年が決まった。それはもうどうしようもない。けど俺たちと同じ学年に進級できる手段はあるんだ。

それがこれだよ。二等級進級者認定試験。

いわゆる“飛び級試験”ってやつさ」

留年は決定した。だったら俺たちよりも余分に進級すればいい。そんな発想から行き着いた手段がこれだった。

「秋にやるこの試験で規定以上の成績を残せば、今回の留年は事実上無効になる。」

もちろん簡単な試験じゃないけどね」

「でもそれって」

俺の手から要綱を受け取り、紙面に視線を落とす。

「やっぱり……受験資格があるよね」

なぎさはやはりその点を気にした。

確かにこの飛び級試験は点数さえ取れば進級が認められる。だがあまりに特別な措置を認める試験だ。受験資格というものがないわけがない。

「その一。学力が優秀であること」

「それはそうよね」

なぎさが頷く。

「その二。人物が優秀であること」

「……わたし資格とかあまりないんだけど……」

なぎさの表情がわずかに曇る。

「その三。学業に取り組む姿勢が優秀であること」

「だめじゃないそれ！」

なぎさが叫んだ。

「姿勢って授業態度のことですよ。」

学業に取り組むもなにも私、引きこもりだよ？ それじゃとても

……」

「大丈夫だ」

予想されていた反論に、俺は断言で返す。

「ほら。要綱には“出席日数”がどうか一言も書いてないでしょ？ 学校側としても留年者なんて極力出たくないんだ。だからその辺は教育的配慮でなんとかしてくれる。点数に関しては合格点を取るしかないんだけど」

「詳しいのね」

「まあね。」

この制度で留年免れた奴を知ってるから」

昔の記憶を手繰りながら話をする。

「　　そいつも特殊な事情で留年が決まって、学校にぜんぜん行けないような奴だった。」

けど周りの人の支えがあつて、本人も血を吐くような努力をしてこの試験を受ける資格を勝ち取り、合格した。

けどそいつだってできたんだ。だったらなぎささんにできない道理はない」

自信満々に語る俺をなぎさは不思議なものを見るような目で見ていた。

そして「……詳しいのね」ともう一度だけ言った。しかしそれ以上は聞こうとしなかった。

「話を戻そうか」

俺はひと口だけ先輩の出していつてくれたウーロン茶を口に含んだ。氷が溶けて味はほとんど水になっていた。

「とりあえずこれからなぎささんのやることは二つ。」

ひとつはもちろん学力を伸ばすこと。これは必須だよね。

それともうひとつは“学業に取り組む姿勢が優秀”なのを先生に見せることだ。つまり……」

そう。

学校に通うこと、だ。

俺はあえて言葉にはしなかった。けれどなぎさは黙って、しかし力強く頷いた。

「　　試験の出願期限は十月いっぱい。それまで一日でも多く、なぎささんの意思を学校にアピールしていこう。」

それまでになぎささんの……体質が治ることはないよね。人間関係で難しい対応を迫られるときもあると思う。

けどそのあたりは上手にやっていこう。俺もクラスメイトとして

できるだけサポートはするから」

「ありがと。」

。うん。

頑張つて……みる」

なぎさはほんの少し複雑な表情を浮かべて、小さな手のひらを胸にそつと当てた。

人の嘘を見抜いてしまう枷。そして嘘をつけないという枷。いずれも人間社会で生きていくには大きなハンデキャップと言っている。不安はあるだろう。だからこそ今までなぎさは外に出ることを躊躇ってきたのだ。

しかしそれでもなぎさは“やる”と言った。

それは彼女の強さなんだと思う。

「あ、そういえば梶本くんって」

なぎさは思い出したように言った。

「クラスメイトだったんだね」

「え、今更？」

そっか。なぎさは一回も教室に来ていないから知らないんだな。そういえば初めて会ったときもサッカー部の後輩としか名乗っていなかった覚えがある。

「そっぴや言つてなかったっけね。」

俺はなぎささんと同じ1・D所属だよ。せつかくだからちよつとだけクラスのことを話しておこうか？」

「うん。聞かせて」

不安半分。興味半分のまなぎしをなぎさに向けられる。

「うちのクラスに日塚健太郎って面白い奴がいてな……」

他愛のない話で盛り上がる。なぎさは珍しくニコニコしながら話を聞いてくれた。俺もいつのまにか、鬱屈とした気分が胸から消えていることに気が付いた。

久しぶりに気持ちが軽かった。たぶんなぎさも同じだと思う。

あくまで今は一時的な休息に過ぎない。これからなぎさはトラウ

マと戦いながら集団の中に混じっていかなきゃならないし、勉強だって寝る間も惜しむくらい熱心に取り組んでいく必要があるだろう。けれどわずかでも今はなぎさと穏やかに過ごそうと思った。そういうスタートも悪くないと思った。

なにもかもがいきなり上手くいく事なんてない。けど昨日よりも今日を、今日よりも明日を、ほんの少しでも前向きな日にできればいい。

柄にもなくポジティブな気分になって俺は思わず苦笑した。けどまあ、たまにはそんな気分になるのも悪い気はしなかった。

ついになぎさの学校生活が始まる。そして今までよりも過酷な試験勉強へふたりで挑んでゆくことになる。

どうなることやら、ね。

俺はぼんやりとカレンダーを眺めた。

七月も、もう後半に差し掛かるうとしていた。

第二話 後 『ふたりきりの試験勉強』（ライトノベル）（後書き）

ライトノベル『ふたりきりの試験勉強』をお読みくださりありがとうございます！次回！なぎさちゃん学校デビュー！？

『なんちゃって肉食系!』(ラブコメディ)(前書き)

ジャンル「ラブコメディ」	字数	3500	3600
--------------	----	------	------

『なんちゃって肉食系!』（ラブコメディ）

漫画みたいな恋をしたい。

甘くて、切なくて、ときどきして、ちょっぴりえっちな恋をしてみたい。

そんなことを思ったことない？

ううん。そんな願望を持たない女の子って、いる？

少なくとも私はずっとしてみたいって思ってた。

そして高校2年に進級した今年の春。野望はひょんなことから“微妙に”実現してしまったの。

あれはじめての告白が受け入れられた時のことだったわ。

「あの……付き合うのはいいんだけど……」

2・3のクラスメイトで、私の彼氏になることを受け入れてくれた井坂はつぶやくような声で言った。

「恋人同士ってどんなことしたらいいのかな。」

その僕……女の子と付き合ったことってないから

どうも女性関係のないらしい井坂はすぎるような視線を私に向けた。

やばい可愛いッ!!

ってそんなことを思ったとかはどうでもいいの。

そんなことより私は焦っていたわ。私も男の子と付き合ったことってなかったの。

でも……言ってしまった。見栄を張ってしまった。

「しょ、しょうがないわね。経験のないアンタの為にあたしが色々教えてあげるわよっ!」

主導権を握りたかったとかそういう下心があったわけじゃない。けれど乙女心って自分でもわからないものね。気が付いたらつい、

そんなことを口走っていた。

「うん。ありがと」

井坂は恥じらいと羨望のブレンドされた言葉を返した。
思い返せばそれが全てのはじまりだったのだわ。

私は切ってしまった大見栄を通すべく雑誌、ドラマ等あらゆるメディアに目を通した。

少しでも恋多き女子を演じなくてはならない。絶妙のリードをし続けなければならない。

そんな熱い思いに後押しされ、わたしは机上論を極めようともがいた。

そして最終的にたどり着いたのがこの漫画です（宣伝）

明石^{あかし}みはる子 著

『肉食系恋愛！！』

内容は肉食系女子の主人公がうぶな草食系男子をからかったり甘やかしたりしながら仲を深めてゆく、いわゆる少女マンガの王道をゆくラブコメディである。

設定を見たときもうこれしかないと思ったわね。

私はこの漫画の主人公を演じ、草食系男子井坂をリードする。

そんな決意を持ってこれまで付き合いを続け、本日のデートにも臨もうとしていた。

「……よし」

わたしは聖書^{バイブル}『肉食系恋愛！！』の4巻をバッグに忍ばせ、駅のトイレを出た。

現在9時45分。待ち合わせ時間の15分前だ。

「もうっ！ 男の子なんだからカノジョを待たせちゃ駄目でしょうっ！」

って感じに、主人公はあえて15分前に待ち合わせ場所に来て、

後から来たカレを可愛く責める。

『お詫びになにか甘いものでも奢るよ』

『しょうがないわね。なら許してあげる。』

食べてみたいパフェがあったの。そこ連れて行きなさいよ。』

そんな流れを経てふたりはちよっとお洒落なカフェへと向かうのだ。

「……完璧じゃないか」

よし今日はこの流れで行こう。

私は唾を飲んで待ち合わせ場所へと向かった。

「あ、真菜さん」

「なんでアンタが先に来ちゃってんのよっ！」

「え……えっ？」

井坂は私の逆ギレに視線を泳がせた。

聞くとマメな性格の井坂は30分前に待ち合わせ場所に来ていたようだ。バイトやらなんやらで忙しいらしい彼がまさかこんな早く来ているとは思いつかなかった。

「ご、ごめん。デートに遅刻するの恥ずかしいって思って」

やばい可愛い。

ってそんなことを思ったとかはどうでもいいの！

早くもプランが崩れてしまった。なんとか立て直さなくちゃならない。私はなんちゃって恋多き女なのだ。残念ながらアドリブはまったく利かない。

「……」

「……」

「……早く甘いものでも食べに行こうかって誘いなさいよっ！」

「ええっ!？」

純度百パーセントの理不尽に井坂は戸惑いを隠せない様子だった。しかしそこはうぶで素直な井坂。「じゃ、じゃあ何か甘いものでも食べに行こうか」私の期待にあわせてくれる。

「しょうがないわね。なら許してあげる。」

食べてみたいパフェがあるの。そこ連れてきなさいよ」

「え。でも真菜さん、カロリー高いのは控えてるって前に……」

「それは連載当初の設定だッ！」

まるで意味不明な返しに豆鉄砲をくらった鳩のような表情をする井坂。

つと、いけないいけない。ついメタ的な発言をしてしまったわ。

「ど、どうでもいいから早く行くわよっ」

私は無理やり井坂の手を引き、引きずっていった。

『おいしいね。ここのパフェ』

カレはがつつとパフェを口に運んでいった。

『お行儀の悪い食べ方しないの。』

ほら、口にクリーム付いたよ』

主人公はそつとカレの口についたクリームを拭う。

『もう。子供なんだから』

『ありがと。優しいんだな』

そうして目が合う二人。見詰め合う二人。そして……

「これよこれ……」

私はだらしなくにやけた顔を軽く叩き、聖書の5巻をバッグに忍ばせた。

そうして井坂の待つテーブルへと戻る。

「ご注文をお願いします」

「じゃあ私、このイチゴパフェで」

店員さんがメモにさらさらとペンを走らせる。

「じゃあ僕はこのゼリーで」

「おい」

なんとしてもクリーム系を食べてもらわなきゃ都合の悪い私はメ

ンチを切った。

「パ・フェ・を・食べに来たんでしょうが」

「じゃ、じゃあ僕もイチゴパフェで……」

無理やりパフェを頼ませる。先にコーヒーが運ばれて来て、パフェを待つ間は普通に雑談をして過ごした。

「お待たせしました」

ふたつのイチゴパフェが私たちの前に置かれる。「おいしそうだね」そう言いながら井坂はてっぺんのイチゴを口に運び、アイスを掬い、そして遂にクリームヘスプーンを入れた。

さあ。口にクリームをつけるのだっ！

そしてそれを拭う私にときめくのだっ！！

私は獲物を狩らんとするハイエナのようにチャンスを伺った。しかし井坂のパフェはどんどん減り、ついぞ口にクリームを付けず完食をしてしまったではないか！

「おいしかった！ ご馳走様」

笑顔で手を合わせる井坂。対して私は無言でクリームを掬った。

「ねえ井坂」

「ん？」

「食べきれなくなっちゃった。……あーんして」

私の言葉に井坂は顔を赤くして首を振った。

「こ、こんなところで……恥ずかしいよ」

「あーんして」

「で、でも人が居るし……」

「あーんして」

「それにそれ真菜さんが食べたいって……」

「あーんしろ」

はいごめんなさいすみませんでした。

まだ少しもじもじしていたが、井坂がそう言って顔をこちらに近づける。

「おおっとお！ 手が滑ったあ！！」

スプーンに乗ったクリームが井坂の顔面にストライク！

“不幸にも”狂ってしまった手元は、見事に井坂の口元およびその周辺にクリームを塗りたくった。

「もう。お行儀が悪いわね。」

子供なんだから」

我ながら意味不明なことを言っていると自覚しつつも私が井坂の顔を拭く。

ついでに頬とか色んなところに付いたクリームも拭っていった。拭いたら、その下からとっても引きつった井坂の笑顔が出てきた。

さ、さすがにやりすぎたかな？

私は反省してフオローを試みる。

「ご、ごめんなさい。ちゃんと全部拭くからね」

店員さんから新しいお絞りを受け取って拭く。顔から垂れたクリームとかもちゃんと拭かなきゃならない。

顎先、胸元、手元……そして……井坂のジーンパンにもクリームは付着している。

しかも付いていたのは股間の位置だった。ジャストミートだった。拭いて……くれるの？

井坂が無言で私を見つめる。

やばい可愛い……けどそれ以上に……恥ずかしいっ！

私の頭は一気に茹だりパニックだった。無理だ。無理だけど、私は経験多き女を演じる身だ。何とか誤魔化さなきゃっ！

そう思い私は勢いで誤魔化そうと試みた。

「おおっとお！ 手が滑ったあっ！！」

思いつきり勢いをつけて布巾を股間に当てた。いや、当てたというより、あれはぶつけたと言ったほうが正しい。

井坂の表情が凍りついたかと思いきや、また更に一段階表情が変わった。

およそ地球上の言語じゃ表現しえない表情を浮かべていた。

「ごめんなさい明石みはる子先生。あたしは主人公を上手に演じられませんでした。」

私は意味もなくバイブルの作者に謝罪をした。

散々なデートを済ませて帰宅し、井坂は自室のベッドへ腰を下ろした。

「今日も……なかなか洒落にならなかったなあ」

股間に残る鈍い痛みをかみ殺して呟く。

しかしそれでも惚れた弱みという奴か。井坂は苦い顔ながらも、うつすらと笑顔を残していた。

「まあ言っても仕方ないよね。それより一日遊んじやつたんだ。仕事に戻らなきゃ」

そう言ってデスクに向かい、原稿にペンを走らせる。

締切日も近い。高校生ながらも仕事とのきつちりとした両立を案件に、会社からも連載を認めてもらっているのだ。落とすわけにもいかない。

それに今まで一度も原稿を落としたことはなかったのだ。これで落とせば明石みはる子の名に傷が付いてしまう。

「パフェネタはもう止めとこう。真菜さん何やらかすかわかんないしね。」

真似されても大丈夫そうだなネタ考えなきゃ……」

そんなことを呟きながら井坂はネタ帳を開いた。

股間の痛みが気になって、その日はなかなか集中できなかった。

『なんちゃって肉食系!』(ラブコメディ)(後書き)

明石みはる子の明石(a k a s i)を逆から読むと……(笑)

『トランスション』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」	字数
	1200～1300

『亡霊マンション』（SS）

そのマンションの3階西渡りには、日が落ちると幽霊が出る。

出るらしい、じゃなくて“出る”。そんな噂がある。

それって結局のところ噂なの？ 事実なの？ それは彼らも知らないし、だぶん誰にもわからない。

だが誰にもわからない。そして誰も調べようとしないうのが、逆に彼らにとっては都合がよかった。

「というわけで、ここで色んな人にドッキリを仕掛けようと思います」

悪乗り高校生筆頭、3年の小林が号令を上げる。後輩の2人は「わー」と騒ぎながら軽く拍手をした。

「やり方は簡単。ママが白装束に貞子ヘアーで例の西渡りに立つ。

そしてその姿を、タッチちゃんが仕掛けたカメラで撮影する。それだけだ」

すべて相談済みの内容だった。そして準備も万端だ。

「了解っす」

「まかせて」

水色のワンピースを畳み、怨霊ルックに着替えたママとカメラを手にした達也は頷いた。

「いちおう達也は西渡りに向かう踊り場で待機、俺は反対側で待機。そっから様子見な。脅かしちゃやばそうな住人が来たらすぐママにワン切り入れるってことで。」

それじゃ解散」

3人はそれぞれの道具を持って定位置へと分散した。

午後9時から開始30分。幽霊に扮したママは順調に住民をびびらせていった。

ママはただ無言で立っているだけだ。ただ異様な服装・様相。そ

して雰囲気を出しているだけで、角を曲がった住民は道を変えたり、早足で脇を通り抜けようとしたりした。

小林と達也は見張りの役割を担いながらも、そんな様子を見て笑いを堪えていた。

「……っ！」

「ひっ！」

多かれ少なかれ、誰もが驚きのリアクションを取った。中には声を漏らしてしまう人すら居た。

「嫌あああああああっ！」

中にはマミのほうに逆にビックリしてしまう反応を見せた人すらいた。そのおばちゃんは葱のはみ出たビニール袋を放置しダッシュで逃げ去った。

「あー、面白っ！」

……けどもう10時か。そろそろ潮時かね」

さすがに騒ぎをでかくしすぎるのもマズい。そんな判断から小林はマミと達也へ撤収の合図を出した。

10分後、マミは化粧を落とし、達也はカメラを回収しそれぞれ合流。

あとはそれを小林の用意したハンディカメラで再生し、それを着に笑い飛ばして終了。……の、

予定だった。

「え、何……この映像……」

再生された映像を見て3人は言葉を失った。映像が撮られていなかったのだ。

最初は故障かとも思った。けど、そうじゃない。マミはちゃんと映っている。

ただ待てども待てども、映像の中に誰も現れない。音もない。マミが無言で立っているだけ。

つまりは9時から10時まで……西渡りは『誰も通らなかった』それをはっきりとカメラが証明していたのだ。

「こ、こんな馬鹿なことがあるかよっ！」

その場にへたり込む後輩二人を置いて小林は現場へ走った。

彼の目に入った西渡りは何の変哲もなし。彼らがここに来たときとまったく同じ。

葱のはみ出たビニール袋も何もかも、その場から忽然と消え失せていた。

『イラスト したら負け』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 字数 1900～2000

落ちまで我慢大会のような文章が続きます。ご注意ください

『イラッ としたら負け』(ss)

あーあ。ユウウツ。

アタシはケータイをいじくりながらタカシとのことを考えていた。

「好きなんだ、マジで。」

お前とのが忘れられねえ。やりなおそうぜ」

昨日タカシから来たメールは、ヨリをもどそうって内容だった。

なにそれ。あれはアイツの浮気が原因じゃん！

ムカッ！！

アタシは怒った。

そりゃアタシだってちよつとカツコいいオトコが言い寄ってきたらさ？ 魔がさすことだってあるけど・・・。

アタシってばほら、コアクマ系じゃん？

や、ちよつと愛され系女子っぽいところもあるけどお・・・ってそんなの今はいいの！

アタシ今度という今度は許さないんだからっ！！！！

オトコってばほんと勝手。アタシみたいなピュアな乙女はいつも苦労させられちゃう。

コウボウは筆を選らばずってやつよね！！

・ ・ ・ やだアタシってばちよつとムズカシイ言葉使っちゃったかな？
べつに頭いいのひらけたかしたいとかじゃぜんぜんないし！

友達のなかじゃ「ココってアタマいいよね」とか言われることあるけどおべつにたまにだし。

あーあ。ユウウツ。

どっかにいいオトコいないかなあ。

・ ・ ・ ・ ・ そのときいきなり奇跡が起きた！

アタシの前に超イケメンの先輩が来て「俺と付きあわね？」って言ったのだ。

アタシは運命を感じた

そんな私の自信作『ラブ フューチャー』が芥川賞に落選して三年。この日を迎えるに当たって、胸の内に燦る感慨を私が堪えられようはずもなかった。

寝ても覚めても筆を走らせ、アイディアを研ぎ、推敲を重ねた日々。臥薪嘗胆の思いで積み上げた研鑽の日々は、凝り固まった価値観にしがみつく一人の人間を確かに変えてくれた。

携帯小説こそ至高のジャンルと信じ、誇りという名の驕りを固持していたあの頃が今や遠い過去であるかのように感じる。

驕りは捨てた。もはやあの頃の私ではない。

今年の芥川賞は私が獲る。

殺意にも似た決意をぐつと喉の奥で噛み殺し、手にした原稿に視線を落とす。

『恋、そして未来』

鬱屈とした心持が、私の頭を、胸を、あるいは四肢の先までの全てを満たしていた。

無意識に遊ぶ指先が件のメールくだんを開いては閉じ、また開く。それは夕べ届いた隆からのメールだった。

“好きなんだ、マジで。”

お前とのが忘れられねえ。やりなおそうぜ“

単純にして明快な甘い囁き。調子がいいとも思し難いその内容に、私は言葉を失うとともに呆れ返った。

発端は何だ。何もかも貴方の浮ついた振る舞いが崩落を招いたのではなかったか。

ムカツ！！

それは怒りか。あるいはそれ以上の何かだろうか。私自身にも知りえぬどす黒い感情が、胸の内に燦って消えなかった。

無論、彼の行為の全てが理解できないというわけではない。私と

て人間だ。浮ついた気持ちの一つや二つ、抱いた経験はある。

私は所謂、“小悪魔系”……いや、まさか。しかしあるいは“愛され系女子”の要素をも孕むというに足る存在だろうか？

論じるに論じ得ない命題だ。故に差し置くことが最善の手に違いはあるまい。殊更に論すべき命題は今、別のところにある。

赦すか、赦さないか。

罰すか、罰しないかだ。

性の奔放はある種の罪といっても過言ではない。彼^かのような人間に正対する、私のような“純”の存在は苦しみを、悲しみを、あるいは両方乃至それ以上の精神的負荷を強いられてやまない。

“弘法は筆を選ばず”とは良く言ったものだ。

無闇矢鱈と先人の言を借り、学をひけらかそうとする浅薄な人間と思わないで呉れ給え。

大事なことなので二度言おう。浅薄な人間と思わないで呉れ給え。稀にはあるが「ココつてアタマいいよね」「等と望まぬ賞賛を浴びることも在る。が、あくまでたまの出来事だ。気にしないで呉れ給え。

しかし憂鬱だ。

異性とのいざこざに胸を痛める。それがいかに非生産的な事が、私は理解をしている。だがそれでも心のどこかで、時めきをもたらす異性との出会いを望んでやまない自分が居る。

瞬間。運命という名の静謐を一刺のもとに破らんとする彗星の如き奇跡が私の元に舞い降りた。

逞しく生気漲る肉体に精悍な顔付き。炎の燃える瞳はナポレオン、シーザー、大和武尊。歴戦の勇士をも連想させる。

そんな益荒男が突如として私を見つめ、言ったのだ。

「俺と付きあわね？」

此処が全ての始まりに違いない。私は確信すると共に、彼の手を取った。

「完璧じゃないか」

もうこれもらったわね。今年の芥川賞。

私は確信すると共に、封筒をポストへ投げ込んだ。

だがその四日後。原稿が私の元に戻ってきた。

書いた住所も、部署名も正しい筈だった。何度も見直したから間違いない。にもかかわらず何故か原稿が私の元に戻ってきたのだ。

封筒には手書きで“宛先間違い”の文字。

意味が分からず、私はしばし思案を重ねた。

『イラスト したら負け』(ss)(後書き)

ショートショート「イラスト したら負け」をお読みくださりありがとうございます。もう最後まで読んでくだされば……それだけで感謝の一作。

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理) (前書き)

このお話は『三千世界』『水平思考ゲーム』前後編との関連を含みます。ご了承ください。

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理)

第一話 開戦二時間前

「どうぞ」

ノックに対する返事がなされるや否や、白いスライド式の扉が音もなく開かれた。

「気分はどうだい」

入室した白衣の男が少女に語りかける。

「うん……」

少女は笑顔を作った。だが、言葉は続かなかった。

「薬はきちんと飲んでいるね？」

男の言葉に小さな頷きが返された。細いブロンドの髪がふわりと揺れた。

そんな少女の額に男の大きな手のひらがそっと当てられる。ひんやりとした感触に少し驚いたのか、少女はぴくりと身体を震わせた。

「大丈夫そうだ」

そう言う男はようやく表情を崩し、微笑を浮かべた。だが少女は視線を落としたまま、男に視線を合わせようとしなかった。

男には憂いを帯びた表情の理由が分かっていた。医者として、また父として、誰よりも傍で彼は少女と接してきたのだ。それも今日でちょうど二年になる。

右の拳を硬く握り歯を食いしばりながらも、男は微笑を維持した。「大丈夫。ミレイユの病気は、もうすぐ治せるようになるから」

「ありがと」

「今度のは、本当だぞ？」

え。ミレイユは小さく呟いて男の瞳をじっと見た。

「本当？」

「本当だ」

「本当に本当？」

「本当に、本当だ」

男はそつと少女の手を取った。男よりもずっと小さくて熱を帯びた手のひらだった。

「パパは、ミレイユに嘘を言わないよ」

言いながら男はその手に力を込めた。せめて胸に秘めた気持ち、愛する娘に伝わるように、と。

「わたし、またおうちに帰れるの」

少しだけ光を帯びた瞳が男へと向けられる。

「お外にも出られる？」

「うん」

「動物園にも行ける？」

「ああ。行けるさ。一緒に行こう」

「うう……」

頬がほんのり上気したかと思うと、ミレイユは勢いよく男の胸に顔をうずめた。

そんな娘の頭を男がそつと撫でる。彼は意識していないが、いつもより長く撫でていた。

「じゃ、お仕事に行ってくるよ。いい子に待っていてられるね？」

「うん。……あ、パパ」

立ち上がり、背を向けた男の白衣が少女の細い指先につままれる。

「動物園。」

「約束、だよ」

「。」

「ああ。約束する」

男は振り返り、もう一度だけ少女の頭に手をのせた。

「お仕事が終わって帰ってきたらお休みをもらうよ。そしたらきつと行こう」

「うん！」

男の言葉に少女は屈託のない笑顔を見せた。一片の疑いもなく、男の言葉を心から信じている顔だった。

そんな少女の笑顔に見送られるようにして男は病室を出て、そつと扉を閉めた。

腕時計を覗くと、外に待たせていた二人組みのうち青年のほうに彼に言葉をかけた。

「二十時。ゲームに挑むまで残り二時間ある。もういいのか」
青年の言葉に、「問題はない」とだけ言って、脇に立つナースへ白衣を預けた。

「我々はゲームに勝つのだ。何をセンチメンタルになる必要がある。それよりMr・タキヅカ。君のほうこそ覚悟は出来たか」

「何も問題はない。ただ……」

男の言葉を借りるようにしてタキヅカが返す。

「作戦の最終確認だけしておきたい。構わないか」

「ああ。」

あまり人に聞かせるような話じゃないな。院長室へ行くか？」

「いや、すぐ済む」

茶色の表紙の本を取り出し、タキヅカは紙面に目を落とした。メモ帳、だろうか。しかしそれにしても随分とサイズが大きいな。男はそんなことを思った。が、特に言及することもなくタキヅカの言葉を待った。

「これから俺とデイサン……あんたの二人で例のカジノへ乗り込む。目標は“水平思考ゲーム”での三連勝。元手の二千万を一億六千万まで伸ばすことだったな」

「そつだ」

「そして同時に俺のほかに依頼した二人の勝負師が、別の国営カジノに勝負を挑む。そこでこの腐った国営カジノに大打撃を与えてやれば、あんたの標的……カジノのオーナーを権力の座から引き摺り下ろせるって寸法だ。

ここまで間違いはないか」

「ああ。他に依頼した勝負師もすでにスタンバイが完了している」
デイサンが頷きつつ答える。

「仮に我々以外の二名が敗北したとしても、我々が挑むセントラル
カジノへのダメージが大きければ、奴へ責任追及の手が及ぶのは間
違いないはずだ。」

そして一億六千万があれば君への報酬を差し引いても、娘の治療
へ費やせる十分な資金が手元に残る。

要は……」

「最低限、俺らは勝たなきゃならないってことだな。例えどんな手
を使っても」

分かっているじゃないか。

そうとでも言わんばかりにデイサンは笑みを浮かべた。つい先ほ
どまで娘に見せていたそれとはまったく異質の笑みだった。

「一流の勝負師である君の手腕には期待している。」

では、二時間後に例の場所で」

そう残し、デイサンは長い廊下の果てに姿を消した。そんな彼の
後姿をタキヅカはナースと共に見守った。

「いよいよね」

ああ。聞こえるか聞こえないかという程度の小声でタキヅカが相
槌を返す。

「傷は癒えたかしら」

「頭は普通に働く。多少は痛むが、ゲームをするのに支障はない」
撃たれた横腹に手を当て、タキヅカは応じた。二週間前。これか
ら挑むカジノからの刺客から襲撃を受けた際に負った傷だ。

「この傷の礼もきっちり片をつけなきゃならない」

そう言ったタキヅカの目には静かな闘志が漲っていた。報酬だけ
の問題ではない。彼も彼で、このゲームに負けられない理由がある。
ナースは彼が手にする本に視線を向けた。

「あなたの目標は水平思考ゲームに勝つこと。」

ただ……今回の勝負が単なるお金のやりとりで終わるとは限らな

い。ゲームに勝ち、無事に帰るまでがあなたの任務よ。分かっている？」

「当然だ」

「家に帰るまでが遠足よ？」

「遠足なんて微笑ましいものとはかけ離れているけどな」

まあ一応。タキヅカはそんな前置きを置いて頭を掻いた。

「その辺りの対策をあの男……デイサンが怠っているわけがない。

俺は俺でゲームに集中するさ」

信用でも信頼でもない。しかし相応の確信を持ってタキヅカは答えた。

「叩き潰してやる」

ぱたん、と携帯電話を閉じてポケットに仕舞う。そうして先ほどデイサンが向かったのと同じ道に行く。

すれ違い様、タキヅカの表情に緊張と、そしていくらかの高揚が混じっているのをナースは見た。

異世界の勝負師タキヅカ。対するは極上の難関“水平思考ゲーム”

この結末はどこに向かっているのだろう。そんなナースの疑問に答えを出せる者は、まだどこにも存在していなかった。

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理)

第二話 水平思考ゲーム

誰もが固唾を呑んでその瞬間を見守っていた。

煌びやかな空間が嘘のように静まり返り、勝負の結末を見守らんとしている。

衆人環視の中、二人の男に正対するディーラーは額に汗を溜め、震える唇を開いた。

「正解」

会場が一気にどよめく。黒い皮の背もたれに腰を預ける青年の目の前に、山のように高く積み重ねられたチップが運ばれた。

「これで八千万。目標の額まで、あと一勝だな」

言って、タキヅカは脇に立つデイサンへ視線をやった。

「君に代打ちを依頼して正解だったよ」

デイサンが驚嘆の息を漏らす。タキヅカの勝負強さは依頼した彼の予想以上、そして圧倒的だった。

不可解なシチュエーションの真相を明かす推理遊び“水平思考ゲーム”。このカジノではプレイヤーに七回の質問の権利が与えられている。

そして質問の末、正解を言い当てる事が出来ればプレイヤーの勝ち。不正解ならばディーラーの勝利となる。

勝てば得られるチップは賭けた額の倍。そしてルーレットその他のギャンブルと比べれば運の要素が少ないというのがこの水平思考ゲームというギャンブルの魅力だ。だが出題はいうまでもなく難問。控除率は十%以下という極めて厳しいゲームのはずだった。

だがタキヅカはこれまでの二戦。実質、七つの質問を使いきることなく正解を導いていた。これはデイサンも含め、ギャラリー、デ

イーラー、そして本部の人間に至るまで誰も想定し得ない展開と言
ってよかった。

「さて……次の勝負で決着だ。

もちろん賭ける額は八千万。出題をして貰おうか」

タキツカの黒い瞳がディーラーを見据える。ディーラーは唾を飲
み、そつと胸元の集音機のスイッチを入れた。

「（アクシデントです。本部、聞こえますか。

私の手には負えないギャンブラーが現れました。すぐに応援を…

…！）」

ブラッド・パープルの液体を冷やす氷が、カラン、と甲高い音を
立てて動いた。

無数のモニターに囲まれた暗室。突如として自分のシマを荒らし
に現れた男たちの顔を一瞥し、グラスの酒を一気に喉の奥へと流し
込む。

「オーナー……！」

ノックの時間も惜しむかのように慌てた声が、扉の外で叫ばれた。

「アクシデントです！

アクアマリンホール“水平思考ゲーム”にプロと思われる連中が

……」

「見ていた」

オーナーは静かにボトルを傾け、グラスを唇に運ぶ。

「慌てることはない。

次は“あの問題”で確実に殺せ」

「あの問題……ですか」

「そして念には念だ。

メインゲート、及び隣接するホールへスタッフを集める。精鋭を
だ。無論、客には気づかれんようにな」

扉の外で黒服は息を飲んだ。だが決してオーナーの神経に触れな
い程度の間だけを置き「はい」と返事を返した。

外から聞こえる足音が遠ざかる。オーナーはもう一度、モニターに移る青年とその脇に立つ男へ視線を戻した。

「勝負師タキヅカか。姿が見えなかったがやはり生きていたようだな。」

そして……デイスン。ようやく私の首を獲りに来たか」

自然と唇が吊り上った。まるで獲物を罠にかけた狩人のように。「待ちわびたぞ」

静かな暗室に低く、重く、邪悪を孕んだ咳きが響く。

大画面に映し出された因縁の相手は二年前となんら変わらない。余裕の裏に殺意を押し込めた、彼好みの表情をしていた。

「準備が整いました」

第二ゲームが終わって十分弱が経過。ミネラルウォーターのグラスをバー・ガールに預け、タキヅカは再びテーブルに着いた。

「やけに時間がかかったのな」

「申し訳ありません。これよりすぐに開始いたしますよう」

含みを持たせたタキヅカの問いかけをも軽く流し、ディーラーは手元のリモコンを操作した。

ウィイ、と微かな起動音を立て、ディーラーの背後に飾られていた絵画が割れる。その奥に設置されていたのは、五十インチほどの大きなモニターだった。

「三問目は映像をご覧になって答えていただきます」

これまでもそうしてきたように、ディーラーがルールの確認を行う。

「映像を見た後に、私が出題を行います。七回以内の質問で真相にたどり着ければ貴方の勝ち。チップは一億六千万となります。」

逆に正解できなければ負け。賭けた八千万のチップは全額、没収いたします。よろしいですか」

「ああ」

「それでは開始いたしますよう。」

水平思考ゲーム第三戦。
“犯人と現金”

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理)

第三話 ” 犯人と現金 ”

雨のしとしと降る冬の深夜。資産家から現金を強奪した三人の男たちは、山奥のアジトにて祝杯を挙げていた。

手に入れた現金はなんと四億。たった一山の仕事にしては上々の額と言ってよかった。

「やったぜ。さっさと金を山分けしまおう」

「いや。今日はボスが来る。ボスを待とう」

ボスというのは彼らに計画を授け、このアジトを用意した人物だ。「どんな奴か知らないがいい気なもんだ」

彼はボスの姿を知らない。声も知らない。グループとボスのやりとりは全てメールでなされていたからだ。

そのボスが今夜、このアジトに現金を受け取りに来る約束になっている。

「扉には常時ロックがかかってるって聞いたが……ボスは入ってこられるのか」

「いや。合言葉を言って内部から扉を開ける手筈になっている。ロックのナンバーはアジトの管理を任されている俺が一時間ごとに変えているからな。内部からは開閉ボタンひとつで開けられても外からはナンバー無しじゃ絶対に開けられない。

けど……それにしても遅いな。もう約束の時間を三十分も過ぎているぞ」

「もう俺たちで山分けしまうか？」

「それ、いいな。したら一人あたまで一億三千万か。涎が出るな」

「お、おいおいお前ら。何言ってるんだ」

「冗談冗談。って、お？」

急に明かりが落ち、辺りが暗闇に包まれた。

「停電か？」

「じきに復旧するだろ」

「いや、ここのは自家発電だ。待っていても元に戻らない。

こんなときのために俺が用意しておいたランプがあるからこれで

……」

パシユッ！

瞬間、何かが破裂するような音が響いた

「何だ？」

ランプを持った男“C・ボンド”がすぐに明かりを付けた。そしてすぐに違和感に気が付く。

さっきまでソファに腰掛けていた仲間“A・ロビン”が胸から血を流して倒れていたのだ。

「や、殺られたのか」

「。息をしていない」

「くそおつ！ どっからやりやがった！？」

非常事態を目の当たりに“B・ジョナサン”が叫んだ。

この部屋に窓はない。そして人が隠れるスペースもない。

この部屋ひとつしかないため、一応、出入り口の扉は彼らのすぐ傍にある。

「さては明かりが付く前に逃げたか」

あの薄暗い中で人を狙撃し、そしてすぐに扉から逃げる。そんなことが可能だろうか。そんなことを考えつつ、

「いや」

軽い否定を返しC・ボンドはランプを持ったまま扉の傍に行つた。
「この扉は電子ロックだ。電気が復旧していない今、壊さない限りは開け閉めできない。

そして扉は壊されているところか傷一つついてはいないようだ」

「え……じゃあ“A”を殺した奴はどうやって外に出たんだよ」

「室内に居るとしか考えられない」

「え、でもこの部屋に隠れるところなんかないぞ」

「そつえばお前、さっき分け前がどうのって言ってたよな…

…？」

え……？ 仲間の不穏な声調にB・ジョナサンが思わず息を呑む。

「お、俺じゃないぞ！ さっきのはあくまで冗談だ！ 殺すなんて考えてない」

「でも殺れたのはお前だけだ。俺ではないのだからな。お前しか居ない」

C・ボンドがランプを置き、銃口を向ける。

「残念だよ。仕事の上の付き合いだが、仲間だと思っていた」

「お、俺じゃない！ 本当だ！ 信じてくれ！」

「言い訳ならあの世で聞かさ。

ではな」

それだけ言つて、C・ボンドは引き金を引いた。薄暗い中でも、撃った弾丸は正確にB・ジョナサンの急所を捉えた。

一発で十分だった。B・ジョナサンはすぐに呼吸をしなくなった。

「こんなになつてしまったのではもうボスを待つ意味はないな。現金は俺がいただくことにして、さっさとドアを破り退散させてもらおう」

そう言つてC・ボンドは現金の詰まつたジュラルミン・ケースを手にする。

まだ室内には資産家から奪つたものやら武器やらが残されていたが、現金だけで十分だと彼は踏んだ。

「さて。とつととおさらばさせてもらうことにす

パシュ

最後の最後。C・ジョナサンはA・ロビンが撃たれたときと最初

に聞いた音と同じ音を聞いた気がした。

しかしそれを理解しようとしたところには、もう彼の神経は機能を碌に果たしていなかった。

床に伏し、胸から液体の流れ出る感覚を味わう。そうしてようやく、C・ボンドは自分もまた撃たれたことに気が付いたのだ。

どこからかわからないが、誰かが室内を歩く音が聞こえた。すぐ傍の入り口の扉はやはり壊されていない……にもかかわらず、狙撃をした何者かが部屋の中にいる。

霞む視界の先。彼は最後に見た。目を疑ったが確かに見た。

「馬鹿な奴らだな。まんまとかかった」

それは最初に死んだはずのA・ロビンの姿だった。彼は最初に何者かに撃たれたはずなのに。

嘘だ……。ろ。

声にならない声がC・ボンドの口から漏れる。彼の意識はそこで完全に途切れてしまった。

翌日。現金強奪の犯人が使用していたと思われるアジトから死体が見つかった。

アジトの扉には強力なロックがかかっていたが、特殊な工具を使うことで警察は内部に侵入することが出来た。

室内の死体は三つ。

一体目の死体はB・ジョナサン。体内に残された弾丸と銃の種類から、彼はC・ボンドの持っていた銃の弾丸を受けて死んだらしいことがわかった。

二体目の死体はC・ボンド。彼はA・ロビンの銃弾を受けて死んだらしいことが同様の調べでわかった。

最後の死体はA・ロビン。ソファに腰掛けた状態で見つかった。彼の死体から摘出された弾丸は、彼の持つ銃のものと一致した。身体から硝煙反応も出ていることから警察は自殺の可能性を考えた。

ただ……奪われた現金四億円はアジトから見つからなかった。考えられる場所を搜索したがついぞ見つかることはなかった。

警察は現金四億の行方と、犯行時の状況について現在も捜査を続けている。

「さて、ここからが問題です」

映像を止め、ディラーが最後の課題を提示する。

「密室に現金を強奪した三人の男がいます。

最初にAが倒れました。仲間を疑ったCが、Bを撃ちました。そして現金を奪って去ろうとしたところを、最初に撃たれたはずのAが、Cを撃ちました。

しかし次の日。警察が密室に踏み込んだところ、犯人は三人とも死んでいました。ただし現金は見つからずじまいでした。また扉も警察が踏み込むまで壊された痕跡はありませんでした。

“何故このような事態になったのか”

質問は七度。私は質問に対し“Y e s”か“N o”かのみで答えします。

また回答のチャンスは一度きり。

さあ、存分に真相を明かしてください」

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理)

第四話 不可解。あるいは理不尽

“水平思考ゲーム” ファイナルゲーム開始。

タキヅカは口元に手を当て、思案を始めた。

「密室殺人というやつか」

デイサンの言葉に、タキヅカが「ああ」と小さく呟く。そして出題された内容の要点を反芻し始めた。

「不可解な点は三つだ。

一つは最初に撃たれたはずのA・ロビンが、C・ジョナサンを殺したこと。

二つ目はアジトにいた犯人グループ三名が全員、死亡していた状態で発見されたこと。

そして三つ目は出入り不可能の密室から四億が消えたことだ。

電子ロックは停電中の開閉は不可能。また電気が通っていても外からの開閉はナンバーがなければ不可能。

扉は警察が踏み込んだそのときまで壊された痕跡がなかったんだっか」

映像を見ている途中も碌にメモを取ろうとすらしなかったタキヅカだが、情報は全て頭に叩き込まれているようだった。その記憶力にギャラリーの一部がざわめき舌を巻いた。

「一つ目の質問だ」

「もう良いのですか」

いきなりの宣言にディーラーは思わず確認を取った。頷くタキヅカ。デイサンはその脇で口を挟もうとするそぶりすらも見せない。ゲームの駆け引きに関し、全幅の信頼をパートナーに寄せる覚悟が現れていた。

「一つ目の質問。」

停電が起きたのは、偶然か」

意図を図りかねている様子のギャラリーがわずかにどよめく。だがデイサン、ディーラー含む多くの人間はタキヅカの狙いを正確に読み取った。

「Noです」

タキヅカの視線が再び手元に落とされた。思考する際の癖のようだった。

「成程。となれば、三人が死んだこと、そして現金が消えたことまで最初から誰かの狙い通りだったってことになるな。」

それがはつきりしてよかった」

“偶然というイレギュラーがいちばん怖い。どんな謀^{はかりごと}も神の気紛れの前には無力だ”

それはいつかタキヅカが教えられ、自分自身でも痛感してきたことだった。この質問から分かることはさして多くない。それは彼にもわかってる。

だが彼は貴重な権利使い安心を手に入れた。運や勘じゃなく、思考の冴えで問題を突破できるという確認を取ることができたのだ。これが彼の精神にゆとりを与えたのは間違いない。

「二つ目の質問だ」

畳み掛けるように質問が重ねられた。一つ目の回答はタキヅカの予想、いや期待通りだったのだろう。思考に滞りは見られなかった。

「Aの死は、BとCの死よりも後か」

その質問がなされた瞬間。ディーラーの眉がわずかに吊り上ったのをタキヅカは見た。

「Yesです」

それを聞いたデイサンがぽつりと呟く。

「Aが最後に死んだのは事実。ということ」

「ああ。最初に“撃たれた”と思われたのはAの狂言だったわけだ」
「ならば事件はAの計画によるものか」

言葉を返すこともせず唸ることもせずにタキヅカは視線をテーブルに落とした。

確かにAが死んだフリをし、疑心暗鬼に陥ったBかCが一方を射殺するように仕向ける。そして生き残っている仲間が油断したところを、隠し持っていた銃で撃つ。これなら死んだはずのAがCを撃った展開には説明がつくだろう。

だがその推理には疑問が残った。

「じゃあなぜAは死んだ？」

独り言かそうでないかはわからない。しかしタキヅカは簡潔に、この推理の穴を突いた。

「そしてAが死んだ後、現金が消えていた理由にも説明がつかない。これじゃ真相を明かしたことはないだろう」

「ふむ。」

では後から来るはずの“ボス”とやらがAを殺し現金を回収したと考えるのはどうだ」

「無理だ」

断言するタキヅカ。

「アジトの電子ロックは一時間ごとに書き換えられている。ボスが外からアジトに入るには誰かが中から扉を開けなきゃならない」

「ボスとグルだったAが開けたのでは」

「開ける理由がない。」

だってAは一人で四億を抱えている。たとえ最初はグルだったにしても、現金はすでにAの手元にあるんだ。わざわざボスを待つて取り分を半分にする理由はない。ボスが自分を裏切らないとも限らないし」

「成程」

デイサンは感心するように頷いた。タキヅカは誤答につながりうる思考のほつれをきちんと押さえているようだった。

だが不安要素がないわけではない。これまで淀みなくなされてきたタキヅカの質問がここで少しだけ停滞した。

「。三つ目の質問だ」

わずかの間を挟んでようやく三つ目の権利が行使される。

「AがCを殺したのは、四億を独り占めするためか」

これまでとは変わったアプローチの質問がなされる。

ディーラーは

「Noです」

そうはつきり答えた。

「何？」

タキツカの質問が何を狙いとしているか。わからないながらも沈黙していたデイサンは思わず呟きを漏らした。

「金目当てでは……ないというのか」

視線が向けられる。だがディーラーは何も答えず、ただ次の質問を待つスタンスのようだった。

「ただでさえ不可解な密室を解かねばならないというのに、そのうえ不可解な動機……だと？」

デイサンが押し黙るのも無理はなかった。

タキツカも含め、場の誰もがこの出題を“現金が消えたロジック”を解くものと認識していた。だがここに来て、課題が増えたのだ。それも質問の権利を三つ消費した状況で。

「デイサン」

タキツカが珍しく自分の方から言葉をかけた。その口元にはわずかな震えが伴っていた。

「相談がある。少し、いいか」

最終ゲーム中盤。快進撃と呼ぶに相応しい勝利を収めてきたタキツカがはじめてのタイムをかける。

表情は硬直しており、デイサンにも相棒の感情が読み取れなかった。

タキツカがずっと手元に置いていた本だけを抱え席を立つ。デイサンもまた黙ってチップを預け、相棒の背中を追った。

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理)

第五話 制する策

ディーラーにチップを預け、タキヅカはデイサンと共にレストル
ームへと向かった。

「どうした」

デイサンの問いにタキヅカが辺りを伺う。周囲に人影が無いこと
を確認すると、彼は躊躇無く口火を切った。

「このゲームの勝ち筋は見えた」

「それは結構」

問いたいことはいくらでもあった。先ほどの三つの質問で、タキ
ヅカに何が見えたのか。むしろ不利になったとさえ思える展開から
どう勝利へと導くのか。デイサンにはまるで理解ができない。

しかしデイサンはあえて聞くことをしなかった。必要なことはタ
キヅカのほうから話すだろう。この場の積極性は野暮でしかない。
それを彼は知っていたからだ。

「しつこいようだが、最後の確認だ」

タキヅカは指を立てた。

「あんたの目的はゲームに勝ち、現金を持って無事に帰ることだ。
その目的を達成させるため俺はゲームに勝つ。そして確実に奴^{カシノ}か
ら一億六千万を奪ってやる。そこまでは約束しよう。

問題はその先だ。あんたは無事に小切手を持って安全なところま
で向かわなきゃならない。その算段はついているんだな」

言いながら、タキヅカはほんの数時間前。病室前の廊下で微かに
聞こえてきたデイサンと彼の娘のやりとりを思い出していた。

「いきなりの告白になるが俺はゲームに勝ったら姿を消す。そつい
うトリック……というか、力を持っているんだ」

「 どういうことだ? 」

デイサンの問いにタキヅ力は少し言葉を選ぶようなそぶりをみせた。が、考えの結果は芳しくなかったようで、大きなため息をついて再び口を開いた。

「俺の任務は“ 水平思考ゲーム” に勝つことまで。それが終われば、俺は俺の世界に帰ることができる。この本を使つてな」

そう言つてタキヅ力はずっと手にしていた茶表紙の本を掲げた。金の文字で書かれた『 水平思考ゲーム 』の文字が、電灯の明かりを反射させていた。

「難しいことはここじゃちよつと説明できない。けど分かつておいて欲しいのは、このゲームに片がついたとして、その後の保障までは出来ないってことだ。」

だから聞いた。最後は、あんた自身の力でこの戦い完全勝利へと持つてくことができるのかつて」

「 舐めるな」

呟くと、デイサンはタキヅ力の視線に自分の視線を絡ませた。鷹のような眼光、と表現するのに差し支えない鋭さを孕んでいた。

「余計なことを考える必要はない。君は君の言つとおり、ゲームに勝ちさえすればいい」

「 いいんだな」

「 構わない。」

最後は私自身の力で、対決を制してみせる」

相棒の言葉に、タキヅ力は「わかった」とだけ返した。それ以上は何も聞かなかった。

デイサンがどういう仕掛けをうっているのかタキヅ力にもまるで見当はついていない。ただ彼の言葉は、確かに何かを覚悟した男の声だった。

だから黙っていた。それで充分だったからだ。

「待たせたな」

ギャラリーを一瞥し、再び勝負の場へ戻る。様子は席を外す前とさほど変わってはいないようだ。それを確認し、タキヅカはディーラーと正対する。

「袋小路は破れそうですか」

手に詰まってタイムアウトを取った……ディーラーはそうのように捉えていたのだろう。二人を前に作り物の笑みを浮かべた。

「まさか」

意趣返しのもりか、タキヅカもまた余裕の笑みを浮かべた。

「最初から追い込まれてなんかいないさ。」

四つ目の質問だ。

Aが死んだ場所は、アジトの外か」

タキヅカの質問は、Aが室内で殺されたまま放置されたのか。あるいは外で殺され、アジトに戻されたのかを確かめるものだった。

「NOです」

質問にディーラーが答える。

こんな質問で何が分かる。まるでそうとでも言わんばかりの、嘲りの混じった笑みを作って。

だがそんな表情が、次の言葉で凍りつく。

「一 停電が起きたのは偶然ではない。つまり三人の死は誰かの計画通り。」

二 Aが死んだのはCより後。つまりAの最初の狙撃は狂言。

三 Aの目的は四億の独り占めではない。これはつまり、「共犯者がいる」ということ」

「何？」

デイサンの反応にやや遅れて、ギャラリーからも疑問の声が上がる。それに応じるような形で、タキヅカは再び考えをまとめ始めた。「俺が確認したのはAの目的が“四億の独り占めではない”ということだけ。つまりAは奪った全額を自分のものにしようとは思えなかった。それだけのことだ。」

では残りの金はどうするのか。決まっている。共犯者に渡す以外にないだろう。

そして四つ目の質問で、Aはアジトの中で死んでいたことがわかった。

だが外からは誰も入れない。これはつまり“共犯者は最初からアジトの中にいた”ってことだ」

予想だにしない推理がタキヅカの口からなされ、会場のざわめきが一層大きくなる。

ただ誰もがタキヅカの意図を理解できない中、ディーラーだけが胸中に燦る焦りを必死で噛み殺していた。

「アジトには三人の男しか居なかったんじゃないのか!？」

「部屋には隠れる場所もないんだろう……?」

「いや」

雑音を一蹴するかのようにタキヅカが追撃の質問をぶつける。

「アジトには三人の“男”が居る。三人の“男”が、ね。では五つ目の質問だ。

“男”ではない何者かが、このアジトにはいるんだな？」

核心を穿つ一撃。タキヅカの質問はそう呼ぶに相応しい威力を持っていた。

会場が静まり返ってディーラーの言葉を待つ。

「YESです」

ディーラーの声に、わずかな震えが伴っているのをデイサンは聞いた気がした。

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理)

第六話 真相

タキヅカの思考はこうだ。

アジトには誰も入れない。……ならば黒幕は、最初から部屋の中にいたのではないか。

疑えば映像の違和感を嗅ぎ付けるのは簡単だった。薄暗い部屋の中、描写されるのは三人の“男”の挙動ばかり。不可解な状況もすべて男たちの台詞がそう思わせるだけなのだとタキヅカには気がついていた。

「で、ではなぜAが倒れた直後、その“女”はBとCに疑われなかったんだ!？」

ギャラリーの誰かが声を上げた。

「そ、そうだ。Aが倒れた直後、CはBだけを疑った! 女のことを一言も口にしていない!」

彼の言うことももつともだ。確かに三人の男の他に女が最初からいたとすれば、女がAを撃った容疑者からはずれているのはおかしい。

だがそんな更なる不可解も、テーブルに向かう男にはすでに答えの目星がついているようだった。

「女は立场上、Aを撃つ事など不可能と思われた人物だったからさ」

「不可能と思われた……?」

「ああ」

「武装していないはずの人間ということか? しかしそんな人間がなぜアジトに」

「その人間がいたことこそが、現金強奪を成功させた鍵になるからさ」

方々から疑問の声が沸き立つ。しかしプレイヤーのタキヅカは至って冷静に、

「資産家から四億。どうやって奪ったか」

そう言つて人差し指を伸ばした。

「現金を力技で奪う方法はいくつもない。それも四億なんてぶっ飛んだ額だ。個人が一箇所に保管しているケースなんてありえない。

犯人は資産家に“四億を用意させて奪った”そう考えるのが妥当だろう。

ではなぜ資産家は犯人グループの都合のよいように四億を集めたのか。そしてアジトにいる女性とは何者か」

丁寧な正確に、宝石を削りだすようにゆっくりと論理が詰められてゆく。

現金強奪の手段という事件の背景に着眼し、かつ、女がアジトにいた可能性を確かめた。

その時点で勝負は大勢を決したといつていい。だがタキヅカはあくまでも抜かりなく、コンマ数パーセントの“負け筋”をも完全に塞ぐよう思考した。

「強奪の手段と女の存在を結びつけて考えるのが妥当だろう。

六つ目の質問だ。

犯人グループが資産家から現金を強奪した手段は、“誘拐”じゃないのか」

もはや質問ではない。確認だった。「YES」そう答えるディーラーに対しても、「ほらな」の一言だった。

「ではまさか」

タキヅカが小さな頷きをディサンに返す。

「ああ。アジトにいたのは“女の人質”さ。BとCの二人も拘束されているはずの人質がAを撃つたなんて疑えない。そしてそいつが今回の黒幕さ。

ここまで来たら後は確かめるだけだな」

視線を戻すと共に、唇が動く。

“止めだ”
とど

何も聞こえなかったが、そう言っているようにデイサンには見え
た。

「最後の質問だ。」

アジトには最初から人質のふりをしたボスがいた。そいつがグル
だったAを殺し、現金を持ち去った犯人だ。

正しければYES。そうでなければNOと答えろ」

喉元に刃物を突きつけるような一言。

「YES」

返されたディーラーの声はまるで蚊の鳴くような声だった。

「おおっ！」

熱を帯びていた会場が沸く。誰もがタキヅカの勝利を確信した。
そんな中デイサンだけが冷静に、タキヅカへ問う。

「Aと人質がグルなのはわかった。」

ではなぜAは人質、いや、ボスを殺さなかった？ 殺せば金を独
り占めできるんだろう？」

「四億を独り占めするのが目的じゃなかったからさ。」

Aが欲しかったのはおそらく金と“人質の証言”。つまり安全だ。
ボスは一貫して人質の立場だ。そいつがでっ上げの証言をすれ
ば、Aは金を得られて、なおかつ先の安全が保障されるって算段だ
ろっ」

「成程な。女は自分の家から四億を奪おうとしていたわけか」

「そうだ。家の財産が四億あるのと自分が個人として四億を持つ
のは違うからな。」

さ、決着の時間だ」

鋭く対決の相手を睨んでいた瞳がそっと閉じられる。

「答え合わせをしよう。」

最初にAが倒れたのは狂言。BとCが仲間割れするのを待ち、B
を殺したCが油断したところを殺した。

そして人質であり共犯者の“ボス”の縄を解いたところ、ボスに

撃たれてしまった。

停電は意図的なものだから、もちろん復旧させることはできる。ボスは停電を復旧させ、予め用意しておいた別の場所に現金を移して隠した。

そして後は警察に保護されるのを待つだけ。現場の状況はそれらしいことをでっち上げたか、分からないとも言ったんだろう。

これが事件の真相だ」

推理の果てに行き着いた回答を澁みなく口にする。

最後は流石にタキヅカも固唾を呑んでディーラーの宣言を待った。

一秒が長く感じる。張り詰めた空気が火照った肌をひりつかせる。吐き気のしそうな緊張だった。

こればかりはいくら修羅場をくぐってもなくならないな。

そんな思いを押さえ込み、タキヅカはゆっくりと瞳を開いた。時を同じくしてディーラーの口が開かれる。

「正解です」

宣言と共に倍近くの高さへと積まれたチップがタキヅカの目の前に置かれる。

後はもう歓喜の爆発だった。

耳をつんざくような拍手が大勝負を制した青年へと向けられる。

「見事だ」

脇に居た相方の声すらも届かない。タキヅカはただほっとしたように肩を下ろした。そしてデイサンを振り返り、本当に珍しく満面の笑みを向けた。まるで少年のような笑顔だった。

『終わったか。』

いや、此処からが始まりだな』

カジノ三階最奥。President section。

現場の大騒ぎをモニター越しに見ていた男は、目いっぱいグラスを傾け、ソファを立った。

『鼠狩りの始まりだ』

狂気を帯びた眼光の先には小切手を受け取るデイサンの姿が映っていた。

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理)

第七話 鳥籠と銃口

午後二十二時。水平思考ゲーム決着。

タキヅ力は全てのチップを換金し、小切手をそのままデイサンへと渡した。

「ご苦労だった」

改めてデイサンがねぎらいの言葉を口にする。だがタキヅ力は首を小さく横に振った。

「まだだ。こいつを無事に持ち帰るまでがあんたの仕事だろう」

「ああ。……そうだったな」

小切手がタキヅ力の手から離れる。手のひらからは小切手が消え、代わりに指輪が載っていた。ピンクの大きな石が光を受けて輝いている

「君の分の報酬だ。少なくとも五百万にはなる」

五百万。タキヅ力の馴染み深い通貨である日本円に換算して約六千万円。あらゆる修羅場を潜り抜けた彼にも手にしたことのない価値のものだった。

「報酬は別に後でも……」

「お別れだからな」

囁きがタキヅ力の耳に届く。彼にだけぎりぎり聞こえる絶妙の小声だった。

「会場の外に迎えを用意している。が、待ち伏せをされたら厄介だ。私はすぐにここを去る。」

君はここから消え去ることができるんだったな」

「ああ」

「なら問題はない。」

達者でな」

白い歯を目いっぱい見せてデイサンが笑う。
そして小切手の入った封筒をひらひらと振った。かと思うと、そのまま早足に群集を掻き分け、人ごみへと消えた。

「何だよ」

気がつくのと眩きと共にタキヅ力は胸元を押さえていた。パリッと決めた漆黒のスーツにしわが寄るのも厭わず、思いきり力を込めていた。

「何だよ。あの笑顔」

焼きついたデイサンの姿が臉から消えない。まるで心をさらけ出すような笑顔が、タキヅ力の胸を騒がせた。

「あいつがあんな顔……」

柄じゃないだろう」

ここから先の行動に、思考はなかった。

タキヅ力はほとんど闇雲に、消えたデイサンの姿を求め駆け出していた。

一階、ルーレットホール。

デイサンは予め調べておいた最短距離を辿り、カジノの出入り口へと向かっていた。

早く。一秒でも早く。

頭に娘の顔を浮かべつつ、人ごみを掻き分け一目散に進む。焦りもあつたのだろう。ときどき、人とぶつかることすらあつた。「……っ」「すまない」そんなやりとりを何度か繰り返し、ようやくルーレットホールを抜ける。

この先のフォレストホールを抜ければエントランスだ。敵が外へ刺客を配置する前に、一刻も早く外へ……！

ルーレットホールの先。フォレストホールの客はまばらだった。特に障害もなく進める。そんなことを思っていた矢先だ。

デイサンの肩を後ろから掴む者がいた。

「タキヅカ？」

先ほど別れた相方を姿に目を丸くする。

「何をしに来た」

「……」

息が整っていないのか、タキヅカは肩を上下させるばかりだった。口は微かに動いているが言葉になっていない。

「。君の役割は済んだ。もう私といることはない」

掴まれた肩を払おうとする。だがその手は離れなかった。尋常ではない力が込められていた。

「早く行け」

手を引き剥がそうとしながらデイサンは言った。言葉は確かにタキヅカへと向けられている。だが視線は自分の周囲へと移されていた。

「いいから早く」

「何をそう慌てている」

タキヅカは背後から、氷のように静かで、重たい性質の声を聞いた。

顔を上げる。デイサンの瞳孔が開いた状態で硬直していた。

「折角だ。遊んで行けば良いだろう。デイサン」

「ベンニー」

口からわずかに漏れた名前を聞き、振り返る。大勢のギャラリ―に囲まれるようにして立つ黒コートの大男。

この男が“ベンニー”。国営カジノの首領にしてデイサンの敵、ベンニー＝フェルドマンだ。

名前だけは知られていた。が、タキヅカが姿を見るのはこれがはじめてのことだった。

「おや？ 二年ぶりの再会だ。挨拶くらいはするものだろう」

「あんたがベンニー＝フェルドマンか」

口を開いたのはタキヅカのほうだった。ベンニーは濁ったブルーの眼球を少しだけずらし、葉巻を咥えた。

「Mr. タキヅカ。先ほどのゲームは堪能させてもらったよ。実に見事だった。

どうだ。私の下で働く気はないかね？」

「馬鹿を言え」

相棒の肩から手を離しながらタキヅカは言った。敵意を隠さない表情と声だった。

「今日の大損失であんたは失脚だ。雇う金なんか残らないだろうぜ」
「大勢を決する前から息巻く。」

少々の知恵は働くようだが、やはり鼠か」

ベンニーの顎が一瞬だけ動いた。

何かの合図か？ タキヅカが思った次の瞬間には、彼らを囲むタキシードとドレスの連中の数人が、デイサンとタキヅカのそれぞれに銃口を向けていた。

「おいおい。他の客がいる前で随分な真似を」

「客。客なア」

最強の抑止になるはずの指摘にもベンニーの表情は崩れない。様子がおかしいのはタキヅカにもすぐに悟ることができた。

「まさかこいつら全員……」

スーツの内側がじつとりと嫌な汗で満たされる。

「外までは安全と踏んだか？ ここが鳥籠の中ということすら忘れたか」

思考がまともに動き始め、敵の動きが少しずつ理解できてゆく。

おそらくベンニーは小切手を得たデイサンが最短距離で出口へと向かうことを読んでいた。そこでこの部屋だけを“貸切”にして、他の客を払ったのだ。

ベンニーはこのカジノの責任者だ。タキヅカに気づかれず客を全て出すことは無理でも、一部屋をスタッフの貸切にするくらいではない。

「二人相手にこの数か。大層な鼠狩りだ」

「いかなる弱者をも迅速に速やかに、確実に殺す。獅子のあるべき姿だ。そうは思わんかね」

「どうだかな」

軽口を叩きながらも、タキヅ力は手元の本を指で弄った。

いよいよ本格的に危ういな。本当なら今すぐにでも逃げ出したい……そんな思いが行動に現れたのだろう。

それでもタキヅ力は三千世界へと戻る呪文を言えずにいた。視界の端には、硬直したデイサンの姿が映っていた。

「さあ、そろそろ本題に入ろうじゃないか」

紫と黒の禍々しい指輪に彩られた指先がデイサンの手の封筒を指す。

「君らのために一室を貸しきったのだ。対価を戴かねばなあ」

銃口に囲まれた俺たちへゆつくりと歩みを寄せるベンニー。

唯一、タキヅ力達に逆転のチャンスがあるとすればここだった。もしもベンニーが二人を殺し、デイサンの死体から小切手を奪おうとしたなら勝負は決していただろう。ただ今なら、まだ命のある今なら、近寄ったベンニーを人質に取ってこの場を凌ぐことができるかもしれない。

タキヅ力は細心の注意を払って隙を伺った。が、どうにもならなかった。

ベンニーは横目ながら、タキヅ力から視線を離そうとはしなかったのだ。隙などまったく見つけられず、タキヅ力は封筒が奪われるのを見届けることしか出来なかった。

「チェックメイトだ」

囲んでいた銃の撃鉄が引かれる。

此処までか。

本のページに人差し指を挟み、タキヅ力は離脱と敗北の覚悟をした。

そのときだ。

「待て」

まさに放たれようとする銃撃に、待ったをかける声が届いた。

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理)

第八話 制する者

場を支配する男の静止が、引き金から指を外させた。

ベンニーが振り返る。そして膝を突くデイサンへ視線を戻した。

「どういうことだ」

封を切ったばかりの封筒がタキヅカとデイサンの目下に落とされた。

「こいつはダミーだ。いつの間にこんなものを用意した」
ダミー？

やり取りの意味が分からず、疑問の声がタキヅカの喉まで出掛かった。しかしそれを飲み込みデイサンの表情を覗くに留める。

ちらりと見た顔にはこの場に似つかわない、薄い笑みが浮かんでいた。

「一目で見抜くか。流石だな」

「馬鹿が。こんなもので私を欺けると思ったか」

遅れてようやくタキヅカが状況を悟る。デイサンはベンニーへ偽の小切手を渡したのだ。

「本物はどうした」

懐から見るからに重量のある拳銃が出される。銃口は誰にでも分かる急所。デイサンの額を捉えていた。

「出せ」

聞く者を例外なく竦ませそうなくらい有無を言わせぬ脅しだった。だがデイサンは端的に

「私の手には、もうない」

そう答えた。

冷静に考えればハツタリとしか思えない。事実、彼らを囲むスタ

ツフはそう確信していた。

だが至近距離でデイサンと向き合っていたタキヅカ。そしてベンニーの二人だけは、彼の言葉に、息を飲んだ。

「まさか貴様」

デイサンとタキヅカの二人がほとんど同時に一つの可能性に思い当たる。

ここに来る過程。人ごみの中でデイサンは大勢の客とすれ違っていた。

その中に“デイサンの仕込んだ人間が混じっていたのではないか”ひとつのトリックを連想したベンニーの表情が強張る。破かれた封筒を拾い上げ、デイサンは視線を落としたまま言った。

「お前たちの想像したとおりだ。」

本物の小切手は、カジノへ紛れ込ませた別の仲間へ渡している」

「。出入り口の客は全てマークしている。見慣れない客はスタッフが止める」

「じゃあその“スタッフ”とやらは、全員マークしているのか」
「何？」

「このスタッフは、“間違いなく例外なくお前の味方か？”」

ここまで語られ、ようやくほとんどの人間がデイサンの仕掛けを理解した。銃のグリップと接したベンニーの掌にじっとりと湿り気が溜まる。

「二年前。お前がカジノのオーナーに着任した日から私はこの瞬間を、この勝ち筋を思い描いていた。」

だがベンニー。お前は最後まで私の執念を軽んじていたな。ならば当然、気がつけなかっただろう？

“お前が此処へ来たその日から私の配下がお前の懐へ紛れ込んでいた”ことに

「貴様……っ！」

初めてベンニーが声を荒げる。だが時すでに遅し。デイサンがこの部屋に足を踏み入れてもう数分が経過している。デイサンが外に

迎えを用意していたとすれば、追ったところでもう間に合わない。

「私の配下はスタッフ専用出口から抜け、今頃は安全な場所まで避難した頃合いだろう。もちろん本物の小切手を手放すことなく、なわざわざダミーを用意したのも、ここまでのおしゃべりも、全て単なる時間稼ぎさ。」

悔しそうな顔をしているな。ならせつかくだ。言わせてもらおう」

デイサンは笑っていた。額に銃口を突きつけられながらも、彼は曇りひとつない顔で敵を見据えていた。

「私の勝ちだ」

それは腹の底から吐き出した高らかな勝利宣言だった。

「おおおおおおおおお……！！！」

激高。

煮えたぎる胸の内をそのまま形にしたかのような咆哮が、電飾に彩られるカジノの一室を奮わせた。

そして程なくして、赤い飛沫が絨毯にしみを作る。鉄の塊に殴りつけられた額からは、明るい色の血液がとめどなく流れた。

「デイサン……！！」

殴られた衝撃で二メートルほど吹っ飛んだデイサンの元へタキヅ力が駆け寄る。一瞬、覗きることができたのは穏やかな表情だった。すべての荷を下ろしたような、そんな安らかな笑顔だった。

「引き際だ。Mr・タキヅ力」

額をつたうものを拭おうともせず、デイサンは呟いた。

「狂ったベンニーがいつ引き金を引くか分かったものではない。

さあ、早くその本で戻るといい。君の帰るべき場所へ」

「あんたは……！！」

「私は目的を果たした。だが君はまだなのだろう」

言葉が、タキヅ力の背中を押す。しかしタキヅ力は本を開かない。

心が彼を踏みとどまらせていた。

「ひとつ聞かせてくれ」

「断る。時間が無い」

その言葉が誰のためのことを言っているのかはタキヅカにも分かった。しかし、タキヅカは言葉を変え、かまわず続けた。

「七つ目の質問だ」

「何を」

「あと一つ、権利は残っていたはずだな」

権利。

その言葉がデイサンの記憶を。

初めて二人が言葉を交わした日の約束を思い起こさせた。

七回。 “YES” か “NO” かで答えられればどんな質問にも答えてくれるんだな

それは水平思考ゲームの例題をデイサンが出題した際、タキヅカが確認した内容だった。

よく今になってそんな約束を……。

デイサンは微笑んだ。確かにあの日、タキヅカは質問を六つしか消費せずゲームを終えていた。この期に及んであんな小さな約束を覚えているなどは、彼も予想だにできなかったのだろう。

自分の見込んだ男に間違いは無かった。最後の最後。デイサンは彼に出会えた事を、信じてもない神に感謝した。

「七つ目の質問だ」

タキヅカがデイサンの瞳を覗き込む。

「命の保障もここに帰ってこられる保障もしない。

それでも、俺と一緒に来る気はないか」

「随分な誘い文句だな」

「どうなんだ」

「なぜ……」

力ない声が返される。

「なぜ危険を侵してまで私を救おうとする。君の目的はもう果たされたはずだ。」

それに君には帰る場所が」

「それはあんたも同じだろうが」

一呼吸の間も無かった。

「あんたを信じて待っている人間がいる。」

そんな人間が、こんなところで死んでいいはずがないだろうが」
強い口調だった。いや、強い声だった。

「時間が無い。三秒で決めろ」

タキヅカの右手で本が徐々に強い光を帯びてゆく。

ここで死ぬか、異世界へと飛ぶか。究極の二択を選ぶのに与えられた時間はほんのわずかの時間。

だがデイサンは顔を上げ、はっきりと答えを口にした。

その答えがタキヅカに届いたかどうかはわからない。

瞬間。どんな決意をもかき消す銃声がホールに鳴り響いていた。

撃鉄は落とされ、火薬の匂いがホールの空気に溶け込む中。

その場に居た全ての人間が、息を呑み、最後の結末を見届けていた。

『水平思考ゲーム ファイナル』 ? (推理)

第九話 意思

深夜一時五十五分。草木も寝静まる深夜の闇に、ヒールの甲高い足音が響いていた。

非常口の上に灯る明かりだけが彼女の足元をぼんやりと照らす。視界はおぼろげだった。しかし彼女の足取りに澱みはない。

毎日のように往復する道のりはもはや身体が覚えていた。ワンフロア四十を越える病室の並んだ廊下を抜け、ロツカールームのリーダーにカードを差し込む。

扉を開けると、彼女は明かりもつけずにスーツの上着を脱いだ。タイを外し、手袋を脱ぎ、手際よく衣装を変えてゆく。

彼女がいつものナース服へ着替えるのに数分の時間もかからなかった。変装道具の一式をロツカーへとしまつと、彼女はスーツの上着から、預かつた封筒だけを取り出して扉を閉めた。

『これを娘の元へ』

黒の装丁に金の茨が施された封筒。中には九桁の数字の刻まれた小切手が入っている。

これを彼女へ預けた男は「頼んだぞ」そう彼女に告げて消えた。この病院の院長、デイサンの下について五年。看護師の彼女がはじめて彼にかけられた言葉だった。

「。あと……一分」

腕時計の針を読む。デイサンが彼女へ連絡を入れるはずの時間まで残り一分を切っていた。

『無事に脱出できれば二時までには連絡を入れる。』

もしも連絡がなければ予定通り、私は死んだと思ってくれ』

打ち合わせの内容を思い返しつつ、携帯の振動を待つ。一秒が経

つのを惜しみながら待つ。

だが無常にも連絡はないまま約束の時間を迎えた。

それから五分。十分。それとほんの少しの時間を待ったが、デイサンからの連絡はない。女は結末を悟り、瞳を閉じた。

そうして方々の医療組織にメールを送信する。女はもう一度だけ携帯のディスプレイに目を落としてから電源を落とし、デイサンの娘、ミレイユの病室へと向かった。

形だけのノックを済ませ女が病室へ足を踏み入れる。ミレイユは安らかな寝息を立てていた。

空になった点滴を取り外し、新しいものへ取り替える。極めて静かに、そして迅速に。女の手際に一切の無駄はなかった。

もちろんそれはいつものこと。だからいつもなら、ミレイユに声をかけることもないまま女は夜勤の仕事へ戻る。

ただこの日だけはほんの少し勝手が違った。女は温かな頬にそつと手を触れると

「ミレイユ」

囁くような、しかし優しい声で少女の名前を呼んだ。

「あなたは、きっと幸せなのだと思う」

難病を抱えた少女が言われたことのない、いや、自分自身ですら思ったことのない言葉が女の口からこぼれ出た。

「幼くして母を失ったこと。たった五十人の医療ミスに引っかかってしまったこと。それらは確かに不運としか言いようがない。

それでも、あなたは最後まで愛されていた。ひとりの人間が命を賭けてあなたを愛していたわ」

娘と触れ合っていたデイサンの微笑が女の脳裏に蘇る。

変わるものなら変わってあげたいとか、私の命を代わりに、だとか。そういう犠牲を口にする人間を女は数え切れないほど見てきた。

だが実際に。現実には誰もが諦めた娘の命を最後まで諦めず、しかし自身の命を投げてまで守ろうとした男はデイサンの他に女は出会ったことがない。

“愛する者の為に”

その一念がいかに普遍的で、けれど形にしがたいものかは彼女もよくわかってる。女は昔を少しだけ思い出して唇を噛んだ。

「私はただのナース。ミレイユ。あなたにとって、私は父親の部下に過ぎない。

それでもデイサンの意思を預かった人間としてこれだけは言わせて」

女は小切手と、デイサンから預かっていた手紙を枕元に置いた。手紙は作戦が予定通り行われた場合に、ミレイユへ届けるよう指示されたものだった。

そして女が無垢な寝顔へ向き合う。少女の寝息はいつの間にか静かになっていた。

「あなたは深い愛情に生かされた。だから自分のことを誰より愛して生きなさい。

何を知っても、命あることを悔いては駄目。胸を張って生きなさい。

それが殉じた人間の愛情にあなたが報いる生き方だと私は思う。

あなたはきつと、それが出来る子のはずだから」

女の両手がミレイユの小さな手を握った。

少女の生きてきた数年間。父の前で堪えた涙を、拭い続けてきた強い手だった。

「さよなら」

音もなく腰掛けていた椅子を引く。そして女は病室を去った。

月明かりだけが深夜の病室を穏やかに照らす。

少女の頬の光るものが首をつたい、シーツに無色のしみを作った。

『水平思考ゲーム ファイナル』 終（推理）

最終話 終わりと始まり

目を覚ましたとき、彼は自分の知らない場所にいた。

光の差し込まないステンドグラスの天井に、本棚に囲まれた異様な空間。

自分の行き着いた先は地獄か。あるいは何かの間違いで、それ以外の場所に着いてしまったか。直前に聞いた破裂音を思い出し、デイサンは嘲るように笑った。

鈍い痛みを感じて額に手を触れてみる。固まりかけて結晶のようになった血液が指に付着した。

「撃たれては……いないのか」

上半身を起こし、デイサンは自分の身を確かめた。銃のグリップで殴られた箇所のほかには傷は見つけられない。どうやら最後の銃撃は自分の身を逸れたことを知った。

だが不思議に思う。デイサンは銃声を聞いたのだ。

今いる場所がタキヅカの本の力によってたどり着いた異空間であることは彼にも想像がついている。しかし銃声を聞いたということは、自分がここへ来るよりも先に、弾丸が放たれていたということだ。

幸運にも弾は逸れてくれたのだろうか。

あの至近距離で？ そんなに都合よく？

自分の身に痛みがないことが、逆に彼の不審を掻きたてた。そんな思いに触発されるかのように思考の霞が晴れてゆく。

「そうだ。タキヅカは」

最後の最後まで共に戦った相棒の姿がないことをようやく悟り、デイサンは立った。

迷路のような本棚の間を手探りで歩く。

途中。赤いカーペットに黒いしみを見つけた。黒い、水玉のようなしみだ。

なんの予感もなく、デイサンはそれを辿って歩いた。そうして歩いた先。彼はようやく、その場所へたどり着く。

広々とした円形の空間。ランプの灯るテーブルを囲むようにして本棚が放射線状に避けていた。

中央に人影が二つ。

一人は黒いフードとマントで全身を覆う異様な様相の者。そしてもう一人。仰向けになって床に伏す男は、デイサンのよく知る青年だった。

「タキヅカ」

覚束ない足取りで、横たわるタキヅカへと近寄る。接近に気がついたマントの人間は「お目覚めですか」そう声をかけたがデイサンは脇目すらも振らなかった。

「おい。タキヅカ」

膝を折り青年の顔を寄せる。閉じられた瞳に口元。動くことのない瞼。デイサンの主観ではとても穏やかな表情をしていた。まるで眠っているようにしか見えなかった。

彼の左脇に溜まる液体に気がつくことさえなければ。

「まさか……いや、なぜ」

瞼に焼きついた最後の瞬間がデイサンの脳裏に蘇る。

ここに来る直前。本当に最後の最後、ベンニーの銃口は確かにデイサンの左胸へ向けられていたはずだった。

見紛うはずなどない。死んでいたのは、デイサンのほうの“はず”だった。

「なぜだ」

デイサンはタキヅカの両肩を掴んだ。人形のように脱力したその身体がぐらりと大きく揺れた。

「なぜ君が倒れている。」

なあ。おい」

揺さぶり、揺らす。されど青年の瞼は開かない。

「死んでいたのは私のはずだ。私であつたはずだ。

これは何かの間違いだ。なあ。そうだろう。

だから、なのに」

「狼狽うろたえておられますね」

両手の本を閉じ、マント姿の者が言葉を発した。女の声だった。

「はじめまして。そしてようこそ。『三千世界』へ」

そう言つて差し出された手は不気味なほど白かった。

「わたくしはこの司書を務めさせていただいている者です。この世界は……」

「タキツ力は」

女の声を遮つたのは、デイサンの呟きだった。

「タキツ力はまさか」

言葉は最後まで続かなかった。しかし司書を名乗る者は「ええ」と端的に言つて頷いた。

「きつと貴方の想像通りでしょう。」

貴方があそこで撃たれる事は予定調和だった。わたくしの時も、貴方はゲームの数分後に死ぬパターンでしたから。

しかしその予定調和が、そこに眠る青年によって狂わされた。それだけのことです」

女の言う事はあまりに漠然としていた。きわめて不十分でもあつた。

しかし最後の瞬間に何が起きたのかを知るには、過不足のない答えといつてよかった。気がつくときデイサンは硬く握った拳を思い切り床に叩きつけ、そして叫んでいた。

「何故だっ！！」

死ぬべき人間は君じゃない……私だった筈だ！ 私は全てを成した。なぜ道半ばの君が倒れるっ！」

拳が床を打つ。何度も、何度も。皮膚は擦りむけ、手の甲に赤み

が広がっていた。

「死ぬべき人間は私だった。私だったのに」

彼はそう考えなかったからこそ、この結果なのでしょう」

司書が断言する。分かったような口の利き方だった。

「貴方はまだ娘との約束を果たせていない。待っている人間がいる。だから、彼は貴方が死ぬべきではないと考えた」

「だがそれは彼とて……」

「タキヅ力にはいません」

ほんの少し、司書の身体がタキヅ力へと向けられる。

「正確にはいたけれど、今はいない。そう表現すべきでしょうか。もう随分前のことになりますが、昔はタキヅ力にも守るべき人間がいました。あなたと同じようにね。」

これはあくまで憶測に過ぎませんが」

そんな前置きを挟み、司書がタキヅ力の髪を軽くかき上げた。

「彼はあなたの姿に自分の過去を重ね合わせたのではないでしょう。まだ守るべきものがあつたかつての自分を。」

だから体が動いた。意識も計算もなく。反射的に」

「馬鹿な」

「信じる信じないは貴方の勝手でしょう。」

しかし彼はそういう青年でした。ずっとね。それはわたくしも良く知っているつもりです」

前髪の上がつたタキヅ力の顔がデイサンの瞳には霞んで映った。

手を組み共に戦った青年が何を思っていたのか、今となつては誰にも分からない。ただデイサンに向けられたタキヅ力の言葉は、思い返せば殆どが自分ではなく誰かを気遣う言葉ばかりだった。

もしも。ほんの少しでも彼が他人へ非情になれたなら、運命は変わっていたかもしれない。

自分の身だけを案じたなら結末は違っていたかもしれない。タキヅ力にはそれが分からなかったのだろうか。それも今となつ

ては確かめようのないことだ。けれどデイサンは、司書の言うことが間違いではないだろうことを感じていた。

「彼に拾われた命をどう使うかは貴方次第です」

立ち上がり、司書が抑揚のない声で話した。

「いかがなさいますか」

「。私のすべきことは決めた」

視線はタキヅ力に向けられたままだった。だがデイサンの声は先ほどまでと異なり、はつきりとしていた。

「手段をこれから探る。」

司書、と言ったか。君はこの世界の事情に通じているのだろうか？
話せる範囲でいい。情報をくれ」

デイサンの返しに司書は一瞬の沈黙をした。が、「畏まりました」
すぐにそう言って一冊の本をデイサンの前に提示した。

「覚悟はありますか」

「ああ」

「それではお話をしましょう。まずは改めまして、ようこそ『三千世界』へ。

これから貴方は世界の真実を知ることになります。心して聞かれますよう」

そうして長い語り、長い長い彼の物語が始まる。

どのような物語になるのかは誰も知らない。運命でさえも。神様でさえも。

行き着く先はたぶん、彼自身の意思と力だけが決めるのだろう。

足元さえも薄い闇に覆われていた。それでもデイサンは前だけを見ていた。かつての相棒がそうしてきたように。

両肩に託された何もかもを背負って生きる覚悟の炎が、デイサンの瞳へ静かに灯っていた。

『水平思考ゲーム ファイナル』 終（推理）（後書き）

推理『水平思考ゲーム ファイナル』をお読みくださりありがとうございます！
ございます！

つ終わったあーっ！！ 予選含めて決着に半年もかかってしまいました
したが、なんとか書ききることができました。ここまでお読みいた
だいた読者の方々にただただ、感謝しております。

『幼女と偽善で全てを救えッ!』（ファンタジー）（前書き）

ジャンル「ファンタジー」 字数4300 4400

過去のお話からつながっています

『幼女と偽善で全てを救えッ!』（ファンタジー）

ええ、わかっていました。姉がちょっと変わった嗜好を持っていることくらい。

長い付き合いです。いくらかネジの緩んだ姉ということは存じています。子供の頃からそうでした。両親も心配していましたが、幼い頃の私も姉の過剰な可愛がり方には些少の違和感を覚えたものです。

いい姉であることに間違いありません。お菓子を分けてくれたり、勉強を教えてくれたり、いつも構ってくれたり接していて悪い気はしませんでした。加えて学力も運動能力も交友関係も文句なし。あの悪癖さえなければ自慢の姉と呼んでなんら差し支えはなかったことでしょう。

まあ悪癖といえど本人の自制次第でどうにでもなる程度のもの。常識と倫理を逸脱さえしてくれなければよかったのです。

それが。まさかこんな事態になるうとは。

「姉さま」

呆然と呼ぶ私から姉はばつが悪そうに目を逸らしました。

そんな姉の脇には和装の幼女。推定七、八歳。おかつぱの髪につぶらな二重。

『ちよつと世界を救ってくる』

そう言つて異世界へ旅立ったロリコン姉さまは遂に一線を越えて帰ってきてしまわれたようでした。

「百パー誤解してるわね。まずはお姉様の話をお聞きなさい」
御伽噺『傘子地藏』の世界から戻つて開口一番に飛び出た姉の言葉は、おそらく現状の説明、いや言い訳になるだろうと想像が付きました。

昔から小さな女の子を見ると身もだえを禁じなかった姉。その姉

がわざわざ御伽噺の世界から和服の幼女を持ち帰ってきたのです。邪推のほかはどうしてくれることができません。

心なしか身を引く私を前にさしもの姉も声色に焦りを混じらせました。

「この娘はね。違うのよ。ただ可愛いから持って帰ってきてしまったとかじゃないのよ。いえ確かに小さくて幼くて私のどストライクなんだけれど違うのよ」

「何が違うのですか。ノーマルなわたくしにも分かるようご説明いただけますでしょうか」

「この娘は精霊なのよ」

まさしくアウト以外の何物でもない発言でした。一線どころか二線三線ほどは越えてしまわれたのでしょうか。倫理と法の壁を飛び越え、その先の極致へ至ってしまったのでしょうか。急に姉が遠く感じました。

「そうなんですか。さよならわたくしのお姉さま」そう言うと、姉はまたあさつての方角を見たまま「誤解しているわ」と呟き首を振りました。話しも視線もかみ合っていないませんでした。

「最後までお聞きなさい。結論を急ぐ女は嫌われるわよ」

諭すように言って姉が一冊の本を掲げました。

『傘子地蔵』先ほどまで姉が旅立っていた世界です。

「“かさこ地蔵”という昔話を知っている？ ほら。おじいさんが地蔵に傘をかぶせるあのかさこ地蔵」

あのかさこ地蔵がどのかさこ地蔵かは分かりません。まあでもおじいさんが傘をかぶせたお礼に、地蔵が家までお礼を持ってくる来るあのお話でしょうと仮定し、頷きました。

「この娘は地蔵の精霊なの」

「かさこ地蔵のですか」

「正式には“見返り地蔵”」

見返り地蔵？ 聞きなれない単語に首をかしげ、続きを待ちます。
「かさこ地蔵は俗称よ」

姉は人差し指を立てました。

「傘のエピソードが有名すぎてそう呼ばれるけれど、あの地蔵は本来“人に見返りを与える性質”の地蔵なの。だから、見返り地蔵。見返り地蔵は人間の行った善行あるいは悪行に対し、それに見合った見返りを与える力を持つわ。奇跡とか天罰という形でね」

「成程。だいたいわかってきました。」

姉さまはその奇跡を利用するために、見返り地蔵を持ち帰ってきたのですね」

「そうよ。残っていた二尊のうち一尊だけね。でも地蔵のままじゃ重たくて持ち運べないから、私の能力で地蔵を“擬人化”させて連れてきたのよ」

ファンタジーの世界に染まる前の私たちでは考えられない会話なのでしょう。そんなことを自覚して私は苦笑せざるを得ませんでした。

「ではなぜその姿に？」

「それは可愛いからに決まっているじゃない。」

このロリ具合……ふぁ……たまらない」

「認めましたねこのロリコン」

姉は白い歯を見せて笑いました。そよ風のように清しい笑顔でした。呆れたのは言うまでもありません。

“物質をイメージどおりの外見に擬人化する能力”

適材適所とはよく言ったものです。姉にこの手の能力を与えた運命とやらは何を考えているのでしょうか。変態に透視。セールスに催眠術。いえこの姉に限ればもっと性質の悪い相性と言ってよいかもしれません。

それにこの地蔵も……私は幼女に視線を向けました。流石は地蔵の精霊、見事な微笑をしていました。

「つまりこの見返り地蔵を連れて善行を積みめば、どんな奇跡だって起こせるかもしれないってわけ。」

この悪夢みたいな図書館から抜け出すことも、私たちが普通の人

間に戻ることも、今まで死んでいった仲間を生き返らせることも……ね」

姉はどこか遠い目をしていました。私たち姉妹と同じく神隠しに遭い、異世界で死んでいった仲間たちの面影を追っているかのようでした。

「では奇跡を起こせばお姉さまの性癖も元に戻るということなのですね」

冗談めかして言うと姉は「それは元から」と朗らかに笑いました。しかし先ほどから目線を合わせてくれないのが、どこか寂しく感じます。その目で何を見ているのでしょうか。

胸の内に嫌な予感が燦るのを感じました。

確かこの見返り地蔵。善行にも悪行にも見返りを与える、といいましたか。

「大丈夫」

疑念の視線に気がついたのかそうでないかはわかりませんが、姉はそう言って微笑みました。

「私みたいな異常者でも奇跡を起こすことはできるわ。」

この地蔵が判定する“善行”はね。“偽善”でもいいの」

「偽善？」

「そう。この地蔵は行った善行の大きさに比例して見返りを返す。その善行は心からの善意に基づくものでなくてもかまわないの。これは検証済み。」

動機はどうあれ、結果的に誰かの役に立てばそれは善行とみなされる。もちろんその逆もありうるけれど、私みたいな子悪魔系が奇跡を求めるには絶好の条件なわけね」

姉が悪戯っぽい含み笑いを見せます。それにしても子悪魔系ですか。御年^{おんとし}二十六にもなろう彼女にはぎりぎりの単語では……いえなんでもございません。

とにかく姉には勝算があるようでした。「ま、任せて頂戴」そんなことを言いながら腕を伸ばして幼女の髪を手で掬っています。

「私がこの娘の前で善行積んで奇跡を起こしてあげる。私はお世辞にも善人じゃないけれど全部を救えるまで偽善を重ねて、何もかもを元に戻してあげる。」

それでこの悪夢の旅もゲームセット。ここに戻ったら零歩や滝塚にも教えてあげて」

「」

「どうしたの？」

「いえ」

「お姉さまに隠し事？ 百年早いんじゃないですか？」

「隠し事をなさっているのは姉さまも同じではありませんか」
ついに、私は切り込みました。姉はわけがわからないといった様子で目を丸くしています。しかし、もう引けませんし引く気もありません。」

“ 姉はわたくしの為に自分を犠牲にしている ”

その確信が今、はつきりと持てましたから。

「善行にも悪行にも見返りがあると言いましたね」

足音が立たないように姉に近づきます。

「姉さまがした“ 精霊を擬人化する ” という勝手な行為に見返りがなかったのでしょうか。わたくしはずっと疑問に思っていました。」

しかし今なら言えます。姉さまは悪行の見返りを受けた。光を失うという形で」

「え」

「地蔵を連れてゆく見返りに、視力を奪われたのですね」

「 そんなことはないわ」

姉は幼女の肩に腕を回しました。

「私にはこの娘の姿が見えてるもの。薄紅の羽織に白の帯でしょ？ おかつぱの髪でそれにいい匂い」

「その娘の姿は姉さまのイメージを具現化したものです。分かっただけで当然でしょう。」

そして匂いまで聞いてはおりません。

姉さまはわたくしが今、どの方角に立っているかお分かりですか」
ほとんど目の前から、囁くように語り掛けます。姉の首筋に汗が
つたっていました。

「 どうしてわかったの？」

肩をすくめ、姉は大きく息を吐きました。

「 しばらくは隠しておこうと思ったのに」

動機はきつと、私や他の皆の為に光を失ったと知られないために
といったところでしょう。昔から姉はそういう人でした。

その姉も正直に白状してくれたのです。せめて私も正直であろう
と、種明かしをしました。

「 滝塚と零歩のこと」

先ほどまで腰掛けていた椅子まで戻り、対面のソファに寝かせて
いる人物に目をやりました。

「 滝塚ならそこに眠っています。姉様にはそれが見えていませんで
したもの」

姉の正面にあるソファにはほんの数時間前にここへ戻り、静かに
眠った滝塚の姿があります。気がつかないはずがありません。ちゃ
んと、光が見えているのなら。

「 眠っている……？ まさか」

問いかけに私は言葉を返しませんでした。ただ言葉はなくとも、
姉は悟ったようでした。一瞬ですが唇を噛んだのが見えました。し
かしあくまで一瞬のことでした。

「 大丈夫。この娘の力があれば、奇跡が起こせるんだもの。ね
？」

「 うん」

幼女はこくりと頷きました。というか喋るのですね。

「 ほら。

滝塚の身体も私の目もこの娘がいれば治せる。だから平気よ」

偶然に違いはありませんでしょう。しかし姉の笑顔は私の真正面
を向いていました。それだけに胸が痛くてなりませんでした。

姉はいつたいどれだけの因果を背負う気なのでしょう。全てを救う奇跡を起こすのに、どれだけのものを費やす気なのでしょう。

光を失い、仲間を失い、それでもなお前を向いて笑っていられるのでしょうか。

戦える人間もそう多くありません。滝塚が沈んだ今、ここから離れることのできない私を除くと残るは姉と零歩とデイサン……全部で三名きり。

希望はどんどん乏しくなっただけです。誰もが異世界で朽ち、寿命のない身体、私は永遠にこの図書館で孤独を過ごすそんな結末が現実味を帯びてゆきます。

それでも姉は言いました。奇跡を起こす、と。
ならば私が信じなくてどうするのですか。

「姉さま」

気がつくと私は姉を抱きしめていました。幼い頃は姉が私を何度抱いたかはわかりません。私から腕を伸ばすのは初めてのことでした。

ロリコンの姉が喜ぶかはどうでもよかったのです。けれど少しでも、光を失った姉さまに少しでも気持ち伝われればと、私は力いっぱい抱きしめました。

「大丈夫」

姉が私の頭を撫でます。被っているフード越しにも、体温は充分に感じられました。

「きつと大丈夫よ。」

それじゃあ、またちょっとセカイを救ってくるわね。信じて待っていてくれる？」

「ええ」

そうして私は少女を連れた姉とまた笑顔で別れました。

三千世界の最後に待つのが奇跡か絶望かはわかりません。それでも戦って、その先に望みをつないでゆく覚悟を私たちは失っていない

いのです。

だからきつと道は見つけられます。ハッピーエンドの道は、
可愛らしい”奇跡”が私たちの傍にしているのですから。

『幼女と偽善で全てを救えッ!』（ファンタジー）（後書き）

ファンタジー『幼女と偽善で全てを救えッ!』をお読みくださりありがとうございます！新キャラがまさかのロリコン（笑）今後も何かをやらかしてくれそうです

『ジャスティスメンG』（コメディ）（前書き）

ジャンル「コメディ」 字数3200 3300

『ジャスティスメンG』（コメディ）

「キヤアア！　だ、誰か、助けてえ！」

夜の静けさを割くような悲鳴が廃ビルの間を駆け抜けた。

折れたヒールを脱ぎ捨てて前のめりに走る若い女。そして後方10mには、魚の怪人が彼女の背に迫っていた。

ヒレのついた足跡が徐々に彼女との距離をつめる。怪人が手にする鉈が彼女の背に届くのは時間の問題だ。

絶体絶命。走る女の脳裏にはあらゆる記憶が無造作に蘇っていた。走馬灯というやつだろう。ストーカーとか変質者とか、付きまとわれたりした経験がないわけではなかった。いずれも最終的にはなんとかなかったけれど、しかし今度ばかりは本当に死ぬかもしれない。彼女は人生で初めてリアルに自分の命を危ぶんだ。

と、そのときである。

「待てええい！」

ドスの利いた声と共に、怪人の前へ影が飛び出した。

「お、お前はジャスティスメン！」

裏返った声で叫ぶ怪人の前に現れた男！　その名もジャスティスメンG！
ゴールド

悪に立ち向かう正義の心と強さを併せ持つ、現代の英雄。スーパーヒーローである。微妙にダサかつこいいいネーミングは彼自身によるものだ。もちろんお気に入りである。

「はっはっは！　よくぞ知っていたな！」

名前を知られていて嬉しかったのか、ジャスティスメンは高笑いをしながらポーズを取った。三日三晩寝ずに考えた自慢のポーズだ。もちろんお気に入りである。

ちなみにこのポージングの最中に攻撃をする者には容赦しない。かつてポーズの邪魔をした怪人には後半戦を待たずして合体ロボを出動させた。そのくらいこだわりを持っていた。

「ジャスティスメンっ」

ポーリングが終わったのを見計らい、女はジャスティスメンの背中に身を隠した。そのときである。女の身体はふわりと舞い、空中で一回転した。

あれ、私、投げられてる？

自分がヒーローによる一本背負いをくらっていることに気づけたのは、べしゃつと音を立てて水溜りに落ちた瞬間のことだった。

「な、何すんのよ！ アンタ正義の味方でしょ！？」

当然の猛抗議がヒーローに浴びせられる。しかしジャスティスメンはしれつとした口調で、女に腕時計に似た形状の機械を寄せた。赤い針のメモリの端にランプが灯っている。

「そうだ。正義の味方だ。だが必ずしも人間の味方ではない。

私の手にある善悪判断装置によると、あの怪人よりも君のほうが微妙に悪い奴だという判定が出た。よって正義の名の下に君を成敗させてもらう」

「え、ちょ……！」

女はすぐさま反論に転じようと試みた。しかしジャスティスメンの言うことにも思い当たる節があり、言葉にはならなかった。

実はこの女。これまでかなりの数の男をたぶらかし、巧妙に財産を搾り取ってきたのだ。その手法は詐欺スレスレの絶妙なもので、彼女と関わった男たちの中には悲劇の末路を辿った者もいた。

彼女にも自覚はあったのだろう。だからこそ女は、別の手段でこの苦境を逃れることに切り替えた。

「わ、わかったわ！ けれど私は善行だってそれなりに積んできたつもりよ！

あなただって私のすべてを知っているわけじゃないんでしょう」
「ふむ。もつともだ。善悪判定装置とて万能ではないからな。

では君はこの判定を覆すほどの善行を私にアピールできると？」

「チャ、チャンスを頂戴」

そして急遽、アピールタイムの開催が決定。「あの……僕は」魚

の怪人はおずおずと自分を指差した。ジャステイスマンは彼を一瞥すると、「待たせて済まないな。そうだ。これでも読んで時間を潰したまえ」といって白い本を手渡した。ちなみに大賞を受賞したあの本だった。

「お勧めだ。あとで感想聞かせてくれ」

消え入りそうな声で「はい……」と返事する怪人。そんな彼を尻目に女のアピールタイムが始まる。

「わ、私は毎月おじいちゃん宅へお金を振り込んでいるわ！ 私、おじいちゃん子だったから！」

女の声に反応したのか装置の針が揺れる。

「本当みたいだな。ちよつとメモリが動いた。その調子だ。このまま怪人よりも善メモリが上回れば、成敗する対象が変わる」
「よし！」

ガッツポーズを作る女。反面、ベストセラーを手に素っ頓狂な声を上げる怪人。まさか自分に予先がくるとは思ってたようだ。
「ええと……あ、わたしボランティアもやってるわよ！」

「お、またちよつとポイント上がった。ちなみに何の？」

「友達がやってる販売の手伝いよ。狭い部屋でお年寄りに高級な布団のよさを説明するの」

「なんかだいぶ下がったぞ」

「何で!？」

どうやらアピールが逆効果になることもあるらしい。しかしそんなことより彼女の販売は何かまずいことがあったのだろうか。当事者意識はまったくなかっただけに、女は若干ショックだった。

「他にないかないのか。なければ成敗するけど」

ジャステイスマンのベルトから必殺のビームサーベルが抜かれる。
「ま、まだあるわ！」女は必死に記憶を辿る。

そしたら意外に色々なエピソードを引っ張り出すことができた。直前に見た走馬灯が功を奏したのかもしれない。様々なアピールをし、上がったりに下がりたりしながら女の善行メーターは遂に

怪人のそれを越えた。

「お。遂に越えた」

「いよつしゃ！」

「それじゃ成敗は、襲った怪人のほうかなあ」

ヴォン、と竦った音と共に光の刃がその切っ先を怪人に向けた。

「嘘っ！」

こうなると怪人も必死である。白くて綺麗な表紙の本を投げ、アピールへと走る。怪人もそれなりに良いことはしてきた奴らしく、彼のメーターは女の善行を越え、再び矛先が女へと向かった。

こうなると始まるのは二人のアピール合戦である。

「ぼ、募金したわ！ コンビニでもらったお釣り！」

「ウ、ウミガメの怪人の卵を孵化まで守り抜きました！」

続く一進一退の攻防。就職試験の面接ですらここまで白熱した自己アピールはないだろうな。そんなことをジャスティスメンは思った。

しかし二人のアピールとて永遠に続くことはない。徐々にはあるが確実に二人の善行エピソードは微妙な内容になっていった。

「おととい三十分のサービス残業したわ！」

「初詣のお祈りで世界平和もついでに願いました！」

「もう全然、針が動いてないぞ」

争いがこう着状態を迎える。すると今度、次に始まったのはジャスティスメンも予想だにしない展開だった。

「そーいやお前、こないだ俺の財布から一万抜いたろ！」

「そー言うアンタこそゴム使うとか言っときながら……」

二人が始めたのは泥まみれの罵りあいだった。どうやら二人は深い関係があったらしく、もうお互いの悪いところが出るわ出るわ。

ジャスティスメンがメーターに目を落とすと針は凄い勢いでマイナスへ向かい、あっという間に善行分をチャラにした。これ故障するんじゃないか？ 戦闘力が上がりすぎると壊れるスカウターを思い出し、ジャスティスメンはちょっぴり不安になった。博士から大

目玉を食らう羽目になるかもしれない。

そして二人がお互いをけなし合うこと一時間。ついに決着のときを迎える。

「ねえ、どっち？ どっちが悪者なの！？」

ヒステリックな色の混じる声で女が問う。なんか趣旨が変わってのように感じなくもない。

ジャスティスマンはもったいぶることもなくメーターを見せた。針はマイナスに振り切り、実は数分前にはすでにカンスト状態になっていた。

「二人ともマイナス過ぎて引き分けた」

引き分け。その言葉に女と怪人は息を呑んだ。この場合はどうなるのだろう。固唾を吞んでヒーロー、いや二人には裁判官に見えている男の言葉を待つ。

「随分と派手に罵り合ってたな。これはもう善とか悪とかの判断とかではなく、世間一般の規範に照らすほかあるまい」

「というと……」

「格言があるじゃないか」

ジャスティスマンがゆっくりと腕を十字に交差させ、必殺技の構えを取る。

「喧嘩は両成敗ってね」

瞬間。赤い閃光が女と怪人の全身を包んだ。

肌は浅黒くこげ、まんがみたいなアフロヘアになった女と香ばしい焼き魚の匂いを放つ怪人。

「痴話喧嘩なら家でやれ」

瓦礫の山を跳ねるようにして上昇し月明かりに消えるヒーロー。今日も彼は、正義のために戦っている。

『ジャスティスメンG』（コメディ）（後書き）

コメディ『ジャスティスメンG』をお読みくださりありがとうございます。女性以外にもマイナーな外貨への投資などもお勧めしているらしいですが、果たして

『俺たちの地球侵略』(SF)(前書き)

ジャンル：SF	字数	3800	3900
---------	----	------	------

『俺たちの地球侵略』（SF）

築二十五年。木造二階建ての安アパートの一室で、全身銀タイツをまとった夫婦がちゃぶ台の前に腰を下ろした。

「とうわけでこれから地球の侵略に取り掛かろうと思うのだが」
男の銀タイツ“バロ”の切った口火に、女の銀タイツ“ニヤロ”は頷いた。

「我々の思った以上に地球の兵器は強力だ。現段階ではとてもではないが太刀打ちができない。」

そこでまず地球で仲間を作ろうと思うのだが、どうだろうか」

「具体的にどうするの？」

「まずは地球人に溶け込み、仲間を増やす。そして油断をしたところを一気に叩く、というのはどうだろう」

「いいわね。それ」

ニヤロは赤い唇を吊り上げ、妖艶な笑みを浮かべた。

「けど地球人に取り入るにはどうするの？」

「まずは生活から地球に溶け込もう。身の回りを地球人らしくするのだ」

「じゃあとりあえずユニクロへ行くべきね」

「だが困ったことにユニクロへ行く服がない」

クロゼットにはお揃いの銀タイツがずらりと並んでいる。地球征服への道は長そうだった。

異星人夫妻が地球侵略にやってきて二年。バロは就職に成功し、ニヤロも家事手伝いと円満な近所づきあいを身につけ、前向きに彼らの計画は進んでいた。

「ただいま、ニヤロ。今日はいいい知らせがあるんだ」

「お疲れ様、あなた。なにがあったのかしら」

「本日付で係長に昇進した。日ごろの仕事ぶりを社長が認めてくだ

さつたんだ」

「やったわね、あなた！　これでまた地球侵略が一步進んだわね」

「ああ。お前が支えてくれるお陰だよ」

「お祝いしなくちゃ」

ちやぶ台にサラミとチーズを添え、ちよつといいビールを二人で乾杯した。

「社長の口添えでプロジェクトにも参加することになった。しばらく家を空けることが多くなるけど」

「あ、そのことで私も話があるの」

ニヤロが少し視線を逸らし、グラスから唇を離した。

「婦人会の会長さんが手芸教室のボランティアに参加しないかって誘ってくれているの。ほら、この近くに異星人ってあんまりいないでしょ？　故郷の手芸に皆さん興味があつて、ぜひとも教えて欲しいって」

「いい？　上目遣いに聞くニヤロに、バロは柔らかな微笑を浮かべて「やつておいで」と言った。

「こういう小さいことから侵略も進むはずさ。それに君だって息抜きは必要だよ。いつも家のことをやってくれてありがとうね」

「あなた……」

ニヤロが膝を崩して身を寄せる。がその夜はちよつぴり暑くて、冷えたアルコールが喉に心地良い夜だった。

そしてまた一年。バロは職場でも重要な役職を任されるようになり、ニヤロは町内会の役員として下手な地球人よりも地球人らしい生活を送っていた。

「そろそろ侵略も次のステップに入っている頃だな」

「具体的にはどうするの？」

「政界に進出する」

「よく聞こえなかったわ。もう一度お願い」

「政界に進出する」

「え」

ニヤロが素つ頓狂な声を上げた。しかしバロは真剣な面持ちを崩さず続けた。

「異星人の参政権は認められて間もない。障害も大きいだろう。けど政界に出て顔を広げ、色々な政策を通すことができれば更に手際よく侵略が進められるはずなんだ。

君にも苦勞をかけることになるかもしれない。だから意見を……」
「かまわないわ」

思わぬ即答に、今度はバロが驚いた。

「正直びっくりしたわ。けど何をやるにも、私はあなたについてく」
「ニヤロ……」

ありがとう。呟くように言って、バロは頭を下げた。

「がんばりましょう。あなた」

こうして二人の地球侵略は斬新なアプローチによって始まった。

市長立候補に必要な積立金百万を貯金から用意し、二人の選挙活動は始まった。異星人にしては稀に見る活動的な二人だったために顔は広く、挨拶回りは順調に進んだ。

「がんばれよ！ 銀色！」

「応援してるわ！」

「ありがとうございます」

夫婦でにこやかに微笑みを返す。異星人が市長に立候補するといふもの珍しさも手伝って、周りに集まる人は他の候補者に引けをとらなかった。

だが何もかもが順調だったわけではない。

「異星人なんかに市政を任せてよいのですか！」

「地球人の生活は地球人の手で行われるべきです！」

他の候補者から向けられる容赦のない攻撃。そしていまだ根強く残る異星人への偏見から、ときに心無い言葉を浴びせられることもあった。それでも辛抱強く、バロは笑顔を貫いていた。

しかしあるとき、ニャロが配ったビラを破られた拳句、軽く頬をはたかれるという事件が起きた。その件でニャロ本人は事を荒立てずに収めようと試みた。だがその話をニャロと一緒にいたボランティアから聞いたバロは激高した。

「こんな星、いますぐぶつ潰してやる」

バロはちゃぶ台が跳ね上がるくらい強く拳を下ろした。

「抑えて、あなた。誰が聞いているかわからないわ」

「けどお前の顔に……！」

「私は大丈夫。大丈夫だから」

ニャロはバロに見えないよう腫れた頬を逸らして笑った。

「だからあとちょっと。がんばりましょう」

ニャロの微笑みに、バロはやり場のない怒りを噛み殺して頷いた。事務所に石を投げ込まれたときも、選挙カーが全部パンクさせられたときもバロは怒りを面に出すことなく耐えてきた。彼の熱意は、ずっと近くで彼を支えてきたニャロがいちばん良く分かっている。

二人はお互いの痛みがわかるからこそ、自分の痛みを耐えることができた。

そうして最後まで彼らは目的のために戦い抜いた。

バロがはじめての選挙に落選して三年。現職の市長がリコールされ、二度目の選挙でバロは異星人として初めて市長に当選した。

「頑張れよ！ バロ！」

「お前ならきつとしつかりやれるさ！」

「ニャロさんもしつかり支えてあげて」

彼らに向けられる視線はもはや物珍しさだけではなかった。

「けどこれで油断してはいけないな」

「そうね。しつかり務め上げなければ、今までの苦勞が台無しだもの」

「ああ。少しでも俺たちの仲間が増えるように、少しでもいい政治をやってみせる」

それからバロは寝る間も惜しみ、市政の改革案をまとめ上げた。異星人の考える案ということで、議会の声はずいぶんと厳しいものがあつた。

しかしバロの熱意はまがい物ではない。何年も政治を勉強してきた知識と、少しでも町と住民の生活を良くしたいという気持ちで、支持者を少しずつ彼の元に集めていった。

「大型のショッピングモールを誘致するのは良い。けど商店街が煽りを受けないよう、共存の工夫をする必要がある」

「税務等の処理をする施設が随分と住民の利用しづらい場所にあるな。いつそ移転してはどうだろうか」

肅々と政務をこなすバロと、それを傍で支えるニヤロ。彼らの姿はひとり、またひとりと地球人、あるいは彼らの政策に救われた異星人の心を掴んだ。

史上初の異星人総理が誕生するのもそう遠い未来じゃないかもしれない。

地元の一部メディアを中心に、そのような声も囁かれていた。

時は流れ、異星人夫妻が地球にやってきて三十年。そしてバロが与党第一党の党首となって、一年が過ぎた頃。この国は、いや、この星は最大の難に直面していた。

「ゴルバ星が地球に宣戦布告！ 異星人宰相はいかなる決断を下すか！」

そんな見出しが新聞の一面を飾る。

総理官邸で各国の首相と密談を済ませ、自室に戻ったバロはニヤロの入れた茶をすすりながら、ぼろぼろのちゃぶ台の前に腰を下ろした。

「どうするの、あなた」

「どうするもこうするもない。はじめから決まっていたことじゃないか」

そう言って、バロは静かに瞳を閉じた。

「この星で仲間を増やし、来るべき侵略の手引きをする。はじめからそういう計画だった。」

「そのために俺たちは派遣され、今日までがんばってきた」

「そのために？」

「ああ」

「そのため……だけに？」

「何が言いたい」

バロの言葉に、ニヤロはちゃぶ台に広げたアルバムへ目を落としたりした。

「懐かしいわね。二人であのアパートに住んでた頃」

色あせた写真の中に、多くの人に囲まれている二人の笑顔がある。「まずは服を買わなきゃって。でも宇宙スーツしか二人とも持っていない」

「ああ。そんなこともあったな。ユニクロで随分と浮いてしまった覚えがある。店員さんが妙にやさしくしてくれてさ」

「勧められて買った千円のＴシャツをずっと着てたね」

ピンクのＴシャツを着て並ぶ林家夫妻のような構図を見て、思わず笑いがこみ上げる二人。

「これ町内会の祭りに参加したときのだ。町長にやたら日本酒を勧めらたっけな。もう酔っ払ったのなんの」

「これははじめて選挙に当選したときのね。あなたがダルマを家に忘れちゃって大変だった」

セピア色の思い出が、二人の目の前で少しずつ色づいてゆく。

「こうやって、私たちは歩いてきた」

ニヤロが遠い瞳を、いや、どこかさがするような色を帯びた瞳をバロに向けた。

バロはそんなニヤロから顔を背けるように、時計つきのデジタルカレンダーに目をやった。仲間との密約によって決められている、この星への攻撃まで残り一週間を切った。

もつわずかもなく侵略がはじまる。そこに正義も信念もない。た

だ欲望のためだけの侵略が始まる。それはバロが掲げてきたものは、かけ離れたものに違いはなかった。

「俺たちの地球侵略は……」

バロの口から言葉が漏れる。だが、その先は続かなかった。

沈黙が流れる。一秒、また一秒とXデーが近づいてゆく。何十年も前から待ちわびていたはずの二人の記念日だ。

それでも二人の顔には喜色がなかった。アルバムに詰まった輝きの顔の数々が、二人の目には、今となつては皮肉にしか見えなかった。

『俺たちの地球侵略』（SF）（後書き）

SF『俺たちの地球侵略』をお読みくださりありがとうございます。手段は本来目的の為にあります。けれど時として、手段が目的そのものになってしまう不思議

『ラッキーアイテム』(SS)(前書き)

ジャンル「ショートショート」	字数900	1000
----------------	-------	------

『ラッキーアイテム』（SS）

俺の朝はニュース番組“おはようテレビ”を見ることから始まる。

視聴率冬の時代が続く中、豪華なキャストの揃ったなかなか予算のかけられていそうな番組だ。コーナーも色々と趣向が凝らされていて面白く、出勤前には必ず見ている。

特に楽しみにしているコーナーは“今日の占い”だ。このコーナーでは今日の運勢と、星座ごとのラッキーアイテムが紹介される。俺は占いを見たら、ラッキーアイテムを鞆に忍ばせて出勤する。それがライフワークなのだ。

自慢じゃないが凝り性の俺はラッキーアイテムの所持を欠かしたことがない。大抵のものは家に揃っているし、無くてもコンビニかそこで用意をしてから出社カードを通す。そのくらいこだわりを持っている。

7時55分。そろそろ占いの時間だな。鏡の前を離れ、リビングのテレビ画面に目を向けた。陽気な効果音をバックに、ポップな字体で飾られた“今日の占い”の5文字が踊っている。

『おとめ座のアナタ。今日のラッキーアイテムは』

鰹節削り

「は？」

鰹節……でもなくて鰹節削り？ まさかこんなものが出てくるとは。いったいどこに売っているんだ？

さすがに1人暮らしの男の家にこんなものはない。しかも入手に骨が折れそうだ。

だがそんな障害が逆に俺の拘り魂に火をつけた。こんなにマニアックなものを、苦労の末に手に入れたならきつと大きな幸運が

訪れるに違いない！

俺はすぐさま携帯で検索をかけ、入手できそうな店をピックアップした。自分でも驚くべき手際だった。仕事もこのくらい効率よくやれたらいいのにと苦笑する。

検索を終えて携帯電話の表示時刻に目をやった。7時58分。もしかしたら今日は出社が遅れるかもしれない。時間休を取る必要があるかもな。けど全ては幸運のため！

そして上着を羽織り俺は家を出た。車のエンジンをかけたところでテレビの消し忘れに気がついたが、鰹節削りのことで頭がいっぱいだったのだろう。気にせずそのまま出発した。

7時59分。主の去ったリビングに全ての原稿を読み終えた女子アナの声が響く。

『それでは7時台のニュースを終わります。それでは元気に、いつてらっしゃい』

花のような笑顔でお辞儀をするアナウンサーの映像で番組が締めくくられる。そして画面は切り替わり、活きのよさそうな鰹の映像をバックに“削り屋総本舗”の文字が表示された。

『この番組はご覧のスポンサーの提供でお送りいたしました』

『ラッキーアイテム』(SS)(後書き)

アナタの今日のラッキーアイテムは”短編集”です

『辛そうな彼女』(SS)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 字数800 900

『辛そうな彼女』(ss)

「ねえ、アヤコ。……辛いよ」

ガラスの向こうに広がる夜景へ遠い目を向けながら、サチは消え入りそうな声を絞り出した。

「辛くて苦しくて、涙が止まらないの。ねえ私、どうしたらいいの……？」

「飲みましょ。飲んで忘れちゃお」

洒落た形に整った氷が、アヤコの手の中でカランと音を立てた。

サチはそれを受け取るが口には運ばず「……誤魔化せないよ」そう小さく呟き、自嘲するかのような笑顔を浮かべた。

「こんなに辛いなら、好きにならなきゃ良かった」

「でもわかってたことじゃない」

恨み言を言うサチの隣で、アヤコはグラスの底に沈むさくらんぼに視線を落とした。

「好きになれば辛い思いをすることはわかってた。あんなやつ止めときなつて、私、言っただじゃない」

「っ！ やめてよ！」

他の客の目もはばからずにサチはテーブルを叩き、友人に食って掛かった。

「ずつと懂れてたのよ？ アヤコだって知ってるじゃない」

「ごめん。でもさ、そうやって引きずったって解決しないから」

「アヤコだって、健二君のこと忘れられないくせに」

「っ！ 健二のことは今は関係ないでしょ！」

徐々に二人のボルテージが上がってゆく。周囲も逆に視線を向けず、腫れ物に触るかのような雰囲気が漂ってきた。

「アヤコに私がどれだけ辛い思いしてるかなんてわかんないよ！」

「は？ あんたが付き合ってくれて言っただんじゃない。ふざけないでよ！」

アヤコの脳内で何かが切れる音がした。

「もういい。あんたが辛い思いをしてるのはもうわかったわ！ それよりどうするのよ。」

諦めるの？ どうなの！？ はっきり決めなさいよ！」

硬く握られたアヤコの拳がテーブルに振り下ろされ、真っ白な皿がカタンと高い音を立てた。

「あんたが頼んだこの特製ハバネロカレー！ 食べないならもう下げてもらわよッ！」

「でも残したら割引使えなくなるもん！ だから悩んでるんでしょ！ あうう……辛い。ひりひりするよう」

頬を腫らしたサチが店内の張り紙を指差す。“食べ残しはご遠慮ください” 真っ赤な油性ペンで書かれた注意書きが、サチの口内に広がる辛さを余計に引き立てた。

『辛そうな彼女』(ss)(後書き)

全部”からい”に変換して読むと別のお話になります。ちなみにアヤコが飲んだのはクリームソーダ

『土産コンテスト』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」	字数	700	800
----------------	----	-----	-----

『土産コンテスト』（ss）

赴任してから勤続7年。私は2年目からこの学校で生徒指導を務めている。

色々と問題を起こすやんちゃ坊主や、タバコ吸う奴。ときに警察のご厄介になる連中に特別な指導を加えるのが私の仕事だ。

基本的に奴らは大人って連中を信用しちやいない。そりゃあそうだ。奴らが曲がったのは、多かれ少なかれ大人の影響ってもんがある。

けど奴らだって根っこは良い子ちゃんって呼ばれる生徒たちと変わらない。愛情をかけてやれば、それに報いようとしてくれる。愛情あつての教育。それを信念に掲げてやってきた甲斐あつてか、奴らも多くは私を慕ってくれている。

ある日の休み時間。3年の男連中が私のところにやってきた。こいつらは本当に似たもの同士。波長が合うのだろう。4人は何をするにしてもつるんでいて、良くも悪くも、よく一緒に私のところにやってくるのだ。

「センサー！ 土産は何がいい？」

「土産？ どっか行くのか」

「シューガク旅行だよ！ しょうがねーから何か買ってきてやるよ」

ニコニコしながら言うやんちゃ坊主たち。私は照れを隠すように頭を掻いた。

「ああ。何でもいいよ。任せる」

「よっしゃ。俺のセンス楽しみにしてろって」

「でもお前めっちゃセンスねーじゃん」

「は？ そんなことねえし。じゃあ誰が一番センスあるもん買つか勝負すつか？」

そんな売り言葉に買い言葉で始まったお土産のセンスコンテスト。どうも奴らが送ってきたお土産を評価して、誰が一番センス

あつたかを決めたらいいらしい。

まあ似たもの同士のこいつらだ。そう差がつく判断をする羽目にはならないだろうとは思っていた。

そして今、私の前に4つの品が届いたわけだが……。

「まさか全員が木刀を選んできやがるとは」

職員室の机上に色とりどりの木刀が並ぶ。

なんでデイズニールランドへ行つて木刀なんだ！ しかも4人とも木刀とか、どれだけあいつらは似たもの同士なんだという話になる。

けど被りまくってしまったものの、あいつらなりに真剣に考えてくれたんだ。ちゃんとお礼を言わなきゃな。

そんなことを思っていると、お土産を送ってきた4人が私のもとへやってきた。

そして目を輝かせて、聞いた。

「なあなあ！ 誰の木刀がいちばん良かった？」

『土産コンテスト』(ss)(後書き)

木刀なのは前提らしいです。

『わけありセレブリティ』(ss)(前書き)

ジャンル「ショートショート」 字数：500 600

『わけありセレブリティ』（ss）

私ね。最近、わけあり値引きにはまってるの。

ほんのささいな我慢でいいものがすごく安く買えるのよ！ほら、あるでしょ。大きさが不ぞろいの果物とか、スイーツの形崩れしたやつとか。味は変わらないのにね。商品価値の問題で驚きの価格が実現するみたい。

それにね。わけあり値引きって聞くと食べ物イメージが強いけど、実は検索かけると家電とか食器とか、色んなものが出てくるわ。部屋のもの一式わけあり値引きで揃えられちゃうくらいにね。

ほら、このカップも凄いのよ？一セット一万円のところを四割引で買えちゃった。箱がなくて贈答用にならないからってだけでよ？ホント感激しちゃう。

もう夢じゃない時代なのよ。庶民がセレブ生活するのね。

そんな私はいまやお手軽予算でセレブの仲間入り。

ワケありのマンションに住んで、インテリアには素敵なワケありピアノとフランス人形。お洒落でしょ？

家電もワケあり値引きですごく安く買えたの。特にこの冷蔵庫なんてほとんどタダ！内側に無数の引っかき傷があるけど、ソトから見ちゃえばわかんないわかんない。

あんまり贅沢しすぎて注目されちゃうのはチョット恥ずかしいけどネ。いつでも誰かの視線を感じちゃってタイヘン。自意識過剰力な？

あなタもどう？わけありセレぶ生活、してみない？

シテミナイシテミナイシテミナイシテミナイネエシテミナイ？？

『わけありセレブリティ』(ss)(後書き)

ピアノはひとりでに演奏する機能憑き。

『人形供養寺』（夏ホラー2010）（前書き）

ジャンル「ホラー（リメイク作品）」 字数5200 5300
夏ホラー2010の作品です。オチの改変等はありません

『人形供養寺』（夏ホラー2010）

葉蔵がはじめてその異変に触れたのは、たしか一週間ほど前の出来事だった。

一月六日。土砂崩れにより道路が閉ざされ、娘夫婦が寺に一泊したときのことだ。

風呂から上がった葉蔵が寝室に戻ると、彼の孫娘がくまの縫いぐるみをいじって遊んでいた。耳のほつれた年代ものの縫いぐるみ。それは彼女が寺にやってきたときよく遊びに持ち出している品だった。

「こらこら。またそれを持ち出して。ちゃんと元の場所において置かなきゃ駄目だろう」

葉蔵の注意に孫娘は「はい」と返して手を止めた。幼いながらも聞き分けの良い孫娘の成長に感心する葉蔵。しかし彼の感心と裏腹に、彼女は縫いぐるみを部屋の端に置くと、そのまま寝室を立ち去ろうとした。

「お片付けをきちんとできない子は誰かな？　きちんと蔵に戻しておきなさい」

葉蔵が再三の注意で呼び止める。すると孫娘は少し頬を膨らませてこう言った。

「蔵から持ってきたんじゃないよ。最初からこの部屋にあったもん」

それは少々妙な話だった。この縫いぐるみは蔵に保管されていたはずのものだ。それは家主の葉蔵がいちばんよく知っている。

だから彼には孫娘の言うことを安い言い訳としか捉えられなかった。孫娘も知恵のつく年頃だ。咄嗟の言い訳でも口にしたのでろう

……その程度の認識でしかなかった。

だがこの孫娘の一言が後に単なる妄言では片付けられなくなる。『最初からこの部屋にあったもん』

なかったはずのものがある。という確かな進入の痕跡。

それがこれから起こる怪異の序章であることを、このときの葉蔵は、まるで気にも留めていなかったのだ。

一月十三日。H県山中にある由緒ある寺“千永寺”の境内にて、住職をつとめる葉蔵は三体の縫いぐるみとにらめっこをしていた。
「こいつらから悪縁は感じられないな」

人形を凝視して独り言を呟く老人はかなり不気味なものを感じたことだろう。ただ勘違いしてはいけない。これが彼の仕事なのである。

江戸時代の前期から続くこのお寺“千永寺”では厄除け祈願のほか、人形の供養を引き受けていることで他県でも知られた存在だった。葉蔵がいまやっているのは供養の日を控えた人形の厄を診る作業だ。

こういう手前では厄の有無・多寡によって供養の手段や過程を変更することがある。だから彼は何かを感じる依頼品の届いたときには、人形その目で診ることがたびたびあった。

だが今日は普段と少々勝手の違う様子だった。不審の種は厄の有無ではなかった。

「悪縁がない……となると、どうして人形が動いたりする？」

彼が頭を悩ませていること。それは勝手に居場所を変える人形たちのことだった。

蔵に保管しておいたはずの人形が寝室に移っている。葉蔵もはじめは自分の記憶違いだと思っていた。

供養を控える人形の多くは庭の蔵に保管をされている。ただ供養前になると保管のスペースにも限界が迫り、保管しきれない分は寝室に移っていた。だから葉蔵の寝室にはいまも十数体の人形たちが置かれている。その中の数体に、自分の置いた覚えのない縫いぐるみが混じっているような気がした。そこが気付きの出発点だった。

葉蔵はそれからなんとなく、部屋の縫いぐるみの配置を記憶して眠るようになった。するとどうだ。やはりなかったはずの人形が増えていたのだ。

そうした過程があつて葉蔵は明朝から厄を診る作業にとりかかっていた。ただ別段、大きな厄を抱えている人形も見当たらず、移動をしていた三体もそれは同様だった。

人形の移動は悪縁によるものではない。蔵正な調査の結果も踏まえ葉蔵はそう結論付けた。確かに悪縁によつて人形が動くこともあるにはある。ただそういつた場合、悪縁の対象が近くにいないければ人形もそう大きな力を発揮するものではないということを、彼は経験則でわかつていたからだ。

だがそうなると疑問は振り出しに戻る。人形は何故移動をしているのか。

誰かが移動をさせているのか？　それなら話は早いが、そうなると、そいつがなぜ人形を移動させるのか。そこがわからない。人形は増えているわけでも減っているわけでもないのだ。ただ移動をしているだけ。

人形を移動させるだけさせて立ち去る人物にもその動機にもまるで心当たりはなかった。

「恨みの対象が近くにいないなら悪縁によるものじゃない。かといつてまともな人間のやりそうなことでもない。

いったいどういうことだ……」

そのとき首を傾げる葉蔵の頬を水滴がかすめた。いつのまにか厚い雨雲が空を覆っていた。

せっかく預かつている人形を濡らしてはいけない……葉蔵は急いで人形を抱えて屋内に駆け込んだ。彼の腕の中で、三つの無機質な人形の瞳は、なかま人形たちの納められている蔵を食い入るように見つめていた。

しとしとと降り続く雨が窓を打つ。降り始めた雨はいくぶん勢い

を弱めたものの、夜になつてもまだ止む気配を見せない。

鳥の囀りも喧騒もない静かな朝だった。水滴だけが音もなく地面にしみこんでいる。

翌日は人形を供養する予定になっていた。明日は晴れてくれるといいが……そんなことを思いながら、葉蔵は糸を縫いつける。

手には耳のほつれた、例のくまの縫いぐるみがあつた。供養する前に人形に簡単な補修をするのが人形への手向けになると葉蔵は考えていたのだ。せめて旅立つ前は美しく。というのが彼の言だった。「さて終わつた」

裁縫箱を閉じ、縫いぐるみを布団の脇に置く。このときもう、深夜の二時を過ぎていた。葉蔵はそのまま部屋の明かりを落とし、布団に潜つた。

くまの縫いぐるみを横目に見る。悪縁はないのに動き出すくまの縫いぐるみ。その姿は目を閉じてもなぜか葉蔵の瞼の裏にぼんやり浮かんだ。人形はうつすら微笑を浮かべて、ずっと彼の寝顔を見つめていた。

そして翌朝のこと。目を覚ました葉蔵は半ば寝ぼけた眼で身の回りにある人形に視線を送つた。

この日もやはり違和感はあるような気がしていた。だが昨夜は疲れも手伝つてすぐに眠つてしまつてゐる。そのせいかどの人形が増えているかまではわからなかった。

仕方なしに蔵へと足を向ける。雨戸を開けると外は小雨の景色だった。地面の水たまりはさほど大きくなかつた。夜のうちに一度は止んだのだろう。だがまた強く降り出すのも時間の問題であるように思え、葉蔵は急いで草鞋に足を通した。

すると足元に残る“跡”に葉蔵は気がついた。短い幅で点々と残る跡。雨でぬかるんだ地面に、小動物でも通つたかのような後が残されていた。

兎か？ それとも猫？ 大きさはそのくらいの跡だ。だが形が足跡と呼ぶにはあまりに不自然な形状をしている。

小さな、ただの丸い跡。それもかなりの数の跡が残っていた。小動物だとしたら一匹や二匹の足跡ではない。正体不明の無数の足跡が、境内のほうへと向かっている。

「これは……」

もしかして。まさかとは思うが。

葉蔵は急いで寝室へと向かった。廊下にも泥の跡が点々と残されている。

彼は寝室に跳び入るや否や、人形を手にした。布製の生地がひどく湿っていた。ずっと室内にあったとは思えないほどに。

そしてその直後だ。葉蔵が目にしたものは信じがたい、しかし彼には予想されていた光景だった。

白い人形の足に、べっとりと、生乾きの泥がへばりついていていた。

掌から零れ落ちる人形を拾うこともせず、次々と人形の足を見やる。熊も兎も日本人形も。どれもこれもに明確な移動の痕跡が残されていたのだ。

しかもその周辺に残されていた泥の跡が、まるで円をなぞるように並んでいた。つい先ほどまで葉蔵の眠っていた布団の周りをぐるりと一周。

まるで焚き上げられる人形たちを人間が見送るときのように。

整然と彼の眠っていた布団に向けて、つま先の跡が向けられているのだ。

ここまでくると、もう放っていくわけにもいかなかった。流石に不吉すぎる。なんとか対処をしなくてはならない。

ただ天候のせいで焚き上げを早めるというわけにもいかなかった。雨が降っている日は薪を燃え上がらせることができない。

そこで葉蔵は翌々日の一月十六日、ついに直接的な手段の行使を決意した。夜を徹して人形たちの移動を目撃してやろうと試みたのだ。

もちろんそれなりの対策はとった上でだ。手には破魔矢、着物には符の完全装備でその瞬間を待った。

だが彼も連日の警戒と緊張によって心労が溜まっていただろう……丑三つ刻を過ぎた頃の記憶を最後に、眠りへとおちてしまった。時計の針だけが、コチコチと音を立てて冷たい空間に響いた。

それからどれくらいの間がたったときのことか。葉蔵は何かの気配を感じたわけでもなかったが、本当に理由もなく、その刻が訪れる前に目を覚ました。

意識が覚めて辺りを見やる。彼の脳裏には明朝の、自分が無数の人形に囲まれているイメージが浮かんできたのだ。

だが周りに人形の姿はない。増えていないどころか、もともとあったはずの縫いぐるみまでもが姿を消している。

畳には無数の足跡が残されていた。どういうことだ？ 人形たちは出て行ったのか？

不審とともに安堵の気持ちに胸に生まれるが、それが誤りであると葉蔵が気づくのに時間はかからなかった。

足跡は寝室の出口へと向かっていない。泥の部屋の隅へと、そして天井に伸びる柱へと続いていた。

そして柱にも点々……点々と泥の跡。その先には

瞬間。

ドサリ、と音を立てて、何かが葉蔵の脇へと落ちた。彼が視線を落とすと、それはくまの縫いぐるみだった。

上から人形が落ちてきた……。

反射的に、視線をその先へと送ってしまった葉蔵。なんの警戒も心の準備もなしに見たことを彼はすぐに後悔した。

瞳の先には、天井の梁に所狭しと並ぶ縫いぐるみ。それらは一体として余所を向くことなく、一律に、微塵のずれもなく葉蔵の姿を見下ろしていたのだ。

百を超える光のない視線が老人の眼を射抜く。まるで虫けらでも

見ているかのように。

冷たい電流が全身を駆け巡る感覚を葉蔵は味わった。それから先の行動はほとんど反射だった。彼はすぐさま出入り口の引き戸へと駆け寄った。

そこに論理的な思考など存在しない。とにかくこの場を離れたい！ その一心で引き戸に思い切り力を込めた。

が、引き戸はぴくりとも動かなかった。何かがつつかえているのかどうしても開いてくれない。

一体何故？ 苛立った葉蔵はふいに足元のサッシへと眼をやってしまった。

そこには、日本人形がずらり。引き戸の先に、雛人形が一行に並んで戸の移動を阻んでいたのだ。

葉蔵が力を込める。もともと強度の落ちていた人形たちだが、腕が落ちても、身体にひびが入っても、その場を微動だにもしない。動かず語らず、ただ黙し、影のある微笑を浮かべて葉蔵を見ていた。

「……くっ」

踵をぶつけ扉を破ろうと試みる。正攻法で開けるのは無駄だと思われたのだ。だがそれでも衝撃が足りない。

そこで助走をつけて扉を破ろうと右足を引いた。だが駄目だった。転倒してしまったのだ。着物の裾にはさきほど落ちたくまの縫いぐるみが乗っていた。およそ布と綿ではありえない圧力を持つて。

そこへ示しを合わせたかのように、急に部屋全体が震え出し、梁の上の縫いぐるみたちは一斉に横たわる彼の体へと落ちてきた。そのどれもが縫いぐるみではありえない重量をしていた。

葉蔵は払いのけようとするが、それができない。びくともしない。数十の縫いぐるみが彼の自由を奪い、まるで押しつぶすように全身を覆った。いまだに部屋は大きく揺れている。次第に柱も梁も鈍い音を立てて崩れだし、彼はそのまま瓦礫の下へと埋もれていった。

。

一月十七日未明。H県付近の海域を中心に、未曾有の大地震が発生をしていた。

農村部に残る古い家屋はほとんど全壊し、都市部では高速道路が横倒しになるなど、歴史に残る甚大な被害を起こしたその地震の死者は六千人以上。被害者はその数十倍にもものぼると言われている。同じ地域で家屋全壊の被害を被った葉蔵があ夜に起きたことの多くを理解したのは、余震の収まった数日後のことだった。

地震発生から十数時間。彼が瓦礫の下から救出されたのは夜中になつてから。

誰もが彼の生存を絶望視していた。寺は江戸時代から使っている建物に多少の補強を加えただけのもの。震度七近くの地震なんて起これば崩れるのも一瞬だろう。しかも未明となつては布団から起きだす間もない……皆はそう考えていたからだ。

だが彼は生きていた。しかもまるきり無傷で。救出されたとき、無数の縫いぐるみが彼の代わりに裂けていたのを見た人もあるという。

悪縁のない人形たち。彼らを動かしていたのは、葉蔵に対する恩義の心だったのかもしれない。自分とその仲間の最後を看取る男を、迫り来る過酷からなんとか救いたかったのかもしれない。

それらは科学的な要素だけで説明のつく話ではない。すべての真相は誰にも明かすことはできないだろう。

ただ葉蔵は仮家を訪れた家族へ、確信している事実だけを端的に語った。

「人形に救われた」と。

それから彼は暇を見つけては、あとき自分の代わりに傷ついた

縫いぐるみたちをちくちくと修復している。

孫娘はその脇で、例のくまの縫いぐるみを撫でていた。

「おじいちゃんを助けてくれてありがとうね。よしよし」

くまの縫いぐるみはやはり何も語らず、ちいさな掌に撫でられて微笑んでいた。

『人形供養寺』（夏ホラー2010）（後書き）

初出：2010年8月7日

改筆：2011年8月8日

『ねえパパお城だよ』（コメディ）（前書き）

ジャンル：コメディ 字数：2100～2200

『ねえパパお城だよ』（コメディ）

「ねえパパお城だよ！　きれいだよ！　見て見てっ！」

「……ソウダネ・キレイダネ」

高速道路から見える景色を指差し、娘の未柚（5さい）はとつてもはしゃいでいた。

そしてその隣。青白い顔してハンドルを握るのは父親の武三（40歳）である。やたら無機質な片言を返したがれっきとした日本人だ。現在、万博のロボットより表情が失われているがちゃんと人間でもある。

「あ、あっちのお城もすてき！　ヤシのはっぱが見えるよ！　ねえパパも見て！」

「ああ、そうだね。でもパパは今だけ未柚のそのつぶらなおめめをそつと塞いでしまいたいよ」

武三は汗を拭いながらカーナビに視線を向けた。一本道の脇にはHの文字が延々と並び続いている。

XXXX hotel。LoveアンドウPeace。やんちゃ姫……等等。

窓から覗く煌びやかな景色の一角には、子どもの教育にとてもよろしくない宿泊施設が所狭しと並んでいた。

そんな子供の目にはお城にしか見えない建物に、娘は目を輝かせながら無邪気な好奇心を膨らませている。

これは未柚が四才の時の「ねえパパ。赤ちゃんってどうやってできるの」事件以来の試練だと武三は思った。

苛立たしげにハンドルを握るが、無情なる車の列は一向に緩む気配を見せない。その間にも未柚は点在する成人向け憩いの場を指差し、あれこれ感想を述べていた。

「あ。あのお城もすっこーい！　ねえ、王子様とかもいるのかな」「いるかもしれないね」

「いいなあ。わたしも王子様につれてってもらいたいな」
「そんな王子様はパパがやつつけてやる。奥歯が全て吹っ飛ぶまでな」

後半、武三の言葉には邪悪な本音が小さく混じっていた。オブラートに包む余裕は失ったらしい。

「あ、やっぱりお姫様もいるんだね」

「？」

「ほらあれ！ プリンセスってかいてあるよ」

未柚の指す方向には、建物の屋上にでかかとホテル名の書かれた立体看板があった。

“ S X PRINCESS ”

気がつくと武三は皮膚がちぎれるくらい強くこめかみを押さええていた。

なんだこのネーミングセンスは！ アレ見て誰が「ステキな名前

」なんて展開になるんだ！ とうかなぜ行政は許可したッ！

風営法とかなんかそういうのはどこへ行ったんだそもそも国政は国民の厳粛な……

終盤、なんか憲法前文みたいなフレーズの苦言を武三は脳内で連ねていた。そんな武三を尻目に、未柚はその味わい深い看板へ食い入るような視線を向けている。

「プリンセスってえいご教室でおぼえたんだよ。未柚すごいでしょ」

「そうだなあ。未柚は可愛くて賢いなあ」

「えへへ。」

「ねえパパ」

武三は嫌な予感がした。

「よこの言葉はなあに」

予感は一秒で結果へと進化した。

「えすいーだから、あれはせ……」

「シックスツッツ！……！！！」

ラジオの音を掻き消す中年の叫びがこだまする。

「あれは、シックスつて、読むんだよ」

「あ、シックスならわかるよ！ 数字の6だよね！

でもなんでお姫様が6人もいるのかな」

「それは……あれだよ。ほら、7人の小人だっているだろ？ お姫様だけ1人だと不公平じゃないか……」

「そうなんだ。パパすごい！」

まったく意味不明でしかない説明だったが、無邪気な娘は納得したようだった。

しかしもう武三は限界であつた。これ以上何かを聞かれて、娘を健やかな道へ導ける答えを誤らずに選び続ける自信がなかった。

「未柚」

「なあにパパ」

「幼稚園の宿題を持ってきてただろう。あれをやっていないさい」

教育熱心な妻が無理やり未柚のリュックに詰め込んだ宿題の存在を武三は思い出した。遊園地に連れてってやるのに宿題を持たせるとかこういう神経してんだと口論になったが、現金な彼は今になって妻に心からの感謝をした。

「ええ。せつかくお出かけなのにパパまでしゅくだいのこと言うの……？」

「未柚。サービスエリアにいたら好きなだけアイスを買ってあげよう」

「うん！ 未柚がんばるよ」

未柚は元気に返事をしていそいそとポシエットから色鉛筆を取り出した。表情の切り替えが子役のそれに等しかった。さっきの文句はアイス買わすための手筈だったんじゃないか、と思わざるを得ない速さだった。

こうして武三はひとまず窮地を乗り越えた。サービスエリアで高原ダブルソフト（650円）を買わされた上に助手席はクリームで

べつとべとになったが、安いもんだと自分に言い聞かせた。
そう。これで終わったと思っていた。自宅に着くまでは。

その夜。武三は台所の床で正座をしていた。その眼前には妻のみどり（29歳）が般若のような笑顔で立っていた。

「空いた時間に宿題をさせてくれたのはお礼を言うわ。でもこの絵日記はないでしょ」

そこには16色の色鉛筆を余すことなく使用した大人のお城の絵が所狭しと描かれていた。

武三危機一髪。もう底なし沼に片足が漬かっているのを彼は肌で感じていた。

返答を誤れば疑いようもなく死だ。

武三は搾り出すように「それは遊園地のお城で……」と呟いてみたが、みどりは絵の一角に尖った爪を突きつけて夫に見せた。

そこには正確なスペルで書かれた“シックスプリンセス”の看板があつた。そしてその脇に“パパにえいごをおしえてもらったよ”の添え書きが。

さらばだ娘よ。勉強熱心な娘でパパは嬉しいぞう！

武三は妻の折檻を受けながら、薄れゆく意識の中で、愛する娘の笑顔を走馬灯のように見ていた。

『ねえパパお城だよ』（コメディ）（後書き）

え、あ、その、……うん。フィクションですよ？

『没ノ嘶 吊るされたドレス』（ホラー）（前書き）

ジャンル：ホラー 字数：4800～4900

『没ノ斷 吊るされたドレス』（ホラー）

二度と行きたくない場所がある。俺はそこで、二度と見たくないと思えるものを見た。

とあるラブホでの話だ。よく利用するなら心して聞いて欲しい。

お盆休みも終わりに差し掛かった頃だ。俺は当時付き合ってた彼女を乗せて夜の中央道を走っていた。

いや、走ってたというよりあれは“前進してた”くらいの感じだったかな。帰省ラッシュも相俟ってひどい渋滞だった。特にジャンクション付近なんかは30分に1キロも進めない有様で、それが1時間以上も続いた。運転手たちのストレスは半端ないことになってたと思う。俺がそうだったからね。

で、俺は文句言ったりハンドルを指で叩いたりしてて、見かねた彼女が休憩をしようって誘ってくれた。それが丁度ホテル群の脇だったもんだから、俺はけろりと機嫌を治して高速を降りた。高速沿いにラブホが多いのはこういう理由なのかなって思う。

インターから降りた俺たちはいちばん手近なホテルを選んで入った。駐車場は割と空いていた。けど中に入ったら……わかるかな。部屋選ぶボードみたいなやつ。あれ見たら空いている部屋がひとつしかなくて、彼女と「みんな考えること同じだな」なんて言って笑ってた。

ちなみに笑い話はこれで終わりになる。

俺たちは唯一空いていた部屋、707号室のボタンを押して7階へ向かった。エレベーターを降りたら突き当たりの部屋のルームランプが点滅してて、すぐにこの部屋だとわかる仕組みになってた。下心に背中を押された俺は意気揚々と中に入ったよ。なんの心がまえも無しにね。

そのとき見た光景を本当にシンプルに言うぞ。

部屋の中央に、真っ赤なドレスが浮いてた。

まあ正確には天井に用途のわからないフックがあつて、そこにドレスが赤いスカーフで括られてただけだよ。ドアを開けたときに空気が動いたのか、ベージュの壁紙をバックに赤のドレスがゆらゆら揺れてんの。

俺たちは「っ」みたいな声にならない声を上げた。彼女に至っては半ばパニック状態になって「何！ 何なのこれ！？」とか言いながら抱きついてきた。彼女が見てなかったら俺もそんな感じになつたと思う。

とりあえず落ち着かせなきゃつてことで彼女をドレスの見えない玄関へ戻し、ベッド脇の受話器を取った。フロントには十数回のコールでやっと繋がった。苛立ちに混乱までブレンドされた状態の俺は「はい、フロントですけど」の言葉を待つ間もなく「707号室ですけど何かドレスがかかてるんですけど」みたいなことを早口でまくし立てた。

すると答えまでに変な間が空いた。3秒か4秒くらいで長すぎるってことはないけど、不自然な間だった。

「おい聞いてんのか」の声が喉まででかけたくらいになつてやっと言葉が返ってきた。女の声だった。女は詳しい事情を聞くことなくこう言つた。

「申し訳ありません。降ろしてください」

誠意のない対応にはあ？ っと思つて何か言つてやろうとしたけど言葉に詰まつた。そしたら「申し訳ありません。よろしく願ひします」と言つて相手の方で通話を切りやがつたんだ。

話にならないつて思つて俺は玄関の彼女のところへ向かつた。なるべくドレスは見ないようにね。それでさっきの旨を伝えたら、彼女は少し悩んだみたいだけど、早くやることやつて出ようという話に落ち着いた。

本当は今すぐにも出たかつたと思うよ。けど金払うのは俺だし気を遣つたんじゃないかな。俺もテンションはだいぶ下がつてたけ

ど、彼女も言うことだしってことで提案を受け入れた。

それから彼女をすぐにバスルームに向かわせ、俺はドレスを下ろす作業に移った。

椅子に乗ればフックに手は届くものの、スカーフがやたら硬く結ばれてて外すのに手間取った。ドレスの重さで結び目がこんな硬くなるのか。とか、俺はよくわからん文句をぶつくさ言いながら何とか彼女が出てくる前にドレスを降ろしてクロゼットにぶち込んだ。

それで、ね。はじめるわけですよ。まあその話は省くとして、行為の後の俺はドレスのことが割とどうでも良くなってきた。

だってドレスさえ目の届かないところにしまえば普通の部屋だもんな。心地いい倦怠感も手伝ってか、彼女に至っては腕の中で眠ってしまった。

俺はちよつと変な気もしたけどまあ彼女がいいならってことで、起きるのをぼんやり待った。天井のフックはなるべく見ないようにしながらね。

そしたらいつの間にか俺まで眠ってて、気がついたら夜中の1時を回ってた。やっべ、宿泊料金になっちゃったか……。とかそんなことを寝起きの頭で考えてたら、横で寝てたはずの彼女の姿がないことに気がついた。

シャワーでも浴びてるか、あるいはトイレに入っているのか。俺は深く気にせず彼女が戻るのを待った。けど待っても待っても彼女は戻ってこない。というかシャワールームはすぐ傍なのに人の気配が感じられなかった。

なんかあったのかって思って、俺はバスルームをノックした。一応ドアを開けて中も確かめる。が、誰も居ない。トイレも同様だった。

ベッドに戻ったが服は残っている。ソファーにはバッグもあった。だが肝心の彼女の姿だけがない。

そこら辺で思考がだんだんはつきりしてきて、彼女の姿が見えな

いではなく、居なくなっている可能性を感じ始めた。

俺は意味もなく二度三度とバスルーム、トイレを見た。もちろん居るわけない。それでもう万策尽きてどうしようってなったとき、まだ見ていないところがあることに気がついた。

それはあのドレスをしまったクロゼットだ。クロゼットは人ひとりが入れるスペースがぎりぎり空いている。

それを思いついたときはもう祈るばかりだったよ。見つかったくれ。悪戯であってくれって。

クロゼットの扉に手をかけて、俺は一気に扉を引いた。

彼女の姿はなかった。

なぜかあの赤いドレスも消えていた。

そして誰の声かわからない。けど確かに聞こえた。

変に高い女の笑い声が耳元で聞こえてきた。

その声で俺の思考はすべて吹っ飛んだよ。どういうプロセスだったかぜんぜん思い出せないけど、服だけ着た俺は靴も残したまま廊下へ飛び出そうとした。けど部屋の機械で清算してから出るタイプのホテルで、俺は金払おうとしたけどポケットになくて、財布を忘れてるのすらそれで気がついた。

財布を速攻で回収して今度こそ外へ出る。そのときの俺が立っているのが、ちょうど廊下の突き当たり。すぐ右手には帰り専用のエレベーターのある位置って思ってくれ。

で、廊下の先。5部屋ぶんくらい向こう側にソイツがいた。

見間違いつてことはありえない。例のあの真っ赤なドレスを着た彼女が長い髪を下ろした状態で、こちらに背を向けて立っていた。

俺はどういうわけかわからないけど彼女があドレスを着てそこにいるもんだと思った。だって彼女とドレスが消えたんだ。そうとしか思えないよな、普通。

それでもう叫ぶみたいに彼女の名前を呼んで、そっちに歩み寄ろうとしたんだ。けど一步を踏み出した瞬間に、彼女の足元を見てお

かしいって思った。

素足のつま先がこっちに向いているんだ。後ろ姿なのに。それでやっと気がついた。ソイツは背を向けているんじゃない、最初からこっちを向いていたことに。

全身に嫌な汗が吹き出た。自然と踏み出した足も止まる。もしたらソイツは俺が足踏みをしたのを見るや、ガクガクと首だけを上下させながら、足は引きずるみたいにしてこっちへ寄ってきやがった。

そのとき後ろ髪だと思ってた前髪が動いて、前髪の向こうが見えたんだが顔はわからなかった。ソイツは首から上がなかった。首に巻いたスカーフより上は空洞になって、前髪の奥に後ろ髪が見える感じ。頭部がまるまる透けていて、長い髪の毛だけが浮いて見えるのをイメージしてくれたらいいと思う。

完全に泣いた。

ばあちゃんが死んだときより泣いたが、あれ見て泣いた自分を情けないとは未だに思わない。

俺はもう無我夢中でエレベーターのボタンを連打して、2階のフロントに駆け込んだ。フロントではスルメ噛んだおっさん（警備員かな）が出てきて、パニック状態の俺を見るなり

「どうしたニイチャン！ 落ち着け！」

って肩をゆすって本気で心配してくれた。救急車でも呼ばれかねん勢いの俺だったが、なんとか状況を説明できるくらいにはなつて、彼女がいなくなった旨とその他諸々を説明した。

そしたら警備員はちゃんと制服っぽいのを着た従業員を呼んで、すぐさま7階へ向かってくれた。取り残されるのは本気で怖かったので、俺もついていくことに。本当は絶対行きたくないかったが、誰も居ない廊下で待たされるよりは100倍マシだった。

3人で昇りのエレベーターに乗って上階に向かう。そしたら7階が近づくにつれ頭上から

“ どんどんどんどん”

つてけたたましい音が聞こえてきた。微妙に悲鳴すら聞こえた。相当の声で叫ばなきゃああはならない。

7階に着いた瞬間俺はもう“閉”のボタンを力いっぱい押したよ。けど到着したエレベーターは問答無用で開くため、扉の向こうのやつとの顔合わせを回避する手段はない。

開き始めた扉の切れ目から赤色が見えた。

扉を叩いていたのは、赤いドレスに身を包んだ彼女だった。

俺たち3人と彼女の視線が絡み合う。彼女は涙と鼻水で顔をぐっしやぐしやにして、誰の目もはばからずに扉の一番近くに立ってた兄ちゃんに抱きついた。

兄ちゃんは固まっていた。警備員のおっちゃんも固まっていた。

2人とも彼女の身体の一点に視線を釘付けている。その先には、彼女の首にしっかりと巻かれた赤いスカーフがあった。

それから俺たちは応接室つばいところに通された。そこでまず茶を出されて、次に金を渡された。もちろんここであったことは口外するなという意味としか受け取りようはない。

けどそれで納得できるわけもないから説明を求めた。2人は思いっきり茶を濁そうとしたが、俺が退かないもんだから、誰にも言わないことを約束に、ほんの少しばかりの説明を受けた。

「もうわかりかと思うのですが、あの部屋は、いわくつきの部屋です。昔あのドレスを着たお客様があの部屋で、その……あの部屋を最後の場所にされました。

そのときドレスは警察の方が確かに回収されたのです。間違いないですね。けれど事があった数日後、ドレスは誰も知らない間に部屋に戻ってきていました。あの光景を再現するかのように。スカーフで吊るされた状態で、です。

警察にも言いましたが、身寄りのなかった女のドレスは確かに処分したといって取り合ってくれません。社長はドレスの処分を命じ

ましたが、何度処分してもあそこにかかっているんです。いつのまにか。誰も見ていないうちに。

そして吊るされたドレスを降ろした人は必ず不幸にあうので、私どもはあの部屋のドレスには決して触れないよう、707号室を使用不能にしたはずなのですが……」

そこで俺の顔色に気がついたのだろう。兄ちゃんは露骨に言葉を濁した。

707号室使用不能になってなかったじゃねーかとか、なんでそんな部屋残しておくんだとか文句は死ぬほどあったが、そんなことはどうでもよかった。

「ドレスを降ろした人が……何？」

聞くと兄ちゃん「私どももドレスは降ろさないようにと忠告する取り決めなのですが」って。

もう当然怒ったさ俺は。

「ふざけんな降ろせて言ったじゃねーか！ 電話ん時の女出せよ！」

そう言ったら、兄ちゃん。

「……。」

うちの従業員に女性はありません……」
だって。

『申し訳ありません。降ろしてください』

……あれは従業員じゃなかったらしい。

体温がスーってなくなっていくのを感じたよ。

隣で彼女がまたがたがた震えて泣いたが、泣きたいのはこっちのほうだった

それから彼女は俺に連絡を寄越さなくなった。俺のほうからも、会おう、とか会って話をしようとか言う気にはならなかった。断ち切りたかったんだよ。あの出来事にまつわる何もかもを、さ。

おいおい、なに後ずさってるんだ妹たちよ。冗談だ冗談。作り話さ。

今のところ俺の身に何も起きてないだろ？
でも一応、宮ジャンクション近くでラブホ使ったときには気をつけたほうがいいぞ。

作り話だけど……一応な。

『カレは小説家』？（恋愛）（前書き）

ジャンル：恋愛 字数：？～？ 合計2000文字

『カレは小説家』？（恋愛）

同棲中のカレが小説家を目指しています。

今日もひとつ書き上げたということで、読ませてもらいました。カレの得意な恋愛ものです。

主人公はカレにとっても似た男の子でした。

そしてヒロインはどことなく私に似た女の子でした。なんだか嬉しくなってしまうです。

でもひとつだけ不満がありました。

「どうだった？」

感想を求めるカレに、私は原稿を手渡して言いました。

「ヒロインの胸が大きすぎです。Bカップにすべきだと思います」

『カレは小説家』？（恋愛）

同棲中のカレは小説家を目指しています。

今日は見せ場である“告白シーン”が書きあがったということで、私に原稿が手渡されました。

「どうかな」

「駄目です。“好きだ”だけじゃ安易すぎます」

「そっか。じゃあ君を守りたい、とか」

「駄目です」

「難しいなあ……」。

「幸せにするよ、は？」

「駄目です」

「一緒にいてくれないか」

「駄目です」

「どうしたらいいんだ……」

「とりあえずもって言うてみてください。私が満足できるまで。」

『カレは小説家』？（恋愛）

同棲中のカレは小説家を目指しています。

そんなカレは趣味でネットに小説を投稿しています。

「やった。見てくれ優奈！ 感想きたよ！」

「よかったですね」

「内容もべた褒め。やっぱりわかる人にはわかるんだよねあ」

絵に描いたようなにやけ顔が私に向けられます。

「しかもランキング常連の燕子^{つばめこ}さんからだ。急いで返信しなきゃ」
嬉々として返事を打ち始めるカレ。

ごめんなさい。燕子はこういう形でないと素直に褒められないのです。

『カレは小説家』？（恋愛）

「あの、できちゃいました」

私の一言にカレが青ざめました。

夕飯が出来たのを報告しただけなのですけど、何か。

「どうすればいいでしょう」

聞くとカレは

「どうすればって、そりゃ責任とらなきゃ！ でもデビューも出来てないのに、いやそんなこと言ってる場合じゃ……男として……」
なんて色々言ってくれました。

「何笑ってんの優奈っ」

「別に、です」

「ごめんね。からかって。でも嬉しかったよ。」

今日はいっぱいお酒飲んでいいからね。

『カレは小説家』？（恋愛）

「今度……うちの両親に会ってくれないかな……」
幸せは勇気の先に。結婚式はマリエール。

カレとテレビを見てたらそんなCMが流れました。
年頃の私は見るたびに変な気持ちになるCMです。

私もそろそろ、とか。二十八までには、とか。でも重たい女と思われたくないし……とか。色々考えてしまいます。

カレは何も言ってくれません。

何も言わずに公募の執筆に戻ります。

今はそれで充分です。

がんばって。応援、してるから。

『カレは小説家』？（恋愛）

掃除をしてたらベッドの下から変な本が出てきました。表紙に紙のカバーが付いています。

またカレがエッチな本を隠したのでしょうか。巨乳ものなら許しません。

カノジヨの名のもとに検閲開始です。

主人公のケンジは16才！

さい強の戦士の息子で頭もいい。IQは500くらいある。
おさななじみと妹から迫られる毎日を送

“せっていノート” そう書かれた1ページ目を私はそつと閉じました。

昔と比べて成長したんだね。私は嬉しいよ。

『カレは小説家』？（恋愛）

私のカレは小説家を目指しています。

ですが作品がまた落選して、ひどく落ち込んでしまいました。

「もう諦めようかな」

カレがビールをおりながら言います。

「優奈だってこんな夢見がちな男、嫌だよな。将来性ないもん。」

優奈みたいに大学出てさっさと就職しときゃよかったんだ」

「夢を諦めた私を羨ましいと思うの？」

私の問いにカレは何も答えませんでした。

だから私も何も言いません。黙ってカレの頬を思いきりひっぱたきました。

『カレは小説家』？（恋愛）

大学四年までに作家デビューできなければ就職する。私は親とそんな約束をしてました。

だからがむしゃらに書いて書いて書いて。でも最後まで手は届かなくて。

私が夢破れて、物書きの道を諦めた日にあなたは言うてくれましたね。

「夢の続きは俺が見せてやる」って。

そう言えるあなたがどれだけ羨ましかったかわかりますか。

そう言ってもらえて、私がどれだけ嬉しかったかわからないのですか。

気がついたら涙が出ていました。

一緒に夢を叶えるその日まで、もう泣かないと決めたのに。

『カレは小説家』？（恋愛）

「ごめん……優奈」

カレの腕が、私の身体を包みました

「目、覚めたよ。約束したもんな」

。

覚えてて、くれたの？

かすれ声で聞く私にカレは頷きました。

「大学時代の優奈に教えてもらったはずだった。諦めないのがどれだけカッコいいことかって。

やっと思い出したんだ。ごめん、時間かかって。でももう忘れないよ。

だからもう一回約束する」

そう言うカレの目は輝いていました。

私に約束をしてくれたあの日と同じ目をしていました。

「また一緒に、夢を目指そう」

カレの言葉が胸に届いたとき。じんわり身体が熱くなって、鼻がつんと来て。

駄目でした。声が出ませんでした。

でもせめて、気持ちには伝えなきゃって思って。

力いっぱい抱きしめました。

ありがとう。大好きだよ。

そんなこんななカレとの日々。色々ありましたが、カレは今も小説家を目指しています。

今も、まっすぐに夢を追ってくれています。

『カレは小説家』？（恋愛）（後書き）

カレ「……って俺、小説家になれてねーじゃん!？」

『1/365』(ss)(前書き)

ジャンル：ショートショート 字数：2700～2800

初夏の季節。若葉の香る林道を一台のスポーツカーが走っていた。サングラスの似合う男が鼻歌交じりにハンドルを握る。その脇では白いワンピースに身を包んだ女が、麦わら帽子に右手を添えながら、絶景に眼を細めていた。

「どうよ。たまには山のドライブもいいだろ」

スピーカーの音を落として話しかける男に、女は柔らかない笑顔を向けた。

「ええ。風がとっても気持ちいい」

「だろ？ 頂上に着いたらもつといい眺めが待ってる。天然水仕込の流しそつめんが食える店もあるんだ。そこで食事しよう」

「嬉しい。そつめん好き」

「わさびはこの山で取れた生わさびらしい」

「とれたて生わさび！ やった。楽しみ」

エンジン音とせせらぎと、野鳥の鳴き声をバックに雑談を楽しむふたり。久しぶりのデートに話題が尽きることはなかった。一時間半の山道でさえ、退屈の二文字が頭を過ぎることはない。

九合目の駐車場にはちらほらと観光客の姿があった。ふたりも観光客の列に混じって、木造の手すりが伸びる坂道を登ってゆく。一段先を歩く男が手を差し出すと女は小さく礼を言っつてその手を取った。

「あっちが食事処か。まだ少し時間あるけど、どうする？」

「ん。パンフレットには鮎のつかみ取りができるところも載ってるよ。取った鮎はその場で塩焼きにして食べられるみたい」

「いいねえそれ！」

「行く？」

「ん……あ、ヒメさえいいなら」

「私もやりたい。一緒に行きましょう」

そうしてふたりは受付を済ませて浅瀬に入った。冷たいせせらぎを泳ぐ鮎は必死に追う手を優雅にすり抜ける。ふたりは水浸しになるのも厭わず幼い子どものようにはいしゃいだ。そして気だるくなつた身体に、素麺の清涼感が心地よく感じた。

麦茶とわらびもちをつつきながら、男が昇りきつた陽を見上げる。

「まだちよい暑い。頂上はもう少ししたら向かうな」

「わたしは平気だよ？」

「俺がしんどいの」

籐の背もたれへ体重を預ける男に女が「お疲れ様」と言って笑つた。

蝉の声を聞きながら畳の休憩処で一休み。一休み。

そして休みすぎた。

「やば！ このままじゃ夕方になる。」

ヒメ、起きろ！」

「んー……なあに？ 我慢できないの？」

「何がだっ！ 俺ら夜景を見に来たんだろ」

「ふぁ……」

大きなあくびをする女に水を飲ませ、男は手早く山登りの準備を始めた。寝起きにしてはなかなかの手際だった。

まだ眼をこすっている女の歩幅に合わせて山道を登る。ほかの観光客に出遅れたせいかな人影はあまりなかった。

「山登り、久しぶりだね」

「そっか？ 去年も行かなかったか」

「去年は海に行ったよ」

「そっか。キャンプは一昨年か」

「その前はプールだね」

「山か水場しか行ってないな俺ら」

これはもうちょっとデート工夫しないと。男はばつが悪そうに頭を掻いた。

帰りにデート雑誌を買って帰ろう。もちろん女にはばれないよう

に。男は変な見栄を胸に秘めつつ、小さなリュックをかつぎ直した。

ふたりが頂上に出たときには、空にうつすらと星が浮かんでいた。周りのカップルがそうしているようにふたりも身を寄せ合って空を眺める。

「綺麗だね」

「ああ」

「今年も楽しかったね」

「そうだな」

「次はどこに行こうね」

肩に頭を預けたまま、女がぼつりと言った。

「そうだなあ。いい加減、海の幸山の幸も飽きたな。」

夏祭りとか探すか」

「お祭、いいね」

「死ぬほど金魚とつてやるよ」

「水風船も取ってくれる？」

「何でも取るさ」

「嬉しい」

「来年、一緒に行こう」

「うん。」

でも……」

山間の涼やかな風が静かに吹いた。女がまた少し、男に身を寄せた。

「もつとたくさん、会えたらいいのにね」

そう呟く女の視線は星屑に釘付けられていた。群青の空を裂くように走る天の川。太陽の明かりが西の山へ沈むにつれ、ふたつの星を分かつ河はその光を濃くしてゆく。

「きつと会おう。来年の七夕も」

広場を囲む笹の葉がさらさらと音を奏でる。男はそつと女の髪に手のひらを置いた。

もうじき七月八日がやってくる。

一年に一度きりの恋がもうじき終わる。

「知ってた？ わたし、セーター編むの得意なんだよ」

「そうなんだ。さすが機織り娘。^{はたお}ひとつ編んでもらいたいな」

「うん。ヒコくんのとわたしの、おんなじの作る」

「お揃いか。ちょい恥ずかしいな」

「胸に大きなハートマークを入れるね」

「いやだいぶ恥ずかしいぞ」

「それでね。それでね」

男に絡める女の腕が、その力をわずかに強める。

「お料理も練習したから、お弁当作ってお花見したいな」

「卵焼きしか作れなかったのに？ 一年見ないうちに上達したんだな」

「お雑煮もできるよ。すごくおいしいの。わたし、お正月は大活躍なんだ」

「そっか」

「ヒコ君にも食べさせてあげられたら……いいのに」

女の肩が震えだした。毎年のことながら、男は苦い表情を隠しきることができずにいた。

何度思い描いたことだろう。七月の外の世界をふたりで過ごせる、そんな夢を。

ふたりの夏の終わりに待ついちばん切ない時間が過ぎてゆく。何百回繰り返し返しても、慣れることはできない。

ため息を噛み殺して男は微笑んだ。そして目を閉じて言った。

「一緒にセーター着よう。お花見も行こうよ。俺、デートの計画立てるからさ」

「……。密航するの？」

「いやそれはヤバイ。天帝にばれたら今度こそ会えなくなる」

というか天の川渡ることを密航って言うなよ。ロマンも何もない。

などという文句は噛み殺し、話を続ける。

「嘘じゃない。密航はできないけど、約束するよ。セーターも作ってきてくれ。一緒に着よう。」

「セーター着て山登りは嫌だよ？」

「俺だつて嫌だ。」

大丈夫、任せてくれ。だから」

男は女の身体を引き寄せ、ぎゅ、っと抱きしめた。

「信じて待つていてくれるか」

こくり。女は頷いた。男は徐々に強くなる星の明かりを見上げて、小さく息を吐いた。

そして夏は終わり、秋を迎え、冬を過ごし、春の花が散ってゆく。

三百六十五日の時間が過ぎ、翌年の七夕。ふたりは人のごつたがえするロビーに待ち合わせていた。

「ごめん、待たせた」

チェックを済ませた男が駆け足で女の元へ駆け寄る。白いコートに身を包んだ女は「遅いよ」と口を尖らせながらも表情を緩めた。「というわけでオーストラリアに来たわけだが」

男はハンドタイプの地図を開いた。

南半球、オーストラリア。アジアとは間逆の季節を送るこの国で何をして過ごすか。基本的に夏しかデートをしたことのない男は頭を悩ませた。

「まずはやっぱコアラか？ コアラなのか？」

「コアラもいいけど」

女は大きな旅行鞆を開くと、嬉しそうに手作りのそれを広げて見せた。

「まずは着替え、でしょ」

いびつな形のセーターが男の視界を覆う。

もちろん、胸には大きなハートマークが編みこまれていた。

『1/365』(ss)(後書き)

このリア充ども……う、羨ましくなんてないんだからねっ！

『怪人ヒーロー』 プロローグ（ファンタジー）（前書き）

ジャンル：ファンタジー

字数が三千文字を超える作品です。ご了承ください

『怪人ヒーロー』 プロローグ（ファンタジー）

夕日に染まる茜色の空をバックに、黒く、大きな暗闇が浮いていた。

黒い何モノかの集合体がぐにやぐにやと形を変えながら、夕暮れのオフィス街を浮遊する。

音もなく。ゆっくりと。

建物をその体内に吸い込みながら彷徨い進む。

標的から約250mの地点にて、最も間近から影を見上げた男は後にその姿をこう称した。

“^{ハデス}悪魔の右腕”

ピアノを弾く手のような拳動の影が、高さのある建造物を撫でてゆく。影の指先が少しかすったかと思うと、次の瞬間には鉄塔の上半分がなくなっていた。破壊とは違う。忽然とこの世から消滅していた。垂れた送電線だけがそこに拠点があったことを物語っている。目の前の敵を討伐すべく現れたはずの男の額にはかいたことのない汗が滲んだ。

何だ。アレは。

木も、草も、鉄も家もコンクリートも、影に飲まれては消えてゆく。それは彼がいままで対峙したどの怪人とも似つかわないう形状であり、性質であり、そして圧倒的な不吉を孕んでいた。

男の立つマンションの屋上へ徐々にその影が迫る。……対処法不明、名称すらも不明。男にすれば敵は“何がなんだかわからない何か”としか言いようがない。

しかしそれでも、男にはひとつだけ確信できることがあった。

私はアレに勝てない。

アレに立ち向かう覚悟なら、私はここで死ぬだろう。

男はしばし瞼を閉じ、右腕の装置から発生させられる電波を切っ

た。怪人の興奮をコントロールするための装置だがエネルギーの無駄としか思えなかった。

今の彼にできることはもはや二つに一つ。挑むか。撤退か。

厳密に言えばヒーローたる者に敵前逃亡の選択は有り得ない。彼は国防庁怪人対策課より正式の認可を受けたライセンス持ちのヒーロー。国家公務員だ。公共の福祉のため命を賭けることも仕事のひとつに含まれている。

“死んでも文句を言わない”そんな趣旨の書類にサインをしたとき覚悟は固めたはずだった。養成所時代に積んだ地獄の訓練で、覚悟は散々叩き込まれてきたはずだった。

何がヒーローとして正しいかは理解していた。それでもなお迷うのは彼がヒーローである以前に、人間だったからに他ならない。

様々な映像が男の脳裏に浮かんでは消えた。

男はサーベルにかけた手を離し、震える足で階段を駆け下りた。

そして非常信号を発するボタンを連打し、唇を噛みながら走った。すぐ背後では守るべき町並みが消えてゆく。男の目には涙が浮いていた。

国防庁長官により事態の収束が発表されたのはその二時間後。避難に遅れたとみられる市民一名と、ヒーロー二名の犠牲を出した後の出来事だった。

『怪人ヒーロー』 其の一（ファンタジー）

雑踏が彼には懐かしく思えた。

ビルの間を突き抜ける通りをたくさんのヒトが行き交っている。シヨーウィンドウを覗き、雑談をするヒト。アイスクリーム屋の順番待ちに並ぶヒト。通信機器を弄りながら歩くヒト。

ヒト、ヒト、ヒト。街は休日を楽しむヒトで賑わっていた。

変わったな。男はサングラスに指を当て、建物の群れを見上げた。一度は壊滅した街が今やその爪あとさえ残してはいない。戦争、災害、異生物の侵攻。度重なる国難に見舞われながらも、時間を糧に、傷ついた社会は形を取り戻してきた。

復興におけるヒトの力は大したものだと男は改めて感嘆した。次々に増える建物は、10年前の惨状を嘘にしてくれるようにさえ思えた。

煤けたメモを片手に知らない道を歩く。大通りを逸れて裏道へ。交差点をいくつか抜け、左手のさらに細い路地へと入る。

男の捜している場所は、メモに示された建物の二階にあった。

ヒワタリ総合警備事務所。

道から見えるガラスの一枚一枚に、大きなゴシック体の文字が貼られていた。

応接室に通された男を迎えたのは、ぱりつとしたスーツを着こなし、柔らかな笑みを浮かべる怪人だった。

身体の大きさはヒトとさほど変わらず顔つきも限りなく人間に近い。だが爪の先、耳の先、歯の先が“刃物”だった。鋭い銀色の刃が蛍光灯の光を受けて輝いている。

「お掛けください」

鉤爪つきの手のひらをソファへ向け、怪人は客をもてなした。「どうも」怪人の顔に目を釘付けていた男だったが、特に警戒をあら

わにすることもなく腰を下ろした。

「驚かれたでしょう。所長がわたしのような者で」

男は秘書らしき女性の出した紅茶に口をつけた。女性はヒトの見た目をしていた。

「いや。怪人の方が企業を運営されるケースも今じゃ珍しくありませんよ。」

もつとも、この街で姿をお見受けするとは思いませんでしたが」

「でしょうね。風当たりが強いですから」

男の言葉にも、談笑するような調子で所長は返した。

「“ハデスの右腕”が現れて以来、この街でわたしのような者は商売がしづらくなったものです。」

おっと、申し送れました。わたしは所長のルガルタと申します。

こちらは副所長兼秘書の樋渡」

紹介に預かると同時に、ルガルタの脇の女が頭を下げた。

「事務所の名前も彼女の名前から取っています。わたしの名では聞こえが良くないものですから」

「いえ、そんなことは」

そう言つと男は差し出された名刺を受け取り、自分のものを返した。斉藤毅【Takeishi Saitou】という名前と連絡先だけが記されている。

「早速ですが依頼のお話をさせていただきたい」

話が切り出されると同時に、名刺へ向けられていたルガルタの目がわずかに鋭くなった。

「要諦は私の身の安全の確保。用心棒です」

「わたくしどもの事務所へいらしていただいたということは」

「ええ。怪人からの警護です。数はおそらく十以上」

「ほう、それは」

表情こそ穏やかながら、声にはわずかに緊張の色が混じった。十体以上の怪人からの警護。その場の怪人の程度によるが、武装集団からの警護と同等以上の装備とスキルを求められる仕事になる。過

去の経験からルガルタには仕事の大きさが容易に理解できた。

「一週間後にわたしはある人間との交渉に臨む予定でいます。そちらのスタッフにはその場に同席し、邪魔が入るのを防いでいただきたいのです」

「人間との交渉？」

「はい」

「。 “ただの人間” が浮浪怪人を従えているのですか？ それも十以上も」

二度目の問いに、斉藤は目を見開いた。正面ではルガルタが彼の瞳の奥を覗いている。所長を名乗る怪人の状況把握は斉藤が思うよりも早く、正確だった。

人間社会で生活する怪人は今や決して少なくない。ルガルタのように言葉を話すことのできる怪人はこの国の七割を越える地域で市民権を与えられている。しかしそれらの怪人には国防庁への所在報告・登録が厳格に義務付けられているため、二桁を数える怪人が一箇所に集まる場所は当然、国防庁によってマークされているはずだ。ただ国防庁の監視下において怪人が暴力装置として個人のもとへ集められることはあり得ない。必ず国の調査が入る。

となれば依頼人の言う怪人とは未登録の浮浪怪人だと、ルガルタには容易に想像がついた。だが二桁を数える浮浪怪人を囲うほどの知識と力を持つ人間など、そう多くいるものではない。

「まさかとは思いますが、その交渉相手とは国防庁の上層部の人間あるいは」

頭に浮かんだ最悪の仮説を、ルガルタは容赦なく口にした。

「ヒーロー、ですか」

ヒーロー。

正義の心と圧倒的な武力を持ち、人間に仇をなす怪人を討伐する者たちの称号である。

全ての怪人の生殺与奪は彼らの手に握られている。国防庁から特別のライセンスを得たヒーローがその怪人を“無害”と見なせば生

かされ、“有害”と見なせば速やかに処分をされる。

それはルガルタのように市民権を得た怪人として例外ではなかった。審判を下す存在。その名を口にしたとき、ルガルタの視線が遠くを捉えているのを樋渡は横目に見ていた。

「国防庁が未確認の怪人をそう何体も見つけ、それを管理するなどそれこそプロの知識と力がなければ不可能でしょう。」

ヒーローによる未登録怪人の不法所持問題。……もしもわたしの言う仮説が正しいのであれば我々の関わるべき依頼の範疇を越えています。

善良な一市民としては関係機関への通報をお勧めしますが」

言葉と共に、探るような視線が斉藤へと向けられる。

それができれば苦労はない。斉藤は胸の内で悪態をついた。しかしルガルタはそれをわかった上で言っていることも、斉藤は察していた。

「彼はヒーローではありません」

視線がカップの水面に映る天井へと向けられる。

「交渉相手の素性を話すことはできませんが……ただし誓って、彼はヒーローなどではない。それだけは確かなことだと保障します」

逸らされた視線をルガルタの眼が覗く。ヒトの支配する世界で生きるために、何人ものヒトを見てきた眼だ。

「続きをお聞かせください」

ルガルタの言葉に斉藤は頭を下げた。全てを話せない自分を信じてくれたことへの、純粋な感謝だった。

「彼は世の中へ大きな憎しみを抱いています。そしてそう遠くない未来、彼は集めた怪人たちと共に馬鹿なことをしようと目論んでいる。」

私はそれを止めたいのです」

「馬鹿なこととは？」

「具体的には何もわかりません。ただ秘密裏に怪人を集めてすることなどいくつも考えられないでしょう」

「まあ、よからぬことでしょうな」

略奪。破壊。殺戮。

世の中に憎しみを持つ者が怪人という戦力と結びついて至る結末は、どれもヒトにとって暗い未来ばかりに思えた。

「通報によってヒーローが向かえば、浮浪怪人の集まりなどものの五分で殲滅です。テロ行為そのものは未然に防がれる可能性は高いでしょう。」

しかし彼はおそらく相手がヒーローといえど応戦に出る。刺し違えるのすら覚悟でね。そういう男なのです。そうなれば問題は怪人の不法所持などで済まされない」

「成程。交渉の相手を救うことに一義的な目的があるということですね」

テロを防ぐだけでよければ通報すればいい。しかしそれができないのは、交渉相手が罪に問われてしまうからか。

話と依頼人の反応から、ルガルタは斉藤の本意を推察した。

「予定の交渉は一週間後。多少の調整は可能ですが、さして猶予はありません。時間を与えればその分だけ邪魔に入る人員が増すかもしれない。」

引き受けていただけますか」

一週間後に斉藤は怪人を囲う人間との交渉に臨む。ミッションは、交渉相手を囲う怪人から斉藤を守る事。

ルガルタは依頼の概要を反芻しながら聞いた。

「確認をさせていただいてよろしいですか」

斉藤が頷く。

「我々はクライアントの意思を最大限尊重して動くことを心がけております。今回の件では国防庁の介入を避けたいとのことです。でお話してくださった内容を我々が漏らすことは一切ありません。」

ただしそれはあくまでクライアントとの信頼関係が結ばれた上でのお約束です。もしもお話いただいたことに虚偽の情報がある場合には、こちらにも不本意な手段をとらざるを得ない場合もございます

が」

嘘はないか？

その一言をルガルタは然るべき形式に変えて斉藤へぶつけた。斉藤は間を置かずに首を縦に振る。

「勿論です」

「良かった」

ルガルタは口を吊り上げ、銀の歯を覗かせた。

「それではこちらの書面にサインを」

成功報酬や緊急時の対応等、最低限の事項だけが簡潔にまとめられた契約書が樋渡の手から差し出される。斉藤はルガルタを一瞥して、ペンを取った。

かなり強い。

この怪人おとこの力なら奴らに對抗できる。

書面に向ける斉藤の顔にはわずかな笑みが浮かんだ。

サインを書き込み、ルガルタへと手渡される。「結構です」そう言うのとルガルタは書類を樋渡へと手渡し、彼女へ指示を出した。

「失礼します」

斉藤へ一礼を残し、樋渡が応接室を去る。

「少々お待ちください。今、本件に適任のスタッフを呼んで参ります」

その一言に斉藤は顔を上げた。

ルガルタが直接、護衛に当たるわけではないのか？

表情こそ変えずにはいたものの、斉藤は意表を突かれた思いが拭えなかった。湯気の消えた紅茶を口へと運び喉を潤す。

そのとき、応接室の外で足音が止まったのに斉藤は気がついた。

おそらくヒトが二人。扉の外にいる。

斉藤の視線だけが向けられたのと同時に扉が開いた。

現れたのは十七・八かそこらの青年だった。

『怪人ヒーロー』 其の二（ファンタジー）

入室した直後に斉藤は青年と目が合った。

青年が黙って会釈をする。愛想ほどの笑顔もなかった。品定めするような視線を送ったまま、斉藤もまた会釈を返す。

青年の後には樋渡とは別の女が続いた。青年ほどではないが彼女もまた斉藤の目には若く見えた。二十代の前半くらいだろうか。目鼻立ちの節々にあどけなさが残っている。

先ほどまで樋渡の立っていた位置に、二人の男女が並んだ。

「彼らが……？」

斉藤の問いに、ルガルタは笑みを浮かべて頷いた。

「ええ。本件に適任のスタッフです。彼女は藤見。その脇の彼は滝塚と言います」

促され、すぐ脇に立つ女の方が小さく頭を下げた。スーツに身を包む所長・副所長とは違い薄手の白いウィンドブレーカーを着用している。化粧気も薄く、警備会社のスタッフらしいいでたちをしていた。

「はじめまして、藤見です」

藤見が自分の方へ寄るのを見て、斉藤も反射的に立ち上がった。

差し出された手を握り返しつつこれから世話になる女を観察する。さっぱりとしたショートヘアに人の良さそうな笑顔は、自然と職業人としての好感を斉藤へ植えつけた。

問題は護衛としての腕前だが……。

「ルガルタさん」

斉藤は握った手を放すとルガルタの方へと向いた。

「試させていただいてもよろしいですか」

そう言って胸ポケットから名刺を取り出して見せる。彼の言葉を藤見はきよとした顔で聞いていた。が、ルガルタは「構いませんよ」と頷いた。

その先は間髪すらなかった。

ルガルタの許可と同時に斉藤の手からは名刺が消えていた。瞬間、薄く短く空を切る音が斉藤の手元から鳴った。かと思うと次の瞬間には、藤見の目の前数センチに白の長方形が浮いていた。部屋の中だけ時間が止まったかのように静まり返る空気。全員の視線が藤見一人に注がれる中、彼女は表情を変えずに佇んでいた。

「 斉藤毅……様ですね」

人差し指と中指で挟んだ名刺に視線を落とし、藤見が微笑む。

「 本件はよろしくお願いいたします」

藤見の態度には不遜の欠片もなかった。不意の一撃など防いで当然であるかのように。

避けられれば充分と思っていたが……。斉藤は汗ばんだ手のひらをズボンに当てた。

「 突然の無礼をお許してください」

頭を下げ、斉藤は差し出された手を握り返した。

「 こちらこそ、よろしくお願いいたします」

少々の打ち合わせを済ませ、ルガルタが斉藤を見送る頃。藤見と滝塚、そして樋渡の三名が事務室に残っていた。

「 依頼の概要は次の通りです」

樋渡は目を閉じると、小さく喉を鳴らした。

『 。

要諦は私の身の安全の確保。用心棒です』

彼女の声が、言葉を再現する。斉藤と同じ表現で。同じ仕草を交え、斉藤と“同じ声”で。そしてルガルタの相槌までもを交え形にしてみせる。

『 わたくしどもの事務所へいらしていただいたということは』

『 ええ。怪人からの警護です。数はおそらく十以上』

『 ほう、それは』

記憶と声帯模写に裏打ちされた完璧な再現。滝塚ら二人の見てい

なかったやりとりが寸分の違いもなく演じられている。

改めて見るがすごい特技だ、と滝塚は内心で舌を巻いた。彼女がいれば記録すら取る必要がない。ルガルタがどこへ行くにも樋渡を秘書として連れ歩く理由がわかった気がした。

『彼は世の中へ大きな憎しみを抱いています』

樋渡による依頼の再現が核心部へ入る。藤見は食い入るように樋渡の演目へ目を向けていた。

『そしてそう遠くない未来、彼は集めた怪人たちと共に馬鹿なことをしようと目論んでいる。』

私はそれを止めたいのです』

声を聞きながら滝塚は横目に藤見の表情を見た。口元に手を当て考え込むような仕草を交えながら樋渡の言葉に小さく頷いている。

滝塚と藤見の入室したところに差し掛かったところで演目は終わった。

「気になることがあるわね」

概要を把握し、先に口を開いたのは藤見だった。

「滝塚も思ってたでしょ？」

「ああ」

「やっぱりね。」

本当に何者なのかしら。依頼人の交渉相手って」

樋渡によって演じられた斉藤とルガルタのやり取りを振り返りながら藤見は首を捻った。

「所長も言っていたけど、浮浪怪人十体を秘密裏に従えるって間違はなくプロ級の人間が絡んでるでしょ。武装しただけの一般人にできることじゃないもの。」

けど社会的な地位が完璧に保証されてるはずの人間が、何だってそんなテロ行為を？」

藤見の疑問は怪人を集めている人間の動機にあるようだった。

怪人を管理することは普通の人間にはできない。過去に怪人を武力として引き入れようとしたテロ組織は尽く内部崩壊の憂き目にあ

つていた。怪人への応対には専門的な装備と、知識と、武力を要する。その前提がある以上、斉藤の交渉相手を国防庁関係者と疑う藤見やルガルタの見解も不自然なものではない。

しかしそれだけに国防庁職員は保障されていた。生活を、経済を、社会的地位を。決して国家に牙を剥くことがないよう特別の厚遇を受けているのだ。

「入庁のときの経歴チェックや思想教育も半端じゃないって話だし。その辺りが腑に落ちないのよね」

「そっか。まあ、それもそうだな」

「滝塚は？」

歯切れの悪い相槌に、藤見と樋渡の視線が滝塚へと向けられる。

「他に何か気になることがあるんじゃないの？」

「俺が気にしてるのは交渉相手の方じゃなくて、むしろあの依頼人かな」

話しながら、斉藤と名乗る男の姿を滝塚は思い出していた。

「斉藤が何者なのかが気になる」

ああ、と藤見は手のひらに拳を乗せた。

「言われてみれば、斉藤さんがなんで怪人が集められていることを知ってるのかって話よね。」

うーん。斉藤さんもテロ組織の仲間だったとか？ けど組織の中で何かあって、内部告発……じゃないけど、私らに助けを求めに来たとか。

樋渡さんはどう思う？」

藤見の問いかけに樋渡は「概ね同じ意見です」と短く返した。

「滝塚は？」

「交渉相手とやらと斉藤の関係はわからないけどさ。俺は斉藤自身もただの一般人じゃあないと思う」

その言葉に藤見と樋渡が顔を見合わせる。説明が求められるのを待つことなく「所長と斉藤のやりとりを思い出してくれ」そう滝塚は続けた。

「斉藤の持ってきた依頼は十以上もの怪人からの警護。言うまでもなく危険が大きくてそれも腕の問われる仕事だ。」

にもかかわらず斉藤は所長に一度も確認していない」

「何を？」

「この依頼がこなせるかどうかをさ」

藤見はまだピンときていない様子だったが、樋渡はなるほど小さく呟いた。

「斉藤自身も、一目で所長の實力を見抜ける程のキャリアがある……と」

入室してしばらく、斉藤がルガルタへ視線を釘付けていた意図を樋渡は理解した。

「そう。斉藤は所長を一目見ただけでわかったんだろうね。相当の實力があること。それにあの怪人なら難しい護衛をやったのけることも。」

まあ藤見に関しては手っ取り早く試したみたいだけどさ。少なくとも所長くらい抜きん出た實力の相手なら、動きを見なくてもわかるくらいの眼があるみたいだった。それに」

ほんのついさっき、握手を交わしたときの斉藤の表情が滝塚の脳裏に過ぎった。

「斉藤はきつと俺の力も見抜いてたよ。」

身体能力に関しちゃ、俺が凡人以下だってことをさ」

言いながら膝の上に組んだ拳へ滝塚は目を落とした。

藤見にはそうしたにも関わらず、斉藤は滝塚を試すことすらしなかった。試すまでもないことを知っていたのだ。

「強さって言うっても色々でしょ。滝塚の土俵は武力の遣り取りじゃないし」

にわかには明るい調子の声で藤見が言った。彼女のフォローに滝塚は「いや、気にしているわけじゃないんだ」と、逆に申し訳なさそうな表情を覗かせた。

「俺が弱いのは嫌になるくらい承知してる。その分、俺は得意の後

方支援に徹するよ。

戦闘は藤見と、藤見の能力に任せる」
ちから

「またあつさり言うのねえ」

「仲間を頼るのに遠慮はしないことにしているからな」

「はいはい。わーかりました」

滝塚の言葉に藤見は小さなため息をつきながらも表情を緩めた。

「それで、どう動くの？　これから」

「とりあえず特定する。斉藤とその交渉相手って奴が何者かをさ」

大きな液晶画面の端末を取り出し、電源を入れる。同時に複数のレンズから光が漏れ、手元の空間に無数のファイルが映し出された。画面に指を滑らせると、展開されたファイルが枝のごとく広がりを見せる。まるで情報の樹がそこへ葉を広げたかのように。

「殴り合いに関しちや俺はからつきし駄目だけど」

中に浮くディスプレイのひとつを見つめると滝塚は白い歯を覗かせた。

「こつというのは得意分野だ」

『怪人ヒーロー』 其三（ファンタジー）

五十八年二月、嘉岳市（現、陽向市）市中にて素性不明の怪人の出現が確認された。

“悪魔の右腕”事件。当時のメディアではこのような呼称で報道され、その名と、甚大な被害を現在に至るまで記録に残している。

この事件で、怪人の討伐に動いたジャスティスレッド・ピンクの二名が殉職した。同チームに参加したジャスティスゴールドは怪人を撃退の後に病院へと搬送され、一命を取り留めている。

ライセンス 認定証を所持するヒーローが二名も命を落としたその事實は、世間へ少なからぬ動揺を与えた。業界の急先鋒として活躍していたジャスティスレッドの死による士気の低下に治安悪化への不安。取りざたされた題材を数えたら枚挙に暇はない。

しかし最も波紋を呼んだのは、一命を取り留めたヒーローによるこんな証言だった。

「逃げた者がいる」

ベッドに伏したジャスティスゴールドがこれ以上の言葉を語ることはなかった。だが格好の話題を得たメディアは言葉を大きくし、飾り立て、連日のように報道を繰り返した。

職務放棄。市民の安全は守られるか

公務員の不祥事。また

背を向けたヒーロー。処分やいかに

本件の出勤要請を受けていたにも関わらず、名前の出てこないヒーローが特定されるのに時間はかからなかった。とあるマンシヨンの非常階段に設置された監視カメラが現場を放棄するヒーローの姿を克明に捉えていたのだ。

映像が公開されるようになると国防庁は世論の後押しを受け、該

当ヒーロー……ジャスティスブルーの処分を発表した。

名目は“公務員の信用を著しく損なう行為”。

これまで幾多の怪人と対峙し、身を削って平和を守ってきた男はこの事件を機に失職。正義の表舞台から姿を消したのだった。

七回目のコールで藤見はようやく受話器を取った。

「もしもし」

「お疲れ。今、合流できないか。打合わせしたいことがあるんだ」
挨拶もなく滝塚は切り出した。キーを叩く音が言葉の背後に薄く混じっている。

「んー、趣味の途中。
ボランティア

急ぎ？」

「できるだけな」

「今いいところなのよね」

受話器に耳を当てたまま藤見は舞台へ目をやった。色とりどりの衣装を着た園児たちが、童謡をバックに踊りを始めている。

「お遊戯会の最中なのよ。演目は浦島太郎。ベタだけどいい演目よね。歌も踊りも自然に入れられるし。」

やっぱりこのくらいの子が一生懸命になってる姿は萌え、もとい癒されるわぁ。変な意味じゃなくてね？ 私らみたいに殺伐とした大人はもつと無垢な存在に触れるべきなのよ。心に一滴の清涼剤といえますか。

別に変な意味じゃなくて」

「わかった。わかったもついい。」

こめかみを摘むようにして滝塚は目を閉じた。

「俺が行くから、そっちの近くで合流しよう。キリがついたら連絡してくれ」

「はいはい。りょーかいし」
プツッ。

遠い声で子どもの呼ぶ声が聞こえたかと思うと、即座に通話は途切れた。

相変わらずキてるな。あいつの子ども好きは。

これさえなければまともな相棒なのにと、滝塚はため息を吐いた。しかしあれで彼女のボランティアをする幼稚園からの評判は良く子どもからも好かれていろいろらしい。

だったら他人の趣味嗜好に出すものじゃないと同僚たちは割り切っていた。ストレス処理も求められる能力の一つ。これで仕事のパフォーマンスが上がるのなら、何も言うことはないだろう。

滝塚は最小限のデータ媒体と端末を持ち、藤見のいる幼稚園の傍の喫茶店で待った。

三時間くらい待った。

藤見が姿を見せたのは、滝塚の腹がコーヒーで一杯になってからだった。

「それじゃ話すぜ。深刻な話だから真面目に聞いてくれ」
「もちろん。」

あ、店員さん。ケーキセット一つ」

「かしこまりました。お飲み物はいかがいたしますか」

「こないだの依頼だけど、関わってそうな人物に目星がついた」

「もう？ さすが滝塚。」

飲み物は…… コーヒー。アイスで。あ、生クリームを乗せるやつてできます？」

「+50円でできますよ」

「じゃあ、それで」

店員を見送ると、ようやく藤見はメニューを机の端に寄せた。

「それじゃ話すぜ。深刻な話だから真面目に聞いてくれ」

すさまじく不本意ではあったが、滝塚は話を仕切りなおした。

「こないだの依頼に関わってそんな人物に目星がついた。こいつを見てくれ」

端末を置き、映像を机上の空間に映し出す。藤見は温かいお絞りで手を拭きながら、映し出された記事の見出しへ目をやった。

『悪魔の右腕事件とその後』

中央には夕焼けの空を背に浮かぶ暗闇の写真が掲載されている。

「ああ。うちの街で十年前に現れたとかいう」

藤見や滝塚がこの業界へ入るよりはるか昔の出来事だが、名前くらいは聞き及んでいる様子だった。

それがどうかしたの？ 視線でそう問う藤見へ、滝塚は一人のヒーローの名を口にした。

「ジャスティスブルー」というヒーローがこの事件を境に職を追われ、姿を消している。

そしてこいつが今回の依頼に絡んでいる可能性が高い」

唐突な結論に目を丸くする藤見。予想通りの反応に滝塚は「順序だてて話すよ」そう言っただけで資料を並べた。

「国防庁の人間やヒーローみたいに、生活の保障をされた者がテロ行為に走る可能性は低い。それは前に話したよな。

そこで俺は現役の国防庁関係者じゃなく“かつて怪人対策業務に関わっていた人物”を容疑者として洗ってみた。それも正規退職者じゃなく、何らかの事情でクビになった奴を中心に」

滝塚の言うことは藤見にもなんとなく理解ができた。国防庁OBは特別の手当てや年金の支給がされるなど、生涯に渡る保障が約束されている。彼らもまた国家転覆へ熱意を燃やす可能性は低い。

「怪人に関する十分な知識と力を持ち、かつ世の中へ反目しうる動機のある人物……。

それがクビになった元・ヒーローってことね」

「そうだ」

はつきりと頷く滝塚とは対照的に、藤見は首をかしげた。

「うーん……可能性としてはありかも。けどちょっと強引すぎない？ 過去に国防庁をクビになったのがそのジャスティスブルーだけってわけでもないだろうし」

「確かに強引だ。けど根拠はある」

滝塚が端末を操作し、映像を切り替える。そして映し出された名簿らしき書類の一部を指差した。

「十年前に国防庁へ所属していたヒーローの名簿だ。樋渡さんに頼んで入手してもらった。」

そしてここにジャスティスブルーの本名も記載されている。この名前に見覚えはあるよな」

「。これって……」

眉をひそめる藤見の脳裏に、男の顔が浮かんだ。追い討ちをかけるように滝塚が一枚の名刺を端末の脇に逸れる。

「ああ。」

ジャスティスブルーとして戦っていた男の本名は『斉藤毅』。昨日うちへ来た依頼人の名前と一致している」

決定的な符合を前に、藤見の顔から笑みが消えた。

「もちろん依頼人が偽名を使っているのかもしれないから断言はできないし、ジャスティスブルーがテロを画策するなら、その正体である斉藤毅がうちへ現れるのも理屈には合わない。」

けど名前の合致が偶然とも到底思えない。この依頼にヒーローが何らかの形で絡んでくるのはもう間違いないと思う。

藤見。これはあくまで最悪のケースだが……もしも護衛の最中にヒーローを相手にする場面があるとして、勝算はどのくらいある？」
「ほぼ0%。所長抜きならね」

断言。そして即答だった。

「一週間で私が用意できる編成は最大で八十四名^{チーム}。その全員を戦闘に特化させたとしても、完全装備のヒーロー相手じゃ十分と持たないでしょ。」

ていうか本当にジャスティスブルーが依頼人なの？ そうだとしたら、交渉相手は何者になわけ……？」

かつてヒーローだった男が護衛を求めてまで会おうとする相手は何者か。想像はいくつか浮かんだが、そのどれもが、嫌な予感に満

ちたものでしかなかった。

「そういえばさ。所長は出られないの？」

「所長は来週一杯、選挙の応援演説に出てるそうだ。ほら、代議士に立候補した異星人の」

「ああ。史上初の異星人議員になるかもっていう」

銀色のスーツをまとい、妻と共に並ぶ宇宙人の姿が藤見の頭に浮かぶ。彼女もテレビでその姿を目にした事はあった。

「人間以外の種族の声が国政に届く大きなチャンスだ。所長も抜けるわけにはいかないだろ。」

この件は俺たちで何とかするしかない」

「またキツイ仕事になりそうねえ」

苦い口ぶりながらも藤見は澄ました顔で滝塚を見た。

最悪のケースが実現した場合、純粋な武力のみで任務を達成できる確立は限りなくゼロだ。その言葉に嘘はない。しかしそれはあくまで純粋な武力での衝突になる場合の話だ。

そうならないために滝塚がいる。その比類ない勝負強さであらゆる修羅場を潜ってきたこの男が、難しい任務の成功率を上げてくれるはずだ。

滝塚が藤見を信頼しているように、彼女もまた滝塚を信頼していた。二人はそういう関係だった。

「とりあえず今わかってるのはこのくらいだ。藤見は予定通り、集められるだけの武器と兵を用意してくれればいい。他に必要そうなものは情報が揃い次第集めていこう。」

それだけ打ち合わせしておきたかった」

「りょーかい。」

じゃああたし、そろそろ出るね。いろいろ動かなきゃだし」

請求書を摘むと、藤見はバッグを片手に席を立った。

「そっちもお願いね」

そう残して藤見は会計を済ませ軽やかに店を出て行った。

その背中が見えなくなると、滝塚は机上に散乱するファイルを畳

んだ。そしてデータを切り替えると、小さなため息をついた。

（確証がないから言えなかったけど）

実はもうひとつ、滝塚はある仮説にたどり着いていた。あまりに根拠に乏しい仮説のためあえて言うことはなかったが、その考えは滝塚の中では無視しきれない存在感を放っていた。

事務所に現れた斉藤毅という男。

十年前に職を追われたヒーロー。

そして……。

端末へダウンロードした一枚の写真へ目をやる。そこに映る少年の顔は、希望と可能性に満ちた輝きを放っているように滝塚には見えた。

『怪人ヒーロー』 其三（ファンタジー）（後書き）

全6話構成にならないかもしれません（汗　＋2話くらい見ていた
だけると幸いです

『怪人ヒーロー』 其の四（ファンタジー）

降り始めた雨は徐々に激しさを増していた。

関東全域の雨は正午から明日にかけて続きそうです。 仏頂面

の中年アナウンサーが一礼を残すと、落ち着いた音楽と共に、上空から撮影されたビル群の映像へと切り替わった。

時刻がまもなく十六時を迎える。

テレビ画面を横目に、受話器を耳に当てた男が口を開いた。

「約束通り、十九時にはそちらへ着けるだろう」

雨粒が音を立てて窓を打つ。スピーカーの向こうからも微かな雨の音が聞こえた。

「話に決着をつけよう。これが最後だ」

『 分かった』

男の、斉藤毅の言葉に返されたのは短い肯定の返事だった。

どちらからとなく通話が途切れる。カード型の受話器を充電ポケットへ置くと、斉藤は空を見た。

濁った灰色の空に光が走る。わずかに遅れて、雷鳴が轟く。

荒れた夜になるかもしれない。

デスクのスタンドを消して斉藤は椅子を立った。キィ、と甲高い音だけが暗室へ静かに響いていた。

六月十八日。午後十八時五十分。某山中。

茂みに覆われた道なき道を二人は駆け登っていた。

サバイバルスーツに身を包む藤見が丈のある草をなぎ払い進む。

リュックサックを背負う滝塚は息を上げながらも、彼女の背中について走った。

「藤見、少し方角がズレてきた。進路を一時の方角へ修正」

片手で器用に地図を広げながら、滝塚はコンパスへ視線を落とし

た。

「ほんと？ 真っ直ぐ走ってるつもりなのに」

立ち止まることもなく藤見は目の前にぶら下がるツタへ刃を立てる。

「進むだけでも面倒臭いのにはGPSも使えないとか、本当に厄介な山ね」

恨み言を口にしながら木々を見上げる。藤見の目に茂る葉の奥に人工的な赤の光が映った。妨害電波の基地局、これが一定の間隔を置いて設置されている。

「厄介だからここが本拠地なんだろう。それより進路に集中な。もうかなり近いとはいえ、油断していると遭難するぞ」

「はいはい」

愚痴に相槌を打ちながらも、滝塚の目はコンパスの針の先を凝視していた。

あと数分登った先に彼らの目指す建物がある。

廃墟となった変電施設。そこに怪人たちはいる。

表情が陰しくなりかけるのを自覚して滝塚は軽く頬を叩いた。

「ねえ」

ふいに前方からかけられる声に顔を上げる。藤見は道を拓く手を止めないまま、背後の青年に話を振った。

「さっきのやりとりさ。あれ、何だったの」

「さっきの？」

滝塚の意図的なオウム返しに、藤見もまた「さっきのよ」と押した。

「この期に及んで隠すことないでしょ。」

最後にさ。斉藤さんへあんた、何を言おうとしてたのよ」

入山直前に遡る。今は使われていない産業道路の一角に停めた車の陰で、斉藤と滝塚、藤見の三人は最後の打ち合わせをしていた。

「これがアジトへの道のりと、内部の見取り図だ」

A4サイズの封筒の中には数枚のレポート用紙とコンパスが入っていた。

「私は正規の登山道から入る。君たちは私よりも先に、私とは別のルートから中腹の変電施設を目指してくれ。」

見つからないことを前提とした場所だからトラップはないといっている。アジトの近辺まではな。

アジトの傍まで寄ると数箇所の洞窟を見つけることができるだろう。そこが怪人たちの巣窟だ。君たちは近辺に潜伏し、私がアジトから出るまで怪人たちが建物へ立ち入るのを防いで欲しい」

「すべての怪人は地下へ控えているのですか？ アジトの内部には」「特別な事情がない限りいいはずだ。外へ出ればその分、国防庁のリーダーにひっかかる可能性が出る。それを防ぐために奴らは洞窟をねぐらにしている」

国防庁は衛星を用いて怪人の姿を捉えている。怪人を討伐するヒーローが迷うことなく現場へ到着できるのもこのシステムがあるためだ。

しかし衛星がキャッチする映像やシグナルは地下までカバーすることはできない。密閉された屋内も有効ではあるが、窓や壁の位置を気にしなければならぬ不自由さを考えると地下が最も潜伏に適していることは間違いないと言っている。

「伊達や酔狂でこんな辺鄙な場所に集まってるわけじゃないのね」

藤見が何故か感心するかのよう頷いている。……いや、辺鄙な場所だからこそ潜伏してるんだろう。そう滝塚は思ったが、何も言うことなくアジトへの道のりをなぞった。

「交渉は一時間後。十九時から始める予定だ」

斉藤がそうすると同時に、滝塚も腕時計へ目を落とした。

「交渉そのものは私がボスと一対一で行う。しかし話がまとまらなければ、ボスが怪人を呼んでプレッシャーをかけてくることもあり得るだろう。」

そうになったときに地下から這い出てくる怪人たちを君たちが止める。それが今日の作戦だ」

内容は至ってシンプルだった。怪人が話し合いの邪魔をしようと現れたらそれを藤見と滝塚が抑える。複雑な駆け引きも何もない。ただ目の前の敵を倒すだけの、警備としては単純な仕事だ。

しかしその作戦においては斉藤の傍に護衛の二人がいらないことになる。もしもボス本人が斉藤に攻撃を仕掛けた場合はどうするのか。藤見がそのような内容の質問をすると斉藤は「心配はいらない」と、表情も変えずに返した。

「私もそれなりの場数は踏んでいる。一対一であれば、身を守るくらいのことではできるだろう」

「本当ですか」

「私の腕が信用ならないか」

「そうではなく」

不意の横槍に、藤見と斉藤は声の先へと視線を向けた。いつの間にか地図を畳んだ滝塚が斉藤の目を見ていた。

「身を守るっていうのは、時に攻撃をしてくる相手を本気で倒しにかかることも必要になります。」

斉藤さん。あなたは彼に、躊躇うことなく拳を振るうことができますか」

そんな滝塚の問いに斉藤は「覚悟はある」とだけ返した。それ以上は何も言わず、滝塚もまた何を問うこともしなかった。

「あのとき滝塚は拳を振るうことができますかと言った。

倒すことができますか。じゃなくて」

藤見のトーンはなんら変わるところがなかった。しかし背を向けたままの、その淡々とした調子は、自分を非難しているように滝塚には思えた。

「これから何と戦おうとしているのか、もうわかってるんでしょ。なのに言えないの？ 私に」

歩幅を緩めることなく進む藤見の背中を追いながら、滝塚は視線を落とした。

余計な情報はないほうがマシ。情報が錯綜することの混乱が、そこから生まれる先入観が、予想外の事実直面したときの戸惑いがあるときに致命的な失敗を招くこともある。

そう考えるからこそ彼は唇を結んでいた。藤見も理解しているはずだと思っていた。しかし藤見は

「一人で抱えなさんな」

そう言った。彼女にはわかっていたからだだった。滝塚が言わないのは不確実な推測ではなく、暗く重たい事実だということを。

「独り言だと思って聞いてくれ」

滝塚の口ぶりにはつきりしていた。堰を切ったかのようなだった。

「ヒーローになるはずだった少年がいたんだ。いつか憧れの正義の味方になるんだって、ひたむきに夢を追っていた少年がいた。

十年前のあの日。その道を閉ざされるまでは」

滝塚の語りが始まる丁度同じとき。アジト内部に入った斉藤毅は鉄の扉の前にいた。

ノックの返事を待たずして中へと足を踏み入れる。

部屋の中央をかるうじて照らす明かり。その下に浮かぶ人影の暗く沈んだ視線が、斉藤の姿に向けられていた。

『怪人ヒーロー』 其の五（ファンタジー）

待たせたな。……そんな斉藤の言葉にも、青年は頷きを返すことさえしなかった。

ときおり差し込む閃光がソファに腰掛ける青年のシルエットを際立たせる。来客を前に立つこともなく、ただ肩を丸めて、目の前の男を見ていた。

感情の籠らない瞳で。人と人の対面ではないかのように。

「話をしにきたのだ。猛^{たける}。お前も少しは口を開いたらどうだ」

「話、なあ」

短い言葉には嘲笑うかのような色が混じっていた。ただ表情がない。それは異質さだけの伝わる振る舞いだった。

「答えはなんとなくわかつているよ」

「そうか。ならば話は早い。」

お前は、お前のやろうとしていることから手を引け。今ならば間に合う」

「間に合う？ 今更、何が」

猛は静かに手を胸に当てた。

「俺の道はもう終わっているんだ。誰かさんが自分の身可愛さに、ハデスの右腕から逃げた日にさ」

無機質に嘲り笑う青年の脳裏には、彼と、彼の父親の転機となった日の映像が克明に浮かんた。色あせることなどなかった。言い表せない負の感情が、忘れることを許さなかった。

父親の背中に憧れてヒーローを志した日々。

そして父親の“失態”で、ヒーロー学校を追われた日。

百や千では数えられないほど夢に見た在りし日の自分が、いまでも彼の目には映っていた。

「俺はあんたみたいになりたかった」

青年は斉藤に正対していた。しかし目は、どこか遠くを見ている

かのようなだった。

「大切なもののために戦うあんたに憧れた。命を賭けて、正義の旗を背負って戦うあんたを目指していた。

努力は血が滲むくらいした。難しい試験を掻い潜るために失うものだって多かった。それでもヒーローになりたかった。ジャスティスブルーである父親を、それに俺がその息子であることを誇りに思っていたから。

それが夢の終わりにつながるとも知らずに。

馬鹿みたいに。あんたと同じヒーローになって、いつか並んで戦うんだって」

それは斉藤にとっても耳に覚えのある言葉だった。

『父さんみたいになるんだ』

少年は真っ直ぐに父親と向かい合って決意した。輝きに満ちた笑顔だった。

目の前に掲げられた少年の拳に、斉藤は黙って、自分の拳をつき合わせた。

弱い手だと思った。けれどいつか強くなる手だと思った。

しかし目の前の青年にかつての輝きはない。そして、ずっと彼を支えてきた前向きな心も、どこかへ置き去りにしてきたとしか斉藤には見えなかった。

「全部が終わって、俺には力だけが残った」

猛の腕に青く太い筋が入る。暗闇に浮かぶ姿が、心なしかはつきりとした輪郭を帯びてゆく。

「敵を倒すための力。破壊のための力だけが残った。

もうそれを誰かのために使おうなんて思わない。けどせめて俺たちを追い込んだ世界に傷をつけて終わってやる。

ヒーロー学校にいた頃より腕を上げた。怪人も揃えた。あとは元ジャスティスブルーのあんたが戦力に加わればと思ってたが」

そこで言葉は止まった。最後の沈黙だと斉藤は悟った。

しかし覚悟があるのは彼とて同じ。

「それでも、私はお前を止める」

斉藤の言葉には、わずかな揺らぎもなかった。

「そうか。戦う気概に満ちた昔のあんたはもういないか」

猛が腰に手を当て、ソファを立つ。

「さよならだ」

雷よりも明るく、速く閃光が走った。

ビームサーベルの青い刃が床へと突き刺さる。真つ二つに切断されたテーブルは重心を失い、鈍い音を立てて崩れ落ちた。

同じく両断されたソファから、三步を離れた位置で斉藤が身を構える。不意の一撃を文字通りの超人的な反応によって彼は回避していた。

そしてサイレンが室内に響く。甲高い音。斉藤も聞いたこのあるこの音は、怪人の発する泣き声に良く似ていた。

“呼び寄せるつもり” だというのは考えるまでもなかった。

「避けたか。流石に。」

しかしいつまでもかわしきれんだろうか。現役を退いたあんたが、怪人を十体も相手にしながら」

サーベルを構えた猛は手押しボタンを放り投げて、テーブルの残骸を蹴った。

怪人を呼び寄せ、なおかつ猛が斉藤を襲う。それは斉藤にとって最も避けたい事態だった。しかし同時に最も警戒されていた事態でもある。

外に配置させたのはそのための二人だ。

任せたぞ。

決意の半分を預けた二人へ、斉藤は無言の激を飛ばした。

異形の者たちが洞窟から這い出た直後、視界の覚束ない夜の森に火花が散った。

本当に突然のことだった。彼らの周りを三つ、四つほどの影が囲んだかと思うと、先頭を歩く者がビクン、と上体をのけぞらせ、一呼吸の間を置いて、膝からぬかるみへ崩れ落ちたのだ。

何が起こったかは彼らにもわからなかった。

ただ発作的な何かではなく、攻撃を受けたことだけは、本能が理解した。

怪人たちの雨音をかき消すような咆哮が、雨に打たれる木々を震わせた。

火蓋は切って落とされたのである。

「来るわよ」

チューブの繋がったマスクを口に当て、藤見はガス筒を放り投げた。そして周りの“部下たち”に指示を出し、満ちてゆく煙へ紛れてゆく。

サバイバルスーツに身を包み、藤見と同じくマスクで顔を覆った集団は身を低くして、怪人の突撃を待ち構えた。一部は足元の濃霧に。一部は木の陰に。その数は八十を越える。

戦闘は随所で同時に始まった。

特殊部隊の様相を呈した集団が怪人一体につき五、七名のスタンズで応戦。武器は様々だが、触れた敵に電撃が流れるよう改造が施されていた。

怪人の耐久は個体によって違うが人間の打撃では基本的に大きなダメージを与えられない。戦闘開始と同時に撒かれたガスと同じく、種族の力の差を埋めるための戦い方だった。

「藤見」

「なあに」

手のひらで耳を覆い、イヤホンから入る声へ耳を傾ける。

「AとDチームが応戦する敵がやや手強い。BとFの人員をそっちへ。」

このヤツはガスに弱いみたいだ。雨で効果がだいぶ薄れてるけど、もうすぐ落ちる」

「了解。指示、ご苦労さま」

「そっちはどうだ」

「んー……」

唸りながら、再び藤見が正面へ意識を戻す。全身緑の毛で覆われた獣の怪人が、その爪を藤見へ向けていた。

鉄をも裂く爪が藤見のヘルメットに触れる。しかし止まった。本当にピタリと。スタンガンを仕込んだ藤見の靴が怪人の腹へとめりこみ、敵が動くのを許さなかったのだ。

「まるで問題なし」

「そうか……。でも油断は無しだ。」

近くにいるよな。一度そっちへ行く」

ため息を吐くようにして滝塚は通信を切った。

所長やハデスの右腕クラスの怪人がいないとはいえ問題なしとか、どうかしてる。

滝塚は相棒の強烈さに半ば呆れながら打ち合わせ地点へと走った。辿りついたとき、藤見は両腕に銃のついた怪人と応戦していた。足元にはすでにヒグマのような怪人が一体、意識を失っていた。

「待ってて。もうすぐ終わるからさっ」

敵の発砲を回避しつつ藤見が笑う。藤見と敵との距離は徐々に詰められていた。見るに敵は遠距離攻撃を得意とする怪人だった。藤見の攻撃範囲に入れば勝負は決まりだろう。

それが分かっているのか、藤見の表情にも余裕が見て取れた。しばらく続いていた敵の発砲が止む。藤見はチャンスと見たのか、敵へ距離を詰める構えを見せた。

そのときだ。敵は銃口を振りかぶると、物凄い勢いで藤見の方へと走った。

「そっちから来るの。蹴りに行く手間が省けたわ」

バチ、と爆ぜるような音を立てて藤見のつま先が地面を叩いた。

敵の銃身が藤見の頭を割るのが先か。藤見の蹴りが敵に入るのが先か。これまでの攻防から見て結果は火を見るよりも明らかだった。

しかしそれでも滝塚は躊躇いなく叫んだ。

「触るなっ！」

電撃の靴が敵に触れる寸前のところで、藤見は足を引き、回避へと体制を変えた。ほとんど反射だった。滝塚が叫んだ意味も何も理解できてはいなかったが、身体が自然と相方の指示に従って動いていた。

敵の攻撃が藤見の身体を外れ、すぐ背後に立っていた樹木を打つ。その瞬間。

敵の全身から吹く爆炎が木の幹を抉り、葉を焦がした。

「……自爆？」

唖然とした表情で火柱を見つめる藤見。滝塚は「油断するなっと言ったろ」やはり呆れ顔でため息を吐いた。

「斉藤の方も心配だ。そろそろ俺はそっちのカバーも入りたいんだけど、本当に任せて大丈夫か」

「え、ええ。もちろん」

「分かった。じゃあ行ってくる」

「ちよつと待つて」

もう踵を返しかけた滝塚を藤見が慌てて制する。

「どうしてあいつが自爆するってわかったの？」

「ああ……少し考えただけだよ」

滝塚が肩にかかる火の粉を手袋で掃う。

「敵と藤見の力の差は明らかだった。それに敵は遠距離攻撃を得意としていた。」

にもかかわらず逃げずに距離を詰めてきたのは、その行動に何か勝算があるからってことだろ。

「そんな奴を迂闊に攻撃するもんじゃないさ」

「じゃあ、行くな。そう残して滝塚は戦場を離れた。新たな戦場へ向かうために。」

その背中に見送りの言葉をかけながらも、藤見は動悸を抑えるのに必死だった。

もしも滝塚が敵への攻撃を止めなければ……。挟れた大木の幹が、あのまま攻撃を続けていた場合の未来を物語っている。

死んでいた。私は。

紙一重のところで命を助けられたのだ。

「借りができちゃった」

少し小さくなった青年の背中に向けて、小さな呟きが漏れる。

「　　ありがとう。いつか必ず返すから」

言葉が終わったとき、藤見はもう前を向いていた。

『怪人ヒーロー』 其の六（ファンタジー）

怒声。銃声。衝撃音。森から聞こえていた戦闘の音は、徐々に小さくなりつつあった。

静まり返る建物の中にはもはや雨音しか届かない。環境音に混じる自分の足音だけを聞きながら、滝塚はアジトの中枢へと走っていた。

藤見と、彼女の指揮するチームは間もなく勝利する。

あとは斉藤とその息子、猛のやり取りがどのような結末を迎えているか。

斉藤から聞かされた部屋の前に立った滝塚は様子をうかがうこともなく扉を開けた。

「……っ、は…… あっ！」

窓の前には、サーベルを右手にうづくまる青年。

斉藤は扉に背を向けながら、床に伏す息子を見下ろしていた。

「わかっただろう」

滝塚の入室に振り返ることもないまま斉藤は息子への言葉を続けた。部屋の荒れ具合とは相反する落ち着いた声だった。

「お前は現役を退いた私にすら及ばない。そんなお前が国へ喧嘩を挑んだところで、成せることなど何もない」

「……黙れ」

言葉が終わるや否なといった時点で、うづくまっていたはずの猛の剣は斉藤の首に触れかけていた。ほぼ無いといっていいくらい最小限の拳動で攻撃を仕掛けたのだ。

それでも、手ごたえはない。当たらない。音もなく猛の脇を取った斉藤は、空いた息子の横腹へ掌を打った。

「……っ！」

声にならない声を上げて猛の身体が宙に浮く。そしてガラクタのような機材の山へ、身を投げつけられる。

「続けても意味はない。自分が進むべき道を考え直せ」

自分を殺しにかかる息子を淡々と返り討ちにし、説得の言葉をかける斉藤。その光景に滝塚は息を呑んだ。

攻防の激しさ。レベルの高さに気圧されていたというのも確かにある。しかしそれ以上に目を奪われたのは斉藤の腕に滲む血液だった。

おそらく繰り返される攻撃のどこかで傷を負ったのだろう。ヒーローを目指していたというだけあり猛は間違いなく壁を越えた力を持つ人間の動きをしていた。いくら元・ジャスティスブルーとはいえ、丸腰の斉藤が無傷で猛の剣閃をかわしきれはるはずがない。

それでも斉藤は表情一つ変えることなく猛と向かっていた。恐怖の色を顔に覗かせることはなかった。

「 斉藤さん」

再び猛がうずくまり、攻防が途切れたのを見て滝塚が口を開く。

「ここは一度、彼を倒しましょう。説得はそれからでもできます」

その言葉に斉藤は振り返ることもなかった。視線を猛に釘付けたままの返事をした。

「私は猛を倒しにきたのではない。話をしにきたのだ」

「しかしこのまま繰り返せば、いずれあなたが命を落とす可能性もゼロじゃない。恐ろしくはないのですか」

「命への執着は、思想教育でとうに失くしている」

「 。

笑わせるなよ」

言葉と共に、壁へもたれかかる猛がサーベルを握る手に力を込めた。まだ動けるのか。満身創痍ながら戦意の満ちた敵へ、滝塚の意識が奪われる。

「何が命への執着は失った、だ。あんたは逃げたじゃないか。ヒーローとして守るべきものを捨てて。」

それを何今更気取ってんだ。笑わせるんじゃないって！」

猛の身体は残像だけを残し、斉藤との距離を詰めた。

気迫の籠った一閃が父に向けて放たれる。信じられないことに、先ほどよりも鋭い一撃だった。サーベルの切っ先は斉藤の脚を捉え、筋肉へ無視のできない大きさの切り傷と火傷をつけた。

猛の口元に笑みがこぼれた。ただ斉藤の表情が歪むことはなかった。

顔色一つ変えずに、逆の脚で猛を蹴り飛ばす。それも急所を外して。振り上げられた脚を空中で見ながら、猛は強く唇を噛んだ。

親父は大事なものを守らずに逃げたのに。

どうして、こんなにも強い。

受身すら取れず、四肢の力を失ったマネキンのように猛の身体が地に落ちる。

「どうして。」

「どうして……」

横たわり涙を流しながら、同じ言葉を繰り返す。

目の前には、彼が憧れていた頃と変わらない強さの父がいた。もう二度と見ることはない。猛は信じていたはずの父親だった。

「あんなみたいになりたかった。」

あんなみたいになれなかった。

あんなが……」

「 斉藤猛」

猛の身体が飛んだ際に足元へ転がったビームサーベルを部屋の隅へと放り、滝塚が歩みを寄せた。

「お前はまた、ジャスティスブルーが恐怖に負けたと思っているのか」

その言葉に、斉藤の身体がわずかに強張る。しかし滝塚は一瞥だけを寄越すと、そのまま語りを続けた。

「戦っていておかしいとは思わなかったか。どうしてビームサーベルを持つあんなを前にして斉藤さんがまだここにいるのか。」

命が惜しいだけの人間ならとつくにこの場から逃げてる。あるいは最初の一撃であんたを眠らせることだってできただろう。

そうしないのは誰の為だと思っている？

それに十年前のあの日も」

滝塚の声が呼び水のように、斉藤と猛、父子それぞれの記憶を呼び起こさせる。

夕日に染まる茜色の空をバックに、黒く、大きな暗闇が浮いていた。

その現場にいち早く到着し、向かい合う一人のヒーローがいた。

「ジャスティスブルーというヒーローがいた。彼は自分の死は恐れなかった。

それでも、自分の大切な人間が死ぬことは恐ろしかった」

この一週間。寝る間をも惜しんで情報をかき集め、たどり着いたひとつの結論が滝塚の口から語られる。

「彼には息子がいた。父親に憧れ、ヒーロー学校を首席で入学するほどの優秀な息子だった。

息子はいつか難関の試験に合格し、ヒーローになるだろうことは確実視されていた。ジャスティスブルーはハデスの右腕と対峙したそのとき……推測に過ぎないけれど、頭に過ぎったんだろう。

自分が死ぬこと。そしていつか、息子が同じ道を歩むであろうこと」

推測に過ぎない。そんな前置きを置く瞬間だけ、滝塚はわずかに横目で斉藤へと視線をやった。

「彼の息子は父親のようになりたいと強く望んでいた。しかし彼は自分と同じ道を歩ませてはいけないと強く願った。

それで息子の夢と、自分の築いてきた全てが無になったとしても、父親していちばん守りたいものを守ろうとしたんだ」

斉藤へ釘付けられていた猛の眼の瞳孔が開く。斉藤は黙って

俯き、目を閉じた。

「だから斉藤さんは傷だらけになりながらもここに立ってる。あんたが馬鹿なことして、死ぬことがないようにってさ」

嘘だろ。……言葉になるかならないかという音で、猛の心が漏れた。

殺意の消えた視線が父親へと向けられる。滝塚の語りを、斉藤が遮ることはなかった。黙って最後まで聞いていた。

その意味が、彼の息子にも伝わらなかったはずはない。

十年越しの誤解が解けたその瞬間、猛は事切れたようにその場へ倒れた。彼の背中を無理やりに押していた何かが力を失ったかのようだった。

その身体を斉藤がそつと起こす。憑き物が落ちたように安らかで、無垢な顔で彼は眠っていた

『父さんみたいになるんだ』

それはいつか約束を交わした頃の、少年の顔に良く似ていた。

『怪人ヒーロー』 エピローグ（ファンタジー）

居座っていた雨雲が過ぎ去り、突き抜けるような青空が広がっていた。

事務所の窓際に立つ藤見が日光に目を細めながら伸びをする。猫のような仕草だな、と滝塚はその様子を見て思った。

「長かったわね。雨」

「前の仕事から一週間くらい続いたもんな」

「あの日もひどい天気だったわねえ」

何ともない雑談を交わしながら、外窓のフェンスに残る水滴へ藤見は目をやった。

彼らの言う“前の仕事”が終わったとき。正確には藤見が外の敵を全て片付け、アジトへとむかうその最中。雨の中、誰かを抱えて山を下る斉藤と出会った。

斉藤は藤見の姿を確かに捉えながらも、立ち止まることさえなかった。しかしすれ違い様に一言。

「ご苦労だった」

それだけの言葉を残した。

「私、中のことはよく知らないけどさ」

彼女が最後に会ったときの、斉藤の顔が思い出される。

「決着、したんだよね」

「少なくともあの場は。」

後の事はわからないな。報酬のことがあるから所長に連絡が行くはずだとは思うけど」

「呼んだかい？」

急に第三者の声が混じり、二人の身体が強張った。言葉が終わるその瞬間まで人が増えたことを認識できなかった二人にとっては、怪奇現象を味わった印象にさえ近かった。

振り返ると、滝塚の背後にはやたらさわやかな笑顔のルガルタが

土産袋を目の前に掲げていた。

「いま帰ったよ」

それを言うのになんで気配を消して来たんですか。

そんな二人の視線の抗議は知ってか知らずか、ルガルタは菓子箱の包みを破るとバナナクリーム入りのカステラを二人へ手渡した。

「留守番と任務お疲れ様。報酬はきっちり入っていたよ。上手く行つたみたいだね」

「本当ですか」

「知らなかったのかい？」

ルガルタ目を丸くしながら、自分の口にもまたカステラを放り込む。

「怪人からの警護は完遂しました。その後のことは、俺たちも聞いていません」

「そうか。じゃあ簡単に」

ルガルタが促し、藤見と滝塚が腰を下ろす。いつのまにか所長の脇にはティーカップを持った樋渡が控えていた。まるで忍者のような管理職員たちだった。

「斉藤毅は斉藤猛の説得にとりあえずは成功したと聞いている。これから先は猛の持つ違法武器……ビームサーベルなどだな。それらの内密かつ正しい処分と、浮浪怪人たちの教育に尽力するそうだ。

監督は斉藤毅本人がするそうだ。まあ彼がブレない限り間違うことはないだろう」

「また斉藤猛が依頼人を襲うということは」

「そこまでは我々の立ち入るところではない」

滝塚の突込みも、ルガルタはミルクティーを口に運びながら一蹴した。

「君たちへの依頼は怪人からの護衛だ。親子喧嘩にまで口を出すものじゃないよ」

「でも」

「斉藤毅は、大丈夫だと言った」

静かなルガルタの視線が滝塚へと送られる。その言葉に滝塚は出かかった声を飲み込んだ。

嘘はないか。ルガルタが最初に念押ししたその約束を斉藤は守っていた。彼のことを一から十の先まで調べ、行動を共にした滝塚にはそれが一番よくわかっていたからだった。

「なにかあつたならまたそのときに手を貸せばいい。それで一緒に考えたらいい。」

何かが起こる前から殺気立つことはないよ。今は彼らが父子として上手く行くことを願おうじゃないか」

そう言って、ルガルタが穏やかに笑った。

『怪人ヒーロー』 エピソード（ファンタジー）（後書き）

永らくお待ちをしてしまいました。『怪人ヒーロー』これにて終幕です。お付き合いいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4519k/>

三千世界（短編集）

2011年11月27日17時57分発行